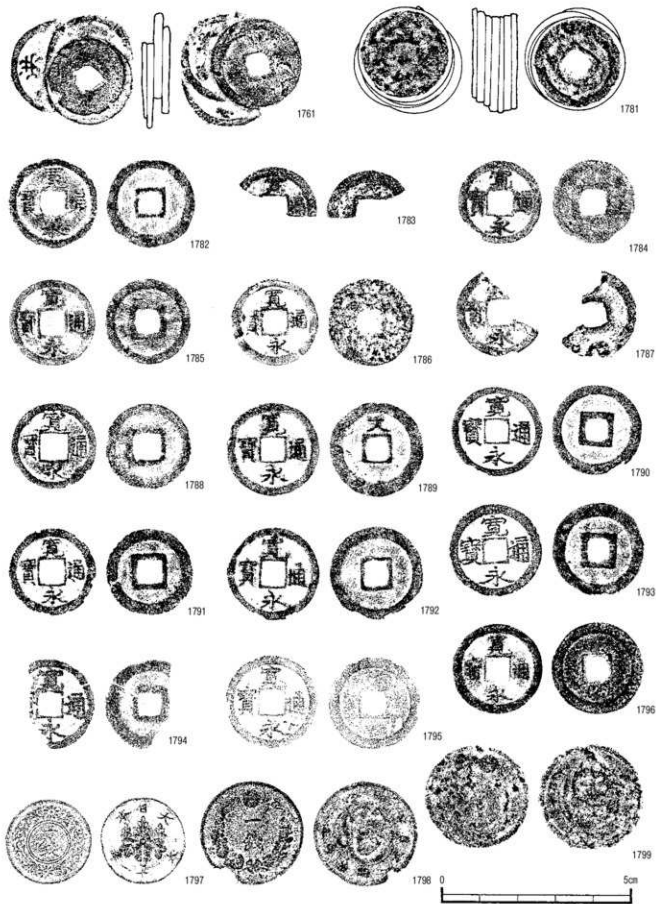


第276图 古钱4



第277图 古钱5

### 掘立柱建物跡出土遺物 観察表（土師器）

探洞番号	周長番号	遺構名	西上区	層位	種類	器種	胎土の色調	器面調整		法量 (cm)		備考	
								(内面)	(外面)	口径	底径		器高
第12706	701	掘立柱穴6	A-25	Ⅱ	土師器	皿	浅黄褐色	ナデ	ナデ	9.4	7.3	1.6	底部未切り 13c-14c代
第12806	709	掘立柱穴10	G-7	Ⅱ	土師器	皿	褐色	ナデ	ナデ	8.3	6.0	1.8	1層部埋付着

### 方形竪穴建物状遺構内出土遺物 観察表（陶磁器）

探洞番号	周長番号	遺構名	西上区	層位	種類	器種	胎土の色調	輪軸	施軸	法量 (cm)		築地	年代	備考
										口径	底径			
第14326	712	竪穴建物1号	B・C-31	Ⅰ	白磁	皿	灰白色	透明軸	外面腰部-外面露胎 口充げ	10.2	6.2	2.4	15c後半-14c前半	Ⅱ期 Ⅱ期
	713	竪穴建物1号	B・C-31	Ⅱ	青磁	碗	灰白色	青磁輪 灰白色	残存部全面施軸 口充げ	16.2	-	-	13c前後一層半	Ⅱ期 Ⅱ期
	714	竪穴建物1号	B・C-31	Ⅲ	滑石製品	鉢	-	-	-	-	-	-	-	外面埋付着
第14406	716	竪穴建物2号	D-24	Ⅰ	白磁	皿	灰白色	透明軸 灰白色	残存部全面施軸 口充げ	9.6	-	c	15c後半-14c後半	Ⅱ期 Ⅱ期
	717	竪穴建物2号	D-24	Ⅱ	中国陶器	天目碗	暗灰色	天目輪 深褐色	外面腰以下露胎	-	-	-	中国	13c-14c

### 方形竪穴建物状遺構内出土遺物 観察表（土師器）

探洞番号	周長番号	遺構名	西上区	層位	種類	器種	胎土の色調	器面調整		法量 (cm)		備考	
								(内面)	(外面)	口径	底径		器高
第14406	715	竪穴建物2号	D-24	Ⅱ	土師器	杯	褐色	回転ナデ	回転ナデ	12.5	8.6	2.8	13C後半-14c前半 太平洋真珠相当地 消失家屋
第14506	718	竪穴建物4号	A-21	Ⅱ	土師器	皿	浅黄褐色	回転ナデ	回転ナデ	13.0	10.0	2.7	見込みに指ナデ
第15006	723	竪穴建物9号	C・D-19	Ⅱ	土師器	小皿	灰黄褐色	回転ナデ	回転ナデ	9.7	7.4	1.2	

### かまど跡内出土遺物 観察表（陶磁器）

探洞番号	周長番号	遺構名	西上区	層位	種類	器種	胎土の色調	輪軸	施軸	法量 (cm)		築地	年代	備考	
										口径	底径				器高
第15306	725	かまど3号	E-29	Ⅱ	磁器	磁鉢	にじい 赤褐色	-	-	-	-	-	築前	15c前半	森田正祥
第15406	727	かまど6号	E-28	Ⅱ	白磁	碗	灰白色	透明軸	残存部全面施軸	11.6	-	-	16c	森田正祥	
	728	かまど7号	E-27・28	Ⅱ	青磁	碗	灰黄色	青磁軸	残存部全面施軸	13.0	-	-	15c後半	上田正樹	
第16606	737	かまど20号	G・F-16	Ⅱ	白磁	皿	灰白色	透明軸	残存部全面施軸 口充げ	11.3	-	-	15c後半-14c後半	白磁炊飯時期	
	738	かまど20号	G・F-16	Ⅲ	灰土器	磁鉢	浅黄褐色	-	-	-	-	-	15c-16c		
第17106	740	かまど25号	C-15、D-15	Ⅱ	青磁	碗	灰白色	青磁軸	残存部全面施軸	-	-	-	15c前半	上田正樹	

### かまど跡内出土遺物 観察表（土師器）

探洞番号	周長番号	遺構名	西上区	層位	種類	器種	胎土の色調	器面調整		法量 (cm)		備考	
								(内面)	(外面)	口径	底径		器高
第30606	731	かまど20号	F・G-16	Ⅱ	土師器	皿	(内)灰青色 (外)浅黄褐色	ナデ	ナデ	8.5	5.1	1.6	底部未切り
	732	かまど20号	F・G-16	Ⅲ	土師器	皿	浅黄褐色	ナデ	ナデ	8.8	-	-	
	733	かまど20号	F・G-16	Ⅱ	土師器	杯	(内)黒褐色 (外)灰白色	ヘラナデ	ヘラナデ	12.7	-	-	
	734	かまど20号	F・G-16	Ⅱ	土師器	杯	(内)浅黄褐色 (外)浅黄褐色	ナデ	ナデ	13.3	8.5	3.6	底部未切り
	735	かまど20号	F・G-16	Ⅱ	土師器	杯	にじい 黄褐色	ナデ	ナデ	-	8.0	-	
	736	かまど20号	F・G-17	Ⅱ	土師器	杯	浅黄褐色	ナデ	ナデ	12.6	8.0	3.4	
739	かまど25号	G-16	Ⅱ	土師器	皿	明黄褐色	ナデ	ナデ	-	6.4	-		

### 製鉄関連遺構出土遺物 観察表（土製品）

探洞番号	周長番号	遺構名	西上区	層位	種類	器種	胎土の色調	輪軸	施軸	法量 (cm)		築地	年代	備考
										口径	底径			
第17306	742	製鉄3号	D-17	Ⅱ	土製品	鑄の引口	灰黄色	-	-	最大径 17.1	9.3	-	-	最大径
第17406	744	製鉄6号	F-16	Ⅱ	土製品	鑄の引口	灰白色	-	-	最大径 6.5	-	-	-	最大径

### 製鉄関連遺構出土遺物 観察表（土師器）

探洞番号	周長番号	遺構名	西上区	層位	種類	器種	胎土の色調	器面調整		法量 (cm)		備考	
								(内面)	(外面)	口径	底径		器高
第17306	741	製鉄3号	G-17	Ⅱ	土師器	皿	にじい黄褐色	ナデ	ナデ	7.6	5.2	1.0	底部未切り
第17406	743	製鉄6号	F-16	Ⅱ	土師器	皿	にじい黄褐色	ナデ	ナデ	7.8	2.6	2.2	

### 土坑内出土遺物 観察表（陶磁器）

探洞番号	周長番号	遺構名	西上区	層位	種類	器種	胎土の色調	輪軸	施軸	法量 (cm)		築地	年代	備考
										口径	底径			
第17506	745	土坑3号	B・C-31・32	Ⅰ	白磁	碗	灰白色	透明軸	外面腰部-真向内面露胎	-	7.2	-	-	11C後半-12C前半 Ⅱ期Ⅱ期
第17606	749	土坑7号	D-27	Ⅱ	青磁	皿	灰白色	青磁軸	高向内面露胎	-	2.5	-	-	龍泉寺系 12c中頃-後半 1期Ⅱc Ⅱ期
第17706	751	土坑10号	B-25	Ⅱ	中国陶器	磁鉢	にじい黄褐色	磁軸	外面腰以下露胎	11.4	-	-	-	龍泉寺系 12c前半

### 土坑内出土遺物 観察表 (陶磁器)

探洞番号	図帳番号	遺構名	土坑区	方位	種類	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量 (cm)			産地	年代	備考
										口径	底径	器高			
第1780号	754	土坑13号	E-18		白磁	皿	灰白色	透明釉	器付輪郭まで	-	6.6	-	奈良県常陸	16c後半	森田正
	755	土坑13号	E-18		瓦器土器	火鉢	黒灰色	-	-	-	-	-	豊方瓦系	15c-16c	
	756	土坑16号	D-17		瓦器土器	椀鉢	灰白色	-	-	-	-	-	豊方瓦系	16c後半	
第1800号	761	土坑18号	C-16		青磁	瓶	灰白色	青磁釉	高台内面露出	-	5.0	-	-	14c中頃～後半	宮野元
	762	土坑19号	D-15		白磁	皿	灰白色	透明釉	外面腰部以下露出	10.6	-	-	-	15c後半～16c代	森田D
第1810号	763	土坑20号	F-12		青磁	瓶	鈍い灰青色	青磁釉	器付から高台内面露出	14.3	6.2	7.3	畿東瓦系	15c後半	上田 聡 書文帯にツラミ高台。見込みは瓦文ステップ
	764	土坑20号	F-12		青磁	椀鉢	明赤褐色	青磁釉	高台内面輪郭に輪郭まで	14.0	5.0	3.9	畿東瓦系	15c後半	
	765	土坑22号	F-10		青磁	瓶	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	-	-	-	-	-	上田 聡
第1820号	766	土坑23号	G-10		青磁	瓶	灰色	青磁釉	器付～高台内面露出	-	6.2	-	畿東瓦系	12c中頃～後半	1期以降 見込みは片割りで花文(あるいは書文)の帯状の瓦文を被す

### 土坑内出土遺物 観察表 (土師器)

探洞番号	図帳番号	遺構名	土坑区	方位	種類	器種	胎土の色調	器面調整		法量 (cm)			備考
								(内面)	(外面)	口径	底径	器高	
第1780号	747	土坑6号	D-28		土師器	皿	内面に黄褐色(外)褐色	ナデ	ナデ	7.6	5.3	1.5	底部被切り
第1790号	752	土坑15号	B-16		土師器	杯	残存部褐色	ナデ	ナデ	8.3	5.2	2.3	底部被切り
第1800号	757	土坑16号	D-17		土師器	皿	浅黄色	ナデ	ナデ	11.8	8.8	2.8	
	760	土坑17号	D-16		土師器	皿	明赤褐色	ナデ	ヘラツブリ	8.0	5.0	2.0	底部被切り

### 溝状遺構内出土遺物 観察表 (土製品)

探洞番号	図帳番号	遺構名	土坑区	方位	種類	器種	胎土の色調	法量 (cm)		備考
								最大長	最大径	
第1720号	746	土坑4号	B-31		土製品	土鍋	浅黄色	3.8	1.65	

### 土坑墓内出土遺物 観察表 (陶磁器)

探洞番号	図帳番号	遺構名	土坑区	方位	種類	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量 (cm)			年代	備考	
										口径	底径	器高			
第1840号	772	土坑墓4号	C-21		白磁	梅花皿	黄白色	透明釉	外面腰部～高台内面露出 見込み輪郭に輪郭まで	9.4	3.6	2.3	不明	16c代	
第1870号	777	木棺墓7号	D-35		白磁	梅花皿	灰白色	透明釉	底部被切りまで	8.7	4.0	2.7		田原龍	
第1900号	807	土坑墓14号	D-14		青磁	杯	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	11.2	-	-	畿東瓦系	13c中頃～14c初頃	杯唇部 片割
第1920号	816	木棺墓17号	G-9		青花	瓶	灰色	透明釉	残存部全面施釉	12.0	-	-	津州瓦系	16c末～17c初頃	

### 土坑墓内出土遺物 観察表 (土師器)

探洞番号	図帳番号	遺構名	土坑区	方位	種類	器種	胎土の色調	器面調整		法量 (cm)			備考
								(内面)	(外面)	口径	底径	器高	
第1830号	775	土坑墓20号	B-30		土師器	小皿	鈍い黄褐色	回転ナデ	回転ナデ	8.6	6.8	1.6	
	776	土坑墓20号	B-30		土師器	杯	浅黄色	回転ナデ	回転ナデ	13.8	9.0	3.2	13c中頃～後半
第1920号	814	木棺墓17号	G-9		土師器	小皿	黄褐色	回転ナデ	回転ナデ	9.8	6.4	2.2	胴面に2ヶ所 穿孔あり
	815	木棺墓17号	G-9		土師器	杯	黄褐色	回転ナデ	回転ナデ	12.5	9.1	2.8	内面被切り

### 礎、土器集積遺構出土遺物

探洞番号	図帳番号	遺構名	土坑区	方位	種類	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量 (cm)			年代	備考
										口径	底径	器高		
第1970号	821	礎・土器集積中・出土遺構	D-E-18		唐石製品	皿	-	-	-	26.1	11.8	8.2		

### ピット内出土遺物 観察表 (陶磁器)

探洞番号	図帳番号	遺構名	土坑区	方位	種類	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量 (cm)			年代	備考	
										口径	底径	器高			
第1960号	822	ピット6号	B-31	I	白磁	瓶	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	-	-	-	11c後半～12a前半	京都C類	
	823	ピット6号	B-31, C-26, D-28	III	白磁	瓶	灰白色	透明釉	外面腰部～高台内面露出	16.4	6.3	7.1	12c中頃～後半	瓶V類D期	
	824	ピット6号	B-31		白磁	瓶	灰白色	青磁釉	外面腰部～高台内面露出 見込み輪郭に輪郭まで	16.3	6.2	5.9	畿東瓦系	12c中頃～後半	
	825	ピット6号	B-31	I	白磁	瓶	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	-	-	-	12c中頃～後半	YまたはV1類D期見込みは別書付文 法量は最大長・最大径・最大径	
	826	ピット9号	D-30		唐石製品	転用品	-	-	-	8.80	7.70	2.70	-	-	
	830	ピット11号	D-29		唐石製品	-	-	-	-	4.0	3.4	1.3	-	-	
	841	ピット21号	B-24		青磁	瓶	灰青色	青磁釉	器付～高台内面露出	16.8	6.5	6.0	畿東瓦系	12c中頃～後半	I-2a D期 見込みは別書付文
	842	ピット22号	D-24		唐石製品	転用品	-	-	-	2.50	2.00	2.00	-	-	
	846	ピット27号	C-27, D-23	II	青磁	瓶	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	7.9	-	-	畿東瓦系	12c中頃～後半	D期
	847	ピット28号	A-21, C-26	II	白磁	皿	灰白色	透明釉	外面露出	13.0	5.0	2.3	畿東瓦系	12c中頃～後半	I-Q 2期 見込みは別書付文
第1980号	848	ピット29号	D-20	II	瓦器土器	燗鉢	灰色	-	-	-	-	-	15c-16c	819と同型一部	
	849	ピット29号	D-20-21	II	瓦器土器	燗鉢	灰色	-	-	-	-	-	-	-	-
	850	ピット30号	C-20		唐石製品	転用品	-	-	-	2.90	1.48	1.50	-	-	
第2000号	853	ピット30号	D-19		青花	皿	鈍い黄褐色	透明釉	高台内面露出 見込みは輪郭に輪郭まで	10.0	4.0	2.0	津州瓦系	16c末～17c初頃	貫入 表面施

ピット内出土遺物 観察表 (土師器)

詳細番号	図録番号	遺構名	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	器面調整		法量 (cm)		備考
								(内面)	(外面)	口径	底径	
第3990区	827	ピット8号	C-31	土師器	杯	灰白～黄褐色	ナゲ	ナゲ	9.0	6.6	1.2	底部未切り
	828	ピット10号	E-29	土師器	杯	褐色色	ナゲ	ナゲ	12.0	8.0	3.8	底部未切り
	831	ピット12号	D-29	土師器	杯	褐色色	ナゲ	ナゲ	7.0	4.0	1.9	底部未切り
	832	ピット13号	E-28	土師器	皿	浅黄褐色	ナゲ	ナゲ	9.2	4.7	1.4	底部未切り
	833	ピット14号	D-28	黒色土師器	皿	黒色	ナゲ	ミダキ	10.0	62.0	1.6	底部未切り
	836	ピット17号	D-28	土師器	杯	浅黄褐色色	ナゲ	ナゲ	7.8	6.0	1.8	底部未切り
第3000区	839	ピット19号	A-24	土師器	皿	浅黄褐色色	ナゲ	ナゲ	-	6.4	-	-
	840	ピット20号	A-25	土師器	皿	浅黄褐色色	ヘラナゲ	ヘラナゲ	13.0	8.7	2.8	底部未切り 13代前半
	844	ピット25号	E-23	土師器	杯	(内) 褐色色 (外) 黄褐色色	ナゲ	ナゲ	10.1	5.0	2.8	底部未切り
	845	ピット26号	F-24	土師器	杯	明赤褐色色	ナゲ	ナゲ	7.6	4.0	2.1	底部未切り
	852	ピット32号	E-21	土師器	皿	(内) 褐色色 (外) 黄褐色色	ナゲ	ナゲ	8.0	6.5	1.2	底部未切り
第3010区	859	ピット38号	C-16	土師器	皿	浅黄褐色色	ヘラナゲ	ヘラナゲ	8.8	6.8	1.6	底部未切り

溝状遺構内出土遺物 観察表 (陶磁器)

詳細番号	図録番号	遺構名	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	輪文	法量 (cm)		窯場	年代	備考	
									口径	底径				
第3200区	866	溝4	D-37	瓦	平瓦	灰白色	-	-	-	-	-	-	中国 14c後半～12c前半	
第3000区	887	溝7	A-27・28	粘土	磁鉢	暗褐色色	-	-	22	8.8	10.1	備前	15c前半	
第3010区	889	溝10	C・D-25	中国産品	四縁鉢	灰色	-	-	-	-	-	-	豊方式	
第3000区	890	溝11	D-25	中国産品	鉢	灰白色	-	-	22.0	-	-	-	中国 13c代	
第3000区	891	溝13	E-22	青花	碗	灰白色	透明釉	雲付輪文	-	5.6	-	-	豊徳窯系	16c前半
	892	溝13	E-22	青花	碗	淡黄色	白煮した透明釉	雲付～高台内面露胎	-	5.0	-	-	津州系	16c後半～11c程度
	893	溝13	D-22	青花	碗	灰白色	透明釉	雲付輪文 見込み輪文に輪文まで	13.0	5.0	4.9	津州系	16c後半～17c程度	
	894	溝13	E-22	皿	青花	皿	淡黄色	白煮した透明釉	外面露胎 高台内面露胎	12.0	-	-	津州系	16c後半～17c程度
	898	溝19	B・C-15	白磁	碗	灰白色	透明釉	残存部全面露胎 口先げ	15.2	-	-	-	-	V型
	900	溝20	A-16	中国産品	四縁鉢	灰色	-	-	-	-	-	-	-	豊方式
第3000区	900	溝20	A-16	中国産品	四縁鉢	灰色	-	-	-	-	-	-	-	豊方式
	901	溝20	A-16	瓦片土	磁鉢	灰白～黄褐色	-	-	-	-	-	-	-	15c～16c 青磁
	906	溝21	G-13	青磁	碗	灰白色	青磁釉	雲付～高台内面露胎	-	5.4	-	-	-	-
	907	溝21	G-13	青磁	碗	淡黄色	青磁釉	雲付～高台内面露胎	-	5.8	-	-	-	-
	908	溝21	F-12	青磁	碗	灰黄色	青磁釉	高台内面露胎	-	6.0	-	-	-	-
第3010区	909	溝21	E・F-25	II	青磁	杯	灰白色	青磁釉	高台内面露胎に輪文まで	10.4	5.4	3.1	畿内系	13c中頃～14c初頃
	910	溝21	G-13	青磁	梅花煎茶?	灰白色	青磁釉	外面露胎 高台内面露胎 見込み輪文に輪文まで	-	5.0	-	-	不明	15c後半
	911	溝21	F-12	青磁	碗	灰白色	青磁釉	高台内面露胎に輪文まで	-	13.6	-	-	畿内系	-
	912	溝21	G-13	瓦片土	磁鉢	暗灰色色	-	-	-	12.0	-	-	-	備前
	913	溝23	E・S	青磁	杯	青磁	杯	青磁釉	-	12.4	4.6	3.7	畿内系	13c中頃～14c初頃
	914	溝23	F-7	粘土	磁鉢	暗褐色色	-	-	-	28.0	13.5	9.2	備前	15c後半

溝状遺構内出土遺物 観察表 (土師器)

詳細番号	図録番号	遺構名	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	器面調整		法量 (cm)		備考
								(内面)	(外面)	口径	底径	
第3000区	867	溝7	一括	土師器	小皿	浅黄褐色色	回転ナゲ	回転ナゲ	9.6	6.0	1.2	-
	868	溝7	一括	土師器	小皿	鈍い黄褐色色	回転ナゲ	回転ナゲ	8.2	4.4	1.1	-
	869	溝7	一括	土師器	小皿	鈍い黄褐色色	回転ナゲ	回転ナゲ	8.0	5.6	1.1	-
	870	溝7	一括	土師器	小皿	浅黄褐色色	回転ナゲ	回転ナゲ	8.0	5.8	1.2	-
	871	溝7	一括	土師器	小皿	浅黄褐色色	回転ナゲ	回転ナゲ	8.2	6.0	1.1	-
	872	溝7	一括	土師器	小皿	浅黄褐色色	回転ナゲ	回転ナゲ	8.0	4.8	1.4	-
	873	溝7	一括	土師器	小皿	鈍い黄褐色色	回転ナゲ	回転ナゲ	13.7	9.0	3.7	-
	874	溝7	一括	土師器	杯	鈍い黄褐色色	回転ナゲ	回転ナゲ	13.6	9.0	3.4	-
	875	溝7	一括	土師器	杯	鈍い黄褐色色	回転ナゲ	回転ナゲ	13.6	9.0	3.4	-
	876	溝7	一括	土師器	杯	浅黄褐色色	回転ナゲ	回転ナゲ	13.6	9.0	3.2	-
	877	溝7	一括	土師器	杯	浅黄褐色色	回転ナゲ	回転ナゲ	13.2	9.0	3.6	-
	878	溝7	一括	土師器	杯	浅黄褐色色	回転ナゲ	回転ナゲ	13.6	9.0	3.4	-
	879	溝7	一括	土師器	杯	浅黄褐色色	回転ナゲ	回転ナゲ	12.8	7.6	3.2	-
	880	溝7	一括	土師器	杯	鈍い黄褐色色	回転ナゲ	回転ナゲ	12.5	8.0	3.6	-
	881	溝7	一括	土師器	杯	浅黄褐色色	回転ナゲ	回転ナゲ	12.6	8.0	3.6	-
	882	溝7	一括	土師器	杯	浅黄褐色色	回転ナゲ	回転ナゲ	14.0	9.0	3.6	-
	883	溝7	一括	土師器	杯	浅黄褐色色	回転ナゲ	回転ナゲ	-	7.0	-	-
	884	溝7	一括	土師器	杯	浅黄褐色色	回転ナゲ	回転ナゲ	-	8.0	-	-
	885	溝7	一括	土師器	杯	鈍い黄褐色色	回転ナゲ	回転ナゲ	-	7.4	-	-
	886	溝7	一括	土師器	杯	鈍い黄褐色色	回転ナゲ	回転ナゲ	-	9.0	-	-
	第3000区	897	溝19	B・C-15	土師器	皿	浅黄褐色色	ナゲ	ナゲ	8.8	6.3	1.6
第3010区	903	溝21	F-12	土師器	皿	浅黄褐色色	ナゲ	ナゲ	7.0	5.0	1.5	-
	904	溝21	E-12	土師器	皿	浅黄褐色色	ナゲ	ナゲ	7.6	6.0	1.2	-
	906	溝21	E-12	土師器	皿	浅黄褐色色	ナゲ	ナゲ	8.8	6.8	1.7	底部未切り

溝状遺構内出土遺物 観察表 (土製品)

詳細番号	図録番号	遺構名	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	法量 (cm)		備考
								最大径	最大径	
第3000区	895	溝13	E～F-22	土製品	土鉢	黄灰	4.4	1.0	-	
第3010区	902	溝20	F-7	土製品	土鉢	浅黄褐色	3.75	1.6	-	









中世出土遺物観察表

採集番号	陶器番号	出土区	層位	種類	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量(cm)			測定	時期	分類	備考	
									口径	直径	器高					
第221区	1131	G-5	Ⅱ	青磁	皿	灰白色	青磁釉	外面底部施釉のみ取り	-	4.4	-	同定常型	D期 12c中頃-後半	同定常Ⅰ-2部		
	1132	B-30 E-31	Ⅱ	青磁	皿	灰白色	青磁釉	外面底部施釉のみ取り	-	4.4	-	同定常型	D期 12c中頃-後半	同定常Ⅰ-2部		
	1133	-	青磁	皿	灰白色	青磁釉	外面施釉のみ取り	9.0	5.8	2.6		同定常型	D期 12c中頃-後半	同定常Ⅰ-2部		
	1134	E-31	Ⅱ	青磁	皿	灰白色	青磁釉	外面施釉のみ取り	-	6.2	-	同定常型	D期 12c中頃-後半	同定常Ⅰ-2部		
	1135	-	青磁	皿	灰白色	青磁釉	口縁部施釉のみ	10.6	5.8	1.7		同定常型	D期 12c中頃-後半	同定常Ⅰ-2部		
	1136	B-31	Ⅱ	青磁	皿	灰白色	青磁釉	外底面施釉のみ	12.8	3.6	2.6		同定常型	D期 12c中頃-後半	Ⅲ1期	見込みに鎌目の華文文
	1137	B-29	-	青磁	皿	浅黄色	青磁釉	外底面施釉のみ	-	3.6	-	同定常型	D期 12c中頃-後半	Ⅲ1期		
	1138	C-13	-	青磁	皿	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	9.8	-	-		同定常型	D期 12c中頃-後半	Ⅲ1期	
	1139	D-16	-	青磁	皿	灰白色	青磁釉	外底面施釉のみ	-	4.7	-	同定常型	D期 12c中頃-後半	Ⅲ1期	見込みに鎌目の華文文	
	1140	-	青磁	皿	灰色	青磁釉	惣付-高台内面施釉	14.0	7.0	3.0		同定常型	G期 14c初頃-中頃	Ⅲ2期		
	1141	E-15	Ⅱ	青磁	皿	灰白色	青磁釉	外底面施釉-高台内面施釉 見込みに輸射のみ	12.4	6.0	2.9		同定常型	G期 14c初頃-中頃	同定常型青磁類	赤色厚化粧(見込-高台内面)
	1142	D-16	-	青磁	皿	灰白色	青磁釉	高台内面施釉に輸射のみ	12.6	8.0	3.6		同定常型	I期以降 14c後半-末	明代瓦	
1143	F-27	Ⅱ	青磁	皿	灰白色	青磁釉	高台内面施釉	11.8	7.0	3.2		同定常型	I期以降 14c後半-末	明代瓦		
1144	C-28	Ⅱ	青磁	皿	灰色	青磁釉	高台内面施釉 見込みに輸射に輸射のみ	12.0	6.0	2.7		同定常型	I期以降 14c後半-末	明代瓦		
第222区	1145	D-28	Ⅱ	青磁	皿	浅黄色	青磁釉	高台内面施釉	12.6	7.6	4.0		同定常型	I期以降 14c後半-末	明代瓦	
	1146	F-26	1b	青磁	皿	灰色	青磁釉	高台内面施釉	13.6	7.3	3.6		同定常型	I期以降 14c後半-末	明代瓦	
	1147	F-18	-	青磁	皿	灰白色	青磁釉	高台内面施釉	12.8	5.8	4.0		同定常型	I期以降 14c後半-末	明代瓦	見込みに華文文の印文
	1148	D-9	-	青磁	皿	灰白色	青磁釉	高台内面施釉のみ	8.2	4.4	2.6		同定常型	I期以降 14c後半-末	明代瓦	
	1149	B-C-30	-	青磁	皿	灰白色	青磁釉	高台内面施釉のみ	10.8	5.7	3.2		同定常型	I期以降 14c後半-末	明代瓦	見込みに華文文の印文
	1150	E-28	Ⅱ	青磁	皿	灰白色	青磁釉	高台内面施釉のみ	10.8	5.4	3.3		同定常型	I期以降 14c後半-末	明代瓦	見込みに華文文の印文
	1151	D-13	-	青磁	皿	灰白色	青磁釉	惣付-高台内面施釉	10.4	5.0	3.2		同定常型	I期以降 14c後半-末	明代瓦	
	1152	F-24	Ⅱ	青磁	碗状鉢	灰白色	青磁釉	高台内面施釉に輸射のみ	10.6	5.0	2.9		同定常型	I期以降 14c後半-末	明代瓦	見込みに華文文の印文
	1153	D-7	Ⅱ	青磁	碗状鉢	灰白色	青磁釉	高台内面施釉	12.0	5.5	3.2		同定常型	I期以降 14c後半-末	明代瓦	見込みに華文文の印文
	1154	C-4	Ⅱ	青磁	碗状鉢	灰白色	青磁釉	惣付-高台内面施釉	12.6	5.8	3.3		同定常型	I期以降 14c後半-末	明代瓦	見込みに華文文の印文
	1155	D-16	-	青磁	碗状鉢	灰色	青磁釉	高台内面施釉	11.6	5.6	3.4		同定常型	I期以降 14c後半-末	明代瓦	見込みに華文文の印文
	1156	D-7	-	青磁	碗状鉢	灰白色	青磁釉	惣付-高台内面施釉	10.2	5.1	3.0		同定常型	I期以降 14c後半-末	明代瓦	見込みに華文文の印文
第223区	1157	D-19	Ⅱ	青磁	碗状鉢	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	14.0	7.4	2.2		同定常型	I期以降 14c後半-末	明代瓦	
	1158	F-17	Ⅱ	青磁	皿	灰白色	青磁釉	底部施釉のみ	-	-	-		同定常型	I期以降 14c後半-末	明代瓦	器底面
	1159	F-19	Ⅱ	青磁	皿	灰色	青磁釉	底部施釉のみ	11.6	4.6	3.6		同定常型	I期以降 14c後半-末	明代瓦	器底面
	1160	G-17	-	青磁	皿	灰白色	青磁釉	底部施釉のみ	-	7.2	-		同定常型	I期以降 14c後半-末	明代瓦	器底面
	1161	-	青磁	浅鉢	灰白色	青磁釉	惣付-高台内面施釉	15.8	6.0	3.2		同定常型	D期 12c中頃-前半	浅鉢型Ⅰ類		
	1162	D-32	Ⅱa	青磁	小瓶	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	11.8	-	-		同定常型	E期 13期前半	小瓶Ⅱ-b類	
	1163	B-28	Ⅱ	青磁	小瓶	灰白色	青磁釉	惣付施釉のみ	-	5.4	-		同定常型	F期 13c中頃-14c初頃	小瓶Ⅲ類	赤地に黄色(高台内面施釉のみ)取り足
	1164	C-18	Ⅱ	青磁	小瓶	灰白色	青磁釉	惣付施釉のみ	-	4.8	-		同定常型	F期 13c中頃-14c初頃	小瓶Ⅲ類	
	1165	-	青磁	小瓶	灰白色	青磁釉	惣付-高台内面施釉	-	3.8	-		同定常型	F期 13c中頃-14c初頃	小瓶Ⅲ類		
	1166	F-9	Ⅱ	青磁	小瓶	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	10.4	-	-		同定常型	I期以降 14c後半-末	明代小瓶	
	1167	E-30	Ⅱ	青磁	小瓶	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	12.4	-	-		同定常型	I期以降 14c後半-末	明代小瓶	
	1168	-	青磁	坏	灰白色	青磁釉	惣付-高台内面施釉のみ	-	5.4	-		同定常型	F期 13c中頃-14c初頃	坏Ⅲ類	赤地に黄色(高台内面施釉のみ)取り足	
第224区	1169	E-14・15 F-18	Ⅱ	青磁	坏	灰白色	青磁釉	惣付-高台内面施釉	10.8	6.0	3.2		同定常型	G期 14c初頃-後半	坏Ⅲ類	
	1170	B-28・29	Ⅱ	青磁	坏	灰白色	青磁釉	高台内面施釉に輸射のみ	11.0	5.6	3.1		同定常型	I期以降 14c後半-末	明代坏	
	1171	D-16	Ⅱ	青磁	坏	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	12.2	-	-		同定常型	I期以降 14c後半-末	明代坏	
	1172	-	青磁	坏	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	12.4	-	-		同定常型	I期以降 14c後半-末	明代坏		
	1173	-	青磁	碗	灰白色	青磁釉	高台内面施釉に2ヶ所輸射のみ	22.0	9.0	4.6		同定常型	I期以降 14c後半-末	明代碗	口縁部施釉	
	1174	D-29・30	Ⅱ	青磁	碗	灰白色	青磁釉	高台内面施釉に輸射のみ	28.0	17.6	5.6		同定常型	I期以降 14c後半-末	明代碗	
	1175	G-11	Ⅱ	青磁	碗	灰色	青磁釉	底部施釉のみ	-	9.6	-		同定常型	I期以降 14c後半-末	明代碗	器底面
	1176	E-30	Ⅱ	青磁	碗	灰色	青磁釉	底部施釉のみ	-	10.4	-		同定常型	I期以降 14c後半-末	明代碗	器底面
	1177	F-25	Ⅱ下	青磁	碗	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	29.4	-	-		同定常型	I期以降 14c後半-末	明代碗	
	1178	E-30・31 F-30	Ⅱ	青磁	碗	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	25.2	-	-		同定常型	I期以降 14c後半-末	明代碗	
	1179	E-28	表漆	青磁	碗	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	30.6	-	-		同定常型	I期以降 14c後半-末	明代碗	
	1180	表漆	青磁	碗	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	-	-	-		同定常型	I期以降 14c後半-末	明代碗	口縁部施釉	
1181	C-20	Ⅱ	青磁	碗	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	-	-	-		同定常型	I期以降 14c後半-末	明代碗	口縁部	
1182	-	白磁	碗	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	-	-	-		A期	8c末頃-10c中頃	碗Ⅰ類	玉縁口縁部		
第225区	1183	C-27・28 D-28	Ⅱ	白磁	碗	灰白色	透明釉	胴部-高台内面施釉	-	5.9	-		C期	11c後半-12c前半	碗Ⅱ-b類	
	1184	F-20	Ⅱ	白磁	碗	灰白色	透明釉	胴部-高台内面施釉	-	6.4	-		C期	11c後半-12c前半	碗Ⅱ類	
	1185	A-23 B-29	Ⅱ	白磁	碗	灰白色	透明釉	胴部-高台内面施釉	16.4	7.4	5.7		C期	11c後半-12c前半	碗Ⅱ類	
	1186	-	白磁	碗	灰白色	透明釉	胴部-高台内面施釉	13.6	5.7	6.4		C期	11c後半-12c前半	碗Ⅱ類		
	1187	A-18	Ⅱ	白磁	碗	浅黄色	透明釉	胴部以下露胎	16.0	-	-		C期	11c後半-12c前半	碗Ⅱ類	
	1188	F-25	Ⅱ	白磁	碗	灰白色	透明釉	胴部以下露胎	15.6	-	-		C期	11c後半-12c前半	碗Ⅱ類	
	1189	C-34	-	白磁	碗	灰白色	透明釉	胴部以下露胎	-	-	-		C期	11c後半-12c前半	碗Ⅱ類	
	1190	A・D-30	Ⅱ	白磁	碗	灰白色	透明釉	胴部以下露胎	16.0	-	-		C期	11c後半-12c前半	碗Ⅱ類	
	1191	C-19	Ⅱ	白磁	碗	灰白色	透明釉	胴部以下露胎	14.8	-	-		C期	11c後半-12c前半	碗Ⅱ類	
	1192	-	白磁	碗	灰白色	透明釉	胴部-高台内面施釉	-	7.0	-		C期	11c後半-12c前半	碗Ⅱ類		
	1193	B-16	Ⅱ	白磁	碗	灰白色	透明釉	胴部以下露胎	17.2	-	-		C期	11c後半-12c前半	碗Ⅱ・2a類	

中世出土遺物観察表

採集番号	図表番号	出土区	層位	種類	器種	胎土の色調	輪軸	法量(cm)		底地	時期	分類	備考			
								口径	底径							
第225区	1194	A・B-16	Ⅱ b Ⅱ	白磁	瓶	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露出	-	5.8	-	C期	11c後半～12c前半	瓶V-2a型		
	1195	E-30	1 b	白磁	瓶	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露出	-	5.8	-	C期	11c後半～12c前半	瓶V型		
	1196	B-30	-	白磁	瓶	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露出	16.6	5.9	7.4	C期	11c後半～12c前半	瓶V-2a型		
	1197	D-2	-	白磁	瓶	灰白色	透明釉	腰部以下露出	12.8	-	-	C期	11c後半～12c前半	瓶V型		
	1198	D-27	Ⅱ	白磁	瓶	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露出	17.4	5.8	6.2	C期	11c後半～12c前半	瓶V-2a型		
	1199	B-30	Ⅱ	白磁	瓶	灰白色	透明釉	腰部～底部露出	17.0	-	-	D期	12c中頃～後半	瓶V-4b型	内面に劃花文	
	1200	D-25	Ⅱ	白磁	瓶	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露出	-	6.2	-	D期	12c中頃～後半	瓶V-4b型		
	1201	D-31	Ⅱ	白磁	瓶	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露出	13.8	5.2	4.2	C期	11c後半～12c前半	瓶V-1a型		
	1202	D-31	Ⅱ	白磁	瓶	灰白色	透明釉	残存部全面露出	12.6	-	-	畿東京系	D期	11c後半～12c前半	瓶V-1a型	口縁部輪花
	1203	D-7	-	白磁	瓶	灰黄色	透明釉	腰部以下露出 見込み輪軸に輪割子	-	7.0	-	D期	12c中頃～後半	瓶V型		
第226区	1204	E-2	N	白磁	瓶	灰白色	透明釉	腰部以下露出 見込み輪軸に輪割子	-	6.2	-	D期	12c中頃～後半	瓶V型		
	1205	F-8	-	白磁	瓶	淡黄色	透明釉	腰部以下露出	-	-	-	D期	12c中頃～後半	瓶V型		
	1206	B-30	-	白磁	瓶	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露出	18.6	-	-	畿東京系	D期	12c中頃～後半	瓶V型	
	1207	D-30	-	白磁	瓶	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露出	-	-	-	畿東京系	D期	12c中頃～後半	瓶V-1型	
	1208	-	-	白磁	瓶	灰白色	透明釉	残存部全面露出	-	-	-	F期	13c後半～14c前半	瓶V型		
	1209	C-24	Ⅱ	白磁	瓶	灰白色	透明釉	残存部全面露出	14.2	-	-	F期	13c後半～14c初頃	瓶V型		
	1210	D-15	Ⅱ	白磁	瓶	灰白色	透明釉	残存部全面露出	15.4	-	-	F期	13c中頃～14c初頃	瓶V型		
	1211	F-16	Ⅱ	白磁	瓶	灰白色	透明釉	残存部全面露出	13.6	-	-	F期	13c中頃～14c初頃	瓶V型		
	1212	-	-	白磁	瓶	灰白色	透明釉	残存部全面露出	-	5.3	-	F期	13c中頃～14c初頃	瓶V-2型		
	1213	D-22	-	白磁	瓶	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露出	-	4.8	-	F期	13c中頃～14c初頃	瓶V型		
第227区	1214	D-22	直線	白磁	瓶	灰白色	透明釉	腰部以下露出	19.4	-	-	J-1期	15c中頃～16c中頃	森田B型		
	1215	D-18	-	白磁	瓶	灰白色	透明釉	腰部以下露出	-	6.0	-	畿東京系	G期以降	14c初頃～	森田B・C型	
	1216	B-13	-	白磁	瓶	灰白色	透明釉	器付～高台内面露出	14.3	5.6	4.8	G期以降	14c初頃～	-		
	1217	E-24	Ⅱ	白磁	瓶	淡黄色	透明釉	腰部～高台内面露出	-	6.2	-	G期以降	14c初頃～	森田D型		
	1218	F-26	1 b	白磁	瓶	淡黄色	透明釉	腰部以下露出	-	5.9	-	G期以降	14c初頃～	森田C型		
	1219	C-24	Ⅱ	白磁	瓶	灰白色	透明釉	残存部全面露出	-	-	-	G期以降	14c初頃～	森田C型		
	1220	D-20	-	白磁	瓶	灰白色	透明釉	腰部以下露出	-	-	-	C期	11c後半～12c後半	瓶Ⅱ-1b型	口縁部断面が三角形の5割	
	1221	-	-	白磁	瓶	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露出 見込み輪軸に輪割子	8.9	4.2	2.2	D期	12c中頃～後半	瓶Ⅱ-1型		
	1222	E-20	Ⅱ	白磁	瓶	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露出 見込み輪軸に輪割子	10.2	4.8	2.7	D期	12c中頃～後半	瓶Ⅱ-1型		
	1223	-	-	白磁	瓶	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露出	9.6	5.0	2.4	D期	12c中頃～後半	瓶Ⅱ型		
第228区	1224	D-E-25	Ⅱ	白磁	瓶	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露出	10.0	4.3	2.4	D期	12c中頃～後半	瓶Ⅱ型		
	1225	C-32	Ⅱ	白磁	瓶	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露出	9.3	4.4	2.7	D期	12c中頃～後半	瓶Ⅱ-2型		
	1226	-	-	白磁	瓶	灰白色	透明釉	腰部～高台外側露出	10.6	3.4	3.1	C期	11c後半～12c前半	瓶Ⅱ-1a型		
	1227	-	-	白磁	瓶	黄褐色	透明釉	残存部全面露出	11.0	-	-	C期	11c後半～12c前半	瓶Ⅱ-1a型		
	1228	D-31	Ⅱ	白磁	瓶	灰白色	透明釉	残存部全面露出	10.4	-	-	D期	12c中頃～後半	瓶Ⅱ-1b型	へろ縞き彫花文	
	1229	B-29	-	白磁	瓶	灰白色	透明釉	底部露出	9.0	1.7	2.2	畿東京系	D期	12c中頃～後半	瓶Ⅱ型	
	1230	D-31	Ⅱ	白磁	瓶	灰白色	透明釉	口	9.4	6.2	1.7	F期	13c中頃～14c初頃	瓶Ⅱ-1a型		
	1231	B-36 B-C-17	Ⅱ	白磁	瓶	灰白色	透明釉	底部露出	9.2	6.0	1.8	F期	13c中頃～14c初頃	瓶Ⅱ-1a型	口縁部に黒色の付着物	
	1232	D-30	-	白磁	瓶	白色	透明釉	底部露出	10.0	7.6	1.8	F期	13c中頃～14c初頃	瓶Ⅱ-1b型		
	1233	E-23	Ⅱ	白磁	瓶	灰白色	透明釉	底部露出	10.6	6.2	2.1	F期	13c中頃～14c初頃	瓶Ⅱ-1b型		
第229区	1234	-	-	白磁	瓶	灰白色	透明釉	底部露出	10.6	7.0	1.9	F期	13c中頃～14c初頃	瓶Ⅱ-1b型		
	1235	-	-	白磁	瓶	淡黄色	透明釉	底部露出	11.6	8.0	2.4	F期	13c中頃～14c初頃	瓶Ⅱ-1a型	内面の施軸が凸出	
	1236	-	-	白磁	瓶	灰白色	透明釉	底部露出	11.4	6.4	3.2	F期	13c中頃～14c初頃	瓶Ⅱ-c型		
	1237	D-29	Ⅱ	白磁	瓶	灰黄色	透明釉	底部露出	11.6	-	-	F期	13c中頃～14c初頃	瓶Ⅱ-1d型		
	1238	D-23	Ⅱ	白磁	瓶	灰黄色	透明釉	残存部全面露出	11.4	-	-	F期	13c中頃～14c初頃	瓶Ⅱ-1d型		
	1239	A-30	Ⅱ	白磁	瓶	灰白色	透明釉	底部内面に輪割子	11.3	6.0	3.3	F期	13c中頃～14c初頃	瓶Ⅱ-1d型		
	1240	D-30	-	白磁	瓶	灰黄色	透明釉	残存部全面露出	10.6	6.0	3.3	F期	13c中頃～14c初頃	瓶Ⅱ-1d型		
	1241	-	-	白磁	瓶	灰白色	透明釉	残存部全面露出	10.8	-	-	F期	13c中頃～14c初頃	瓶Ⅱ-1b型		
	1242	-	-	白磁	瓶	灰白色	透明釉	器付輪割子	9.7	4.4	2.4	H期	14c後半～15a前半	森田D群	髷高台 残存部の目録	
	1243	E-17	Ⅱ	白磁	瓶	淡黄色	透明釉	腰部～高台内面露出	9.5	4.1	2.4	H期	14c後半～15a前半	森田D群	髷高台 残存部の目録	
1244	G-15	-	白磁	瓶	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露出	7.5	3.4	2.8	H期	14c後半～15a前半	森田D群	髷高台 残存部の目録		
1245	D-15	Ⅱ a	白磁	瓶	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露出	9.4	4.8	2.2	H期	14c後半～15a前半	森田D群	髷高台 残存部の目録		
1246	E-31	Ⅱ	白磁	瓶	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露出	10.9	4.5	2.9	H期	14c後半～15a前半	森田D群	髷高台 残存部の目録		

中世出土遺物観察表

採集番号	図帳番号	出土区	層位	器種	釉薬の色調	輪軸	法線(cm)			底地	時期	分類	備考		
							口径	直径	器高						
第 229 区	1247	C-29	Ⅱ	白磁	肌	灰白色	透明釉	腰部一高台内面露胎	10.6	3.6	3.2				
	1248	E-24	Ⅱ	白磁	肌	灰白色	透明釉	腰部一高台内面露胎	10.1	3.4	3.5				
	1249	D-29・30	Ⅱ	白磁	肌	灰白色	透明釉	腰部一高台内面露胎	10.5	4.0	3.1	胎建古		見込みは四分折の目録	
	1250	D-30	Ⅱ	白磁	肌	淡黄色	透明釉	高台一高台内面露胎	8.4	3.6	2.9				
	1251	F-20	Ⅱ	白磁	肌	灰白色	透明釉	惣付輪跡否	12.2	4.8	3.2	1-1期	15中頃～16中頃	森田正 Ⅱ	
	1252	F-6	Ⅱ	白磁	肌	灰白色	透明釉	惣付輪跡否	10.4	4.6	3.2	1-1期	15中頃～16中頃	森田正 Ⅱ	
	1253	E-7	Ⅱ	白磁	肌	灰白色	透明釉	高台一高台内面露胎	11.0	4.6	2.7	1-1期	15中頃～16中頃	森田正	
	1254	F-17	Ⅱ	白磁	肌	灰白色	透明釉	惣付輪跡否	11.0	5.2	2.5	1-1期	15中頃～16中頃	森田正 Ⅱ	
	1255	R-17	Ⅱ	白磁	肌	灰白色	透明釉	惣付一高台内面露胎	10.5	4.7	2.9	1-1期	15中頃～16中頃	森田正	
	1256	E-30	Ⅱ	白磁	菊花肌	灰黄色	透明釉	腰部一高台内面露胎 見込み輪軸に輪跡否	9.0	3.6	3.3	1-1期	15中頃～16中頃	森田正	
第 229 区	1257	-	Ⅱ	白磁	菊花肌	黄灰色	透明釉	残存部全面施釉	-	-	-	1-1期	15中頃～16中頃	森田正 Ⅱ	
	1258	E-30	Ⅱ上	白磁	菊花肌	灰白色	透明釉	惣付一高台内面露胎	10.7	4.8	3.0	1-1期	15中頃～16中頃	森田正	
	1259	-	Ⅱ	白磁	菊花肌	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	-	-	-	1-1期	15中頃～16中頃	森田正 Ⅱ	
	1260	E-18	Ⅱ	白磁	菊花肌	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	-	-	-	1-1期	15中頃～16中頃	森田正	
	1261	F-19	Ⅱ	白磁	白磁肌	灰白色	透明釉	惣付輪跡否	11.8	4.2	3.1	1-1期	15中頃～16中頃	森田正 Ⅱ	
	1262	E-30	Ⅱ	白磁	白磁肌	灰白色	透明釉	惣付輪跡否	9.0	4.9	2.1	1-1期	15中頃～16中頃	森田正	
	1263	F-25	1b	白磁	多角杯	淡黄色	透明釉	腰部以下露胎	-	-	-	1期以降	14後半～1	明代杯	
	1264	E-24	Ⅱ	白磁	多角杯	灰白色	透明釉	腰部一高台内面露胎	-	3.2	-	1期以降	14後半～1	明代杯	
	第 230 区	1265	D・C-29	-	青磁	肌	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	11.2	-	-			
		1266	D-16・22 F-25	1b	白磁	肌	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	-	-	-			水注か?
1267		F-25	Ⅱ	青磁	小型瓶	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	-	-	-				
1268		D-35	-	青磁	瓶	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	-	-	-	龍泉窯系		耳底	
1269		F-8	Ⅱ	青磁	小型瓶	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	5.0	-	-			龍泉窯系	
1270		表録	-	青磁	瓶	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	9.6	-	-			龍泉窯系	
1271		C・D-22	1b	青磁	大型瓶	灰白色	青磁釉	底部内面一高台内面露胎	-	8.0	-				
1272		E-3 F-4	Ⅱb	青磁	小型瓶	灰白色	青磁釉	惣付輪跡否	-	3.8	-				
1273		-	-	青磁	鉢	こぶ・青灰色	青磁釉	内面露胎	10.6	-	-				
1274		E-16	Ⅱ	青磁	鉢	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	-	-	-				
第 231 区	1275	-	Ⅱ	白磁	鉢	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	8.8	-	-				
	1276	E-9	Ⅱ	白磁	鉢	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	12.8	-	-				
	1277	F-16 F・G-17	Ⅱ	青磁	鉢	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	13.2	-	-				
	1278	F-21	Ⅱ	白磁	鉢	明黄褐色	透明釉	外面露胎一部露胎	8.4	4.4	4.1				
	1279	D-28	-	白磁	鉢?	灰白色	-	-	-	-	-			口縁部に5mm程度の穴	
	1280	H-29	Ⅱ	青磁	燗白	灰色	青磁釉	上面露胎	3.4	直径 6.8	1.5	龍泉窯系			
	1281	F-25	Ⅱ	青磁	香炉	淡黄色	青磁釉	内面・高台内面露胎	-	-	-				三足
	1282	-	-	青磁	香炉	灰白色	青磁釉	内面中伊以下露胎	-	-	-				三足
	1283	D-28	-	青磁	香炉	灰白色	青磁釉	内面中伊以下露胎	-	-	-				三足
	1284	D-36	Ⅱ	白磁	香炉	灰白色	青磁釉	惣付一高台内面露胎	6.5	3.8	4.8				三足
第 232 区	1285	F-17	Ⅱ	白磁	香炉	淡黄色	透明釉	残存部全面施釉	10.0	-	-				
	1286	D-35	-	白磁	香炉	灰白色	透明釉	外面露胎一高台内面露胎	-	4.0	-				燗白台
	1287	-	Ⅱ	白磁	杯	灰白色	透明釉	内面見込み輪軸に輪跡否 惣付輪跡否	6.3	2.6	3.0				
	1288	-	Ⅱ	白磁	杯	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	6.6	-	-				
	1289	-	Ⅱ	白磁	杯	灰白色	透明釉	惣付輪跡否	6.8	2.4	4.4				
	1290	E-25	Ⅱ	白磁	杯	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	5.0	-	-				
	1291	F-26	1b	白磁	杯	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	-	-	-				
	1292	F・G-36	表録	青白磁	蓋	灰白色	青白磁 釉	内面露胎	2.9	直径 5.2	1.2				上面に草花文を整理し
	1293	C-15	Ⅳ	青白磁	蓋	灰白色	青白磁 釉	内面露胎	4.0	直径 6.6	1.1				上面に草花文を整理し
	1294	-	-	青白磁	蓋	灰白色	青白磁 釉	内面露胎	7.8	直径 10.0	-				上面に菊梅花の文様
第 232 区	1295	D-20	Ⅱ	青白磁	合子身	灰白色	青白磁 釉	身受け部・内面露胎	7.8	-	-				
	1296	D-24	Ⅱ	青白磁	合子身	灰白色	青白磁 釉	外底面露胎 蓋との接合面を輪跡否	-	4.8	-				
	1297	E-29	Ⅱ	青白磁	合子身	灰白色	青白磁 釉	能受け部を輪跡否 腰部一底面露胎	-	3.6	-				
	1298	C-24	Ⅱ	青白磁	合子身	灰白色	青白磁 釉	腰部一底面露胎 蓋との接合面を輪跡否	5.2	3.2	1.7				
	1299	D-23	Ⅱ	青白磁	合子身	灰白色	青白磁 釉	外面露胎	-	7.0	-				
	1300	D・E-22	Ⅱ	青白磁	肌	白色	青磁釉	惣付一高台内面露胎	6.0	3.4	1.2	龍泉窯系			梅花出
	1301	F-17	Ⅱ	青花	瓶	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	14.4	-	-	漳州窯	14c後半～15c中頃	小野崎C群	貫入
	1302	F-17	Ⅱ	青花	瓶	灰黄色	透明釉	残存部全面施釉	13.2	-	-	漳州窯	14c後半～15c中頃	小野崎C群	貫入
	1303	F-18	Ⅱ	青花	瓶	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	13.2	-	-	景徳窯	14c後半～15c中頃	小野崎C群	梅花肌
	1304	E-18	Ⅱ	青花	瓶	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	-	-	-	景徳窯	14c後半～15c中頃	小野崎C群	
1305	-	-	青花	瓶	灰白色	透明釉	惣付輪跡否	-	5.4	-	漳州窯	15c後半～16c中頃	小野崎C群	見込みは梅花文	
1306	C-7	-	青花	瓶	灰白色	透明釉	惣付輪跡否	-	5.6	-	漳州窯	15c後半～16c中頃	小野崎C群	見込みは梅花文	
1307	E-30	1b	青花	瓶	灰白色	透明釉	惣付輪跡否	-	5.0	-	漳州窯	15c後半～16c中頃	小野崎C群	見込みは梅花文	
1308	D・E-4	-	青花	瓶	灰白色	透明釉	惣付輪跡否	-	5.7	-	景徳窯	15c後半～16c中頃	小野崎C群	見込みは梅花文	

中世出土遺物観察表

採集番号	図表番号	出土区	層位	種類	胎土の色調	輪軸	法量(cm)			産地	時期	分類	備考	
							口径	直径	器高					
第 232 区	1309	F-8	Ⅰ	青花 瓶	灰白色	透明釉	惣付一高台内面露胎	-	5.2	-	涇州窯	15c後半-16c中頃	小野陶C群	見込みに蓮花文
	1310	表探	Ⅰ	青花 瓶	灰白色	透明釉	惣付輪郭否	-	4.2	-	涇州窯	15c後半-16c中頃	小野陶C群	見込みに法螺貝文
	1311	F-3・4	Ⅱ	青花 瓶	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	-	-	-	涇州窯	15c後半-16c中頃	小野陶C群	
	1312	D・E-4	Ⅰ	青花 瓶	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	13.8	-	-	涇州窯	15c後半-16c中頃	小野陶C群	
	1313	E-23・25	1b	青花 瓶	灰白色	透明釉	惣付輪郭否	-	5.0	-	涇州窯	15c後半-16c中頃	小野陶C群	
	1314	C・D-5	Ⅰ	青花 瓶	灰白色	透明釉	惣付輪郭否	-	5.7	-	涇州窯	15c後半-16c中頃	小野陶C群	
	1315	C・D-21	Ⅰ	青花 瓶	灰白色	透明釉	惣付輪郭否	-	5.0	-	景徳鎮窯	15c後半-16c中頃	小野陶C群	見込みに蓮卉文
	1316	C-29 D-30	Ⅱ	青花 瓶	灰白色	透明釉	惣付輪郭否	-	5.8	-	景徳鎮窯	15c後半-16c中頃	小野陶C群	見込みに蓮卉文
	1317	E-25 E-22・21	Ⅱ Ⅱ下	青花 瓶	灰白色	透明釉	惣付輪郭否	-	5.4	-	涇州窯	15c後半-16c中頃	小野陶C群	見込みに法螺貝文
	1318	B-24	Ⅱ	青花 瓶	灰白色	透明釉	惣付輪郭否	-	5.6	-	涇州窯	15c後半-16c中頃	小野陶C群	見込みに法螺貝文
第 233 区	1319	Ⅰ	青花 瓶	灰白色	透明釉	惣付一高台内面露胎	-	5.4	-	涇州窯	15c後半-16c中頃	小野陶C群	見込みに法螺貝文	
	1320	E-19	Ⅰ	青花 瓶	灰白色	透明釉	惣付一高台内面露胎	-	4.8	-	涇州窯	15c後半-16c中頃	小野陶C群	見込みに法螺貝文
	1321	D-10	Ⅰ	青花 瓶	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	15.4	-	-	涇州窯	15c後半-16c中頃	小野陶C群	
	1322	D-7	Ⅰ	青花 瓶	浅黄褐色	透明釉	惣付輪郭否 見込み輪郭に輪郭否	-	5.0	-	涇州窯	15c後半-16c中頃	小野陶C群	
	1323	F-23	Ⅱ	青花 瓶	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	13.8	-	-	涇州窯	15c後半-16c中頃	小野陶C群	
	1324	C-31 D-19 E-19	Ⅱ Ⅱb	青花 瓶	灰白色	透明釉	惣付輪郭否 内面見込輪郭否	12.6	4.2	4.3	涇州窯	15c後半-16c中頃	小野陶C群	
	1325	F-19	Ⅱ	青花 瓶	淡黄色	透明釉	惣付輪郭否	-	5.4	-	涇州窯	15c後半-16c中頃	小野陶D群	
	1326	Ⅰ	青花 瓶	灰白色	透明釉	惣付輪郭否	-	6.6	-	景徳鎮窯	15c後半-16c中頃	小野陶D群		
	1327	F-19	Ⅱ	青花 瓶	灰白色	透明釉	惣付輪郭否	-	5.6	-	涇州窯	15c後半-16c中頃	小野陶D群	
	1328	E-29 D-7 E-7	1a	青花 瓶	浅黄褐色	透明釉	惣付輪郭否 見込み輪郭に輪郭否	12.8	4.6	5.9	涇州窯	16c中頃-後半	小野陶E群	表面に書草文
第 234 区	1329	F-7	Ⅰ	青花 瓶	灰白色	透明釉	惣付輪郭否	-	4.0	-	景徳鎮窯	16c中頃-後半	小野陶E群	見込みに白人物 高台内面に「度部殿」
	1330	E-17	Ⅱ	青花 瓶	灰白色	透明釉	惣付輪郭否	13.0	4.6	5.3	涇州窯	16c中頃-後半	小野陶E群	
	1332	E-27 F-23・24	Ⅳ	青花 瓶	灰白色	透明釉	惣付輪郭否	11.4	4.0	5.7	景徳鎮窯	16c中頃-後半	小野陶E群	高台内面に「梵字
	1333	D-25	Ⅰ	青花 瓶	灰白色	透明釉	高台露胎一高台内面露胎	-	4.2	-	景徳鎮窯	16c中頃-後半	小野陶E群	
	1334	D-19	Ⅱ	青花 瓶	浅黄褐色	透明釉	惣付輪郭否	-	4.6	-	涇州窯	16c中頃-後半	小野陶E群	
	1335	B-30	Ⅰ	青花 瓶	灰白色	透明釉	惣付輪郭否	-	4.8	-	涇州窯	16c中頃-後半	小野陶E群	
	1336	E-21	Ⅱ	青花 瓶	灰白色	透明釉	惣付輪郭否	-	4.8	-	景徳鎮窯	16c中頃-後半	小野陶E群	
	1337	D-9	Ⅰ	青花 瓶	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	13.6	-	-	景徳鎮窯	16c中頃-後半	小野陶E群	
	1338	F-22	Ⅱ	青花 瓶	浅黄褐色	透明釉	残存部全面施釉	16.6	-	-	涇州窯	16c中頃-後半	小野陶E群	
	1339	Ⅰ	青花 瓶	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	11.0	-	-	景徳鎮窯	16c中頃-後半	小野陶E群		
第 235 区	1340	E-24	Ⅱ	青花 瓶	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	-	-	景徳鎮窯	16c中頃-後半	小野陶E群		
	1341	B-35・36	Ⅰ	青花 瓶	灰白色	透明釉	惣付輪郭否	11.2	4.6	5.9	涇州窯	16c中頃-後半	小野陶E群	
	1342	E-30	1b Ⅱ	青花 瓶	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	13.8	-	-	涇州窯	16c-17c初頃	-	
	1343	D-35	Ⅰ	青花 瓶	仁白・黄褐色	透明釉	見込み輪郭に輪郭否	16.8	-	-	涇州窯	16c-17c初頃	-	
	1344	F-19	Ⅱ	青花 瓶	灰白色	透明釉	惣付輪郭否 見込み輪郭に輪郭否	14.2	5.6	4.9	涇州窯	16c-17c初頃	-	
	1345	C-35	Ⅰ	青花 瓶	灰白色	透明釉	惣付一高台内面露胎	10.1	4.2	3.2	涇州窯	16c末期-17c初頃	小野田自群	
	1346	E-35	Ⅰ	青花 瓶	灰白色	透明釉	惣付輪郭否	12.0	6.6	2.6	景徳鎮窯	16c末期-17c初頃	小野田自群	見込みに獅子
	1347	表探	Ⅰ	青花 瓶	灰白色	透明釉	惣付輪郭否	12.0	6.2	2.7	景徳鎮窯	16c末期-17c初頃	小野田自群	見込みに獅子
	1348	G-8	Ⅰ	青花 瓶	灰白色	透明釉	惣付輪郭否	12.4	6.1	2.7	涇州窯	16c末期-17c初頃	小野田自群	見込みに獅子
	1349	D-35	Ⅰ	青花 瓶	白色	透明釉	惣付輪郭否	-	9.6	-	景徳鎮窯	16c末期-17c初頃	小野田自群	
第 236 区	1350	D-18 E-20	Ⅱ	青花 瓶	白色	透明釉	惣付輪郭否	-	8.2	-	景徳鎮窯	16c末期-17c初頃	小野田自群	見込みに十字花文
	1351	D-20	Ⅰ	青花 瓶	灰白色	透明釉	惣付輪郭否	-	8.8	-	景徳鎮窯	16c末期-17c初頃	小野田自群	
	1352	E-9	Ⅱ	青花 瓶	灰白色	透明釉	惣付輪郭否	-	6.0	-	景徳鎮窯	16c末期-17c初頃	小野田自群	見込みに十字花文
	1353	D-4	Ⅰ	青花 瓶	白色	透明釉	底部輪郭否	11.6	3.6	3.1	涇州窯	15c後半-16c中頃	小野田C群	胎面成 見込みに人形化した文字
	1354	表探	Ⅰ	青花 瓶	灰白色	透明釉	底部露胎	-	4.8	-	涇州窯	15c後半-16c中頃	小野田C群	胎面成 見込みに人形化した文字
	1355	表探	Ⅰ	青花 瓶	灰白色	透明釉	底部露胎	10.1	4.2	2.7	涇州窯	15c後半-16c中頃	小野田C群	胎面成 見込みに人形化した文字
	1356	E-35	Ⅰ	青花 瓶	灰白色	透明釉	底部露胎	-	4.4	-	涇州窯	15c後半-16c中頃	小野田C群	胎面成 見込みに人形化した文字
	1357	F-8	Ⅰ	青花 瓶	灰白色	透明釉	惣付輪郭否	-	4.4	-	涇州窯	15c後半-16c中頃	小野田C群	胎面成 西面成底に砂目肌
	1358	表探	Ⅰ	青花 瓶	灰白色	透明釉	底部輪郭否	-	3.2	-	涇州窯	15c後半-16c中頃	小野田C群	
	1359	D-19 E-19	Ⅱ	青花 瓶	灰白色	透明釉	底部輪郭否	13.2	5.6	3.4	景徳鎮窯	15c後半-16c中頃	小野田C群	胎面成 見込みに十字花文
第 236 区	1360	B-37	Ⅰ	青花 瓶	白色	透明釉	惣付輪郭否	-	12.8	-	景徳鎮窯	16c末期-17c初頃	小野田D群	つば面
	1361	Ⅰ	青花 瓶	灰白色	透明釉	底部露胎	8.4	4.6	1.9	涇州窯	16c末期-17c初頃	胎面成		
	1362	A-30	Ⅰ	青花 瓶	浅黄褐色	透明釉	露胎一高台内面露胎 内面下部露胎	9.4	5.8	1.9	涇州窯	16c末期-17c初頃		
	1363	F-17	Ⅱ	青花 瓶	灰白色	透明釉	高台内面露胎	-	5.2	-	景徳鎮窯	16c末期-17c初頃		
1364	E-19 G-16	Ⅱ	青花 瓶	灰白色	透明釉	高台内面露胎	-	6.4	-	景徳鎮窯	16c末期-17c初頃			
第 237 区	1365	B-36	Ⅰ	青花 瓶	白色	透明釉	惣付輪郭否	13.8	4.0	2.9	景徳鎮窯	16c末期-17c初頃		模花面 見込みに蓮花文
	1366	F-3	Ⅰ	青花 瓶	白色	透明釉	惣付輪郭否	-	-	-	景徳鎮窯	16c末期-17c初頃		

中世出土遺物観察表

産産地については、A群広東系系、B群浙江系系、C群福建系系を表す。

採出番号	同表番号	出土区	層位	種類	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量 (cm)			産地*	時期	分類	備考
									口径	底径	器高				
第 237 回	1307	表探	-	青花	小皿	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	-	-	-	景徳鎮	16c末期-17c初頭		
	1308	表探	-	青花	小皿	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	-	-	-	景徳鎮	16c末期-17c初頭		
	1309	-	-	青花	大皿	白色	透明釉	惣付輪郭下	20.6	12.1	4.3	漳州港	16c末期-17c初頭		やや青みがかった輪郭
	1370	F-8	-	青花	大皿	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	-	-	-	景徳鎮	16c末期-17c初頭		
	1371	表探	-	青花	大皿	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	-	14.0	-	景徳鎮	16c末期-17c初頭		惣付に砂付
	1372	F-16-17	Ⅱ	青花	大皿	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	26.2	-	-	漳州港	16c末期-17c初頭		
	1373	D-22	Ⅱ	青花	大皿	灰白色	透明釉	惣付輪郭下	18.8	10.6	3.4	景徳鎮	16c末期-17c初頭		
	1374	E-8	-	青花	大皿	灰白色	透明釉	惣付輪郭下	-	19.7	-	景徳鎮	16c末期-17c初頭		
	1375	C-D-22	Ⅱ	青花	大皿	灰白色	透明釉	惣付輪郭下	-	11.5	-	景徳鎮	16c末期-17c初頭		
	1376	-	-	青花	大皿	灰白色	透明釉	惣付輪郭下	-	13.5	-	景徳鎮	16c末期-17c初頭		
第 238 回	1377	A-36-37	Ⅱ	青花	皿	白色	透明釉	惣付輪郭下	-	-	-	景徳鎮	16c末期-17c初頭		片組半組
	1378	-	-	青花	皿	白色	透明釉	残存部全面施釉	-	-	-	景徳鎮	16c末期-17c初頭		半組
	1379	-	-	青花	皿	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	-	-	-	景徳鎮	16c末期-17c初頭		半組 1376と同じ一器体
	1380	E-20	Ⅱ	青花	鉢	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	-	-	-	景徳鎮	16c末期-17c初頭		
	1381	-	-	青花	鉢	灰白色	透明釉	高台内面露胎	6.2	-	-	景徳鎮	16c末期-17c初頭		見込みに「青」
	1382	-	-	青花	蓋	灰白色	透明釉	見受け部輪郭下	-	-	-	景徳鎮	16c末期-17c初頭		
	1383	A-36	-	青花	蓋	白・橙色	透明釉	見受け部輪郭下	11.6	-	-	漳州港	16c末期-17c初頭		
	1384	D-35	Ⅱ	青花	蓋	灰色	透明釉	外底全面施釉	-	-	-	景徳鎮	16c末期-17c初頭		

中世出土遺物観察表

産産地については、A群広東系系、B群浙江系系、C群福建系系を表す。

採出番号	同表番号	出土区	層位	種類	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量 (cm)			産地*	時期	備考	
									口径	底径	器高				
第 239 回	1385	E-31	-	中国陶器	天目碗	灰褐色	黒釉	外面輪郭以下露胎	-	-	-	-	-		
	1386	E-F-18	Ⅱ	中国陶器	天目碗	白・黄褐色	黒釉	外面輪郭以下露胎	-	-	-	-	-		
	1387	A-B-36-37 A-37	Ⅱ	中国陶器	天目碗	灰黄褐色	黒釉	外面輪郭以下露胎	10.4	4.4	5.8	-	15c-16c		
	1388	-	-	中国陶器	天目碗	浅黄色	黒釉	外面輪郭以下露胎	13.0	-	-	-	-		
	1389	E-24, F-24-25	Ⅱ	中国陶器	天目碗	灰白色	黒釉	外面輪郭以下露胎	12.0	-	-	-	建寧		
	1390	G-3	I b	中国陶器	天目碗	暗灰黄色	黒釉	外面輪郭以下露胎	11.1	-	-	-	-		
	1391	-	-	中国陶器	天目碗	黒色	黒釉	外面輪郭-高台内面露胎	4.0	-	-	-	-		
	1392	A-16-28	Ⅱ	中国陶器	天目碗	黄灰色	黒釉	外面輪郭-高台内面露胎	4.0	-	-	-	-	15c-16c	
	1393	F-G-17	Ⅱ	中国陶器	天目碗	灰黄色	黒釉	外面輪郭-高台内面露胎	3.8	-	-	-	-	15c	
	1394	E-27-28	-	中国陶器	天目碗	灰黄色	黒褐色釉	残存部全面施釉	-	-	-	-	-		
第 240 回	1395	-	-	中国陶器	天目碗	灰白色	黒褐色釉	外面輪郭下位露胎	-	-	-	-	-		
	1396	A-B-36-37, D-31	Ⅱ	中国陶器	天目碗	灰黄色	黒釉	外面輪郭-高台内面露胎	4.4	-	-	-	15c-16c		
	1397	-	-	中国陶器	天目碗	灰色	黒褐色釉	外面輪郭-高台内面露胎	4.4	-	-	-	15c-16c		
	1398	-	-	中国陶器	壺	灰白色	黄釉	外面露胎	-	-	-	C群	11c後半-12c代	口唇部に目跡あり	
	1399	-	-	中国陶器	壺	灰色	黄釉	口唇部輪縁&取手	-	-	-	C群	11c後半-12c代	口唇部に目跡あり	
	1400	C-D-36	-	中国陶器	壺	灰白色	黄釉	口唇部輪縁&取手	-	-	-	C群	13c代	口唇部に目跡あり	
	1401	C-35	-	中国陶器	壺	灰白色	黄釉	残存部全面施釉	-	-	-	C群	11c後半-12c代	鉄跡	
	1402	F-15	Ⅱ	中国陶器	壺	灰白色	黄釉	口唇部-外面露胎	-	-	-	C群	11c後半-12c代	鉄跡	
	1403	E-22	Ⅱ	中国陶器	壺	橙色	黄釉	外面露胎	24.8	-	-	C群	11c後半-12c代	壺蓋-1	
	1404	F-11	Ⅱ	中国陶器	壺	灰色	黄釉	外面露胎	-	-	-	C群	11c後半-12c代	鉄跡	
第 241 回	1405	D-31	Ⅱ	中国陶器	壺	灰褐色	黄釉	外面露胎	21.6	-	-	C群	11c後半-12c代	鉄跡	
	1406	D-15	Ⅱ	中国陶器	壺	灰色	白化系土質黄釉	外面露胎	-	-	-	C群	11c後半-12c代	鉄跡	
	1407	B-34	Ⅱ	中国陶器	壺	浅黄色	白化系土質黄釉	外面露胎	40.0	-	-	C群	11c後半-12c代	鉄跡	
	1408	D-22	Ⅱ	中国陶器	壺	灰黄色	黄釉	残存部全面施釉	22.0	-	-	-	-	口唇部に目跡あり	
	1409	-	-	中国陶器	壺	灰色	黄釉	残存部全面施釉	18.9	-	-	-	-	15c下層くらゐ	
	1410	E-8	-	中国陶器	壺	灰褐色	黄釉	口唇部輪縁&取手	35.0	-	-	-	-	口唇部に目跡あり	
	1411	C-29-31 D-31	Ⅱ	中国陶器	鉢	灰赤色	-	-	37.8	-	-	C群	13c代	鉢-1 b類	
	1412	F-18, G-16-18	Ⅱ	中国陶器	鉢	黄灰色	灰白色釉	口唇部内外施釉	29.6	12.5	14.2	C群	11c中頃-後半	鉢-1-2 a類	
	1413	C-23	Ⅱ	中国陶器	鉢	灰褐色	-	-	24.2	8.3	9.3	C群	13c代	鉢-1 b類	
	1414	A-28	Ⅱ	中国陶器	鉢	灰褐色	褐色釉	残存部全面施釉	22.8	-	-	B群	12c中頃-後半	鉢蓋-1期 口唇部、外面露胎に目跡あり	
第 242 回	1415	B-21	Ⅱ	中国陶器	鉢	灰褐色	透明釉	残存部全面施釉	15.3	7.9	13.7	B群	12c中頃-後半	口唇部、外面露胎に目跡あり	
	1416	-	-	中国陶器	鉢	灰褐色	透明釉	残存部全面施釉	23.0	-	-	B群	12c中頃-後半	鉢蓋類	
	1417	F-16	Ⅱ	中国陶器	鉢	橙色	黄釉少?	外面露胎下位露胎	25.4	-	-	B群	12c中頃-後半	鉢蓋類 口唇部、外面露胎に目跡あり	
	1418	B-30, C-30-31, E-31	Ⅱ	中国陶器	鉢	灰黄褐色	黄釉	残存部全面施釉	27.2	7.6	12.5	B群	12c中頃-後半	鉢蓋類	
	1419	C-15	Ⅱ	中国陶器	水注	白・黄褐色	透明釉	口唇部輪縁&取手	10.4	-	-	-	11c後半-12c代	水注形 口唇部、口唇内面に目跡あり	
	1420	D-27	Ⅱ	中国陶器	水注	橙色	黄褐色釉	残存部全面施釉	10.4	-	-	-	11c後半-12c代		
1421	B-15	Ⅱb	中国陶器	盃蓋	白・黄褐色	透明釉	残存部全面施釉	16.0	-	-	-	11c後半-12c代	盃蓋?か水注形		
1422	F-29	-	中国陶器	水注?	灰褐色	黄釉	残存部全面施釉	10.2	-	-	B群?	11c後半-12c代			
1423	E-28	-	中国陶器	取手	浅黄色	鉄釉	残存部全面施釉	-	-	-	-	11c後半-12c代			

中世出土遺物観察表

産地については、A群(東条系)、B群(浙江系)、C群(擬建系)を示す。

群別 番号	図記 番号	出土区	層位	種類	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量 (cm)			産地*	時期	備考		
									口径	口径	器高					
第23 群	1424	E-27	Ⅱ	中国陶器	取手	褐色	-	-	-	-	-	-	13c後半-13d代			
	1425	C-27	Ⅱ	中国陶器	注口	灰黄色	鉄釉	内面露胎	-	-	-	-	13c後半-13d代			
	1426	D-24	-	中国陶器	注口	灰黄色	鉄釉	残存部全面施釉	-	-	-	-	13c後半-13d代			
	1427	E-29	1b	中国陶器	耳垂	灰褐色	暗赤褐色釉	残存部全面施釉	16.1	-	-	C群	13c中葉以降～	耳垂		
	1428	-	-	中国陶器	耳垂	灰褐色	鉄釉	残存部全面施釉	11.8	-	-	C群	13c後半-13d代	器または耳垂		
	1429	C-27	Ⅱ	中国陶器	耳垂	灰褐色	黄褐色釉	口唇部縁取り	11.8	-	-	-	-	12d代か?	V型	
	1430	E-24	Ⅱ	中国陶器	耳垂	灰色	鉄釉	口唇部縁取り	14.3	-	-	-	-	13c代	文章型	
	1431	F-17	Ⅱ	中国陶器	耳垂	黄褐色	灰黄色釉に 赤灰色釉	残存部全面施釉	10.0	-	-	-	-	13c代	耳垂型類	
	1432	D-32	Ⅱ	中国陶器	耳垂	灰褐色	黄白色釉に 赤灰色釉	残存部全面施釉	9.6	-	-	-	-	13c代	器-1型 口唇部に目跡あり	
	1433	D-8	Ⅱ	中国陶器	耳垂	黄褐色	灰黄色釉に 赤灰色釉	残存部全面施釉	-	-	-	-	-	13c代	耳垂型類	
	1434	D-5	-	中国陶器	耳垂	灰褐色	灰黄色釉	残存部全面施釉	9.0	-	-	-	-	13c代	耳垂型類	
	1435	C-30	-	中国陶器	耳垂	灰褐色	透明釉	残存部全面施釉	10.6	-	-	-	-	13c代	口唇部に目跡あり 耳垂型類	
	1436	D-26	Ⅱ	中国陶器	耳垂	灰黄色	鉄釉	残存部全面施釉	14.2	-	-	-	-	13c代	耳垂型類 口唇部に目跡あり	
	1437	A-14、15、 E-17	Ⅱ	中国陶器	耳垂	にぶい黄褐色	鉄釉	残存部全面施釉	14.4	-	-	-	-	13c代	口唇部に目跡あり 耳垂型類か?	
第23 群	1438	A・B-20	-	中国陶器	耳垂	灰色	黒釉	外面施釉 口唇部縁取り	9.8	-	-	-	-	14c以降		
	1439	D-26、E-30、 F-11	Ⅱ	中国陶器	耳垂	灰白色	鉄釉	外面施釉 口唇部縁取り	10.2	-	-	-	器またはC群	14c以降	1440と同一個体	
	1440	F-G-18	Ⅱ	中国陶器	耳垂	暗灰色	鉄釉	外面露胎	-	8.0	-	-	-	14c以降	1439と同一個体	
	1441	-	-	中国陶器	耳垂	灰褐色	鉄釉	残存部全面施釉	12.0	-	-	-	-	14c以降		
	1442	F-4	1b	中国陶器	耳垂	にぶい褐色	-	-	-	-	-	-	-	14c以降		
	1443	F-17	Ⅱ	中国陶器	耳垂	灰白色	黄褐色釉	残存部全面施釉	-	-	-	-	-	14c以降		
	1444	D-22	Ⅱ	中国陶器	耳垂	暗赤褐色	黄褐色釉	内面露胎下部露胎	11.4	-	-	-	C群か?	13c中葉以降	1443と同一個体 外面に目跡あり	
	1445	-	-	中国陶器	耳垂	暗赤褐色	黒釉	内面-外面露胎下部露胎	-	10.2	-	-	C群か?	13c中葉以降	1444と同一個体	
	1446	-	-	中国陶器	耳垂	灰黄色	黒釉	残存部全面施釉	19.7	-	-	-	-	13c中葉以降		
	1447	C-28	Ⅱ	中国陶器	耳垂	赤褐色	緑褐色釉	口唇部縁取り	7.8	-	-	-	-	13c-14c代		
	1448	E-8	Ⅱ	中国陶器	耳垂	灰白色	鉄釉	口唇部縁取り	22.6	-	-	-	-	13c代		
	1449	E-15	Ⅱ	中国陶器	耳垂	褐色	灰黄色釉	口唇部縁取り	-	-	-	-	-	-	-	
	1450	D-26	Ⅱ	中国陶器	無耳垂	灰褐色	暗緑褐色釉	口唇部縁取り	6.8	-	-	-	-	13c代	口唇部に目跡あり 1型か?	
	1451	E-22	Ⅱ	中国陶器	無耳垂	にぶい褐色	灰黄色釉	残存部全面施釉	5.8	-	-	-	C群か?	13c代	1型	
1452	-	-	中国陶器	無耳垂	にぶい褐色	鉄釉	残存部全面施釉	8.5	-	-	-	-	13c代	1型		
1453	D-28	Ⅱ	中国陶器	無耳垂	にぶい褐色	淡黄色釉	残存部全面施釉	12.6	-	-	-	-	13c代	1型		
1454	E-23	Ⅱ	中国陶器	無耳垂	褐色	-	-	15.0	-	-	-	器形か?	13c-14c	V型か?		
1455	-	-	中国陶器	無耳垂	灰褐色	黄灰色釉	口唇部縁取り	10.8	-	-	-	器形か?	13c-14c	V型か?		
1456	B-13	Ⅱ下	中国陶器	無耳垂	灰褐色	黄褐色釉	口唇部縁取り	9.6	-	-	-	-	13c-14c	V型 口唇部に目跡あり		
1457	E-22、23、 D-21、22	Ⅱ、Ⅲ	中国陶器	無耳垂	灰褐色	黄褐色釉～ 透明釉	外面露胎	10.0	11.2	20.0	-	-	13c-14c	産地不明 内面に7字形		
第24 群	1458	-	-	中国陶器	水注または器	灰白色	-	-	-	-	-	-	-	-		
	1459	A-21	Ⅱ	中国陶器	水注または器	灰白色	-	-	-	-	-	-	-	-		
	1460	E-28	Ⅱ	中国陶器	水注または器	灰色	-	-	-	-	-	-	-	-		
	1461	D-21	22	中国陶器	水注または器	灰白色	-	-	-	-	-	-	-	-		
	1462	E-18、20	Ⅱ	中国陶器	水注または器	灰白色	-	-	-	-	-	-	-	-		
	1463	E-30	1b	中国陶器	鉢または壺	灰色	鉄釉	残存部全面施釉	-	8.0	-	1群	-	-	外面下部露胎 器形の異なる器との同定不可	
	1464	-	-	中国陶器	水注または器	褐色	鉄釉	外面露胎～ 底部-内面露胎	-	10.8	-	-	-	-	-	
	1465	-	-	中国陶器	水注または器	暗灰色	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	1466	D-18、E-18、 F-16、18	Ⅱ	中国陶器	水注または器	灰色	鉄釉	外面露胎下部露胎	-	12.0	-	-	-	14c以降	C群に似て、盤目型か?	
	1467	E-15、16、18、 B-D-19	Ⅱ	中国陶器	水注または器	黄灰色	鉄釉	残存部全面施釉	-	15.4	-	-	-	14c以降	外面部に目跡あり	
	1468	E-22、D-22	E、11b	中国陶器	水注または器	灰色	鉄釉	内面-外面露胎下部露胎	-	13.6	-	-	-	14c-15c		
	1469	-	-	中国陶器	水注または器	褐色	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	1470	A・B-36、37	Ⅱ	中国陶器	水注または器	灰黄色	灰白色釉	外面-内面露胎	-	11.4	-	-	-	14c以降		
	1471	B-37	Ⅱ	中国陶器	壺	にぶい褐色	灰黄色釉	口唇部縁取り	-	-	-	-	C群	13c代	壺1型	
1472	C-D-23、22	-	中国陶器	壺	灰色	灰黄色釉	口唇部縁取り	-	-	-	-	C群	13c代	壺1型		
1473	D-35	Ⅱ	中国陶器	壺	灰褐色	灰黄色釉	口唇部縁取り	-	-	-	-	C群	13c代	壺1型		
1474	-	-	中国陶器	壺	にぶい褐色	灰黄色釉	口唇部縁取り	-	-	-	-	C群	13c代	壺2型		
1475	E-6	Ⅱ	中国陶器	壺	にぶい褐色	灰黄色釉	口唇部縁取り	-	-	-	-	C群	13c代	壺2型		
1476	B-21	Ⅱ	中国陶器	壺	明赤褐色	灰黄色釉	口唇部縁取り	-	-	-	-	C群	13c代	壺2型		
1477	F-22	Ⅱ	中国陶器	壺	明赤褐色	淡黄色釉	内面-外面露胎	-	26.0	-	-	C群	13c代			
1478	D-15	Ⅱ	中国陶器	壺	暗灰色	灰黄色釉	外面露胎	-	28.0	-	-	C群	13c代			
1479	A-17	Ⅱ	中国陶器	壺	暗灰色	-	-	-	-	-	-	C群	13c代			
第24 群	1480	-	-	中国陶器	瓶	灰褐色	鉄釉	外面露胎～内面露胎	-	-	-	-	龍州系	13c後半-13d代	白地彫花、1484と同一個体	
	1481	D-36	Ⅱa	中国陶器	瓶	灰褐色	鉄釉	外面露胎～内面露胎	-	-	-	-	龍州系	13c後半-13d代	白地彫花	
	1482	F-6	Ⅱ	中国陶器	瓶	灰褐色	鉄釉	外面露胎～内面露胎	-	-	-	-	龍州系	13c後半-13d代	白地彫花、1483と同一個体	
	1483	F-4	Ⅱ	中国陶器	瓶	灰褐色	鉄釉	外面露胎～内面露胎	-	-	-	-	龍州系	13c後半-13d代	白地彫花、1482と同一個体	
	1484	-	-	中国陶器	瓶	灰褐色	鉄釉	外面露胎～内面露胎	-	-	-	-	龍州系	13c後半-13d代	白地彫花、1480と同一個体	
	1485	-	-	中国陶器	瓶	灰褐色	鉄釉	外面露胎～内面露胎	-	-	-	-	龍州系	13c後半-13d代	白地彫花、産地不明(胎土層分)	
1486	E-18、F-16	Ⅱ	中国陶器	壺	灰白色	緑釉	残存部全面施釉	26.0	-	-	-	幸南	15c-16c	幸南3期 372-373と同一個体		

中世出土遺物観察表

産産地については、A群広島県系、B群浙江系系、C群福尾系系を表す。

群回番号	図録番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量 (cm)			産地*	時期	備考	
									口径	底径	器高				
第247回	1487	-	-	中国陶器	甕	灰白色	緑釉	外周面露胎	-	-	-	華南	15c~16c	華南三彩 372・375と同じ一類体	
	1488	F-19	Ⅱ	中国陶器	甕	灰白色	緑釉	外周面露胎下位・ 外周面露胎	-	16.2	-	華南	15c~16c	華南三彩 1486・1487と同じ一類体	
	1489	B-37	-	緑釉陶器	瓶	灰白色	緑釉	内面露胎	-	-	-	-	-	-	
	1490	B-37・38	Ⅲ上	緑釉陶器	瓶	灰白色	緑釉	内面露胎	-	-	-	-	-	-	
	1491	B-37	Ⅲ	緑釉陶器	瓶	灰白色	緑釉	内面露胎	-	-	-	-	-	-	
	1492	D-19・20・21・ E-18・19・20・ F-19・20	Ⅱ	中国陶器	甕または壺	浅黄色	黄釉	内周面露胎	5.4	-	-	-	-	14c以降	-
	1493	C-29	Ⅲ	中国陶器	皿	黄白色	緑釉	残存部全面施釉	-	-	-	-	-	-	胎土による花文の重畳か?
	1494	-	-	中国陶器	小皿	にじい・黄白色	白象嵌に緑釉	内面露胎	-	-	-	-	-	-	-
	1495	D-31	Ⅲ	中国陶器	小皿	灰黄色	鉄釉	内周面露胎	-	-	-	-	C群	-	-
	1496	-	-	中国陶器	-	灰白色	透明釉	内面露胎	-	-	-	-	-	-	-
1497	E-3,F-4	1b	中国陶器	-	灰白色	透明釉	内面露胎	-	-	-	-	-	-	-	
1498	B-26	Ⅲ	中国陶器	瓶	にじい・透明色	黄褐色釉	残存部全面施釉	13.9	-	-	-	-	-	-	
1499	-	-	中国陶器	仏像か?	灰白色	鉄釉	顔面部のみ施釉	-	-	-	-	-	-	14c以降か?	
第248回	1500	D-26,E-25	V	朝鮮陶器	鉢	灰色	白象嵌・黄象嵌 に透明釉	残存部全面施釉	19.4	-	-	高麗	14c末~15c?	森田正吾	
	1501	D-31,E-32	1b,Ⅲ	朝鮮陶器	瓶	灰白色	白象嵌に透明釉	残存部全面施釉	-	-	-	李朝	15c~16c	-	
	1502	E-20	Ⅲ	朝鮮陶器	鉢	灰色	鉄釉	器付輪縁取り	-	3.6	-	李朝	15c~16c	見込み・器付に目録あり	
	1503	A-B-36	-	朝鮮陶器	徳利	灰白色	黒釉	残存部全面施釉	5.4	10.0	19.5	李朝	13c後半~	外周面に目録あり	
	1504	D-35	1	朝鮮陶器	皿	黒褐色	-	-	-	-	-	朝鮮	-	-	
	1505	D-25	Ⅲ	ベトナム陶器 青 黄土	皿	灰白色	透明釉	胴部~底面露胎	15.4	-	-	-	ベトナム	15c~16c	-
第249回	1506	F-4	Ⅲ下	瓦器	甕	灰色	-	-	14.6	5.2	5.0	和泉	12c後半	和泉県-1	
	1507	F-4	Ⅲ下	瓦器	甕	灰白色	-	-	13.8	4.5	4.4	和泉	12c後半	和泉県-1	
	1508	F-4	Ⅲ	瓦器	甕	灰白色	-	-	-	-	-	和泉	12c後半	和泉県-1	
	1509	F-4	Ⅲ	瓦器	甕	灰色	-	-	-	-	-	和泉	12c後半	和泉県-1	
	1510	F-4	Ⅲ下	瓦器	甕	灰白色	-	-	-	4.3	-	和泉	12c後半	和泉県-1	
	1511	F-4	Ⅲ	瓦器	甕	灰黄色	-	-	-	3.4	-	和泉	12c後半	和泉県-1	
	1512	A-30	-	瓦器	皿	灰色	-	-	9.6	4.5	1.9	和泉	12c後半	和泉県-1	
	1513	F-4	Ⅲ	瓦器	皿	灰色	-	-	5.2	3.8	1.5	和泉	12c後半	和泉県-1	
	1514	F-5	Ⅲ	瓦器	皿	灰色	-	-	8.8	-	-	和泉	12c後半	和泉県-1	
	1515	F-19	Ⅲ	瓦器	皿	灰白色	-	-	8.4	-	-	和泉	12c後半	和泉県-1	
第250回	1516	E-22	Ⅲ	中世瓦器 (東播磨系)	四角鉢	灰色	-	-	36.8	-	-	東播磨系	12c~14c代	-	
	1517	-	-	中世瓦器 (東播磨系)	四角鉢	灰色	-	-	-	-	-	東播磨系	12c~14c代	-	
	1518	E-30	-	中世瓦器 (東播磨系)	四角鉢	灰色	-	-	-	-	-	東播磨系	12c~14c代	-	
	1519	F-24	1b	中世瓦器 (東播磨系)	四角鉢	灰色	-	-	-	-	-	東播磨系	12c~14c代	-	
	1520	F-31	Ⅲ	中世瓦器 (東播磨系)	四角鉢	灰色	-	-	-	-	-	東播磨系	12c~14c代	-	
	1521	-	-	中世瓦器 (東播磨系)	四角鉢	灰黄色	-	-	-	10.0	-	東播磨系	12c~14c代	-	
	1522	E-22,F-25	Ⅲ	中世瓦器	甕	灰色	-	-	16.6	-	-	徳之島	13c代	-	
	1523	-	-	中世瓦器	甕	にじい・透明色	-	-	16.0	-	-	徳之島	13c代	-	
	1524	-	-	中世瓦器	甕	灰褐色	-	-	18.6	-	-	徳之島	13c代	-	
	1525	C-34	-	中世瓦器	甕	にじい・透明色	-	-	16.9	-	-	徳之島	13c代	-	
第251回	1526	D-7,E-13-14	Ⅲ	中世瓦器	甕	にじい・褐色	-	-	-	-	-	徳之島	13c代	-	
	1527	A-25	Ⅲ	中世瓦器	甕	灰褐色	-	-	-	-	-	徳之島	13c代	-	
	1528	E-3,F-4	1b	中世瓦器	甕	灰褐色	-	-	-	-	-	徳之島	13c代	-	
	1529	-	-	中世瓦器	甕	灰褐色	-	-	-	-	-	徳之島	13c代	-	
	1530	B-30	-	中世瓦器	甕	にじい・褐色	-	-	-	-	-	徳之島	13c代	-	
	1531	C-27	Ⅲ	中世瓦器	甕	にじい・褐色	-	-	-	-	-	徳之島	13c代	-	
	1532	-	-	中世瓦器	甕または壺	にじい・褐色	-	-	-	-	-	徳之島	13c代	-	
	1533	-	-	中世瓦器	甕または壺	にじい・褐色	-	-	-	-	-	徳之島	13c代	-	
	1534	C-27	Ⅲ	中世瓦器	甕または壺	灰色	-	-	-	-	-	徳之島	13c代	-	
	1535	C-22,E-25	Ⅲ	中世瓦器	甕または壺	にじい・透明色	-	-	-	-	-	徳之島	13c代	-	
第252回	1536	E-27	-	中世瓦器	甕または壺	にじい・透明色	-	-	-	-	-	徳之島	13c代	-	
	1537	-	-	中世瓦器	甕または壺	にじい・透明色	-	-	-	-	-	徳之島	13c代	-	
	1538	-	-	中世瓦器	甕または壺	灰黄色	-	-	-	-	-	徳之島	13c代	-	
	1539	D-6	Ⅲ	中世瓦器	甕	にじい・褐色	-	-	-	15.0	-	徳之島	13c代	-	
	1540	E-27	Ⅲ	中世瓦器	甕	にじい・褐色	-	-	-	18.0	-	徳之島	13c代	-	
	1541	D-24・30・ E-34	Ⅲ	中世瓦器 (解方丈)	四角鉢	灰色	-	-	22.0	9.0	10.1	解方丈	13c代	-	
	1542	B・C-30・ C-31・32	Ⅲ	中世瓦器 (解方丈)	四角鉢	灰色	-	-	26.0	10.7	10.6	解方丈	13c代	-	
	1543	D-22	-	中世瓦器 (解方丈)	四角鉢	灰色	-	-	-	-	-	解方丈	13c代	-	
	1544	C-D-21・22	1	中世瓦器 (解方丈)	甕	灰色	-	-	-	-	-	解方丈	13c代	-	
	1545	E-15	Ⅲ	中世瓦器 (解方丈)	甕	灰色	-	-	-	-	-	解方丈	13c代	-	

中世出土遺物観察表

探洞番号	図表番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	輪郭	施釉	法量 (cm)			産地*	時期	備考		
									口径	底径	器高					
第252区	1546	C-15	Ⅱb	中世紀磁器(柳方文)	壺	灰色	-	-	-	-	-	-	柳方文	13c代		
	1547	A-17	Ⅱ	中世紀磁器(柳方文)	壺	灰色	-	-	19.0	-	-	-	柳方文	13c代		
第253区	1548	B-34	Ⅱ	中世紀磁器	壺	灰色	-	-	-	-	-	-	-	13c代		
	1549	A-1415	-	中世紀磁器	壺	灰色	-	-	-	-	-	-	-	13c代		
	1550	E-F-30	Ⅱ	中世紀磁器	壺	灰色	-	-	-	-	-	-	-	13c代		
	1551	-	-	中世紀磁器	壺	灰色	-	-	-	-	-	-	-	13c代		
	1552	C-27	Ⅱ	中世紀磁器	壺	灰褐色	-	-	22.5	-	-	-	-	13c代		
第254区	1553	F-20	Ⅱ	陶器	灰白色	灰白色	丸筒	外面磨胎	外面磨胎	10.9	4.2	5.9	-	瀬戸	15c-16c	
	1554	E-18, F-18	Ⅱ	陶器	黄灰白色	灰褐色	丸筒	残存部全面施	-	-	-	-	-	瀬戸	15c-16c	
	1555	D-21-22	Ⅰ	陶器	灰白色	灰白色	透明釉	外面磨胎	8.4	-	-	-	-	瀬戸	13c代	
	1556	C-D-21-22	Ⅱ	陶器	灰白色	灰白色	透明釉	外面磨胎	10.2	-	-	-	-	瀬戸	13c代	
	1557	-	-	陶器	灰黄色	灰黄色	透明釉	外面磨胎	-	-	-	-	-	瀬戸	13c代	
	1558	C-12, D-13-15, E-15, F-16	Ⅱ, Ⅲ	陶器	灰白色	灰緑色釉	-	内面磨胎	-	-	-	-	-	瀬戸	13c代	
	1559	D-32	Ⅱ	磁器	壺	灰色	-	-	-	-	-	-	常滑	13c前半	口径約1.5cm 5型式	
	1560	A-30, C-29, D-30	Ⅲ	磁器	壺	灰黄色	-	-	48.0	-	-	-	常滑	13c前半	口径約1.5cm 5型式	
	1561	D-32-35	Ⅰ	磁器	壺	灰褐色	-	-	-	-	-	-	常滑	13c第3/4半期	口径約2.0cm 6a型式	
	1562	D-35-36	Ⅰ	磁器	壺	灰色	-	-	37.2	-	-	-	常滑	13c第4/4半期	口径約2.5cm 6b型式	
第255区	1563	A-17	Ⅱ	磁器	壺	灰色	-	-	-	-	-	-	常滑	14c前半	口径約3.0cm 7型式	
	1564	G-16-17	Ⅱ	磁器	壺	灰黄色	-	-	-	-	-	-	常滑	14c前半	口径約4.0cm 7型式	
第256区	1565	D-22, G-16	Ⅱ	磁器	壺	灰黄色	-	-	22.0	-	-	-	常滑	-		
	1566	F-19-21-22	Ⅱ	磁器	壺	赤褐色	-	-	11.5	-	-	-	備前	14c代		
	1567	E-18	-	磁器	壺	赤褐色	-	-	15.2	-	-	-	備前	14c代		
	1568	A-14-15	-	磁器	壺	赤褐色	-	-	-	-	-	-	備前	14c代		
	1569	A-17	Ⅱ	磁器	壺	赤褐色	-	-	-	-	-	-	備前	14c代		
	1570	E-15-16, F-17	Ⅱ	磁器	壺	赤褐色	-	-	15.3	-	-	-	備前	14c代		
	1571	C-30, E-30	-	磁器	壺	赤褐色	-	-	-	-	-	-	備前	15c前半		
	1572	A-14-15	-	磁器	壺	灰白色	-	-	48.8	-	-	-	備前	14c代		
	1573	G-14-15	Ⅱ	磁器	鉢鉢	灰赤色	-	-	-	-	-	-	備前	14c後半		
	1574	E-30	Ⅱ	磁器	鉢鉢	暗灰色	-	-	-	-	-	-	備前	15c前半		
第258区	1575	F-8, G-8	-	磁器	鉢鉢	褐色	-	-	-	-	-	-	備前	15c前半		
	1576	G-13	Ⅱ	磁器	鉢鉢	灰褐色	-	-	31.2	17.2	10.5	-	備前	15c前半		
	1577	B-12	-	磁器	鉢鉢	灰褐色	-	-	-	-	-	-	備前	15c前半		
	1578	-	-	磁器	鉢鉢	にじみ褐色	-	-	26.6	11.9	10.4	-	備前	15c前半		
	1579	-	-	磁器	鉢鉢	黄褐色	-	-	32.8	-	-	-	備前	15c前半		
	1580	-	-	磁器	鉢鉢	明赤褐色	-	-	30.0	-	-	-	備前	15c第2/4半期		
	1581	C-28, D-29, F-26-27	Ⅰb, Ⅱ	磁器	鉢鉢	明赤褐色	-	-	25.6	13.2	12.0	-	備前	15c第2/4半期		
	1582	C-29-30, E-30	Ⅱ	磁器	鉢鉢	褐色	-	-	25.8	-	-	-	備前	15c後半		
	1583	F-G-18	-	磁器	鉢鉢	灰色	-	-	-	-	-	-	備前	15c後半		
	1584	D-30, E-30-31	Ⅰb, Ⅱ	磁器	鉢鉢	灰褐色	-	-	33.4	-	-	-	備前	15c後半		
第260区	1585	E-21-26	Ⅱ	磁器	鉢鉢	灰褐色	-	-	28.0	-	-	-	備前	15c後半		
	1586	C-D-21-22	Ⅱ	瓦質土器	鉢鉢	灰色	-	-	29.6	13.4	12.1	-	-	15c-16c		
	1587	E-29-30	Ⅰb, Ⅱ	瓦質土器	鉢鉢	にじみ褐色	-	-	30.0	17.2	11.8	-	-	15c-16c		
	1588	-	-	瓦質土器	鉢鉢	灰黄色	-	-	26.8	13.6	12.1	-	-	15c-16c		
	1589	F-19-20	Ⅱ	瓦質土器	鉢鉢	明褐色	-	-	23.6	-	-	-	-	15c-16c		
	1590	E-18	-	瓦質土器	鉢鉢	灰色	-	-	-	-	-	-	-	15c-16c		
	1591	D-E-4	-	瓦質土器	鉢鉢	灰白色	-	-	-	-	-	-	-	15c-16c		
	1592	C-22	-	瓦質土器	鉢鉢	灰白色	-	-	16.6	10.1	5.5	-	-	15c-16c		
	1593	-	-	瓦質土器	鉢鉢	灰色	-	-	22.2	-	-	-	-	15c-16c		
	1594	-	-	瓦質土器	鉢鉢	灰褐色	-	-	16.4	-	-	-	-	15c-16c		
第261区	1595	D-26, E-26	Ⅱ	瓦質土器	鉢鉢	灰色	-	-	17.2	-	-	-	-	15c-16c		
	1596	B-E-15	Ⅱ	瓦質土器	鉢鉢	にじみ褐色	-	-	10.6	-	-	-	-	15c-16c		
	1597	-	-	瓦質土器	鉢鉢	暗灰色	-	-	-	-	-	-	-	15c-16c		
	1598	F-26	-	瓦質土器	鉢鉢	灰黄色	-	-	-	-	-	-	-	15c-16c		
	1599	B-C-E-30	Ⅱ	瓦質土器	茶釜	明褐色	-	-	20.8	-	-	-	-	15c-16c		
	1600	C-D-22	-	瓦質土器	茶釜	にじみ褐色	-	-	14.6	-	-	-	-	15c-16c	保存者	
	1601	F-19-20	Ⅱ	瓦質土器	茶釜	灰黄色	-	-	14.4	-	-	-	-	15c-16c	胎線あり 保存者	
	1602	F-16	Ⅱ	瓦質土器	茶釜	灰色	-	-	17.0	-	-	-	-	15c-16c	胎線あり 頸部に流点文	
	1603	-	-	瓦質土器	茶釜	灰白色	-	-	25.0	-	-	-	-	15c-16c		
	1604	E-30	-	瓦質土器	茶釜	灰白色	-	-	23.6	-	-	-	-	15c-16c	保存者	
1605	F-20	Ⅱ	瓦質土器	茶釜蓋	浅褐色	-	-	11.0	底径14.8	2.5	-	-	15c-16c	保存者		
第263区	1606	E-6, F-5	Ⅱ	瓦質土器	火鉢	黒褐色	-	-	33.4	-	-	-	-	15c-16c	外面スタンプ文 保存者	
	1607	C-29, D-30, E-30	Ⅱ	瓦質土器	火鉢	にじみ褐色	-	-	-	-	-	-	-	15c-16c	外面スタンプ文 保存者	
	1608	F-23	-	瓦質土器	火鉢	灰白色	-	-	-	-	-	-	-	15c-16c	外面スタンプ文	
	1609	E-30	-	瓦質土器	火鉢	にじみ褐色	-	-	-	-	-	-	-	15c-16c	外面スタンプ文	



中世出土物観察表

母体番号	図録番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量 (cm)			産地*	時期	備考	
									口径	底径	器高				
第264区	1610	E-22	Ⅱ	瓦質土器	火鉢	明褐色	-	-	32.6	-	-	-	15c-16c	外面スタンプ文 保存者	
	1611	D-15	Ⅱ	瓦質土器	火鉢	にじみ褐色	-	-	-	-	-	-	15c-16c	外面スタンプ文	
	1612	F-17	Ⅱ	瓦質土器	火鉢	褐色	-	-	36.6	-	-	-	15c-16c	外面スタンプ文	
	1613	F-18	Ⅱ	瓦質土器	火鉢	黄灰色	-	-	-	-	-	-	15c-16c	外面スタンプ文	
	1614	E-19, F-20	Ⅱ	瓦質土器	火鉢	にじみ褐色	-	-	34.6	-	-	-	15c-16c	-	
	1615	-	-	瓦質土器	火鉢	にじみ褐色	-	-	29.0	-	-	-	15c-16c	-	
	1616	A-B-36-37	Ⅱ	瓦質土器	火鉢	灰白色	-	-	-	-	-	-	15c-16c	外面スタンプ文	
	1617	F-19	Ⅱ	瓦質土器	火鉢	にじみ褐色	-	-	-	-	-	-	15c-16c	外面に具刺突か?	
	1618	F-17	Ⅱ	瓦質土器	火鉢	黒褐色	-	-	-	-	-	-	15c-16c	外面スタンプ文	
	1619	-	-	瓦質土器	火鉢	灰白色	-	-	-	-	-	-	15c-16c	外面スタンプ文 器具刺突か?	
第265区	1620	D-7	Ⅱ	瓦質土器	火鉢	黄灰色	-	-	-	-	-	-	15c-16c	外面スタンプ文	
	1621	A-B-35-36	-	瓦質土器	火鉢	にじみ褐色	-	-	-	-	-	-	15c-16c	外面スタンプ文	
	1622	-	-	瓦質土器	火鉢	淡黄色	-	-	-	-	-	-	15c-16c	-	
	1623	C-21 1b	Ⅱ	瓦質土器	火鉢	黄灰色	-	-	23.0	-	-	-	15c-16c	-	
	1624	F-17	Ⅱ	瓦質土器	火鉢	淡黄色	-	-	-	-	-	-	15c-16c	-	
	1625	-	-	瓦質土器	火鉢	灰色	-	-	-	-	-	-	15c-16c	-	
	1626	C-22	Ⅱ	瓦質土器	火鉢	黒褐色	-	-	33.6	-	-	-	15c-16c	-	
	1627	C-29-F-28	-	瓦質土器	火鉢	灰白色	-	-	-	-	-	-	15c-16c	-	
	1628	F-20	Ⅱ	瓦質土器	火鉢蓋	褐色	-	-	12.2 10.6 4.1	-	-	-	15c-16c	外面スタンプ文	
	1629	E-8	Ⅱ	瓦質土器	火鉢蓋	黄灰色	-	-	8.8	-	-	-	15c-16c	外面スタンプ文	
第266区	1630	-	-	瓦質土器	蓋	褐色	-	-	34.0	-	-	-	15c-16c	外面・内面底部に保存者	
	1631	D-35	Ⅱ	土製品	かまど	にじみ褐色	-	-	-	-	25.5	-	15c-16c	保存者	
	1632	B-35, D-35	Ⅱ	土製品	かまど	褐色	-	-	-	-	-	-	15c-16c	[著物]の跡あり	
	1633	E-24	Ⅱ	土製品	駒	にじみ褐色	-	-	-	-	-	-	15c-16c	-	
	1634	-	Ⅱ	土製品	浅黄褐色	-	-	-	-	-	-	-	15c-16c	-	
	1635	G-17	Ⅱ	土製品	駒	浅黄褐色	-	-	-	-	-	-	15c-16c	-	
	1636	D-30	Ⅱ	土製品	駒	にじみ褐色	-	-	-	-	-	-	15c-16c	-	
	1637	-	-	土質土器	惣柄	にじみ褐色	-	-	29.8	-	-	-	15c-16c	外面に保存者	
	1638	E-30	-	土質土器	惣柄	褐色	-	-	33.0	-	-	-	15c-16c	外面に保存者	
	1639	D-18	Ⅱ	土質土器	惣柄	浅黄褐色	-	-	-	-	-	-	15c-16c	惣柄の電子 外面に保存者	
第267区	1640	D-35	I	土質土器	埴	浅黄褐色	-	-	12.0 7.4 4.6	-	-	-	15c-16c	外面に保存者	
	1641	E-B,F-4	1b	土質土器	鏡目か?	にじみ褐色	-	-	-	-	-	-	15c-16c	-	
	1642	-	-	瓦質土器	メンコ	-	-	-	最大径 7.0	最大径 1.2	-	-	15c-16c	-	
	1643	E-16	Ⅱ	瓦質土器	ほうじゆ蓋	灰白色	-	-	-	-	-	-	15c-16c	つまみ径, 7cm	
	1644	D-19	Ⅱ	瓦質土器	ほうじゆ蓋	灰白色	-	-	-	-	-	-	15c-16c	つまみ径, 7cm	
	第268区	1645	D-35	Ⅱb	瓦	丸瓦	黄褐色	-	-	最大径 6.2 4.3 1.7	最大径 4.3 1.7	厚み 1.7	中国	12c後半	(上面)布目片 (下面)鏡目タタキ後ナゲ
		1646	A-B-36-37	Ⅱ	瓦	丸瓦	にじみ褐色	-	-	最大径 6.7 4.2 1.4	最大径 4.2 1.4	厚み 1.4	中国	12c後半	(上面)布目片 (下面)鏡目タタキ後ナゲ
		1647	A-29	Ⅱ	瓦	平瓦	淡黄色	-	-	最大径 11.6 7.5 1.2	最大径 7.5 1.2	厚み 1.2	中国	12c後半	(上面)布目 (下面)鏡目
		1648	-	-	瓦	平瓦	灰白色	-	-	最大径 9.8 10.4 1.0	最大径 10.4 1.0	厚み 1.0	中国	12c後半	(上面)布目 (下面)鏡目
		1649	-	-	瓦	平瓦	黒褐色	-	-	最大径 9.1 5.6 0.9	最大径 5.6 0.9	厚み 0.9	中国	12c後半	(上面)布目 (下面)鏡目
1650		D-37	Ⅱ	瓦	平瓦	灰色	-	-	最大径 8.3 5.9 1.1	最大径 5.9 1.1	厚み 1.1	中国	12c後半	(上面)布目 (下面)鏡目	
1651		C-37	Ⅱ	瓦	平瓦	にじみ褐色	-	-	最大径 7.4 7.8 1.3	最大径 7.8 1.3	厚み 1.3	中国	12c後半	(上面)布目片 (下面)鏡目	
1652		D-36	Ⅱ	瓦	平瓦	灰色	-	-	最大径 9.7 10.6 1.3	最大径 10.6 1.3	厚み 1.3	中国	12c後半	(上面)ヘラナデ (下面)布目後ナゲ	
1653		C-22	-	瓦	平瓦	にじみ褐色	-	-	最大径 11.1 9.7 2.5	最大径 9.7 2.5	厚み 2.5	-	-	-	(上面) 木目
第269区		1654	-	-	滑石製品	鏡	-	-	25.0 20.5 9.0	-	-	-	-	12c代	-
	1655	E-24	-	滑石製品	鏡	-	-	16.6	-	-	-	-	12c代	-	
	1656	A-24	Ⅱa	滑石製品	鏡	-	-	18.8 13.2 18.2	-	-	-	-	12c代	外面保存者	
	1657	B-15	Ⅱ	滑石製品	鏡	-	-	43.0	-	-	-	-	13c-14c	-	
	1658	F-26	Ⅱ	滑石製品	鏡	-	-	31.8	-	-	-	-	13c-14c	外面保存者	
	1659	-	-	滑石製品	鏡	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	1660	D-32	Ⅱ	滑石製品	鏡	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	1661	G-17	-	滑石製品	鏡	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	1662	D-31	Ⅱ	滑石製品	鏡	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	1663	E-30	-	滑石製品	鏡	-	-	-	-	23.8	-	-	-	-	外面保存者
第270区	1664	E-28	Ⅱ	滑石製品	鏡	-	-	-	-	19.6	-	-	-	-	外面保存者
	1665	E-29	Ⅱ	滑石製品	転用品	-	-	6.15 6.1 2.5	-	-	-	-	-	-	
	1666	A-16	Ⅱ	滑石製品	転用品	-	-	8.5 4.6 1.9	-	-	-	-	-	-	
	1667	-	-	滑石製品	転用品	-	-	6.95 3.7 1.7	-	-	-	-	-	-	
	1668	D-30	-	滑石製品	転用品	-	-	5.9 4.6 2.8	-	-	-	-	-	-	
	1669	C-29	Ⅱ	滑石製品	転用品	-	-	5.3 6.0 2.2	-	-	-	-	-	-	
	1670	D-36	Ⅱ	滑石製品	転用品	-	-	5.5 4.8 1.8	-	-	-	-	-	-	
	1671	D-28	Ⅱ	滑石製品	転用品	-	-	5.4 1.3 1.4	-	-	-	-	-	-	
	1672	E-19	Ⅱ	滑石製品	転用品	-	-	5.8 2.2 1.5	-	-	-	-	-	-	
	1673	D-24	Ⅱ下	滑石製品	転用品	-	-	6.1 2.9 1.4	-	-	-	-	-	-	

中世出土遺物観察表

探跡番号	埋藏番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	輪毫	施釉	法量 (cm)			産地*	時期	備考
									最大長	最大幅	最大厚			
第271号	1674	A-26	Ⅱ	滑石製品	転用品	-	-	-	6.4	2.9	1.2	-	-	-
	1675	A-24	Ⅱ	滑石製品	転用品	-	-	-	5.15	1.9	1.9	-	-	-
	1676	D-26	Ⅱ	滑石製品	転用品	-	-	-	6.8	2.55	1.8	-	-	-
	1677	F-19	Ⅱ	滑石製品	転用品	-	-	-	8.05	3.1	2.5	-	-	-
	1678	D-16	Ⅱ	滑石製品	転用品	-	-	-	3.7	2.1	1.4	-	-	-
	1679	E-21	Ⅱ	滑石製品	転用品	-	-	-	2.85	2.8	1.4	-	-	-
	1680	D-31	Ⅱ	滑石製品	転用品	-	-	-	4.2	2.95	1.4	-	-	-
	1681	D-17	-	滑石製品	転用品	-	-	-	3.2	1.6	1.9	-	-	-
	1682	B-32	1 b	滑石製品	転用品	-	-	-	2.1	1.3	1.3	-	-	-
	1683	E-32	1 b	滑石製品	転用品	-	-	-	4.9	4.6	1.4	-	-	外面磨付者
	1684	A-28	Ⅱ	滑石製品	転用品	-	-	-	6.8	3.7	2.0	-	-	-
	1685	-	-	滑石製品	転用品	-	-	-	11.1	7.5	2.3	-	-	-
1686	-	-	滑石製品	転用品	-	-	-	5.5	3.4	2.3	-	-	-	
第272号	1687	B-25	Ⅱ上	石製品	磁石	-	-	-	28.1	6.6	6.0	-	-	-
	1688	C-30	-	石製品	磁石	-	-	-	7.4	7.4	2.1	-	-	-
	1689	C-23	Ⅱ	石製品	磁石	-	-	-	9.1	3.8	2.2	-	-	-
	1690	-	-	石製品	磁石	-	-	-	8.2	4.4	3.4	-	-	-
	1691	E-27	Ⅱ	石製品	磁石	-	-	-	5.0	4.2	3.1	-	-	-
	1692	C-36	Ⅱb	石製品	磁石	-	-	-	7.2	7.6	1.3	-	-	-
	1693	E-32	Ⅱ	石製品	磁石	-	-	-	7.3	3.2	1.9	-	-	-
	1694	B-16	Ⅱ	石製品	磁石	-	-	-	6.7	3.4	1.5	-	-	-
	1695	D-23	Ⅱ	石製品	磁石	-	-	-	14.1	5.1	1.5	-	-	-

遺構内出土古銭

探跡	No.	遺構名	出土古銭	古銭情報	備考	直径 (cm)			
45	46	古代土塔6	○◎銅貨	-	破片	-			
	48	古代土塔5	威字元寶	968年	北条・貞宗	2.4			
	49	古代土塔5	頼朝元寶	1294年	北条・貞宗	2.4			
	46	50	古代土塔5	聖徳元寶	1004年	北条・貞宗	2.4		
		51	古代土塔5	○◎銅貨	-	破片	2.1		
		55	古代ビッド5	泉徳元寶	1038年	北条・仁宗	2.2		
		57	古代ビッド7	泉徳元寶	1038年	北条・仁宗 篆書	2.2		
		60	古代ビッド10	天徳元寶	1078年	北条・神宗 行書	2.2		
		61	古代ビッド11	天徳元寶	1086年	北条・神宗 篆書	2.3		
		64	古代ビッド13	光元元寶	758年	僧・圓宗 西ノ銭	2.3		
		65	古代ビッド14	照宗元寶	1068年	北条・神宗 視認不可	2.2		
		66	古代ビッド15	照宗元寶	1068年	北条・神宗	2.2		
67		古代ビッド16	天徳元寶	1078年	北条・神宗 篆書	-			
68		古代ビッド17	天徳元寶	1023年	北条・仁宗	2.3			
49		69	古代ビッド18	頼朝元寶	1009年	北条・神宗	2.3		
	73	古代ビッド22	嘉祐元寶	1056年	北条・仁宗	2.3			
	75	古代ビッド24	太平通寶	976年	北条・太閤	2.4			
	76	古代ビッド25	嘉祐元寶	1054年	北条・仁宗 篆書	2.3			
	79	古代ビッド28	太平通寶	976年	北条・太閤	2.2			
	80	古代ビッド29	聖徳元寶	1004年	北条・貞宗	2.4			
	81	古代ビッド30	太平通寶	976年	北条・太閤	2.2			
	82	古代ビッド31	南唐元寶	960年	南唐 視認不可	2.1			
	-	古代ビッド32	聖徳元寶?	1101年	観音「宗」と「元」の破片	-			
	129	702	中世窟立15	不明	-	-	2.3		
		703	中世窟立15	不明	-	-	2.1		
		-	中世窟立15	不明	-	-	-		
704		中世窟立18	聖元通寶	960年	南唐	2.5			
705		中世窟立18	頼朝元寶	1009年	北条・貞宗 頼朝元寶と視認	2.3			
131		706	中世窟立18	天徳元寶	1023年	北条・仁宗 篆書	2.4		
		707	中世窟立18	天徳元寶	1086年	北条・神宗 行書	2.4		
		708	中世窟立18	天徳元寶	1078年	北条・神宗 篆書	2.2		
		137	-	中世窟立26	不明	-	-	-	
			710	中世窟立31	政和通寶	1111年	-	2.3	
			711	中世窟立31	洪武通寶	1368年	-	2.2	
			148	719	中世堂穴建物6	天◎銅貨	-	-	2
	720			中世堂穴建物6	不明	-	-	-	
	149			722	中世堂穴建物7	天◎銅貨	-	2.3	
	150			724	中世堂穴建物10	泉徳元寶	1038年	北条・仁宗	2.3
	154			726	かまど中世4	照宗元寶	1068年	北条・神宗 篆書	2.3
	159			729	かまど跡11	不明	-	7枚重	2.2
730				かまど跡11	不明	-	7枚重	2.3	
176				750	中世土塔8	不明	-	土銭	1.9

探跡	No.	遺構名	出土古銭	古銭情報	備考	直径 (cm)		
177	-	中世土塔9	不明	-	小片	-		
	752	中世土塔11	元徳通寶	1078年	北条・神宗 篆書	2.3		
	180	759	中世土塔16	頼朝元寶	1009年	北条・神宗	2.2	
		767	中世土塔16	洪武通寶	1368年	-	2.2	
		768	中世土塔16	洪武通寶	1368年	-	2.3	
		769	中世土塔16	洪武通寶	1368年	-	2.3	
		770	中世土塔16	加治本銭	-	背治 2枚重	2.3	
		-	中世土塔16	加治本銭	-	背治	-	
		771	中世土塔16	加治本銭	-	背治 7枚重	2.3	
		184	773	中世土塔16	不明	-	-	2.4
			774	中世土塔16	洪武通寶	1368年	2枚重 布面付者	2.5
			778	中世土塔16	洪武通寶	1368年	背治	2.2
779			中世土塔16	洪武通寶	1368年	5枚重	2.1	
188			780	中世土塔16	洪武通寶	1368年	7枚重	2.1
	781		中世土塔16	洪武通寶	1368年	-	2.2	
	782		中世土塔16	加治本銭	-	洪武通寶に背治	2.1	
	186		783	中世土塔16	加治本銭	-	洪武通寶に背治	2.1
			784	中世土塔16	加治本銭	-	洪武通寶に背治	2.1
			785	中世土塔16	洪武通寶	1368年	-	2
			786	中世土塔16	洪武通寶	1368年	2枚重	2
			190	787	中世土塔16	洪武通寶+? +朝通寶	1223年	3枚重
		788		中世土塔16	洪武通寶	1368年	-	2.2
		789		中世土塔16	洪武通寶	1368年	2枚重	2
		790		中世土塔16	洪武通寶	1368年	-	2.1
		791		中世土塔16	洪武通寶	1368年	-	2.1
792		中世土塔16		不明	-	3枚重	2.1	
793		中世土塔16		洪武通寶	1368年	-	2	
794		中世土塔16		洪武通寶	1368年	-	2.1	
795	中世土塔16	洪武通寶		1368年	-	2.1		
796	中世土塔16	洪武通寶		1368年	-	2.1		
797	中世土塔16	洪武通寶		1368年	小片	2.1		
798	中世土塔16	洪武通寶		1368年	-	2		
192	799	中世土塔16	洪武通寶	1368年	-	2.1		
	800	中世土塔16	洪武通寶	1368年	-	2		
	-	中世土塔16	不明	-	銅質 文章記のふ	-		
	-	中世土塔16	不明	-	小片 文章記のふ	-		
	801	中世土塔16	昌祐	-	3枚重	2.1		
	802	中世土塔16	洪武通寶	1368年	-	2		
	803	中世土塔16	洪武通寶	1368年	-	2		
	-	中世土塔16	不明	-	-	-		
	804	中世土塔16	?	-	2枚重	2.1		
	805	中世土塔16	頼朝通寶+? 3枚	頼朝通寶 1223年	4枚重	2.1		

遺構内出土古銭

経緯	No.	遺構名	出土古銭	古銭情報	備考	直径 (cm)
192	806	中世土坑跡31	洪武通寶	1368年		2.1
193	808	中世土坑跡34	政治通寶	1111年	北条・鎌倉	2.2
194	809	中世土坑跡16	洪武通寶(2枚+1)	1368年	3枚重	2.1
194	810	中世土坑跡16	加治木銭	-	習治	2.1
	811	中世土坑跡16	加治木銭	-	習治	-
	812	中世土坑跡16	加治木銭	-	習治	2.1
	813	中世土坑跡16	加治木銭	-	習治	2.1
195	817	中世土坑跡17	洪武通寶+4	1368年	5枚重	2.1
818	中世土坑跡17	洪武通寶+1	1368年	2枚重	2.1	
196	819	中世土坑跡18	洪武通寶	1368年		2.1
820	中世土坑跡18	洪武通寶	1368年		2.1	
826	中世ビッド7	不明	-	-	2.1	
834	中世ビッド15	洪武通寶	1368年		2.2	
835	中世ビッド16	淳化通寶	1241年	南宋・理宗	2.4	
837	中世ビッド18	大中通寶	1361年	明・朱元璋	2.2	
838	中世ビッド18	洪武通寶	1368年		2.2	
113	-	中世ビッド23	不明	-	-	-
-	-	中世ビッド24	洪武通寶	1368年	「洪」「通」のみ確認	-
200	851	中世ビッド33	祥符元寶	1009年	北条・真宗	2.4
854	中世ビッド34	永樂通寶	1408年	明・成祖	2.1	
855	中世ビッド35	洪武通寶	1368年		2.3	

出土古銭(一般)

経緯	No.	出土区	層	古銭情報	時代	備考	直径 (cm)
1696	-	表	関元通寶	南唐 960年	真書	2.4	
1697	C-28	裏	関元通寶	南唐 960年	破片	-	
1698	C-36	裏	関元通寶	南唐 960年	真書	2.3	
1699	-	表	関元通寶	南唐 960年	真書	2.2	
1700	CD-29	裏	永樂通寶	北宋960年		2.5	
1701	F-19	裏	太平通寶	北宋 976年		2.4	
1702	D-25	裏	太平通寶	北宋 976年		2.4	
1703	-	裏	太平通寶	北宋 976年		2.4	
1704	F-22	裏下	至道元寶	北宋 966年	篆書 大題	2.3	
1705	E-22	裏	至道元寶	北宋 966年	真書	2.4	
1706	E-34	裏	祥符元寶	北宋 1009年	真宗	2.45	
1707	F-23	裏下	天聖元寶	北宋 1023年		2.4	
1708	C-23	裏	景祐元寶	北宋 1034年	真書 仁宗	2.5	
1709	E-16	裏	景祐元寶	北宋 1038年	真書 仁宗	2.45	
1710	G-6	裏	皇祐通寶	北宋 1038年	真書	2.4	
1711	D-21	裏	皇祐通寶	北宋 1038年	篆書	2.4	
1712	G-17	裏	皇祐通寶	北宋 1038年	篆書	-	
1713	D-24	裏	皇祐元寶	北宋 1054年	真書 仁宗	2.4	
1714	C-13	裏	嘉祐通寶	北宋 1056年	真書 仁宗	2.45	
1715	G-36	裏	治平元寶	北宋 1064年	篆書 真宗	2.35	
1716	-	裏	熙寧元寶	北宋 1068年	篆書	2.3	
1717	D-28	裏	熙寧元寶	北宋 1068年	篆書	2.35	
1718	CD-29	裏	熙寧元寶	北宋 1068年	篆書	2.35	
1719	G-6	裏	熙寧元寶	北宋 1068年	篆書 破片	2.5	
1720	D-24	裏	熙寧元寶	北宋 1068年	篆書	2.4	
1721	D-17	裏	熙寧元寶	北宋 1068年	真書	2.35	
1722	F-36	裏	熙寧元寶	北宋 1068年	真書	2.3	
1723	D-15	裏a	熙寧通寶	北宋 1071年	併二銭	2.9	
1724	D-25	裏	元豊通寶	北宋 1078年	行書 神宗	2.5	
1725	F-28	大溝内	元豊通寶	北宋 1078年	行書	2.45	
1726	D-12	表	元祐通寶	北宋 1086年	篆書 行書	2.3	
1727	E-13	品取側	紹聖元寶	北宋 1094年	行書	2.35	
1728	D-25	裏下	紹聖元寶	北宋 1094年		2.35	
1729	D-28	裏	紹聖元寶	北宋 1094年	行書	2.4	
1730	D-24	裏	元符通寶	北宋 1098年	行書 哲宗	2.45	
1731	G-17	裏	元符通寶	北宋 1098年	篆書	2.4	
1732	-	表	大観通寶	北宋 1107年		2.5	
1733	-	表	大観通寶	北宋 1107年		2.5	
1734	G-17	裏	政和通寶	北宋 1111年	分幣	2.4	
1735	G-17	裏	政和通寶	北宋 1111年	篆書	2.3	
1736	D-29	裏	正徳元寶	金 1157年		2.45	
1737	E-9	表	洪武通寶	明 1368年		2.2	
1738	-	表	洪武通寶	明 1368年	2枚重	2.3	
1739	A-30	表	洪武通寶	明 1368年	溝内	2.3	
1740	-	表	洪武通寶	明 1368年		2.2	

経緯	No.	遺構名	出土古銭	古銭情報	備考	直径 (cm)
200	856	中世ビッド36	元祐通寶	1086年	北条・哲宗 行書	2.2
201	857	中世ビッド37	太平通寶	976年		2.2
	858	中世ビッド38	太平通寶	976年		2.2
	864	中世ビッド44	洪武通寶	1368年		2
865	中世ビッド45	不明	-	「通」のみ確認	-	
205	896	溝14	皇宋通寶	1038年		2.4
313	-	近世土坑1	洪武通寶	1368年	銭分多 破片	-
314	1807	近世土坑8	祥符元寶	1009年	北条・真宗	2.3
	1808	近世土坑8	永樂通寶	1408年	明・成祖(永樂帝)	2
	-	近世土坑8	不明	-	文章表記のみ	-
	-	近世土坑8	不明	-	銭銭 文章表記のみ	-
315	1809	近世土坑跡1	洪武通寶	1368年	銭分多し	2.3
	1810	近世土坑跡2	寛永通寶	-	3枚重	2.3
	1812	近世土坑跡6	洪武通寶	1368年		2.2
	1813	近世土坑跡6	加治木銭	-	洪武通寶に習治	2.2
317	1814	近世土坑跡6	洪武通寶	1368年		2.2
	-	近世土坑跡6	不明	-		-
318	1815	近世土坑跡9	不明	-	5枚重	2.1
280	-	近世ビッド5	不明	-	銭分多 破片	-
326	1860	近世跡3	寛永通寶	-	江戸時代	2.2
328	1872	近世自然底跡1	〇〇通寶	-		-

経緯	No.	出土区	層	古銭情報	時代	備考	直径 (cm)
1741	D-15	裏a	洪武通寶	明 1368年		2.3	
1742	A-30	裏	洪武通寶	明 1368年	併一銭	2.2	
1743	D-29	裏a	洪武通寶	明 1368年	破片	2.4	
1744	E-19	裏	洪武通寶	明 1368年		2.2	
1745	F-24	裏	洪武通寶	明 1368年	背北平	2.3	
1746	E-23	裏b	洪武通寶	明 1368年		2.3	
1747	D-25	裏b	洪武通寶	明 1368年		2.2	
1748	D-20	裏	洪武通寶	明 1368年		2.2	
1749	F-11	裏上	洪武通寶	明 1368年	背下類	2.3	
1750	D-28	裏	洪武通寶	明 1368年		2.35	
1751	D-23	裏下	洪武通寶	明 1368年		2.35	
1752	D-23	裏下	洪武通寶	明 1368年		2.4	
1753	D-23	裏下	洪武通寶	明 1368年	背面	2.3	
1754	E-18	裏	洪武通寶	明 1368年	銭分 銭分多	2.2	
1755	C-29	裏	洪武通寶	明 1368年		2.2	
1756	F-21	裏	洪武通寶	明 1368年	破片	2.3	
1757	E-19	裏	洪武通寶	明 1368年		2.3	
1758	G-6	裏	洪武通寶	明 1368年		2.3	
1759	E-20	裏	洪武通寶	明 1368年		2.3	
1760	E-29	裏	洪武通寶	明 1368年		2.3	
1761	EF-16	裏下	洪武通寶	明 1368年	5枚重 1銭1小片	2.4	
1762	D-36	表	洪武通寶	明 1368年		2.35	
1763	D-23	裏	洪武通寶	明 1368年		2.2	
1764	-	表	洪武通寶	明 1368年		2.3	
1765	-	表	洪武通寶	明 1368年	2枚重	2.3	
1766	D-15	裏a	永樂通寶	明 1408年		2.5	
1767	Z-21	裏	永樂通寶	明 1408年		2.45	
1768	C-20	裏	永樂通寶	明 1408年		2.5	
1769	D-15	裏	永樂通寶	明 1408年	破片	-	
1770	B-34	溝内	永樂通寶	清 1662年	背「宣統」興州文字	2	
1771	F-23	裏	朝鮮通宝	朝鮮 1423年	真書	2.3	
1772	-	裏	朝鮮通宝	朝鮮 1423年	真書	2.2	
1773	-	裏	加治木銭	習治		2.3	
1774	E-9	裏	加治木銭	習治		2.3	
1775	D-29	裏	加治木銭	習治		2.25	
1776	F-23	裏	加治木銭	習治		2.3	
1777	-	裏	加治木銭	習治		2.3	
1778	-	裏	加治木銭	習治		2.3	
1779	F-20	裏	加治木銭	習治		2.3	
1780	D-14	1b	寛永通寶	1636年~		2.2	
1781	-	裏	寛永通寶	1636年~	7枚重	2.3	
1782	D-35	裏	寛永通寶	1636年~		2.3	
1783	D-37	表	寛永通寶	1636年~		2.2	
1784	B-37	裏	寛永通寶	1636年~		2	

### 出土古銭(一般)

種別	No.	出土区	層	古銭情報	時代	備考	直径 (cm)
277	1785	B-34	Ⅱ	寛永通寶	1636年～		2.25
	1786	-	表	寛永通寶	1636年～		2.3
	1787	E-37	遺内	寛永通寶	1636年～		-
	1788	D-37	表	寛永通寶	1636年～		2.2
	1789	-	表	寛永通寶	1636年～		2.45
	1790	F-30	1 b	寛永通寶	1636年～		2.4
	1791	D-34	I	寛永通寶	1636年～		2.3
	1792	F-35	表	寛永通寶	1636年～		2.4

種別	No.	出土区	層	古銭情報	時代	備考	直径 (cm)
277	1793	-	表	寛永通寶	1636年～		2.4
	1794	-	表	寛永通寶	1636年～		-
	1795	A-28	-	寛永通寶	1636年～		2.3
	1796	C-37	-	寛永通寶	1636年～		2.2
	1797	-	表	無1銭奉御寶	1922年～	大正11年	2.3
	1798	F-31	表	一銭			2.7
	1799	-	表	竜1銭御寶			2.75

### 出土古銭(一般・非掲載分)

種別	No.	出土区	層	古銭情報	直径 (cm)
非掲載	1	-	表	○和○寶	-
非掲載	2	-	表	2枚連	2.3
非掲載	3	-	表	小片・摩耗のため判読不可	-
非掲載	4	C-20	Ⅱ		-
非掲載	5	E-14	カタラシ	銭分多し	-
非掲載	6	F-4	1 b	銭分多し	-
非掲載	7	E-25	Ⅱ	破片	-
非掲載	8	F-19	Ⅱ		-
非掲載	9	F-19	Ⅱ	水○通○(水堂通寶1385) 水島通寶1644 水野通寶1646	-
非掲載	10	E-21	Ⅱ下	銭分多し	-
非掲載	11	E-22	Ⅱ	○元通寶(元元通寶960) 慶元通寶1195 聖元通寶1330	-
非掲載	12	D-28	Ⅱ	小片	-
非掲載	13	E-15	Ⅱ	破片	-
非掲載	14	E-18	Ⅱ	2枚連	2.35
非掲載	15	G-6	1 b	破片	-
非掲載	16	E-24	Ⅱ	表面摩耗	-
非掲載	17	E-25	Ⅱ	表面摩耗	-
非掲載	18	E-25	Ⅱ	破片	-
非掲載	19	D-24	Ⅱ	表面摩耗	-
非掲載	20	E-22	Ⅱ	破片 ○○○寶	-
非掲載	21	F-21	Ⅱ	天○元寶	-
非掲載	22	D-17	Ⅱ	(天慶元寶967 天慶元寶1013 天慶元寶1111 天盛元寶1124 天福元寶1194)	-
非掲載	23	E-25	Ⅱ	洪武通寶)	-
非掲載	24	D-13	Ⅱ	破片	-
非掲載	25	F-21	Ⅱ	小片	-
非掲載	26	E-30	Ⅱ	破片	-
非掲載	27	E-30	Ⅱ	劣化	-

種別	No.	出土区	層	古銭情報	直径 (cm)
非掲載	28	D-25	Ⅱ	表面摩耗	-
非掲載	29	E-29	1 b	小片	-
非掲載	30	F-31	-	劣化	-
非掲載	31	E・F-36	Ⅱ	小片	-
非掲載	32	F-23	Ⅱ	破片	-
非掲載	33	G-16・17	遺内	劣化	2.2
非掲載	34	G-17	Ⅱ	表面摩耗	-
非掲載	35	G-17	Ⅱ	○元寶or元○寶	-
非掲載	36	D-16	Ⅱ	表面摩耗	-
非掲載	37	D-15	Ⅱ	表面摩耗	-
非掲載	38	C-30	Ⅱ	表面摩耗	-
非掲載	39	D-28	Ⅱ	破片	-
非掲載	40	G-17	遺内	破片	-
非掲載	41	F-16	Ⅱ	小片	-
非掲載	42	B-34	Ⅱb	小片	-
非掲載	43	E-35	表	表面摩耗	-
非掲載	44	F-16	Ⅱ	小片	-
非掲載	45	D-23	Ⅱ	小片	-
非掲載	46	E-31	Ⅱ	表面摩耗	-
非掲載	47	-	表	小片	-
非掲載	48	F-16	Ⅱ	小片 銭分多し	-
非掲載	49	F-16	Ⅱ	小片	-
非掲載	50	D-23	Ⅱ	表面摩耗	-
非掲載	51	E-13	Ⅱ	5枚付者 銭分多し	-
非掲載	52	E-20	Ⅱ	表面摩耗	-
非掲載	53	D-28	Ⅱ	劣化	-
非掲載	54	F-31	泥溜	絆行通寶 非掲載	-
非掲載	55	E-23	Ⅱb	洪武通寶 破片 非掲載	-

### 3 近世の調査

#### (1) 調査の概要

調査は近世の調査においても、10m四方のグリッドを基本に、調査区全体にグリッドを設定して発掘調査を行った。調査区内は河川敷という立地もあり、層堆積は不安定で発掘調査時は遺物把握、出土遺物の層認定に非常に苦慮した。表土直下の近世は、現代の耕作、掘削工事等の影響でさらに調査を厳しいものとした。また、多数のピットが検出されたため、掘立柱建物跡の認定作業は困難を極め、整理作業において図上での復元も試みた。遺構の時期認定は、出土遺物を中心に、埋土などを検討して認定を行った。

#### (2) 出土遺物の分類方法

近世の出土遺物のうち陶磁器においては、1580年代から19世紀代の資料を近世の遺物として報告する。

遺物の分類方法としては、まず磁器、陶器、金属製品の3つに大分類し、さらに種別、器種に細分類した。また、器形や産地（判別できるもの）についても考慮しながら分類を行った。（以下参照）

磁器（白磁・色絵を含む）

碗・小坏・皿・鉢・蓋（食膳具）、瓶・仏具  
陶器

碗・皿・鉢（食膳具）、蓋（浅鉢形以外のもの）、  
水注、土瓶、徳利、片口・鉢・楕鉢・鍋・釜  
（調理具）、蓋（浅鉢形のもの）・壺・壺（貯蔵  
具）、灯明具、仏具、その他

金属製品

陶磁器の産地、年代の記載については、文章内で述べたものもあるが、基本的には観察表内に掲載した。

年代・編年については、以下の文献、報告書を参考にしたが、生産年代と使用年代等を考慮して定めた。

『九州陶磁の編年』2000 九州近世陶磁学会

『江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通 九州編』2006 九州近世陶磁学会 渡辺芳郎

『鹿野川内市 平佐焼窯跡群の考古学的研究』2007

鹿児島大学法文学部人文学科異文化交論文論研究室

#### (3) 遺構

近世の遺構は、掘立柱建物跡2棟、焼土跡3基、製鉄関連遺構19基、土坑8基、土坑墓11基、埋藏箱遺構4か所、古道5条、溝8条、自然路2条が検出された。ピットは多数検出され、根石などの構造物が確認できるもの以外は、掲載遺物のあるもののみ遺構配置図で平面形を明示するに留めた。

#### 掘立柱建物跡（第304図）

掘立柱建物跡は、A-30、31区において2間×2間、2間×3間の2棟が検出された。調査区内において、現河川から、より内陸側に位置している。

#### 掘立柱建物跡1号（第304図）

A-30区で検出された。規格が2間×2間の建物で、梁行約3m、桁行約3.8mの規模をもち、床面積11.4㎡となる。柱穴は径30cm前後のものが大半を占める。柱穴1は、掘立柱建物跡2号の柱穴と切り合っており、径85cm前後と大きい。図中左側に見えるわずかな段差部分が当該建物の柱穴部分となる。掘立柱建物跡2号と切り合い関係にあるが、切り合う柱穴以外の柱穴検出レベルから、時間的前後関係については1号が先行すると考えられる。また同柱穴から遺物が出土している。

#### 出土遺物（第304図）

遺物は柱穴1内より葎代川系の陶片が出土した。壺等の胴部片は図化できなかった。遺物は片口と壺の口縁部が出土した。1801は片口である。薄くシャープなつくりのものである。1802は壺である。口縁部はT字状を呈する。口唇部には目が見える。

#### 掘立柱建物跡2号（第304図）

A-30,31区で検出された。規格が2間×3間の建物で梁行約3.9m、桁行約6mの規模をもち、床面積23.4㎡となる。建物西側の梁行間の柱穴を1本欠く。柱穴は径40cm前後が平均となる。前述のとおり掘立柱建物跡1号と柱穴8が切り合っているが、図中右側のやや大きな底面部分が当該掘立柱建物跡の柱穴部分となる。柱穴8から遺物が出土している。

#### 出土遺物（第304図）

1803は柱穴8から出土した。肥前磁器の染付碗である。

#### 焼土跡（第305図）

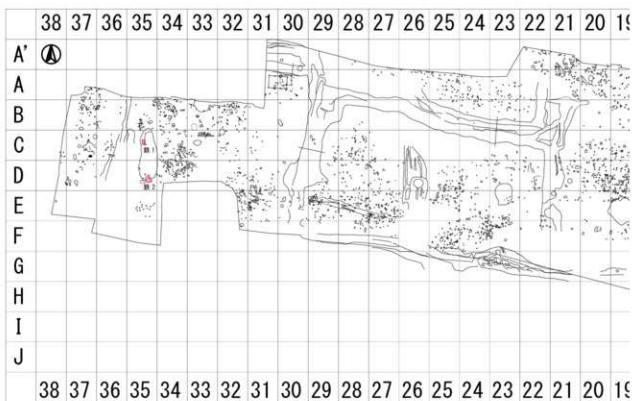
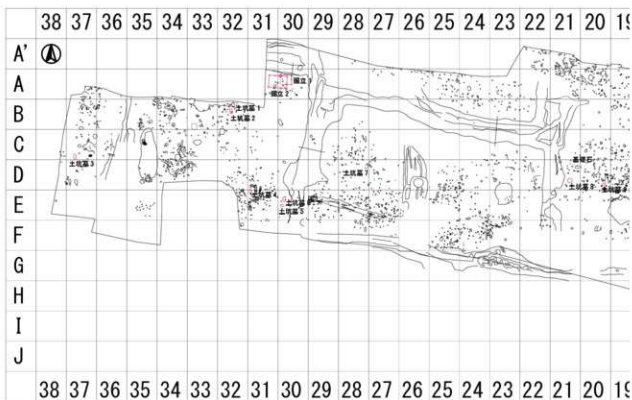
焼土跡は調査区内に点在し、F-7区、C-15区、E-38区の3箇所で見つかっている。鉄滓などが認められず、製鉄とは関係ないと思われるもの、所属時期不明のものを一括した。

#### 焼土跡1号（第305図）

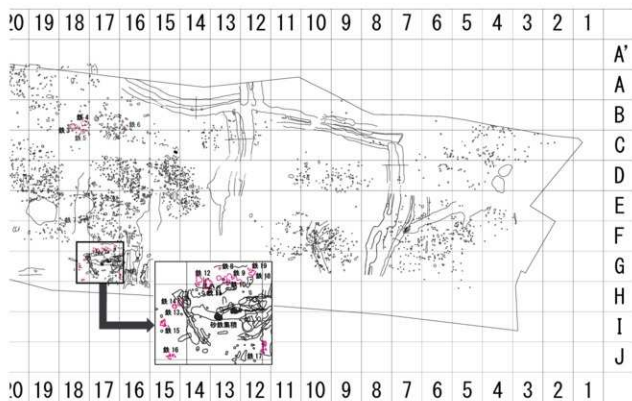
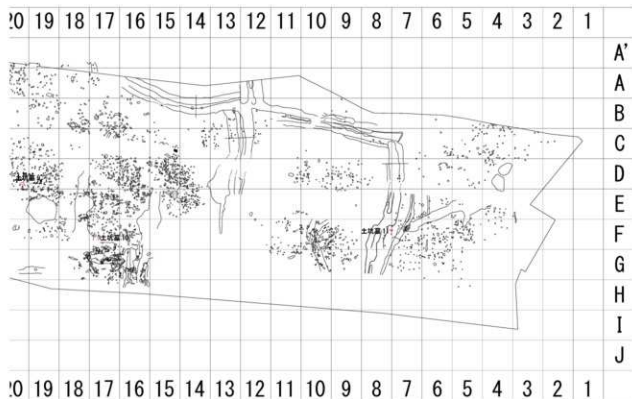
E-38区で検出された。平面形は長軸0.6m、短軸0.4mの楕円形を呈する。検出面からの深さは2cmほどしかなく、埋土はやや粘性を帯びた砂で炭化物、焼土がみられるが、強い焼成は受けていない。

#### 焼土跡2号（第305図）

C-15区で検出された。平面形は長軸1.2m、短軸0.7mの長方形を呈し、検出面からの深さ0.1mほどである。遺構は、後年の耕作により破壊されており、焼土が筋状に3列残る。埋土に炭化物を多く含み、焼成を強く受けた様子が伺え、灰であった可能性も考えられる。



第278図 近世全体遺構図1

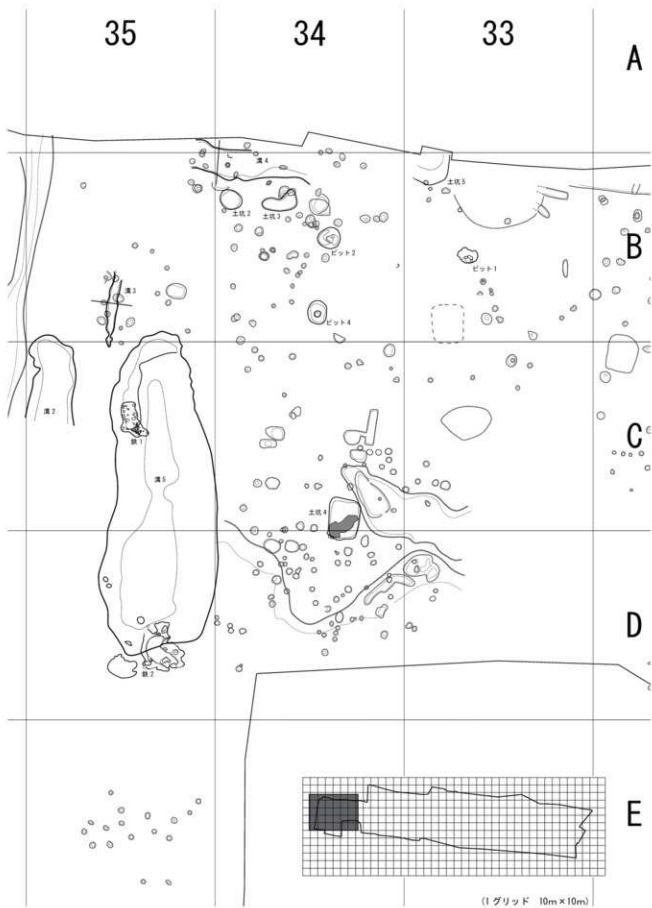


第279図 近世全体遺構図2

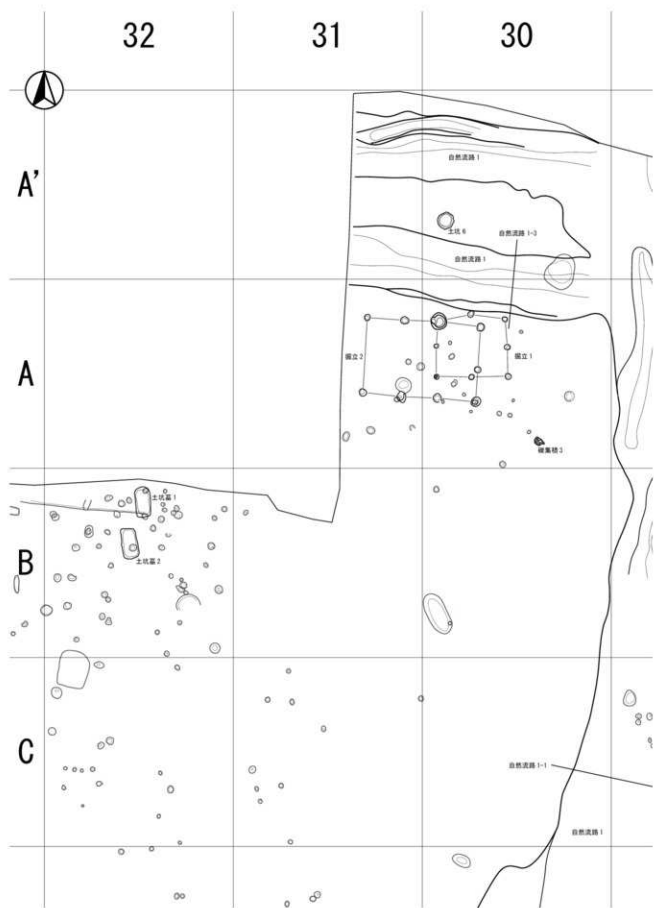


第280図 近世遺構配置図1

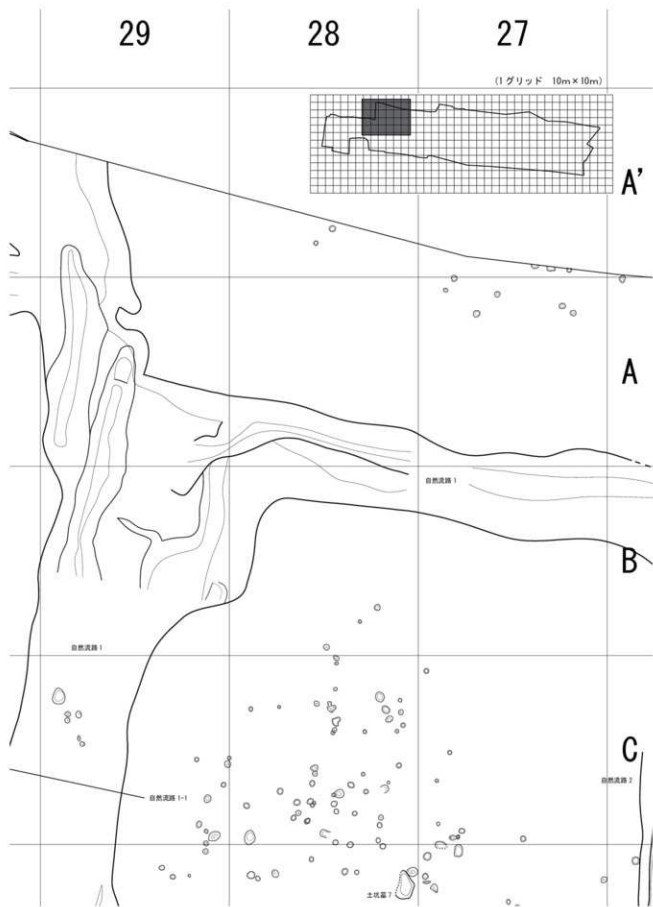




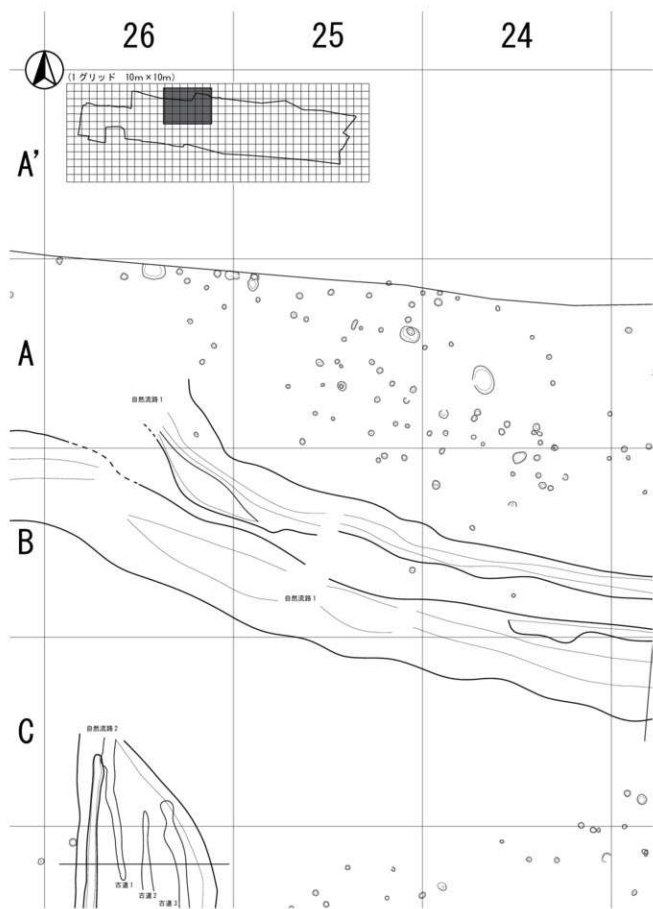
第281図 近世遺構配置図2



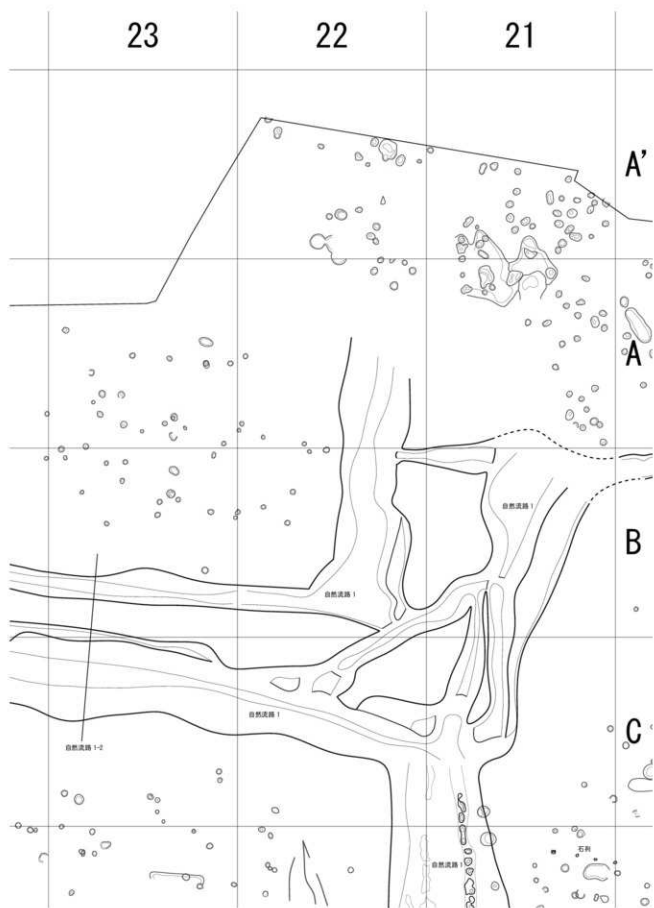
第282図 近世遺構配置図3



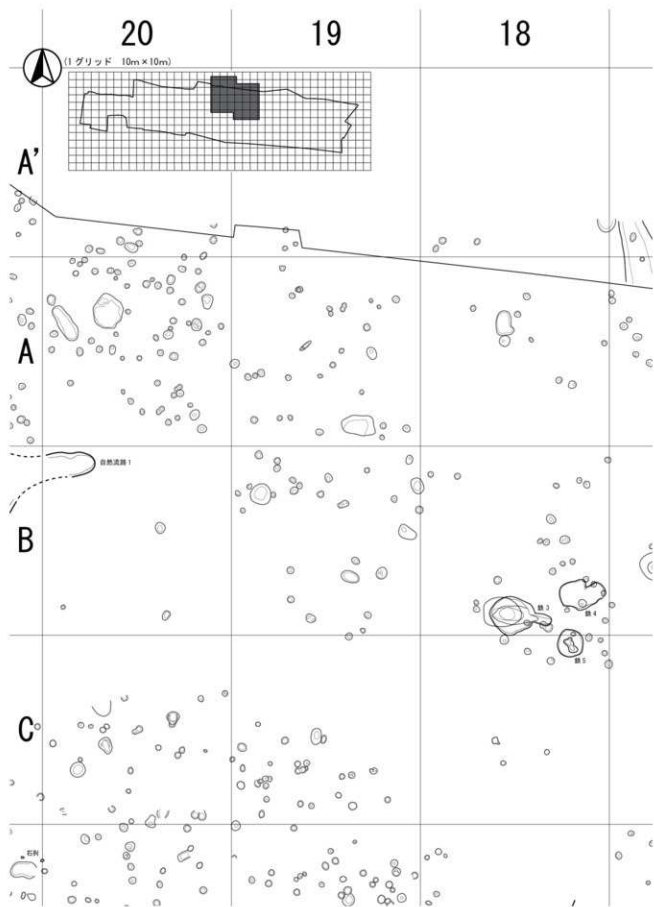
第283図 近世遺構配置図4



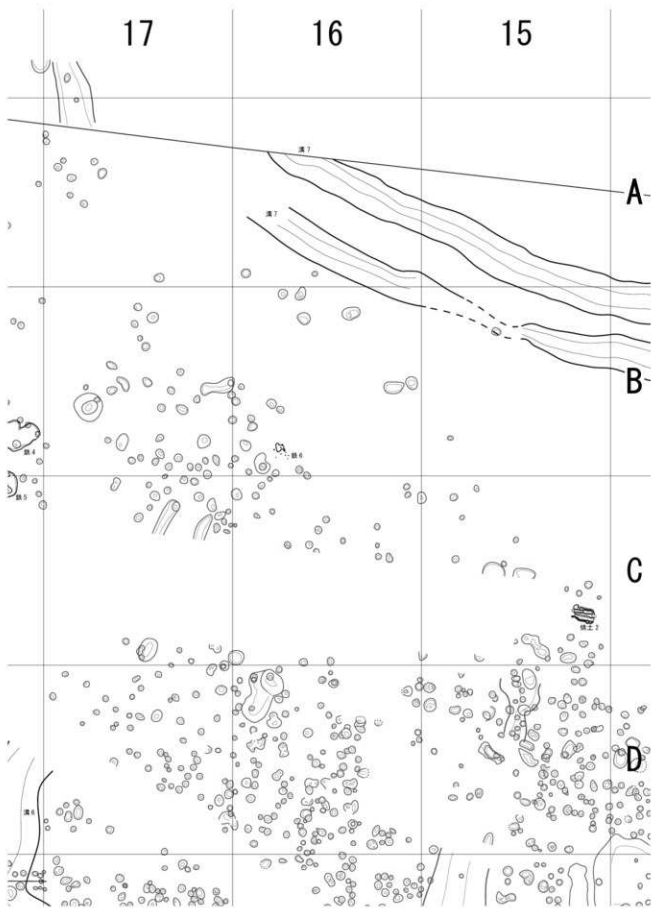
第284図 近世遺構配置図5



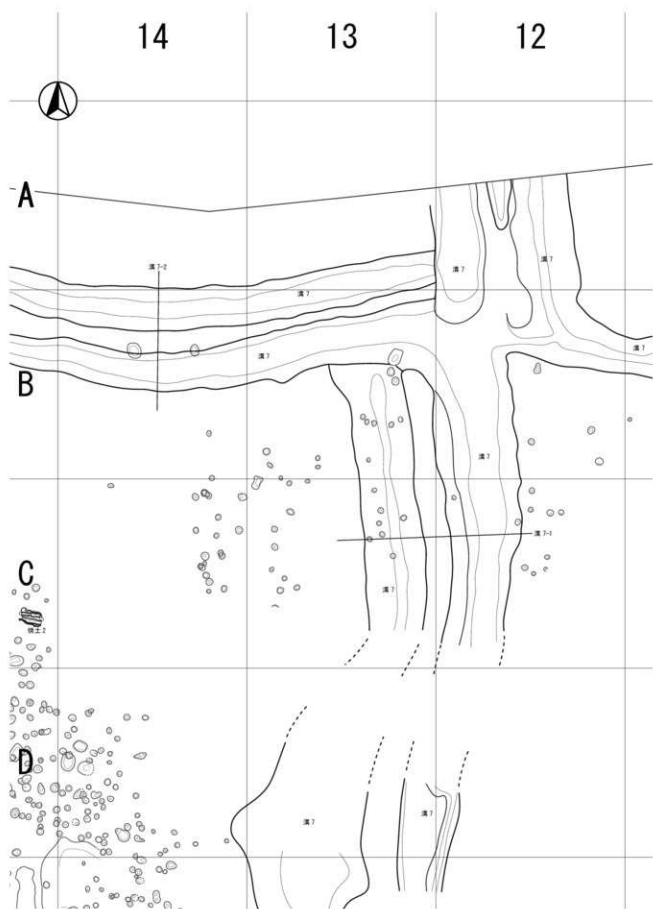
第285図 近世遺構配置図6



第286図 近世遺構配置図7

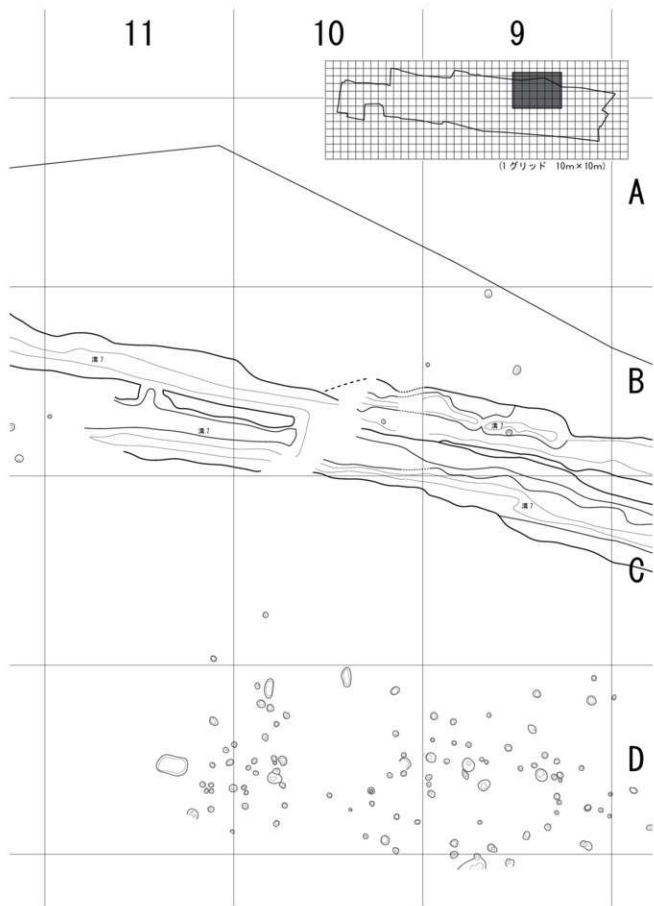


第287図 近世遺構配置図8

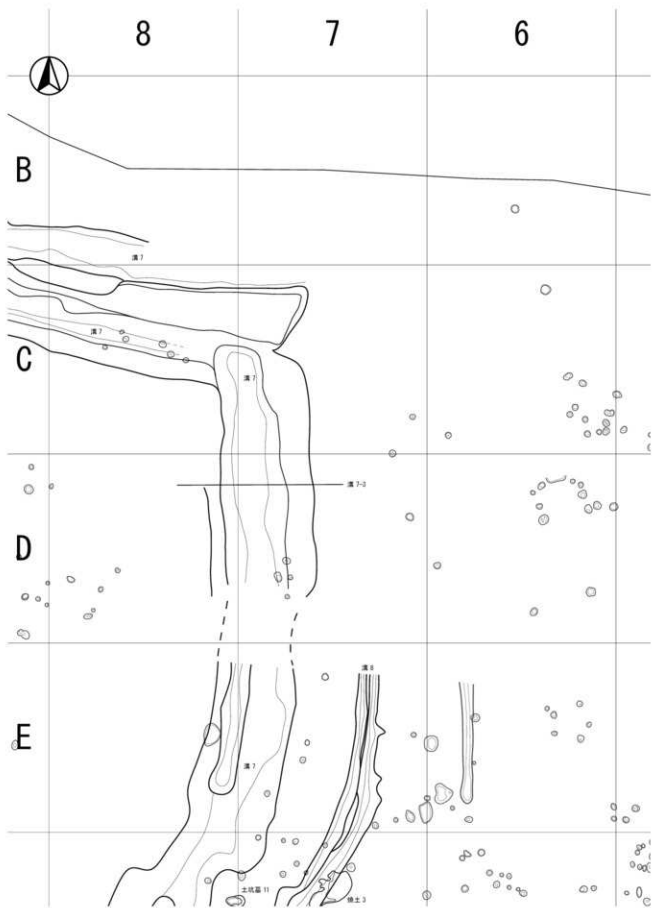


第288図 近世遺構配置図9

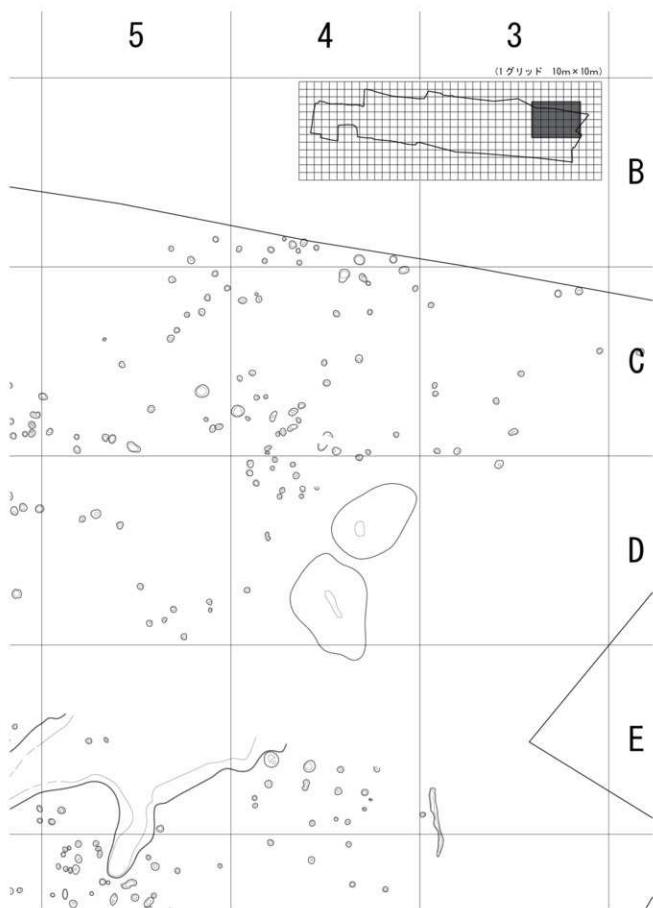




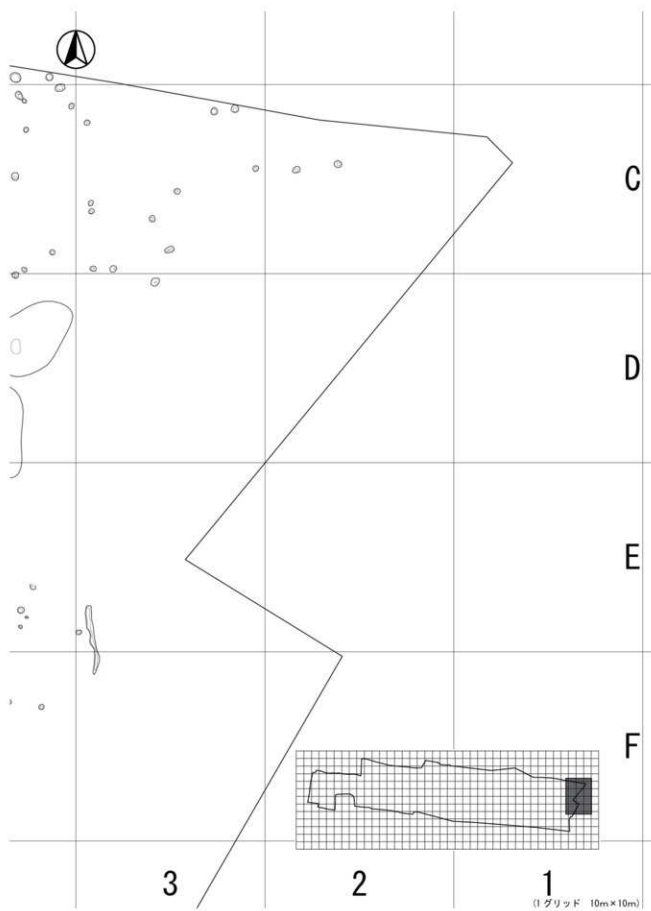
第289図 近世遺構配置図10



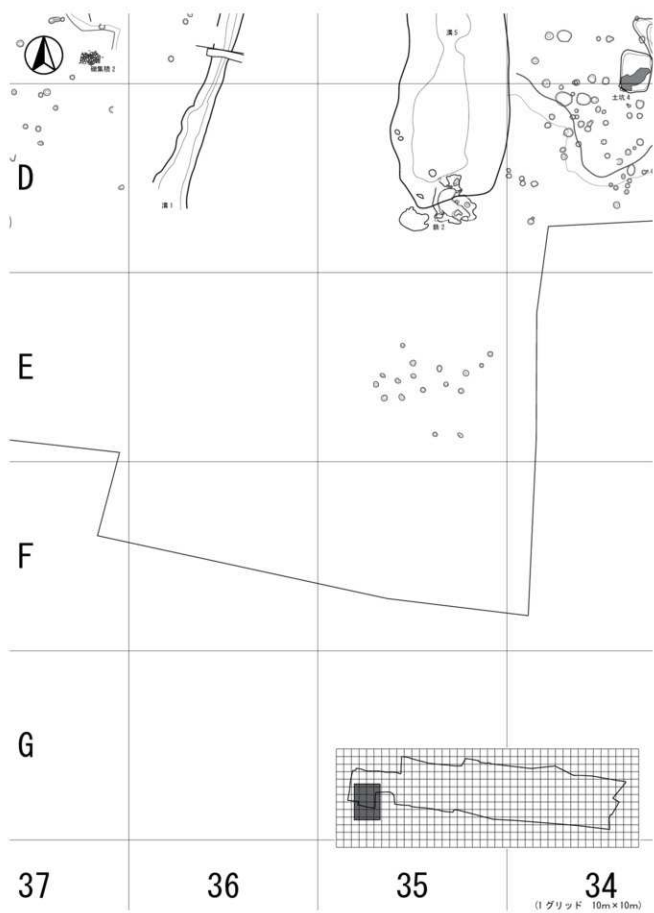
第290図 近世遺構配置図11



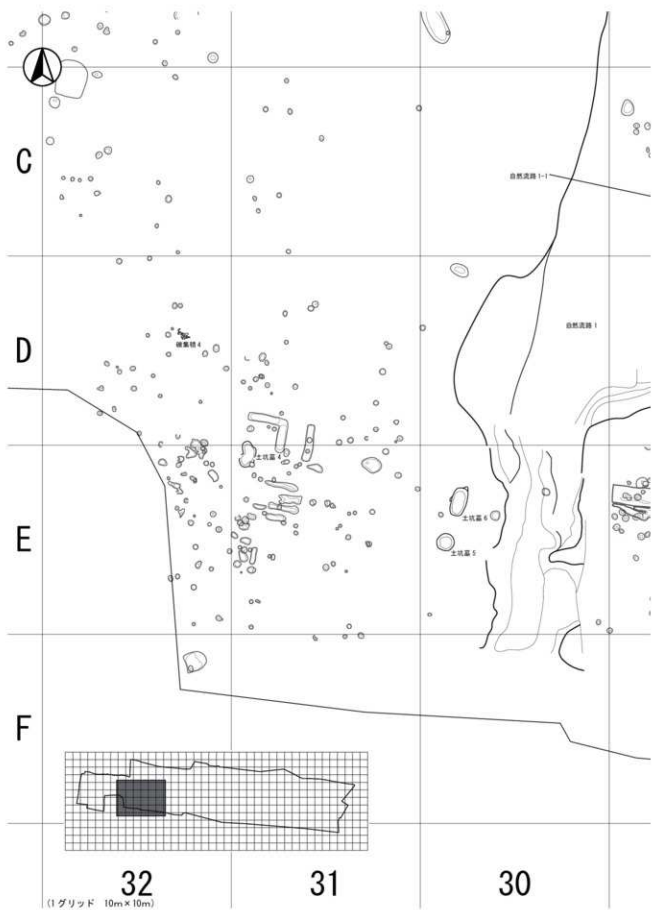
第291図 近世遺構配置図12



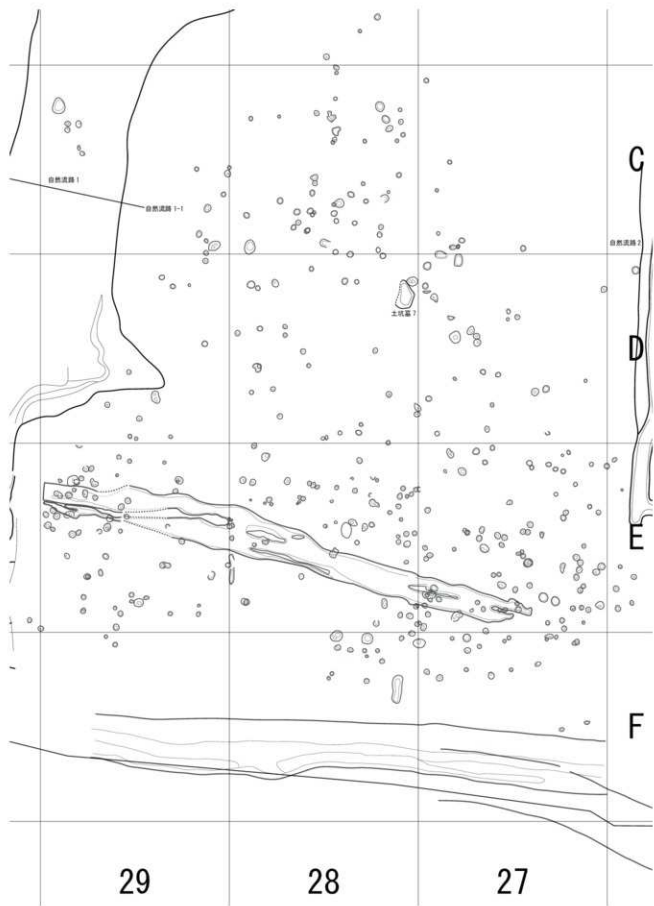
第292図 近世遺構配置図13



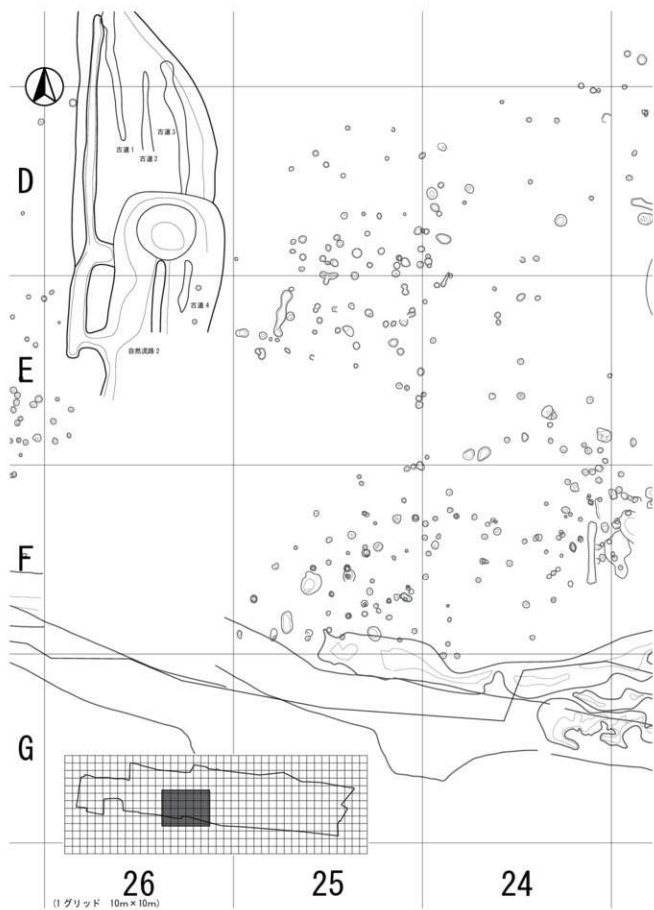
第293図 近世遺構配置図14



第294図 近世遺構配置図15

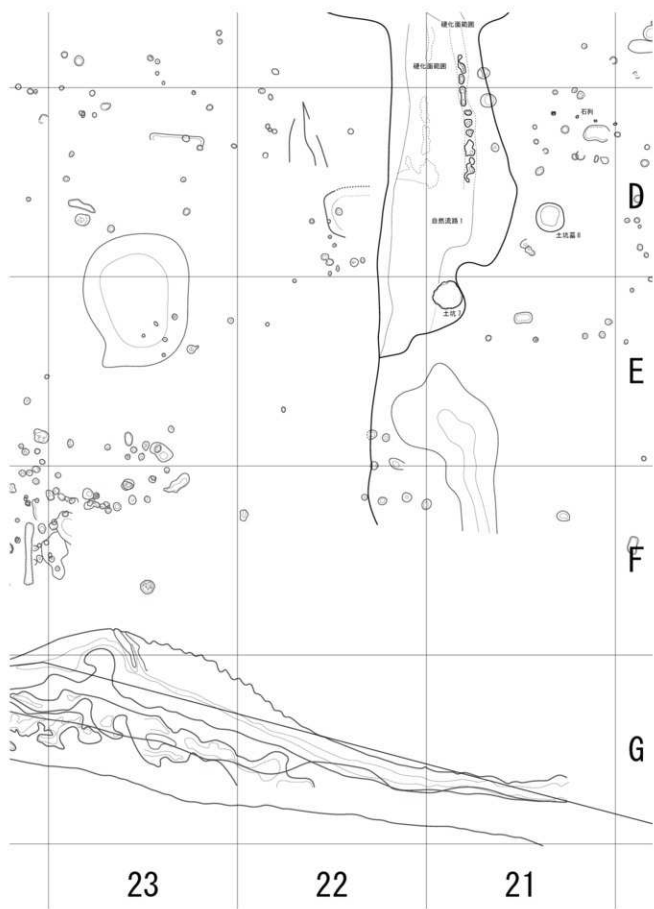


第295図 近世遺構配置図16

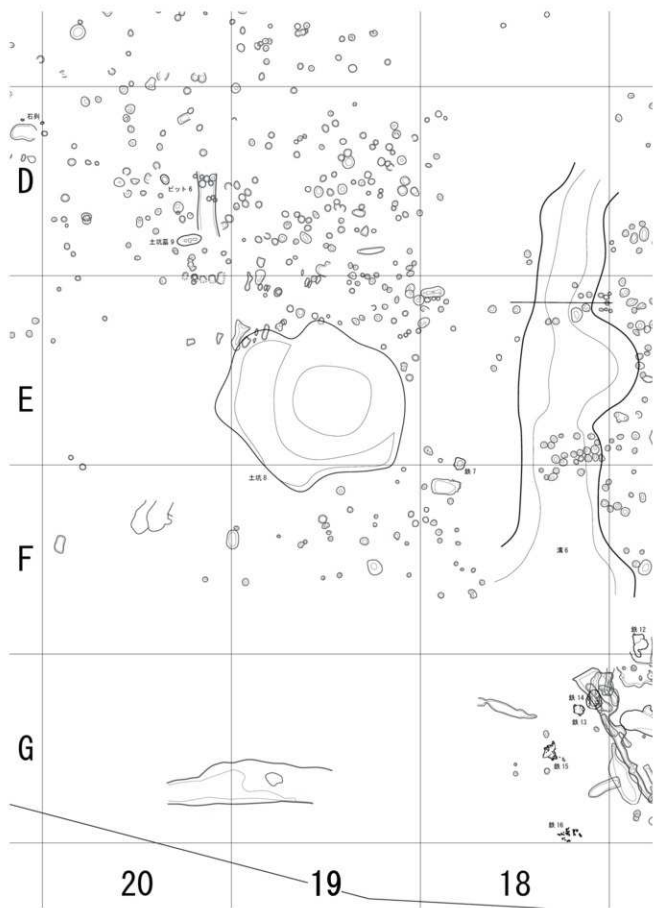


第296図 近世遺構配置図17

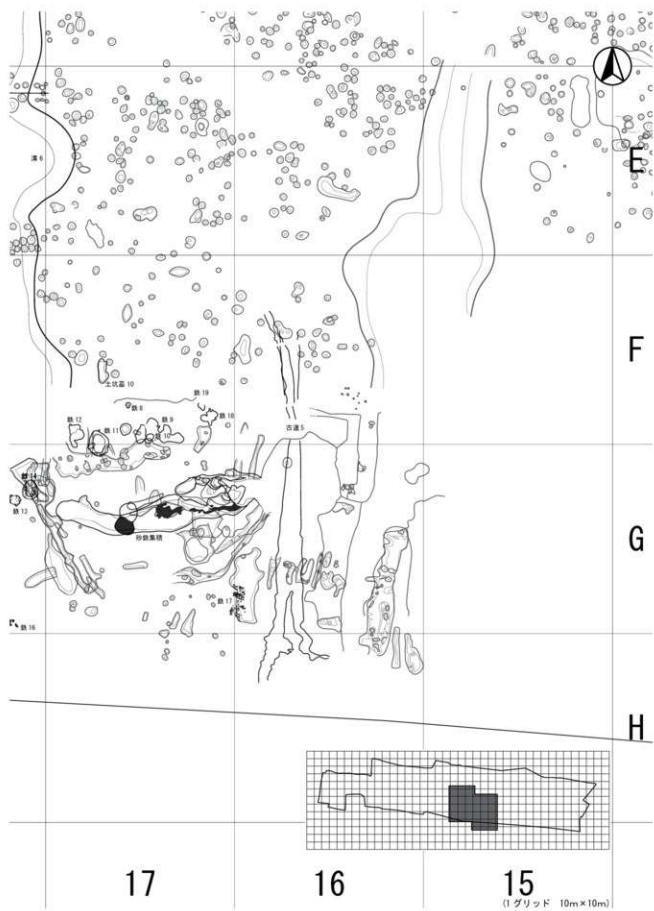




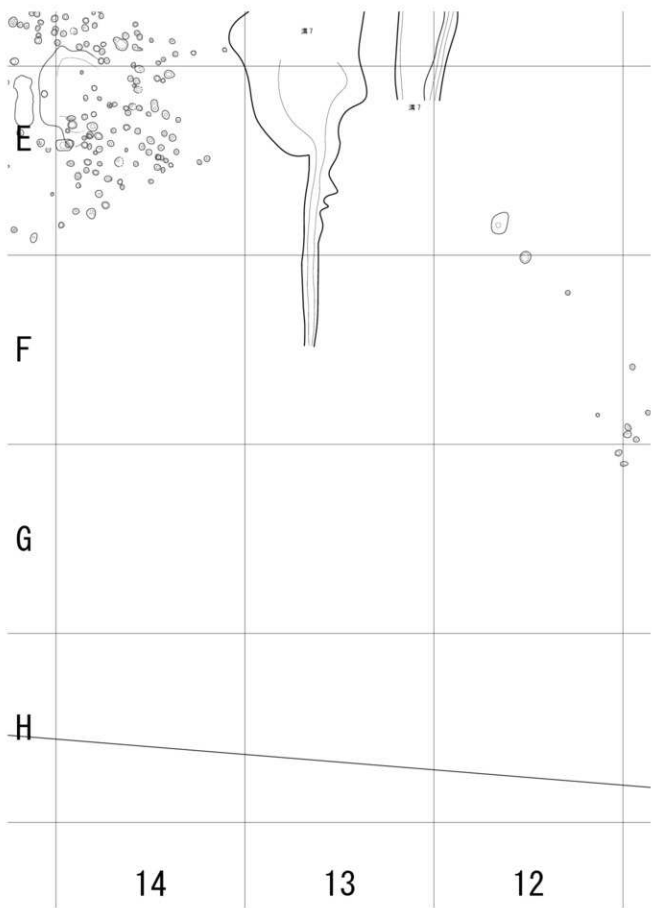
第297図 近世遺構配置図18



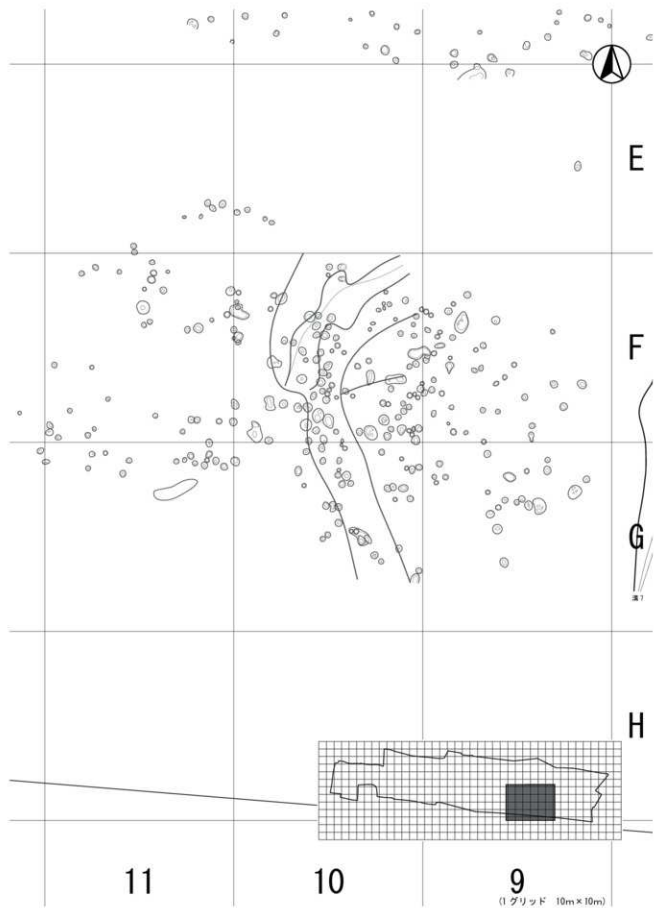
第298図 近世遺構配置図19



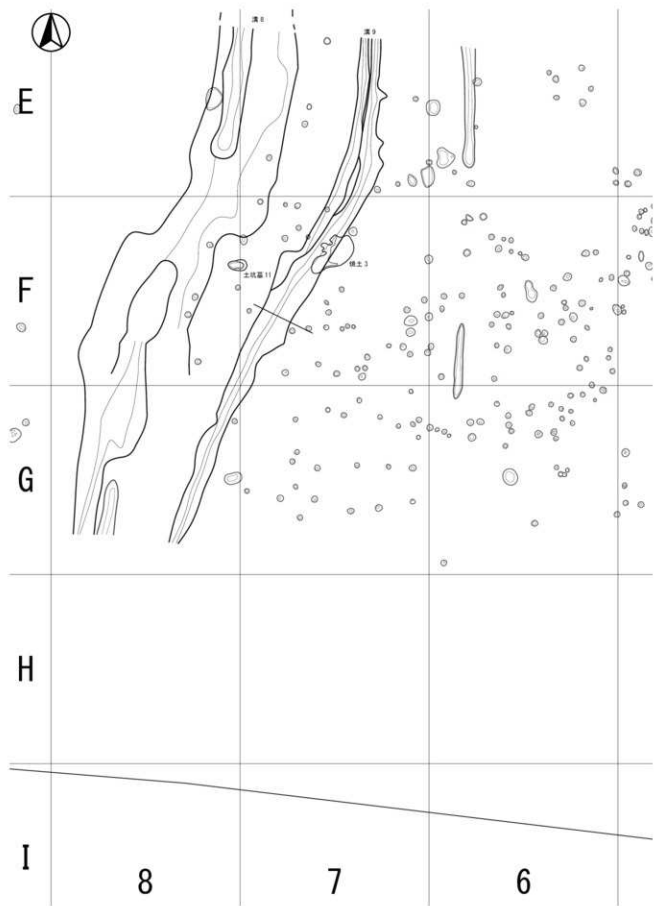
第299図 近世遺構配置図20



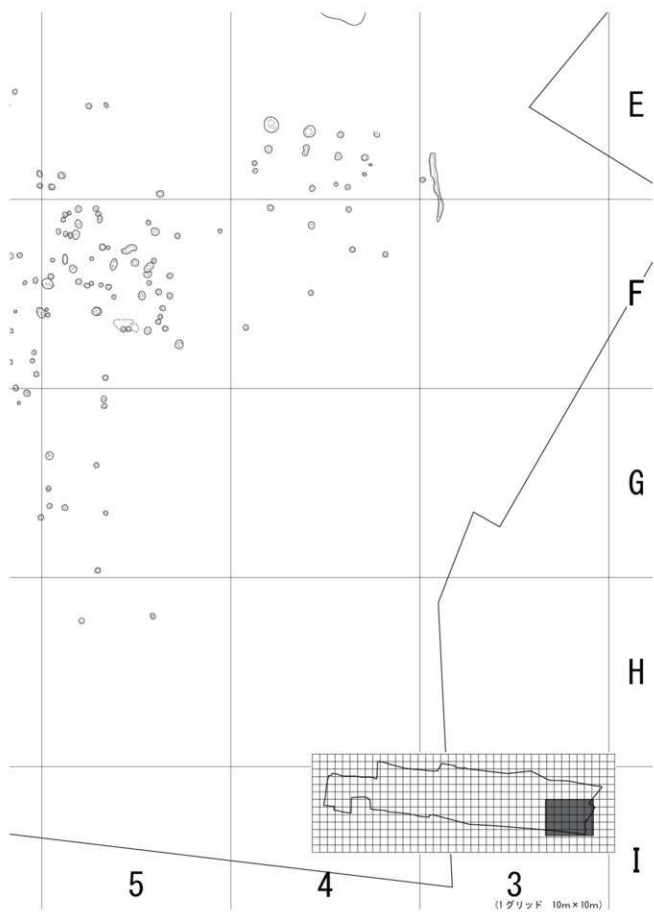
第300図 近世遺構配置図21



第301図 近世遺構配置図22

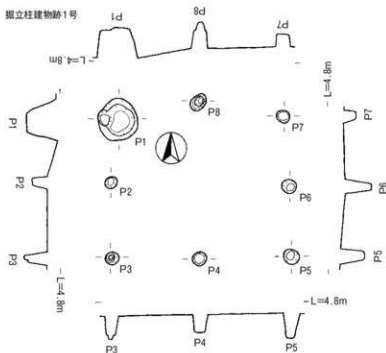


第302図 近世遺構配置図23



第303図 近世遺構配置図24

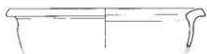
掘立柱建物跡1号



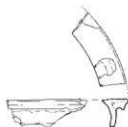
掘立柱建物跡1号

柱番号	柱穴 (cm)		
	直径	深度	底径
1	87	85	66
2	78	74	73
3	78	74	49
4	71	73	38
5	74	72	53
6	72	71	57
7	76	77	77
8	74	71	77

柱穴番号	奥行柱間 (m)	柱穴番号	奥行柱間 (m)
1-2	1.3	3-4	1.6
2-3	1.8	4-5	1.6
5-6	1.5	7-8	2.0
6-7	1.5	8-1	1.7

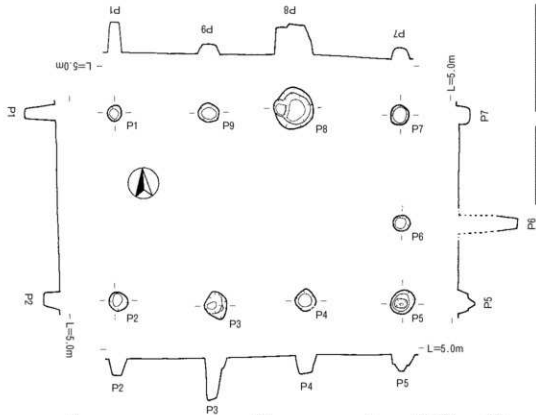


1801



1802

掘立柱建物跡2号



掘立柱建物跡2号

柱番号	柱穴 (cm)		
	直径	深度	底径
1	75	71	66
2	69	78	35
3	61	47	67
4	68	45	41
5	55	46	25
6	70	73	46
7	42	39	26
8	87	83	66
9	45	40	35

柱穴番号	奥行柱間 (m)	柱穴番号	奥行柱間 (m)
1-2	3.8	2-3	2.0
5-6	1.6	3-4	2.0
6-7	2.3	4-5	2.1
		7-8	1.7
		8-9	2.3
		9-1	2.0



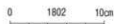
1803



(S=1/80)



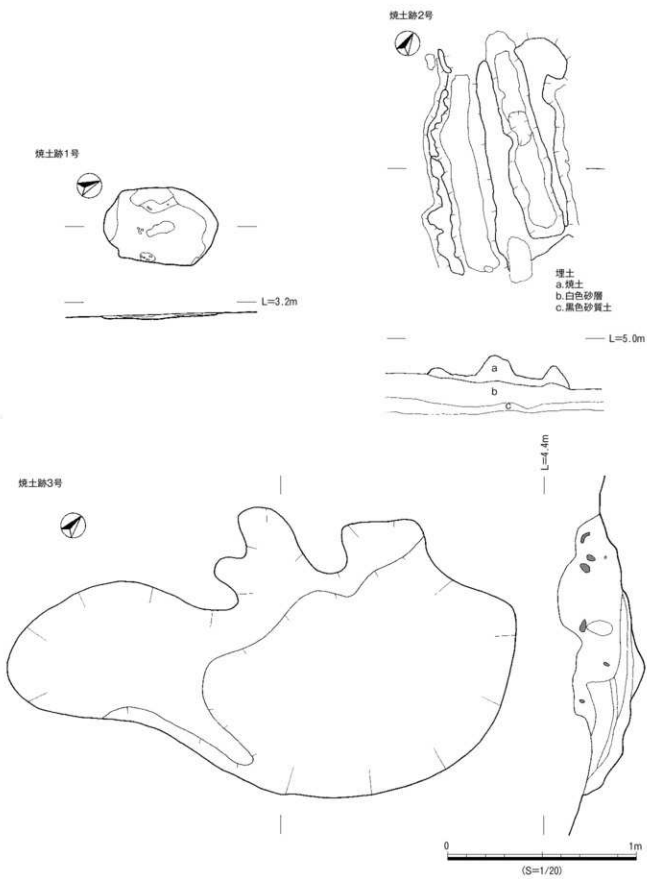
(S=1/3)



(S=1/4)

第304図 掘立柱建物跡1, 2号・出土遺物





第305図 烧土跡1～3号

#### 焼土跡3号(第305図)

F-7区で検出された。平面形は長軸2.7m、短軸1.5mの不定形で、検出面からの深さ36cmである。埋土中に赤色粘質土の焼土塊を含んでいる。

#### 製鉄関連遺構(第306図～第312図)

製鉄に関係すると思われる炉跡や炭化物集中、鉄滓集中などの遺構を一括した。遺構は調査区西側のC・D-35区、調査区中央のB・C-16～18区、F・G-16～18区で検出された。特にF-17区に密集する傾向がある。

#### 製鉄関連遺構1号(第306図)

C-35区で検出された。溝5号内の鉄滓集中である。長軸1.9m、短軸0.8mの範囲に礫とともに広がっている。溝の深い部分に鉄滓が集中しており、廃棄された状態と推察される。

#### 製鉄関連遺構2号(第306図)

D-35区で検出された。掘り込みと鉄滓集中である。掘り込みはごく浅く6cm程しかない。埋土は焼成を受けているとは言えないが、若干濡った土で、掘り込みより外側にまで広がり、その範囲は長軸2.6m+ $\alpha$ 、短軸2m+ $\alpha$ である。また掘り込みの南西側約1mに鉄滓集中があり、1m×1.5mほどの広がりをもつ。

#### 製鉄関連遺構3号(第307図)

B-18区で検出された炉跡である。平面形は径2mの円形に、長さ0.9m、幅0.6mほどの張り出しがつく、柄杓状を呈する。検出面から底部まで、約0.3mである。埋土中に焼土や炭化物を多く含み、強い焼成を受けたことが伺える。鉄滓も多く出土している。

#### 製鉄関連遺構4号(第308図)

B-18区で検出された炉跡である。平面形は長軸2.45m、短軸1.6mの不定形を呈する。検出面からの深さは0.2mである。平面形からは長方形と方形の炉の切り合いも想定できるが、埋土断面からは確認できない。埋土には焼土や炭化物を多く含んでおり、焼成の痕跡を残す。さらに遺構中央に大型の椀形滓、炉壁片なども出土した。

#### 製鉄関連遺構5号(第309図)

B・C-18区で検出された炉跡である。平面形は径1.4mの円形を呈する。検出面からの深さは23cmである。また円形の掘り込みの中央付近に深さ7cmほどの不定形をした凹みをもつ。埋土には焼土塊、炭化物などの焼成の痕跡が残る。輪の羽口も出土している。

#### 製鉄関連遺構6号(第309図)

B-16区で検出された。平面形ははっきりしないが、40cm四方の広がりをもつ。炭化物集中である。断面からもわかるように、本来、掘り込みを有していたと考えられるが、削平のためその規模はわからない。検出面からの深さは4cmほどである。近辺に鉄滓も出土している。

#### 製鉄関連遺構7号(第309図)

E・F-18区で検出された炭化物集中である。径0.6m、深さ14cmほどの掘り込みがあり、炭化物は掘り込みの外側まで広がっていたものと推察できる。埋土中からは、鉄滓片が多数出土した。また遺構周辺から、多数の鉄滓が出土した。

#### 製鉄関連遺構8号(第309図)

F-17区で検出した炉跡である。平面形は径0.3mほどの略円形を呈し、上面は削平を受け、検出面からの深さはわずかに4cmほどの凹みしかない。凹み内からは、椀形滓、炭化物、輪の羽口が出土した。

#### 製鉄関連遺構9号(第310図)

F-17区で検出した炉跡である。炉跡の平面形は径約0.5mの円形を呈し、検出面からの深さ11cmである。埋土は黒色灰が主体で鉄滓片が混じる。炉の東側35cmには茶褐色砂に炭化物、鉄滓を含む埋土の深さ7cmほどの凹みがあり、さらに東側へ炭化物が混じる茶褐色砂が2mほど広がる。遺物では輪の羽口片が出土している。

#### 製鉄関連遺構10号(第310図)

F-17区で検出された炉跡である。平面形は径0.4mほどの円形を呈する。検出面からの深さ17cmで炭化物を多量に含む暗褐色砂を埋土とする。検出面が9号の0.3mほど上面にあり、若干の時間差を認める。

#### 製鉄関連遺構11号(第311図)

F・G-17区で検出された炉跡である。平面形は長軸1.3m、短軸1.1mの楕円形を呈し、検出面からの深さ16cmである。黒色炭化物が主体となる埋土で、埋土内から鉄滓や検出面で鍛造剥片が数多く出土した。

#### 製鉄関連遺構12号(第311図)

F・G-17区で検出された炉跡である。平面形は炭化物の広がりなどで不定形を呈しているが、掘り込みは径0.5m程度の円形を呈するのではないかと考えられる。掘り込み上面は炭化物混じりの埋土が占め、掘り込みから、やや南にずれるように炭化物集中がみられる。掘り込み下部の埋土は焼成により、赤褐色に変色している。

#### 製鉄関連遺構13号(第311図)

G-18区で検出された炉跡である。平面形は長軸0.6m、短軸0.5mの略方形を呈し、検出面からの深さ15cmである。埋土はやや濁りの強い砂質土で、上面に炭化物の集中がみられる。鉄滓片も若干混じる。

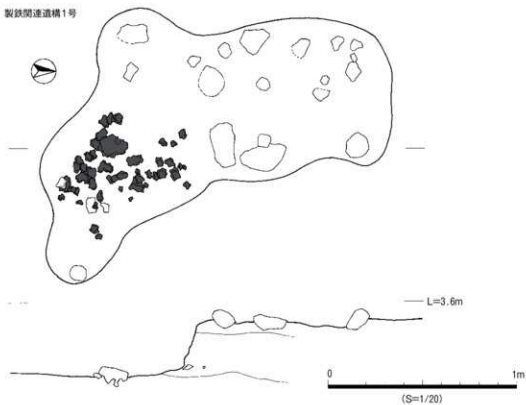
#### 製鉄関連遺構14号(第311図)

G-18区で検出された焼土跡である。平面形は長軸1m、短軸0.8mの楕円形を呈する。流動滓や鉄塊、炉壁片などが出土する。

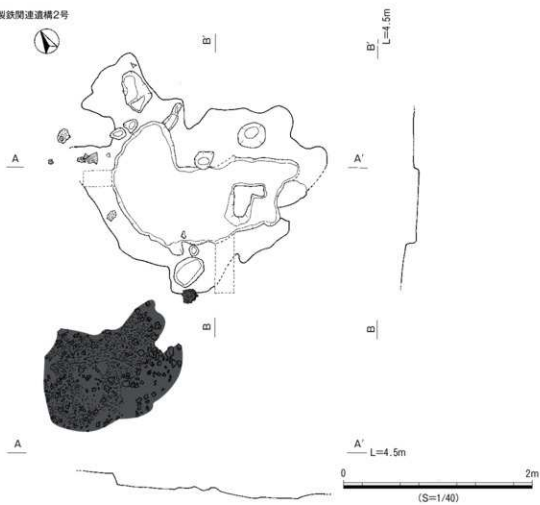
#### 製鉄関連遺構15号(第311図)

G-18区で検出された焼土跡である。平面形は長軸1m、短軸0.8mほどで略三角形に広がる。焼土内からは、炉壁片が多く出土し、流動滓、鉄塊も若干みられた。

製鉄関連遺構1号

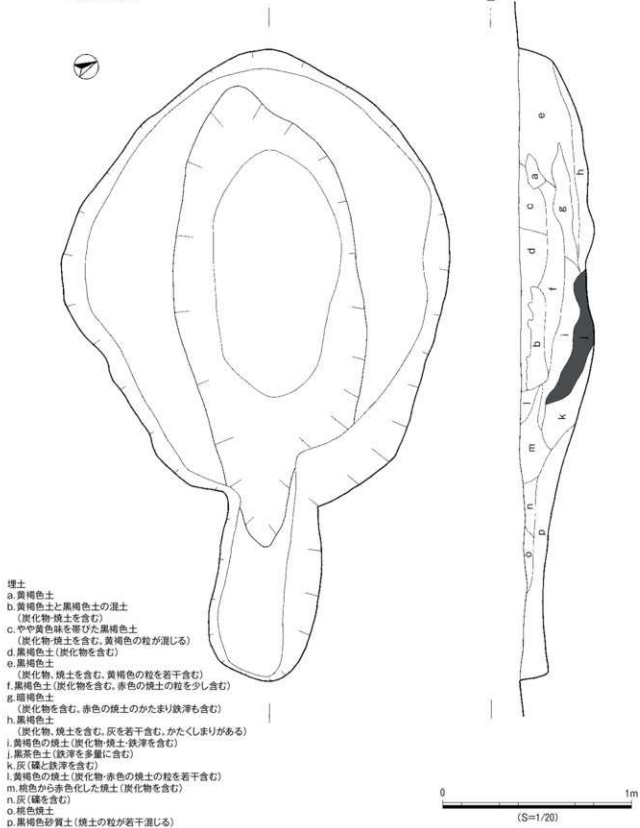


製鉄関連遺構2号



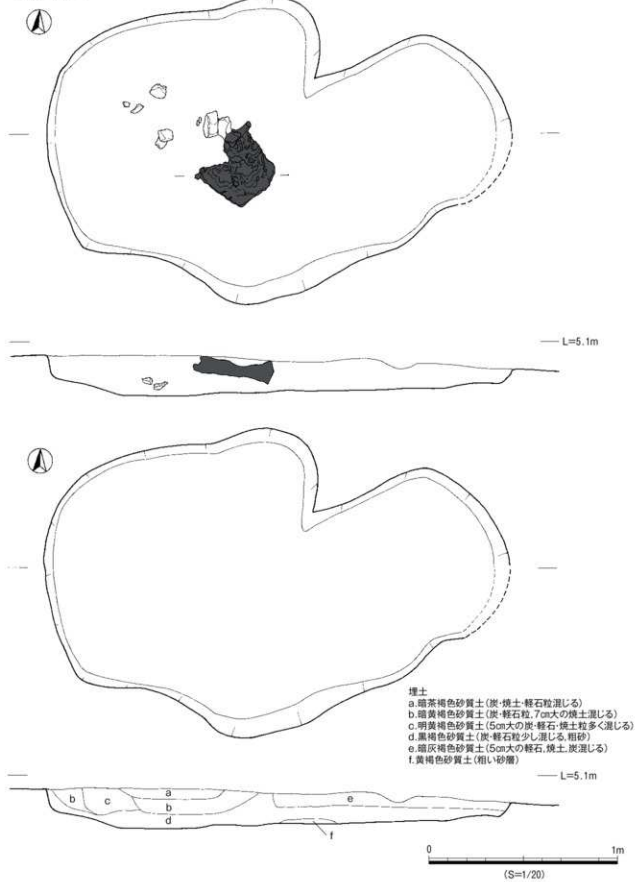
第306図 製鉄関連遺構1, 2号

製鉄関連遺構3号



第307図 製鉄関連遺構3号

製鉄関連遺構4号



第308図 製鉄関連遺構4号

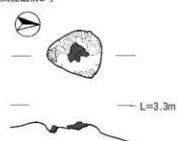
製鉄関連遺構5号



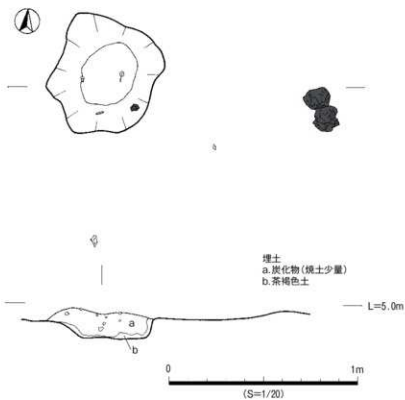
製鉄関連遺構6号



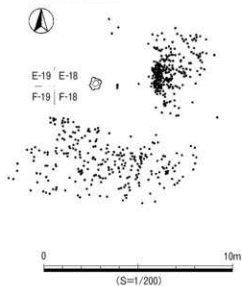
製鉄関連遺構8号



製鉄関連遺構7号

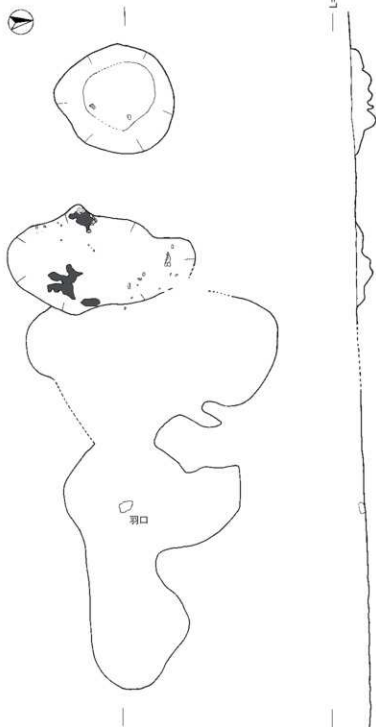


7号周辺 鉄滓出土状況

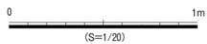
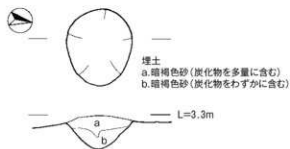


第309図 製鉄関連遺構5～8号・7号周辺鉄滓出土状況

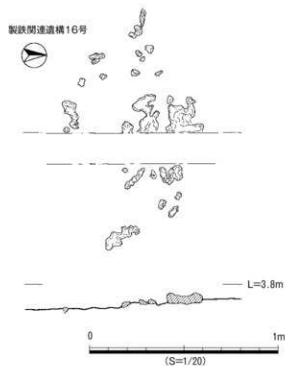
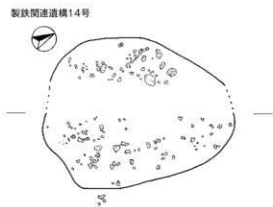
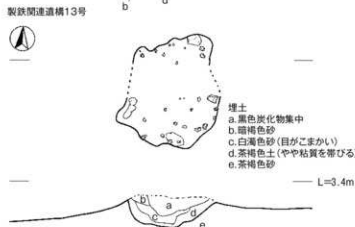
製鉄関連遺構9号



製鉄関連遺構10号



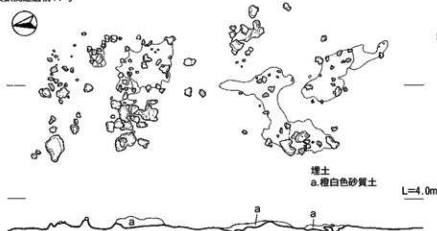
第310図 製鉄関連遺構9、10号



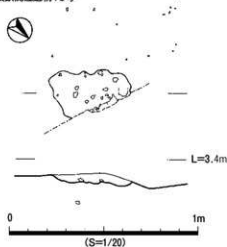
第311図 製鉄関連遺構11~16号



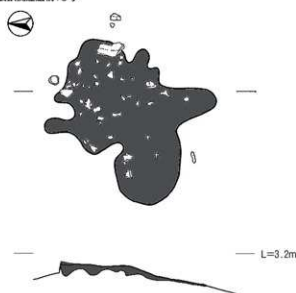
製鉄関連遺構17号



製鉄関連遺構19号



製鉄関連遺構18号



第312図 製鉄関連遺構17～19号

製鉄関連遺構16号 (第311図)

G-18区で検出された焼土跡である。砕けた焼土塊が長軸で、1.3m、短軸で0.8mの範囲で散らばっている。

製鉄関連遺構17号 (第312図)

G-16・17区で検出された焼土跡である。橙白色の焼土ブロックと炭化物が長軸1.9m、短軸0.9mの範囲で散らばっている。

製鉄関連遺構18号 (第312図)

F-17区で検出された。焼土跡である。長軸0.8m、短軸0.7mの不定形に炭化物が多量に混ざる茶褐色砂が広がる。ほかに鉄滓、鍛造剥片なども多量に出土し、排滓場と推察される。

製鉄関連遺構19号 (第312図)

F-17区で検出された焼土跡である。一部をトレンチにより削平されているが、長軸0.4m、短軸0.2mの、長方形を呈すると思われる。焼土跡には炭化物が多くみられる。

土坑 (第313図・第314図)

土坑は調査区内において多数検出されたが、ここでは遺構内から掲載に耐える遺物が出土したものの、特徴的な土坑8基のみについて報告する。その他については検出状況平面図に平面のみ記載する。

土坑1号 (第313図)

B-37区で検出された。平面形は径0.6mで円形を呈し、検出面からの深さ0.4mである。埋土に焼土、炭化物を多く含んでいる。銭貨が1点出土したが、小破片のため種別は不明である。

土坑2号 (第313図)

B-34区で検出された。平面形は長軸1.2m、短軸1mのはば円形を呈し、検出面からの深さ47cmである。近世の遺物が出土した。

出土遺物 (第313図)

遺物の出土数は4点である。内訳は肥前系磁器が3点(柴付碗1、白磁2)、薩摩焼1点(苗代川系)で、そのうち1点を図化することができた。

1804は肥前系白磁の小坏である。体部と高台が一直線につながる桶形の形状を呈する。

#### 土坑3号(第313区)

B-34区で検出された。平面形は長軸1.9m、短軸0.6mの不定形を呈し、検出面からの深さ25cmである。埋土に焼土、炭化物を多く含んでいる。

#### 土坑4号(第313区)

C・D-34区で検出された。平面形は長軸2.1m、短軸1.6mの長方形を呈し、検出面からの深さ44cmである。土坑埋土内には軽石、礫、土器片、釘などがみられた。また床面には、一部炭化物の広がりが見られる。

#### 土坑5号(第313区)

B-33区の調査区域で検出された。平面形は長軸1.7m+ $\alpha$ 、短軸1.5m+ $\alpha$ で、楕円形から円形の一部と思われる。検出面からの深さ44cmである。埋土に焼土、炭化物が多く、軽石も若干混ざり、近世の遺物を出土した。

#### 出土遺物(第313区)

遺物の出土数は11点である。内訳は、肥前系の磁器が6点(染付碗1・白磁小杯1・白磁徳利1・その他3)、薩摩焼が6点(初期の龍門司系の碗1、苗代川系の土瓶蓋1、植木鉢1、陶器胴部3)で、そのうち1点を図化するこができた。

1805は肥前系白磁の小杯で、体部と高台が一直線につながる桶形の形状を呈する。

#### 土坑6号(第314区)

A'-30区で検出された。平面形は径0.9mの円形で、検出面からの深さ0.1mである。床面から壁面にかけて厚さ5cm程度で粘土が貼り付けられている。

#### 土坑7号(第314区)

E-21区で検出された。平面形は長軸1.9m、短軸1.5mの略円形を呈する。検出面からの深さ最大で34cmである。床面から壁面にかけて粘土を貼り付けている。

#### 土坑8号(第314区)

E・F-19・20区で検出された巨大な土坑である。平面形は長軸10m、短軸7.8mの不定形で、検出面からの深さは最大で1m98cmである。埋土中から銭貨4点、陶磁器などが出土している。

#### 出土遺物(第314区)

鉄片1点と銭貨2点を図化した。1806は厚さ約6mmの鉄片である。鍛冶素材として利用されたものと思われる。1807は祥符元宝、1808は永樂通宝である。

#### 土坑墓(第315区～第319区)

土坑墓は11基が確認され28区以西に比較的多くの分布を示し、次に17区から21区にわずかな集中がみられる。ここでは近世以外の時期不明のものも一括して掲載した。

#### 土坑墓1号(第315区)

B-32区で検出された。平面形は、長軸1.6m、短軸0.8mで長方形を呈し、検出面からの深さは0.6mである。

主軸方向は西に4°振れる。土坑内から遺存状況はあまりよくないが、頭位を北にしたと思われる人骨が検出された。また洪武通宝1点と釘が出土しており、木棺による進展葬であったことを示唆している。また図化には至らなかったが近世と思われる遺物小片も出土している。

#### 出土遺物(第315区)

1809は洪武通宝である。

#### 土坑墓2号(第315区)

B-32区で検出された。平面形は、長軸1.6m、短軸0.9mで長方形を呈し、検出面からの深さ53cmである。長軸方向は西に6°振れる。また、1号同様に頭位を北にした人骨と、寛永通宝3枚と釘が出土しており、木棺仰臥屈葬であったと思われる。

#### 出土遺物(第315区)

銭貨と釘を図化した。1810は寛永通宝である。1811は釘である。木棺に使用されていたものと考えられる。木質が残存しており、木棺の板材厚が12mmであったことが推測される資料である。

#### 土坑墓3号(第316区)

C-37区で検出された。平面形は、長軸1.7m、短軸0.8mで検出面からの深さは16cmの楕円形を呈する。長軸方向は西に12°振れる。土坑内から頭位を北にした人骨が検出され、釘も出土しており、木棺屈葬であったことを示唆している。所属時期については不明である。

#### 土坑墓4号(第316区)

D・E-31区で検出された。平面形は、長軸1.3m、短軸0.7mで不定形を呈し、検出面からの深さ8cmである。長軸方向は西に3°振れる。掘り込みは、ほぼ失われており遺構内人骨も原位置を保っていない可能性もあるが、頭位は北方向を示している。所属時期は不明である。

#### 土坑墓5号(第316区)

E-30区で検出された。平面形は、径0.92mの円形を呈し、検出面からの深さ26cmである。土坑内からは人骨、鉄滓などを出土した。遺構平面形と下肢骨の位置関係から、膝を立てた状態で埋葬された座棺と考えられる。

#### 土坑墓6号(第317区)

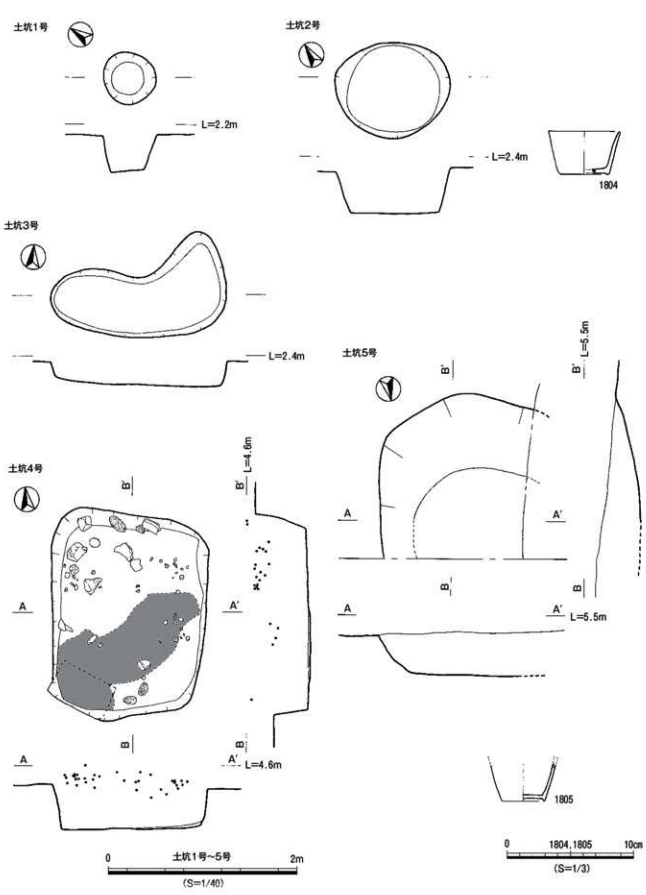
E-30区で検出された。平面形は長軸1.5m、短軸0.9mで楕円形を呈し、検出面からの深さ0.5mである。長軸方向は東に3°振れる。土坑内北寄りに歯が残存し、遺物では洪武通宝と鉄滓が出土した。伸展葬と思われるが、木棺の有無については確認できない。

#### 出土遺物(第317区)

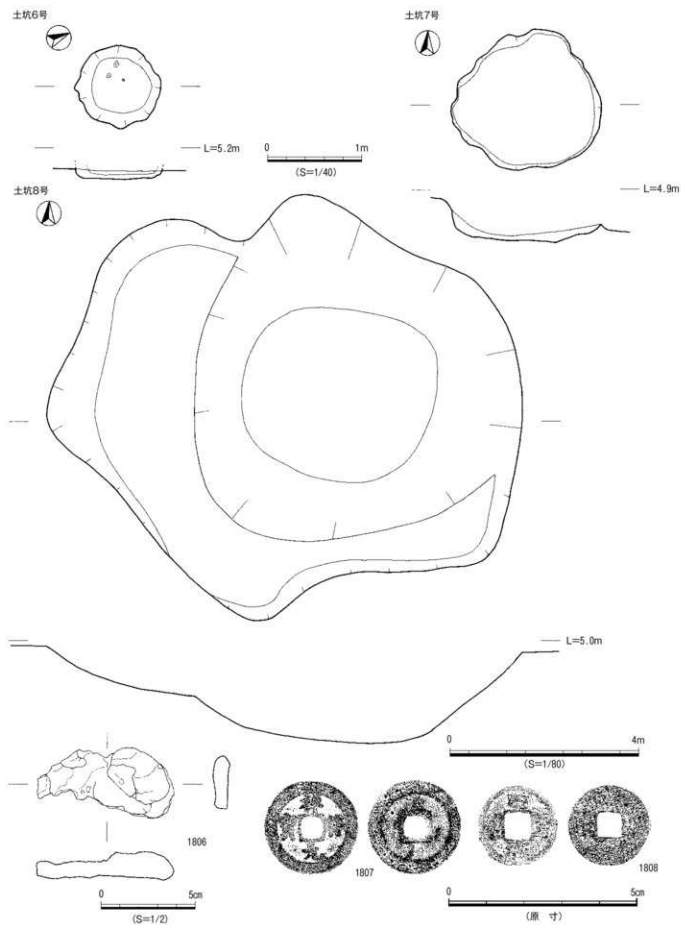
銭貨を図化した。1812～1814は洪武通宝で1813のみ背に治が読める。加治木銭である。

#### 土坑墓7号(第317区)

D-28区で検出された。平面形は長軸1.5m、短軸0.8m+ $\alpha$ で不定形を呈し、検出面からの深さ13cm、掘り込みは、かなりの部分を失っている。主軸は真北を向く。

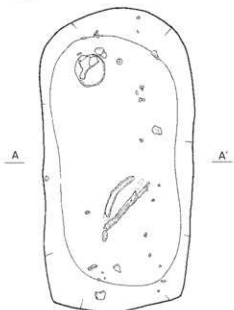


第313图 土坑1~5号·2、5号出土遗物

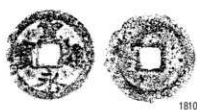


第314图 土坑6~8号·8号出土遗物

土坑墓1号



B' L=5.2m

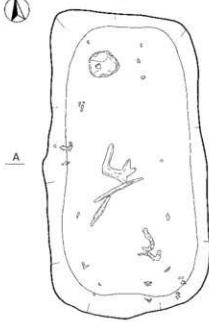


0 5cm (原寸)

土坑墓2号



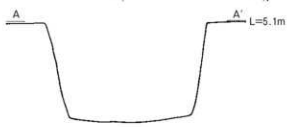
A' L=5.2m



B' L=5.1m



0 2.5cm (原寸)



A' L=5.1m

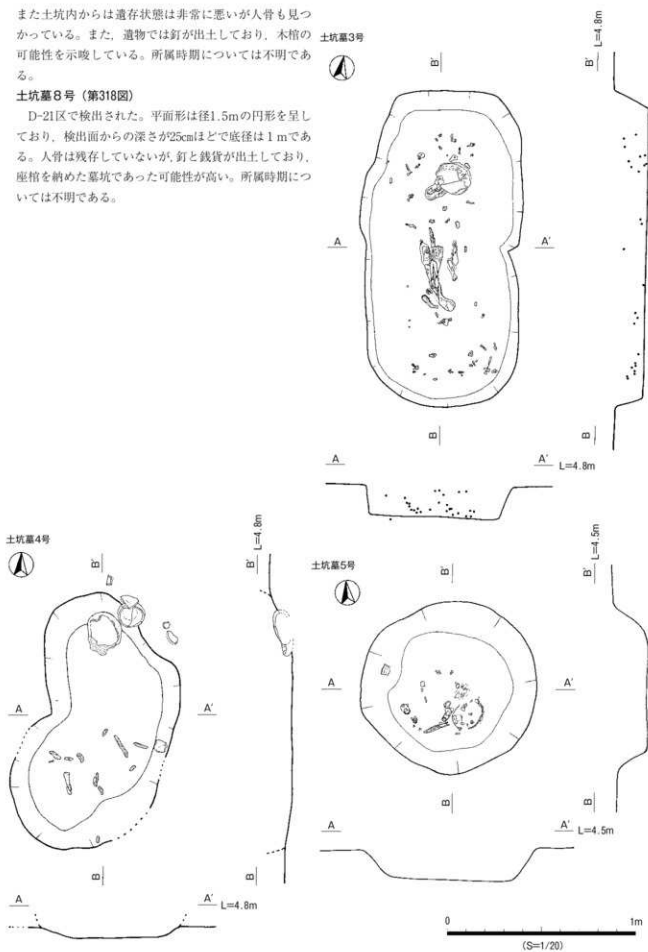
0 1m (S=1/20)

第315图 土坑墓1, 2号·出土遺物

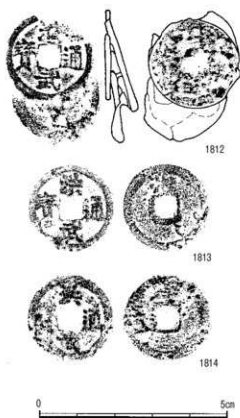
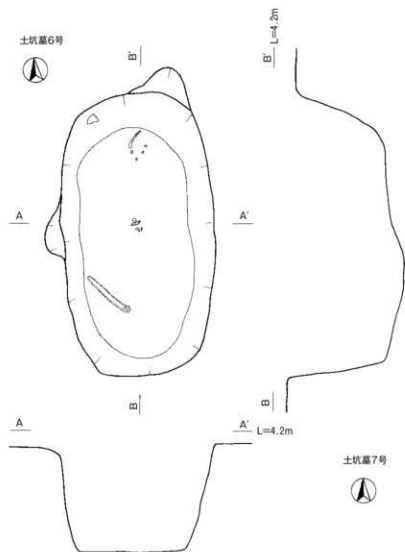
また土坑内からは遺存状態は非常に悪いが人骨も見つかっている。また、遺物では釘が出土しており、木棺の可能性を示唆している。所属時期については不明である。

**土坑墓8号（第318図）**

D-21区で検出された。平面形は径1.5mの円形を呈しており、検出面からの深さが25cmほどで底径は1mである。人骨は残存していないが、釘と銭貨が出土しており、座棺を納めた墓坑であった可能性が高い。所属時期については不明である。



第316図 土坑墓3～5号



#### 土坑墓9号 (第318図)

D-20区で検出された。平面形は長軸1.3m、短軸0.5mの楕円形を呈しており、検出面からの深さは0.2mである。長軸方向は東に80°振れる。ほかの土坑墓と比較すると長軸方向が約90°異なる。土坑底面は平坦にならず2カ所の浅いくぼみをもつ。土坑内から人骨の出土は無かったもの。銭貨が出土した。所属時期は不明である。

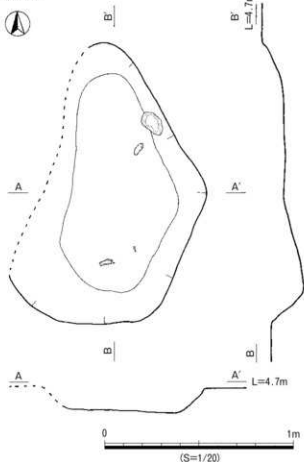
#### 出土遺物 (第318図)

1815は銭貨で、5枚が付着した状態である。錯等で文字判別が出来ず種別不明である。

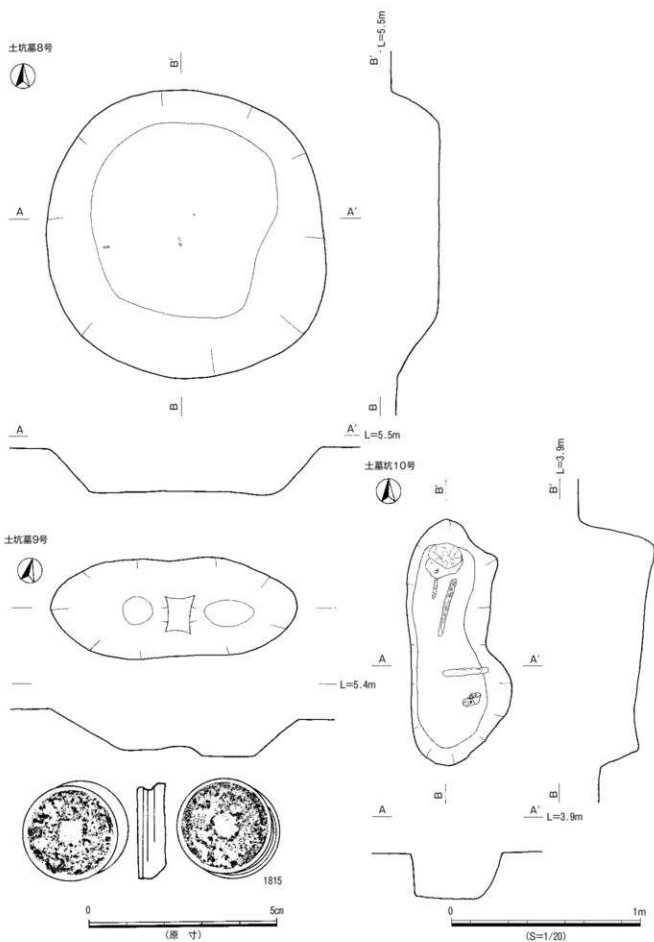
#### 土坑墓10号 (第318図)

F-17区で検出された。平面形は長軸1.3m、短軸0.5mの略楕円形を呈しており、検出面からの深さは26cmである。長軸方向は西に2°振れる。土坑内から人骨が出土し、頭位は北方向であることが確認できる。所属時期は不明である。

#### 土坑墓7号

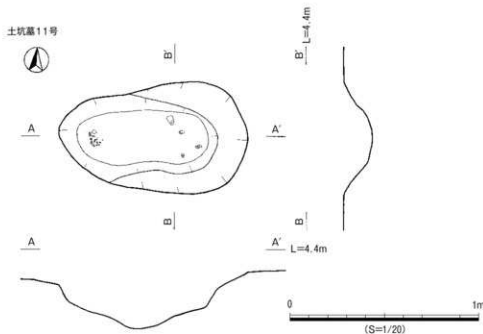


第317図 土坑墓6、7号・6号出土遺物



第318图 土坑墓8~10号·9号出土遗物





第319図 土坑墓11号

#### 土坑墓11号 (第319図)

F-7・8区で検出された。平面形は長軸1m、短軸0.6mの楕円形を呈しており、検出面からの深さは21cmである。長軸方向は東側に85°振れる。人骨の遺存状況がよくないが、西側に歯が集中して出土するため、頭位は西向きと考えられる。所属時期は不明である。

#### 礫集積 (第320図)

用途不明な礫の集積を礫集積として一括した。所属時期の不明なものも一括してある。4基検出されており、調査区西側にやや偏る傾向を示しながら点在する。

#### 礫集積1号 (第320図)

B-36区で検出された。礫は長軸1.6m、短軸0.8m $\times$  $\alpha$ の範囲に特に密集する部分をもたずに散在する。

#### 礫集積2号 (第320図)

C-37区で検出された。礫は長軸1.05m、短軸0.75mの範囲に密集する。やや扁平な礫が多く、礫上面の埋土は黄橙色土で固くしまっている。

#### 礫集積3号 (第320図)

A-30区で検出された。礫は径0.5mの範囲で円形に集中する。

#### 礫集積4号 (第320図)

D-32区で検出された。礫は長軸0.75m、短軸0.45mの範囲に、ややばらけた感じで集まっている。

#### 石列 (第321図)

D-21区で検出された。径20cm前後のやや扁平な礫が1~1.2mの間隔で一直線上に配置されている。礎石建ちの建物の存在も想定されるが、周辺に同様な石列、石列に対して整然と並んだ柱穴などは確認できなかった。

#### ビット (第321図・第322図)

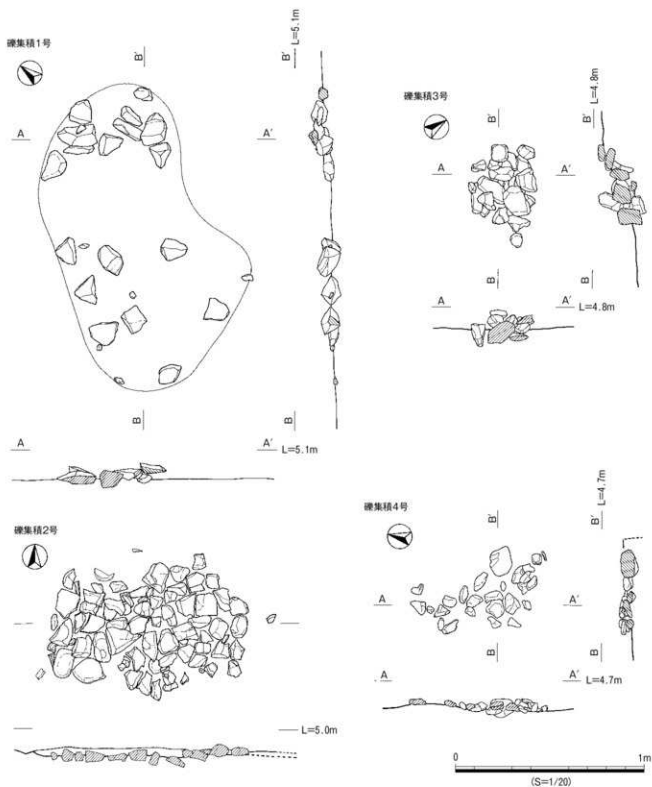
ビットは調査区全体に多数検出された。層位が不安定で、時代判別可能な遺物出土が少なく、時代不明のビットが大半を占めるため個別図掲載はビット内に礫が配置されるもの、遺存状況のよい遺物が出土したものに留める。また、時代不明のものもここに掲載する。

#### ビット1号 (第321図)

B-33区で検出された。検出面から底部までが6cmと非常に浅く、掘り込みのほとんどは失われている。径は現存部で長径1m、短径0.8mである。底面周縁部に3個の軽石が配置される。中心部は固くしまっており、上部から圧力がかかっていたことが想定され、柱穴下部の柱を支える根石と判断した。周辺からは建物に復元できる柱穴の配列は確認できなかった。

#### ビット2号 (第321図)

B-34区で検出された。長軸1.2m、短軸1.1mのほぼ円形の形状を呈しており、検出面から底部までの深さ80cmで底部中央付近に扁平な礫が配置される。径25cm程度の柱痕跡も確認された。周辺からは建物に復元できる柱穴の配列は確認できなかった。



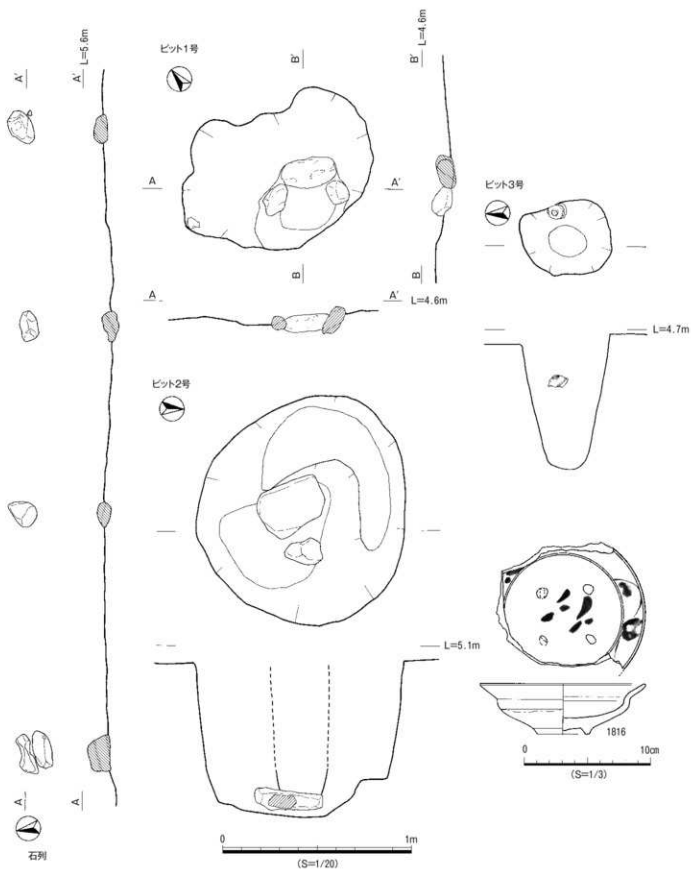
第320図 破集積1～4号

ピット3号 (第321図)

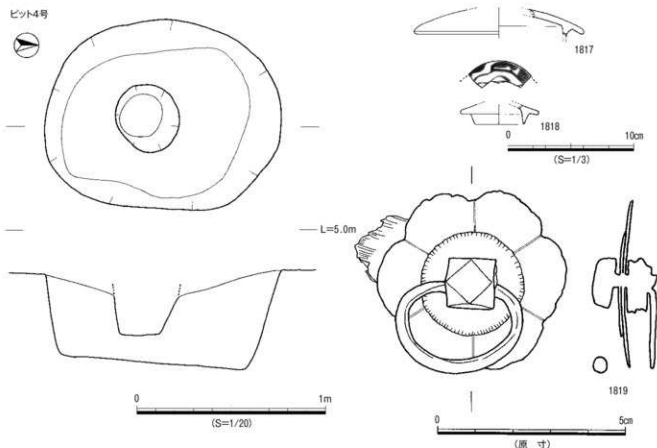
A-36・37区で検出された。平面形は、長軸0.5m、短軸0.4mの略方形を呈しており、検出面から底部までの深さ71cmである。底部から約45cmに伏した状態で肥前陶器が出土した。

出土遺物 (第321図)

肥前陶器の折れ縁皿が1点出土した。1816は内面には鉄絵が描かれ、見込みに胎土目が4か所残る。口縁部の3分の2欠損しているが、地鎮として埋納されたものと思われる。



第321図 石列・ピット1～3号・3号出土遺物



第322図 ビット4号・4, 6号出土遺物

#### ビット4号 (第322図)

B-34区で検出された。平面形は長軸1.25m、短軸1mの略楕円形を呈し、検出面からの深さ0.5mの掘り方である。中央部に径30cm、深さ20cmの柱痕跡が確認でき、柱痕跡下部には粘土質の塊がみられた。

#### 出土遺物 (第322図)

遺物の出土数は4点である。全て薩摩焼(苗代川の土瓶蓋1、胴部2、龍門司系の土瓶蓋1)で、そのうち2点を図化することができた。

1817は苗代川系の土瓶蓋である。つまみ部は欠損している。上面に鉄軸がかかる。1818は龍門司系の土瓶蓋である。上面のみ施軸され、白化粧土の上から褐軸をかける。

#### ビット5号 (第280図)

A-37区で検出された。銭貨が出土したが、小片のため種別は不明である。

#### ビット6号 (第298図・第322図)

D-20区で検出された。1819は調度品の取っ手と思われる鉄製品で、花卉状の金具の裏には木質が残存している。

#### 古道 (第323図)

古道は、調査区内で5条検出された。規模の大きなものではなく、人の往来によって硬化面が形成されたもののみである。古道1～4は自然流路が埋もれた跡に形成されたものである。

#### 古道1 (第323図)

C・D-26区で検出された。南北に7.5mほど延びる。幅約50cmの硬化面である。

#### 古道2 (第323図)

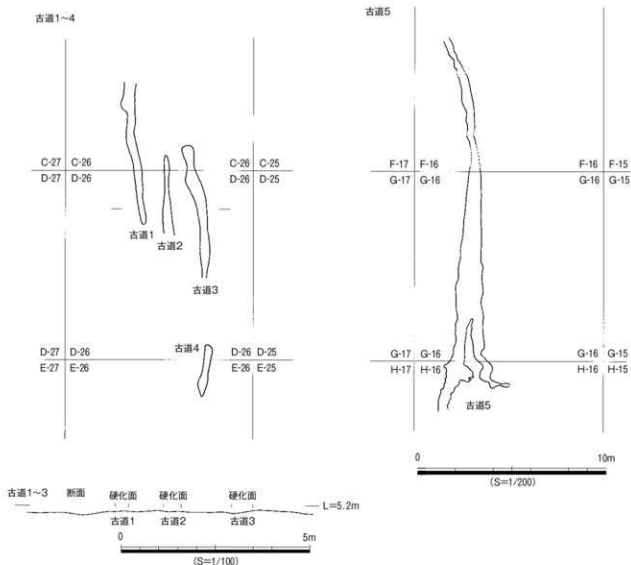
C・D-26区で検出された。南北に5mほど延びる。幅約50cmの硬化面である。

#### 古道3 (第323図)

C・D-26区で検出された。南北に7mほど延びる。幅約50cmの硬化面である。南に位置する古道4と連続する可能性がある。

#### 古道4 (第323図)

D・E-26区で検出された。南北に2.8mほど延びる。幅約50cmの硬化面である。



第323図 古道1～5・古道1～3断面

#### 古道5 (第323図)

F～H-16区で検出された。南北に約20m延びる。幅は広いところで約1.5mあり、北側末端部では40cmほどに狭まる。南側末端付近で2条に枝分かれするが、その延長については確認できなかった。

#### 溝 (第324図～第335図)

溝は調査区内から8条検出された。内5条は34区以西で、残りは18区以東で検出された。調査区中央の20～31区には自然流路が流れており、近世遺物を多く包含していたことから、溝と同様に遺構と遺物について記載を行うこととした。

#### 溝1 (第324図)

C・D-36区で検出された。南西方向に約16m延びる。

幅約90cm、検出面からの深さ約25cmである。遺構埋土中から多くの遺物が出土した。

#### 出土遺物 (第324図・第325図)

遺物は77点出土した。内訳は、薩摩焼(苗代川系の土瓶・徳利・播鉢・甕・壺、それらの胴部や底部、龍門司系の碗や皿)がほとんどで、その他に肥前産の陶磁器が多く出土した。1820～1831は染付である。1820～1828は碗である。1820は外面に一重網目文が描かれる。1821はコンニャク印判による文様が押される。1822・1823は丸文が描かれたものである。1823は見込みにコンニャク印判五弁が押される。1824は広東碗の形状を意識したものと思われるが、高台が低い。1825は広東碗である。1826は湯飲み碗である。1827と1828は端反碗である。1828は在地産の資料と思われる。1829は皿である。見込みに

コンヤク印判五弁花がスタンプされる。また、高台内底にはハリ支えの先端が溶着している。1830は折れ縁の皿もしくは鉢と思われる。1831は油壺である。1832～1855は陶器である。1832は外面腰部まで銅線軸がかかる肥前産の碗である。1833は京焼風陶器の煎じ碗である。1834は龍門司系の碗である。見込みは蛇の目軸割ぎされる。1835は碗としたが鉢の可能性も考えられる資料である。龍門司系のもので、外面は白化粘土に透明釉がかかる。1836は白薩摩の湯飲み碗である。1837は京焼と思われる碗で、見込みに色絵が描かれる。1838～1840は肥前陶器の皿である。1838は見込みに胎土目が残る。1840は見込みに砂目の痕跡が残る。1841は龍門司系の酒器で「からから」と称されるものである。外面肩部には飛び頭が施される。1842・1843は苗代川系の土瓶である。1842の注口部分は欠損している。1843は一穴である。1844は龍門司系の土瓶の注口である。S字状を呈する溜め口ではなく、直線的に伸びる鉄砲口である。茶止め穴は一穴である。1845は苗代川系の資料で、本注としたが、壺の可能性も考えられる。1846・1847は鉢である。1847は口縁端部が欠損している。1848～1850は播鉢である。1848の振り目は口縁下位に1cm程度の余白を残して入れられ、その余白部分にはヘラ状工具による横筋状の調整痕が入る。1849・1850は底部である。1851・1852は蓋である。1851は口唇部に貝目が残る。1852は口縁部が平坦につくられるもので、外面口縁下位には2条の浅い沈線が巡る。1853～1855は壺である。1853は口縁端部を外側に折り返して三角形状につくる。口唇部は丸みを帯び、貝目が残る。1854・1855も口縁端部は外側に折り返してつくるものであるが、1854はT字状に仕上げ、1855は三角形状に仕上げる。

## 溝2 (第326図)

C-35区で検出された。南北方向に約4.5m延び、さらに南へ延びると思われるが、確認できなかった。幅は約2.1m、検出面からの深さ約40cmである。

## 溝3 (第326図)

B-35区で検出された。南北方向に約4m延びる。幅約50cm、検出面からの深さ5cm弱のごく浅い溝である。断面形は皿状である。

## 出土遺物 (第326図)

遺物は93点出土した。内訳は、薩摩焼(苗代川系の土瓶・片口・鉢・播鉢・壺・釜やそれらの胴部や底部、龍門司系の碗等)がそのほとんどを占め、その他に肥前陶器が少数出土した。また、鉄器1、銭貨1枚を出土した。1856は肥前陶器の碗である。内面は透明釉、外面は腰部まで銅線軸がかかる。1857は龍門司系の碗である。胎土は緻密で、黒褐色の鉄軸がかかる。山元産産の可能性も考えられる。1858は本注としたが、壺の可能性も考えられる。口唇部はやや凹んでおり、蓋がつくもと思

われる。1859は鎌と思われる鉄製品で、先端部が欠いている。1860は寛永通宝である。

## 溝4 (第326図)

A・B-34・35区で検出された。東西方向に約6m延びる。幅約1.5m、検出面からの深さ約15cmで底面は凹凸がみられる。末端で浅くなり自然に消滅してしまう。

## 出土遺物 (第326図)

苗代川系の播鉢が1点出土した。1861の口縁端部は外側から内側に折り返してつくるもので、口唇部の一部には貝目が残る。内面は上位に余白を残さずに振り目が入られ、その下には横方向のヘラ状工具による調整痕が観察される。

## 溝5 (第326図)

B-D-35区で検出された。南北方向に約17m延びる。幅約4～6m、検出面からの深さ約1.3mで、断面形が緩いU字状を呈し、一部に段を有する。

## 溝6 (第327図)

D-F-18区で検出された。南北方向に約22m延びる。幅約3m、検出面からの深さ約15cmで、断面形は浅い皿状を呈する。末端で浅くなり自然に消滅してしまう。

## 出土遺物 (第327図)

出土遺物は、薩摩焼5点と、輪の羽口2点出土した。いずれも小片で、1点を図化することができた。また鉄器が2点出土した。1862は薩摩焼苗代川系の資料で、壺に被せる蓋である。口唇部の外側は溝状につくられ、貝目が残る。17世紀前半の堂平窯の製品と考えられる。1863は先端が二又状に分かれたかき爪状の鉄器で、取り付け部分と思われるところで110°折れ曲がる。最先端部は欠損し形状は不明である。1864は棒状に延びる扁平な鉄器である。円形部分には径5mm程度の穿孔がみられる。

## 溝7 (第327図)

A-G-7～16区で検出された。東西、南北方向の複数の溝が切り合い、長大な溝を形成している可能性もあるが、切り合い関係がつかめなかったため、一連の溝として取り扱った。中世の遺物も確認でき、溝が埋もれる過程で近世でも機能していた可能性がある。A・B-12区で4条に分岐している。総延長170mあり、幅は2～5m、検出面からの深さ約65cmである。

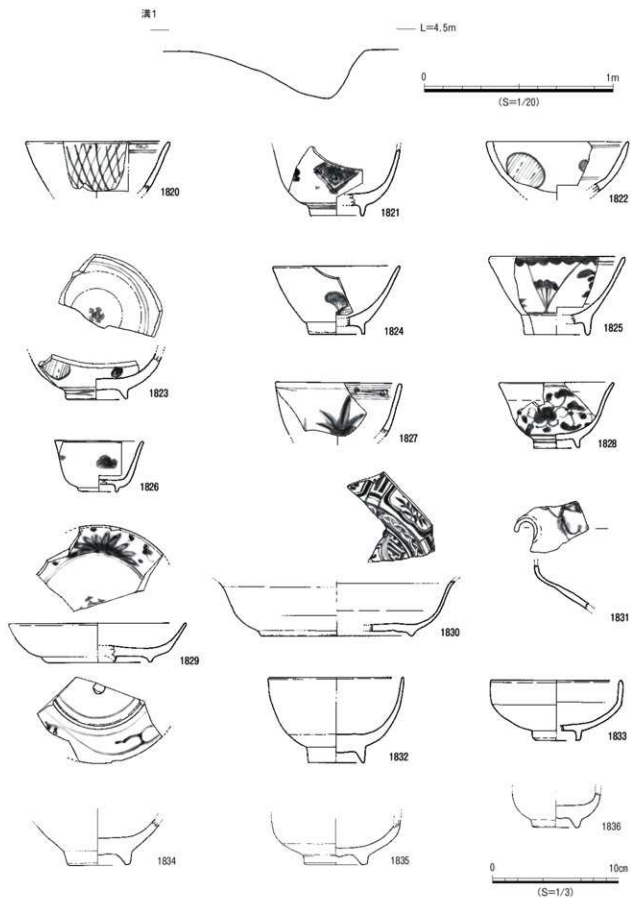
## 出土遺物 (第327図)

出土遺物は2点で、龍門司系と思われる香炉と白土による刷毛目がかかる肥前陶器が出土したが、後者は小片で図化できなかった。

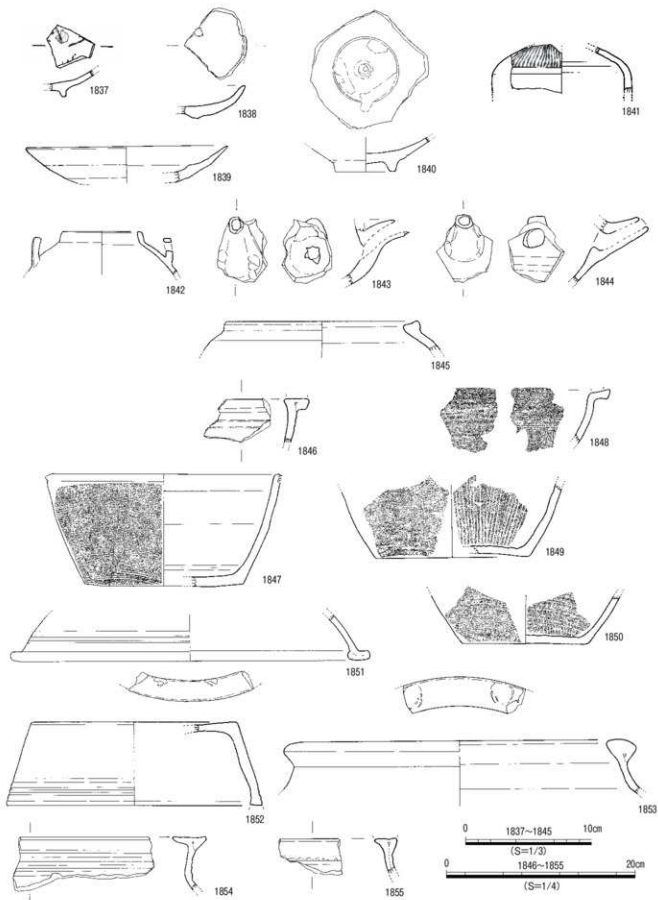
1865は香炉である。やや黄色みがかった灰白色の胎土に、黄釉が外面のみかかる。壺付が幅広の蛇の目高台を呈する。

## 溝8 (第327図)

E-G-7・8区で検出された。南西方向に約30m延びる。

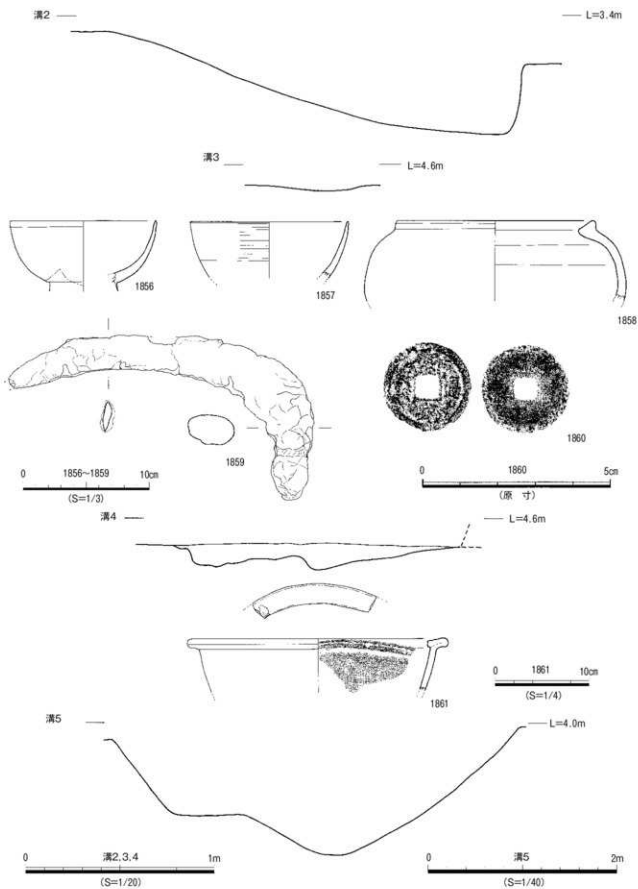


第324図 溝1・出土遺物



第325图 清 1 出土遗物

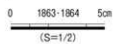
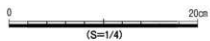
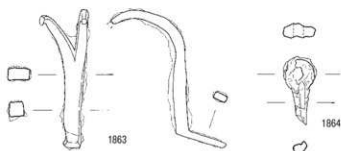
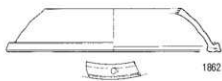




第326図 溝2~5・溝3, 4出土遺物

溝6

L=4.8m



溝7-1

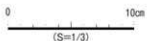
L=4.7m

溝7-2

L=4.4m

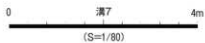
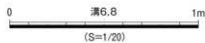
溝7-3

L=4.6m

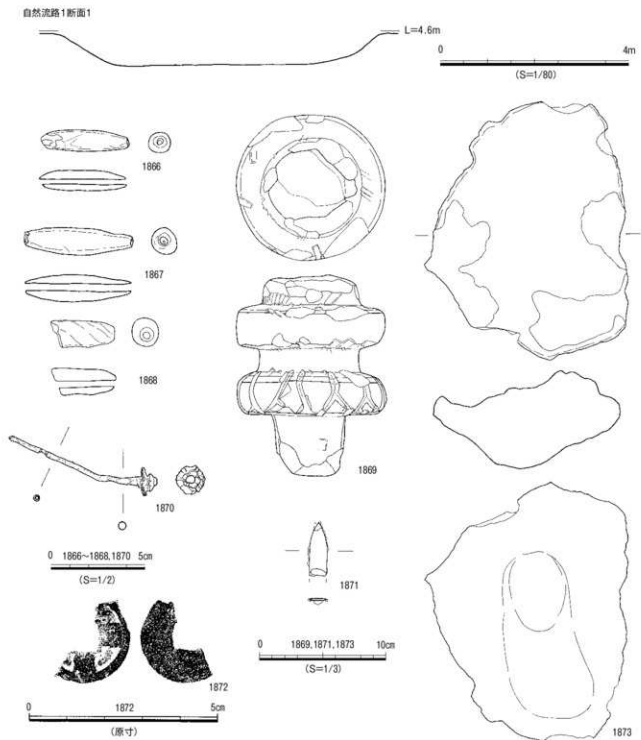


溝8

L=4.3m



第327図 溝6～8・溝6, 7出土遺物



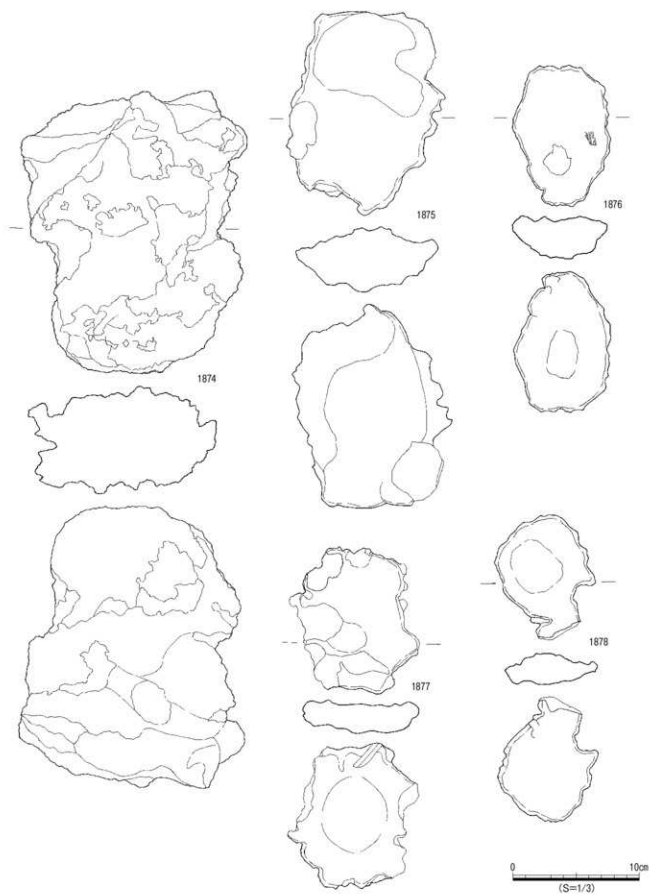
第328図 自然流路1断面1・出土遺物

幅約1.6m。検出面からの深さ約40cmで、断面形は緩いU字状を呈する。溝7の末端とはほぼ平行する。

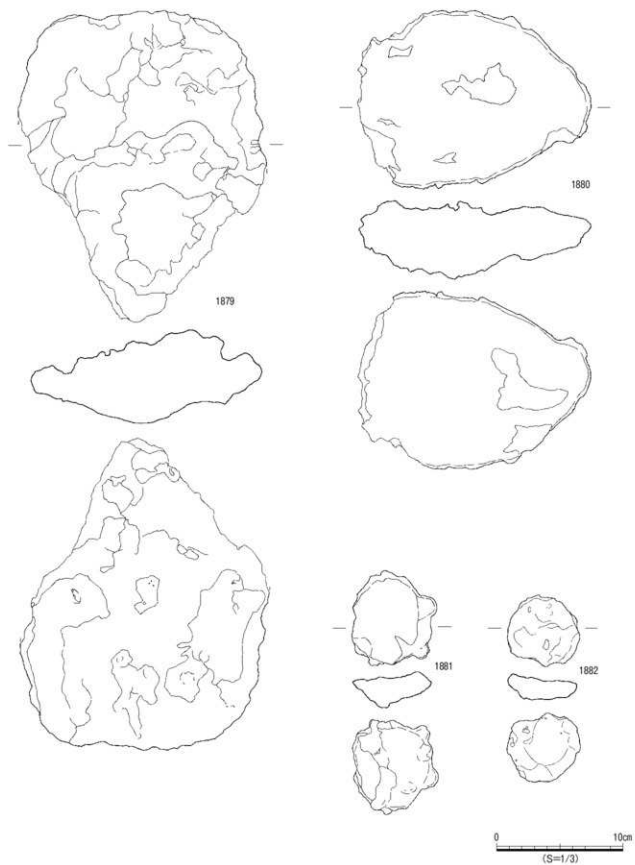
自然流路1（第328図）

A~F-20~31区で検出された。複数の流路が合流し、

最終的に21・22区の南方向への流れ、29・30区の南への流れに集約される自然流路である。B~F-29・30区の流路から大量の鉄滓、輪の羽口片が出土した。



第329図 自然流路1断面1付近出土遺物(1)



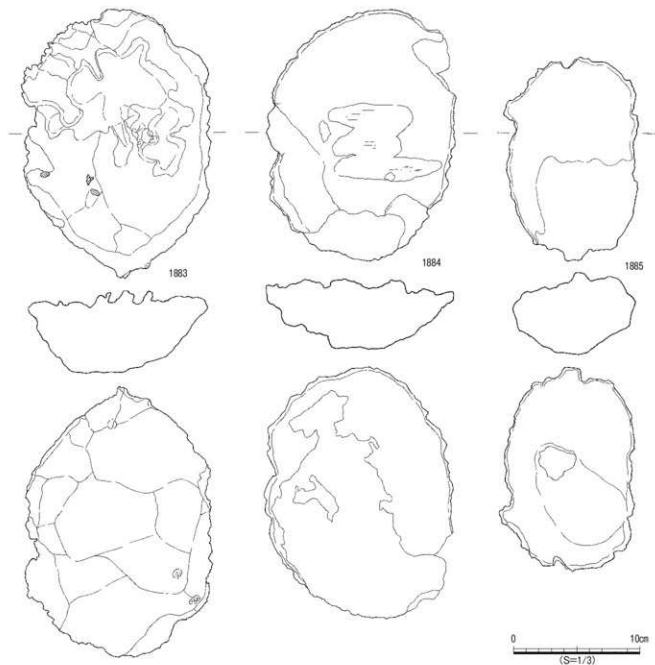
第330図 自然流路1断面1付近出土遺物(2)

出土遺物 (第328図～第335図)

1866～1868は土鍾である。1866・1867は完形のもので、1868は半分ほど残存するものである。いずれも細身の形状を呈することから、中世以降のものと考えられるものである。

1869は石塔の一部である。太い棒状の石材を二輪の環状部分を残して彫り込むものである。上部3分の2程度は断面円形であるが、下部(基部)のみは断面方形の形状を呈するものである。一段目の環状部分は無文であるが、二段目の環状部分には連弁が施されるものである。

形状から「相輪」と呼称される石塔の一部と考えられるもので、宝篋印塔や宝塔、層塔などの上部に乗るものの可能性がある。また、時期はおおむね中世後半から近世初頭におさまるものと考えられる(狭川真一氏【元興寺文化財研究所】の御教示による)。1870・1871は金属製品である。1870は銅製品で、棒状部分の末端部に花弁状の装飾を施すものである。「かんざし」の可能性が考えられる。日本列島の多くで見られるかんざしは装飾部分を棒状部分で突き抜けるものが多いのに対して、本資料は装飾部分を突き抜けてはいない。



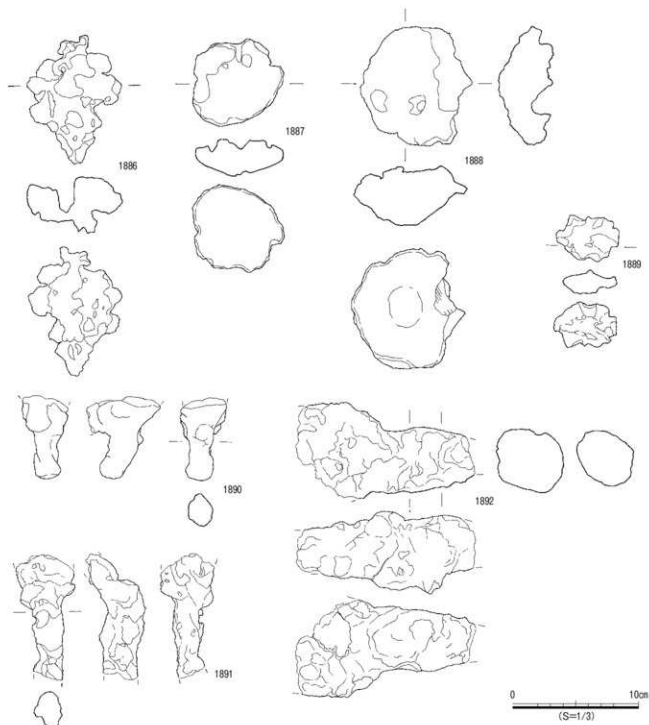
第331図 自然流路1断面1付近出土遺物(3)

これは琉球において多くみられるもの(沖縄では「ジーファー」と呼称)に類似するもので、奄美大島のノロ宅に伝承するかんざしにも類似のものが存在する(金属製品に関しては久保智康氏【京都国立博物館】の教示による部分が大さい)。1871は先端部が鋭く尖り、両側に刃部を持つものである。剣あるいはヤリガンナの可能性があります考えられる。

1872は銭貨である。斜めに半分近く欠損しており、銭

文も右側と下側の二文字が残存しているが、明瞭ではない。かろうじて「○宋通○」か「○鳳通○」と読める。前者であれば、「皇宋通寶」で初鑄は北宋の1038年で、後者であれば「龍鳳通寶」で初鑄は宋の1355年である。後者であれば非常に稀少なものであるが、字体が篆書であることから前者の可能性が高いと考えられる。

1873~1895は鉄斧である。1873~1889は「鍛錬鍛冶」



第332図 自然流路1断面1付近出土遺物(4)

と呼称される工程で生じた鉄滓である。1873～1875は、「平面長方形椀型滓」と呼称されるもので、刀剣など鍛打する際に生じた鉄滓の可能性ある。1876～1878・1880～1889は、「椀形鍛冶滓」である。この中で、形状・表面の様子などの特徴から1877・1878・1880・1881は「楕円状椀形滓」、1882は「小型椀形滓」、1886～1889は「ガラス質椀形滓」に分類される。1879は「炉底塊」である。文字どおり鍛冶炉の底部に生じた鍛冶滓で、鍛冶炉の形状が窺われるものである。兩九方形状を呈するもので、送風痕（輪の羽口から吹く風によってできた「めくれ」）が観察される。1890～1896は、「精錬鍛冶」と呼称される工程で生じた鉄滓である。なお、「精錬鍛冶」は「鍛錬鍛冶」の前の工程とされている。これらの遺物はいずれも「流出孔滓」である。鍛冶炉の炉内にたまった「炉内滓」を抜き出す排出孔にたまった鉄滓で、これらの遺物から排出孔のようす（大きさ・太さ・傾き）などが窺われる。1896～1901は輪の羽口である。他にも数十点出土しているが、良好なもののみを選別した。いずれも一端がガラス化するもので、この部分を鍛冶炉に直接向けて送風を行っていたであろうことが推察される。特に1897は高温によって溶解した部分がガラス化して流れる様子が明瞭に観察されるもので、ほぼ45°の角度で「輪」に固定し

てあったことが推測できるものである。

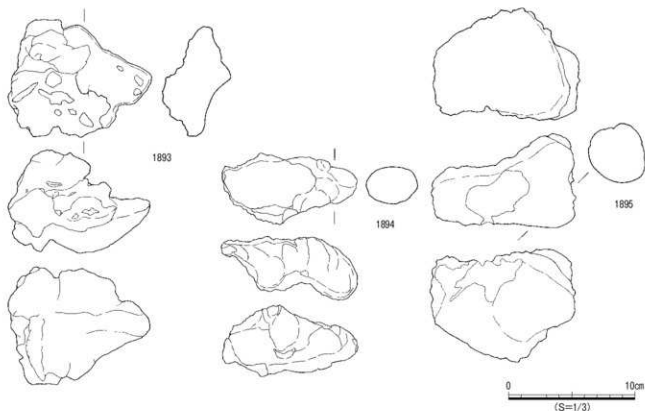
1902・1903は肥前陶器の碗である。1902は内外面に白土による刷毛目が施される。1903は見込みに蛇の目軸割ぎが施される。1904は肥前磁器の皿であるが、白濁した軸葉がかり、半陶半磁状の胎土を呈する資料である。

#### 自然流路2（第335図）

C～E-26区で検出された。南北方向へ約21.5m延びる。幅約7.5mで北側は2.5mと狭くなり、検出面からの深さ約30cmである。遺構埋土上位に硬化面が形成され、道として利用されていたと推測される。

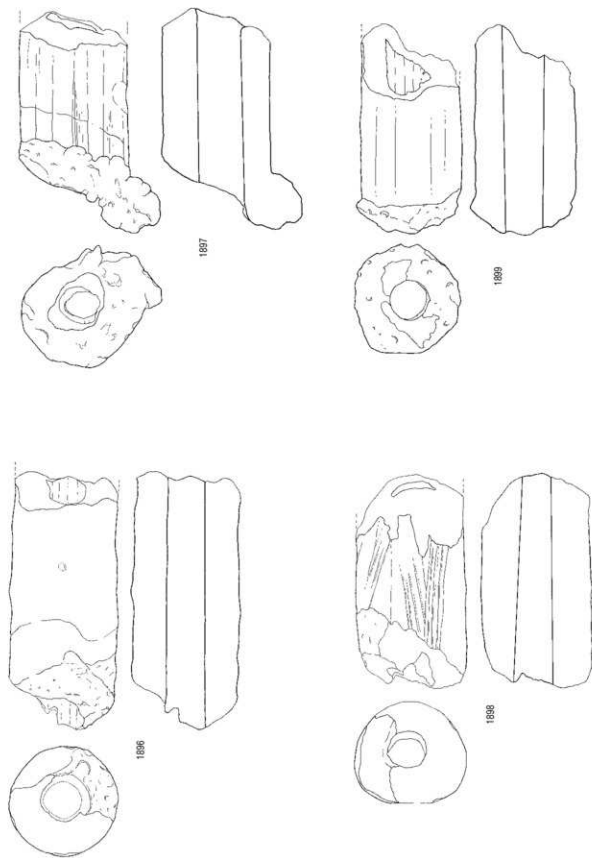
#### 出土遺物（第335図）

1905は頁岩製の砥石である。表面中央に縦方向の溝状の研ぎ跡がみられる。溝幅約1.2cmである。1906はやや小形の輪の羽口である。

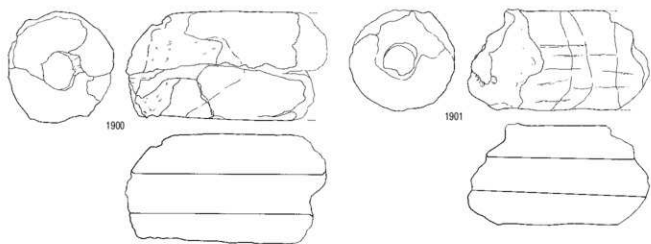


第333図 自然流路1断面1付近出土遺物（5）





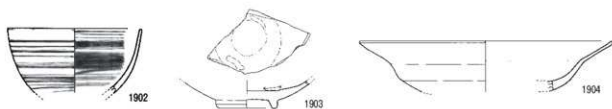
第334図 自然流路 1 断面 1 付近出土遺物 (G)



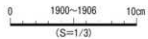
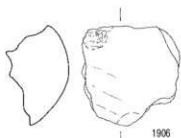
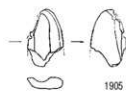
自然流路1断面2



自然流路1断面3



自然流路2断面



第335图 自然流路1断面2，断面3，自然流路2断面·自然流路1断面1，断面3付近，自然流路2出土遺物

#### (4) 遺物

##### 磁器

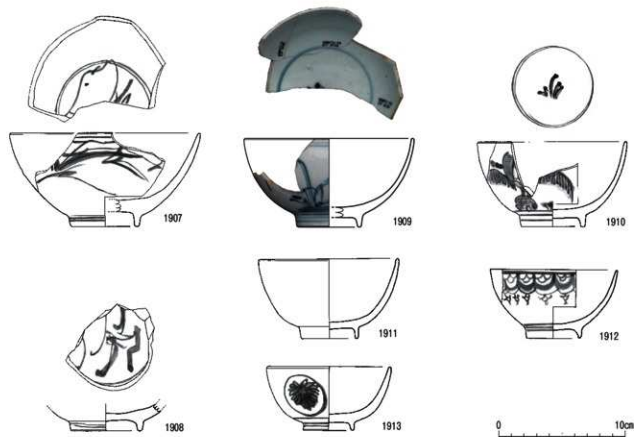
##### 碗 (第336~339図)

1907~1924は肥前系の丸碗である。1911は白磁で、その他は全て染付である。1907・1908は見込みに、波の間から鯉が飛びはね上には雲が描かれる荒磁文が描かれるが、かなり簡略化されている。輸出向けに生産された碗と考えられている資料である。器形はやや大振りであり、碗の範疇に入れたが、鉢ともとらえられる資料である。1907は外面に竜の文様が描かれる。1908は底部のみの資料である。1909・1910は見込みに二重圈線と草文が描かれ、1909は外面に草花文、1910はソテツの文様が描かれる。2点とも器壁は薄手で、上手の作りである。器形はやや大振りである。1911は器壁が薄手の白磁である。高台は細く尖る。1912は外面口縁下位に輪宝繁文が描かれる。1913はコンニャク印判により家紋がスタンプされる。1914~1918は見込みにコンニャク印判五弁花がスタンプされる。1915・1918は五弁花が矮小化している。1914は外面青磁釉の資料で、高台内底には「渦福」が描かれる。内面口縁下位は四方博文が描かれる。1915の見込みは蛇の目軸割りが施され、重ね焼きを行った際の高台畳付の痕跡が輪状に残る。外面には、コンニャク印判

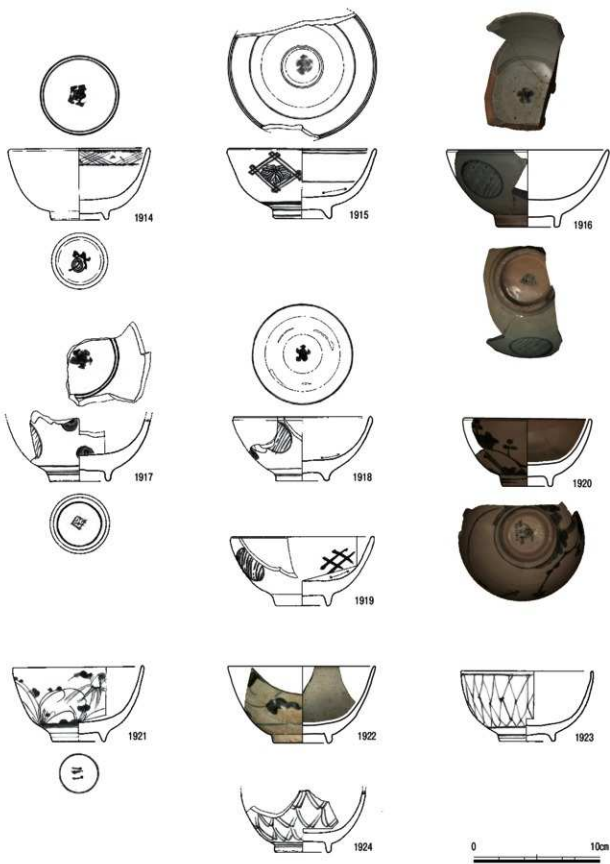
によりスタンプされた家紋風の文様が入る。1916~1919は、外面に丸文が描かれる資料である。1916~1918は胎土が灰色を呈し、1916の高台内底には、一重方形枠の中に変形文字が記された裏銘がみられる。1917には、さらに簡略された変形文字の裏銘が記される。1918は見込みに蛇の目軸割りが施され、重ね焼きを行った際の高台畳付の痕跡が残る。1919は外面に丸文と格子文が描かれ、見込みには蛇の目軸割りが施される。1920は胎土が灰褐色を呈する。外面には梅花文が描かれる。1921は外面に草花文が描かれる。裏銘が記されるが、判読できない。1922は焼成不良のためか、呉須の発色が悪く透明釉も焼けていない。肥前系の資料としたが、中国産の可能性も残るものである。1923は胎土が灰色を呈し、一重網目文が描かれる。1924は二重網目文が描かれる。

1925~1929は厚手で、深さの浅い丸碗である。すべて肥前系の資料である。見込みには蛇の目軸割りが施され、特に1925~1928のものは幅広く軸割ぎされる。1925は、外面に線描きの丸文が描かれる。1926は梅花文が描かれる。1927は胎土が灰色を呈し、外面には折れ松葉文が描かれる。1928はコンニャク印判による菊文がスタンプされる。1929は外面に梅花文が描かれる。

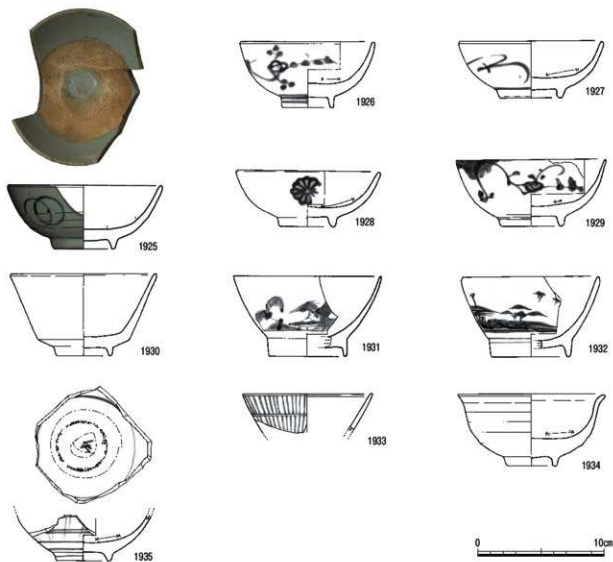
1930は、朝顔形の白磁碗である。体部は腰部で内側に



第336図 磁器 1 碗



第337图 磁器2 碗



第338図 磁器3 碗

に屈曲し、口縁部にかけて逆ハの字状に開く。

1931・1932は広東形の碗であるが、一般的な広東碗に比べ高台が低く厚手である。どちらも外面には山水文が描かれる。

1933は小広東碗である。外面には線状に簡略化された梵字文が描かれる。器形はやや小振りである。1930～1933は在地産の可能性も考えられる資料である。

1934・1935は端反形の碗である。2点とも在地産と考えられる資料である。1934は白磁である。器壁が厚手で、外面にはロクロ引きの稜線が明瞭に残る。見込みには幅広の蛇の目軸割ぎが入る。1935は端反碗の底部である。外面と見込み中央には格子文が描かれ、見込みには蛇の目軸割ぎと重ね焼きの際の高台痕が残る。

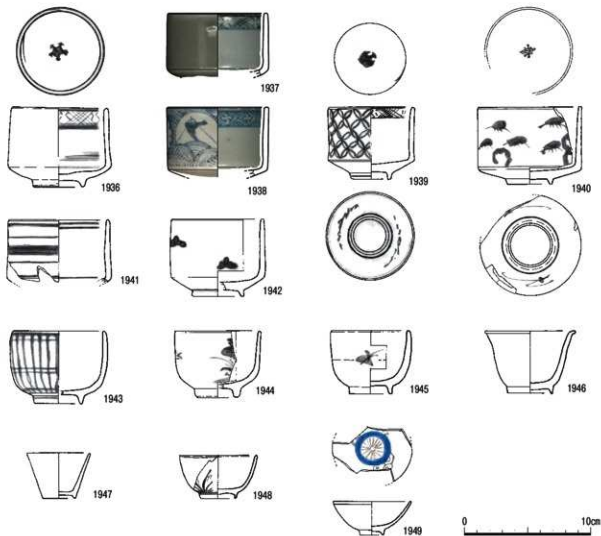
1936～1942は肥前系の筒形を呈する碗である。

1936・1937は外面が青磁釉で、内面口縁下位に四方榫

文が描かれる。1937は底部が欠損しているが、2点とも見込みにはコンニャク印判五弁花がスタンプされる。1938は焼成不良のためか、呉須の発色も悪く、透明釉に光沢がない。外面には菊文と帆かけ舟文、内面口縁下位には四方榫文が描かれる。1939は、外面に二重網目文が描かれるもので、腰部には折れ松葉文が2か所描かれる。見込みには矮小化したコンニャク印判五弁花がスタンプされる。1940は外面に雪持笹文、腰部に略された折れ松葉文が描かれる資料である。見込みに虫文が描かれる。肥前系としたが、在地産の可能性も考えられる資料である。

1941は外面に横溝文が描かれる。1942は胎土が灰白色を呈するもので、呉須の発色も悪く、灰色みを帯びる。

1943～1945は腰部が丸みを帯びる筒丸形の碗である。1943は外面に格子文が描かれる。透明釉が青みがかって



第339図 磁器 4 碗・小坏

おり、在地産の可能性が考えられる資料である。1944・1945は外面に草花と蝶が描かれる。1945はやや小振りである。

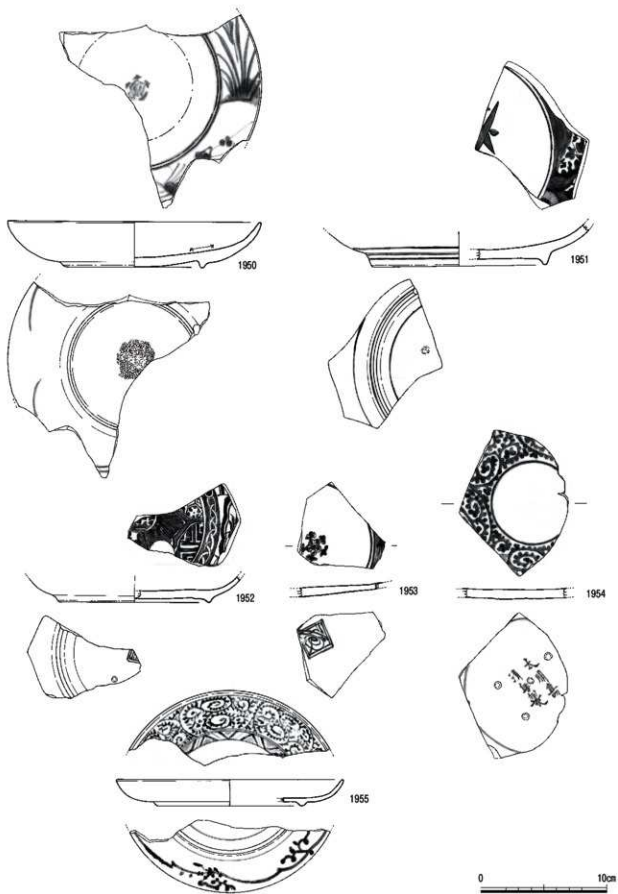
#### 小坏 (第339図)

1946～1949は小坏である。1946・1947は白磁である。1946は端反形を呈する。内面と壘付に焼成時に附着したと思われる砂粒が観察される。小坏として報告するが、器形がやや大振りであるため、他の器種の可能性も考えられる。1947は、高台から口縁部までが直線的につながる桶形を呈する。肥前系としたが、在地産の可能性も考えられる資料である。1948は外面に草花文が描かれる。1949は清朝磁器である。見込みには菊文が描かれ、軸割ぎ部分には青色の顔料が塗布される。

#### 皿 (第340～343図)

1950～1974は染付の皿である。1950～1955は肥前産の大皿である。1950は見込みにコンニャク印判五弁花がスタンプされる。蛇の目軸割ぎされた部分には、重ね焼きの際の高台痕が観察される。高台内底には、砂状の目跡が熔着する。1951は、高台内底にハリ支えの目跡が残る。1952は高台内底に「角福」と思われる銘とハリ支えの目跡が観察される。1953・1954は底面部のみの資料である。1953は見込み中央に手描き五弁花、高台内底に「角福」が描かれる。1954は内面に蛸唐草文が描かれる。高台内底には「大明嘉靖年製」の文字が記され、ハリ支えの目跡が残る。1955は内面に蛸唐草文、裏文様に唐草文が描かれるが、軸は透明度が低く、呉須は黒みを帯びた発色で、かすれている。

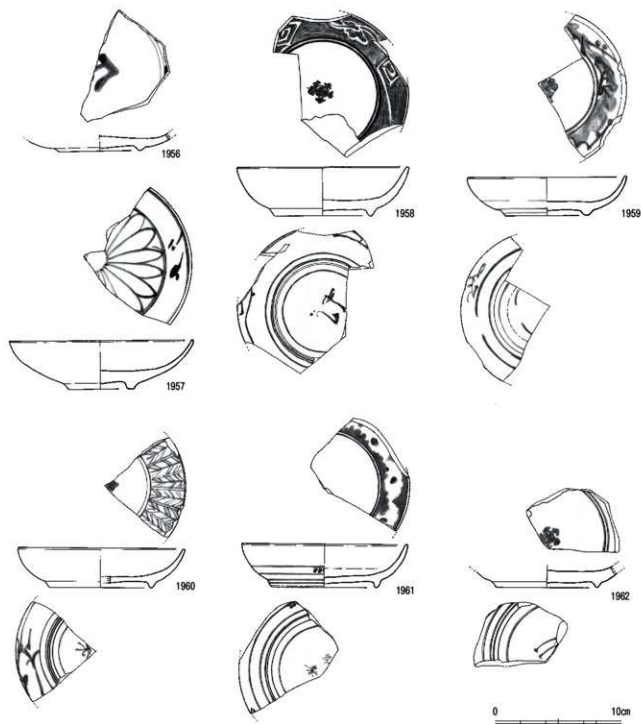
1956～1961は中皿である。1956・1957は初期伊万里の



第340图 磁器5 皿

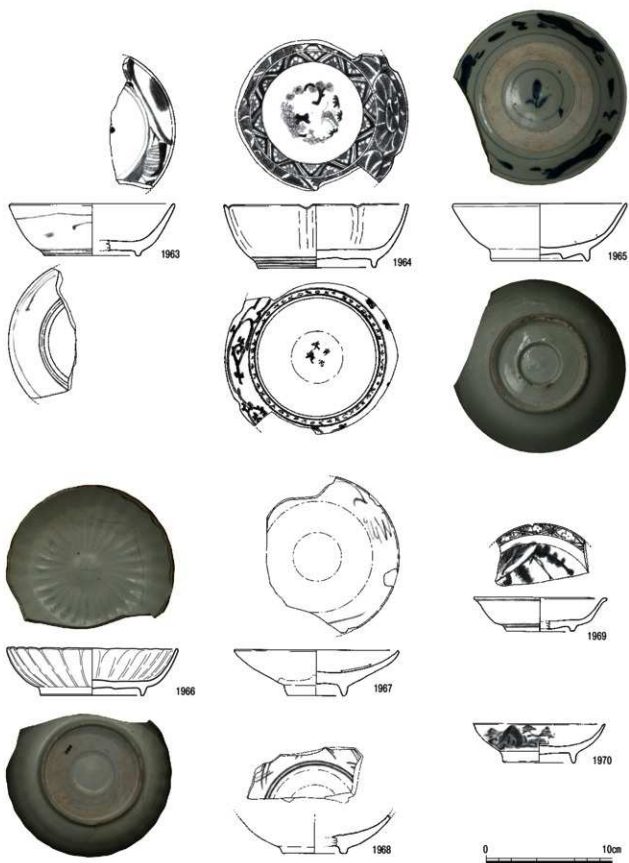
皿である。1956は底部のみの資料で、見込み部分に描かれた「日」の文字の一部が描かれる。海外輸出向けにつくられた日の字鳳凰文の皿と思われる。畳付には白色の砂粒が附着している。1957は、見込み全体に菊花文が描かれる資料である。口径に対して高台径が小さく、高台は断面四角形状を呈する。1958～1962は見込みにコンニャク印判五弁花がスタンプされるものである。

1958の内面は墨弾きの技法により文様が描かれる。高台内底に裏銘が記されているが、判読不能である。1959は胎土が灰色みを帯び、呉須の発色も悪い。1960は内面に矢羽根文、裏文様に簡略化された唐草文が描かれる。呉須の発色が悪く、灰色みを帯びる。高台内底の銘は残存部が少ないため判読できない。1961は高台内底に「年製」の文字がみられる。内面には雪之輪文が描かれる。



第341図 磁器6 皿





第342图 磁器7 皿

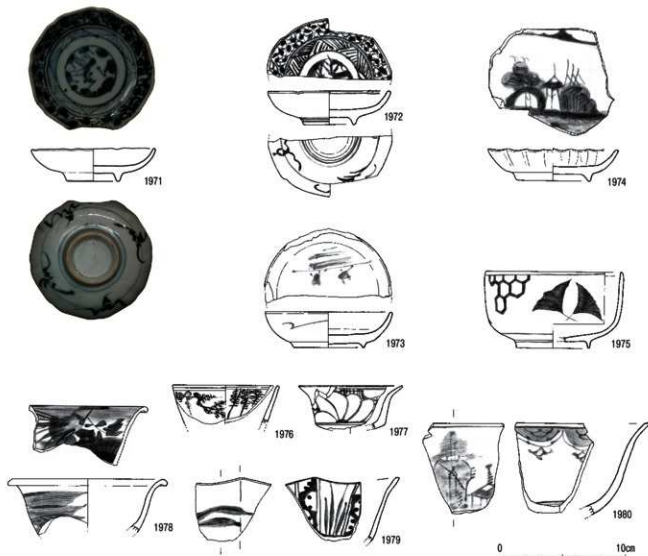
1962は胎土が灰色を呈するもので、呉須も鉄色に発色している。高台内底の銘は残存部が少ないため判読できない。

1963～1966は中形の深皿である。1963は、焼成不良のためか透明釉が白濁し、呉須の発色も悪い。1964は輪花皿である。高台は蛇の目凹型高台を呈し、軸は中央の凹んだ部分まで施軸される。裏銘は、「□化年製」（□は判読不能）と記されている。見込みは松竹梅文、内面は墨弾きと濃により文様が描かれる。裏文様は一筆書きではなく、縁取りをした唐草文が描かれる。1965は高台が蛇の目凹型高台を呈し、見込みには蛇の目軸剥ぎが施される。1966は型作りの菊花皿である。白磁であるが、口唇部には口銘が施される。高台は蛇の目凹型高台である。1967・1968は見込みに幅広の蛇の目軸剥ぎが施され、重ね焼きの痕跡が残る。在地産の可能性が考えられる。

1969～1974は小皿である。1969は端反の皿で、口縁部に四方禪文、見込みに山水文が描かれる。1970は釉薬の胎土が灰白色を呈し、呉須の発色も悪い。外面には山水文が描かれる。1971・1972は輪花皿で、内面に細かい唐草文と松竹梅文が、裏文様に略された唐草文が描かれる。1972は顔料にコバルトが使用されている。1973・1974は内面に山水文が描かれたもので、1974は輪花皿である。

#### 鉢（第343図）

1975～1980は染付の鉢である。1975は腰部が張る形状のものである。内面口縁下位は軸剥ぎされており、蓋付の鉢と考えられる。1976・1977は小形のもので、鉢として分類したが、他の器種の可能性も考えられる。1978は、口縁部が大きく外反する。1979は口縁部が六角もしくは八角形を呈する鉢である。1980は大振りの鉢で、口縁部



第343図 磁器 8 皿・鉢

は緩やかに外反する。外面には山水文が描かれる。

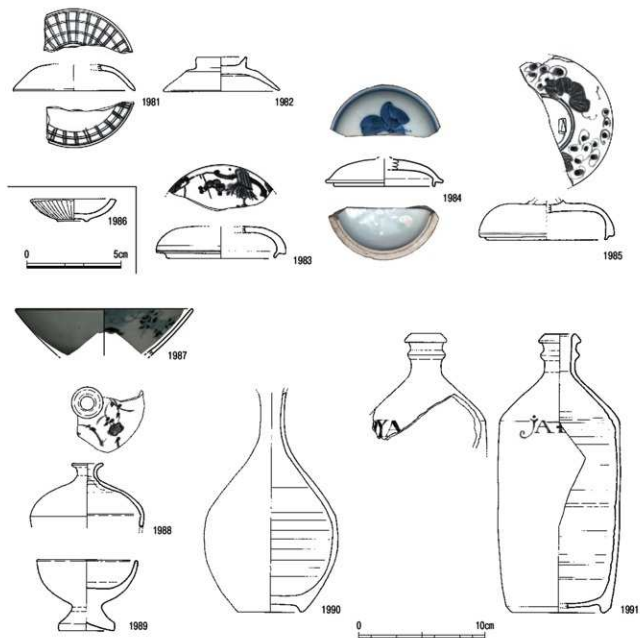
#### 蓋 (第344図)

1981・1982は飯碗の蓋である。1981は端反碗の蓋で、外面と内面口縁下位には染付で格子文が描かれる。1982は朝顔形碗の蓋で、白磁である。1983～1985は蓋物の蓋である。3点ともつまみ部分が欠損しているが、1985はアーチ状のつまみが付く。

#### その他 (第344図)

1986は磁製の紅皿である。在地産の資料である。外面は型作りにより菊花状につくられ、内面のみ透明釉がか

かる。1987はうがい碗と思われる。体部は逆ハの字状で直線的に開く。内面口縁下位に文様が描かれる。1988は油壺である。外面には梅花文が描かれる。1989は白磁の仏飯器である。在地産の資料と思われる。1990は白磁の徳利であるが、産地・年代ともに不明の資料である。近世磁器ではない可能性も残る。底部は碁筒底を呈し、覺付部分は軸割ぎされる。透明釉が緑がかり青磁のようにもみえる資料である。1991は波佐見燒のコンブラ瓶である。肩部は張らず、なで肩である。一部欠損しているが、外面肩部には呉須で「JAPANSOHOZOYA」と書かれるものと思われる。



第344図 磁器9 蓋・その他

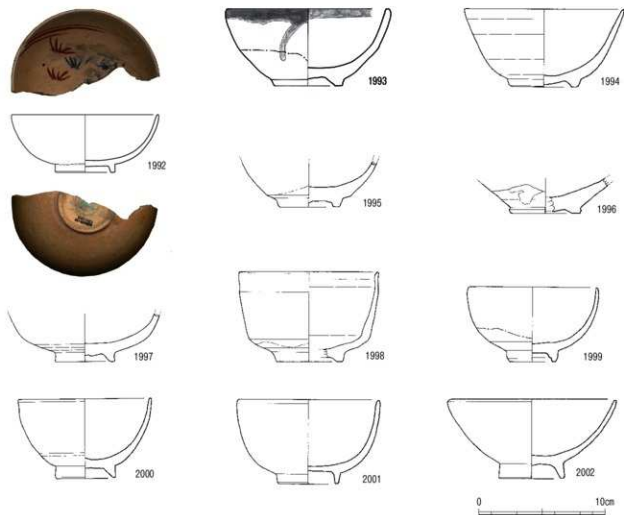
陶器

碗 (第345・346図)

1992～2019は碗である。1992は京焼である。見込みには上絵付が描かれる。1993～2012は肥前陶器である。1993は灰色の灰軸の上から口唇部に鉄軸をかけたもので、皮碗と呼ばれるタイプの資料である。1994は鈍い褐色の胎土に灰色の灰軸がかかるもので、見込みに胎土目の痕跡が残る。1995は、褐色の胎土に黒褐色の軸がかかる。腰部にはへば削りが施されるため、段を有する。1996は天目碗の底部と思われる。胎土は内面灰色、外面赤褐色を呈し、黒軸が厚くかかる。1997は腰が張り、1998は腰部が強く屈曲する形状の碗である。2点とも、内面と外面腰部まで黒軸が厚くかかる。1997の豊付には胎土目の痕跡が残る。1999・2000は内面に透明軸、外面に銅緑軸がかかる。2001は呉器手碗である。黄色みがあった胎土に、豊付以外に軸がかけられる。2002は黄色みがあった胎土に、豊付以外に軸がかけられる。2003～2007は京焼風陶器である。黄白色の緻密な胎土に透明軸

がかけられ、外面腰部から高台内底は露胎する。2003～2005は煎じ碗形を呈するものである。2005の外面口縁下位には、鉄絵の笹文が描かれる。2006は筒丸形、2007は半筒形の資料である。どちらも外面には鉄絵の山水文が描かれる。2008は底部である。見込みには崩された「壽」と思われる文字が描かれる。2009・2010は腰が張る器形の陶胎染付である。灰色の胎土に、白化粧土をかけた山水文を描く。2011は筒丸形の碗で、内外面に白土による巻刷毛目が施される。2012は外面に蜚手、内面に打刷毛目が施される。

2013～2019は薩摩焼の碗である。2013～2017は龍門司系の碗である。2013の高台は竹節状に削り出され、豊付を除き給軸が施軸される。初期龍門司と考えられる資料である。2014は褐色がかかる口縁部である。2015は豊付を除き、黒褐色の軸がかかる。2016は白化粧土に透明軸をかけた資料である。豊付から高台内底は露胎する。見込みに蛇の目軸剥ぎが施される。2017は黒褐色の軸がかかるが、豊付から高台内底は露胎する。



第345図 陶器 1 碗

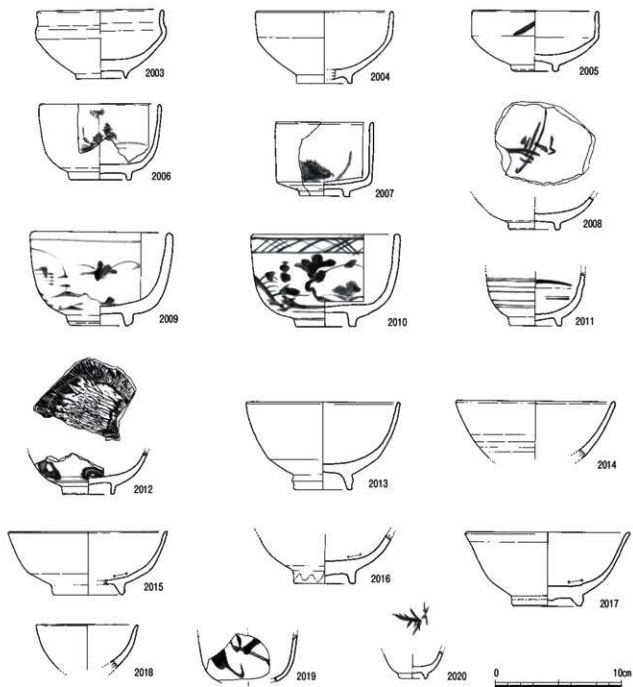
2018・2019は小碗と考えられる資料で、堅野系の白薩摩である。2019は外面に鉄絵（文字か？）が描かれる。

2020は堅野系の白薩摩で、小坏である。見込みに呉須で松葉文が描かれる。

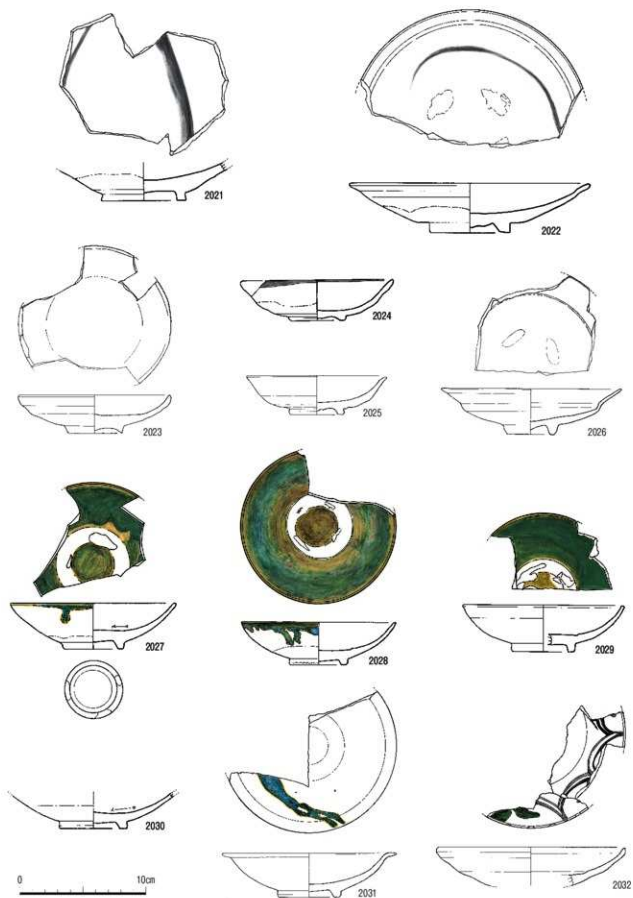
### 皿（第347図）

2021～2032は肥前陶器の皿である。2021・2022は内面に鉄絵が描かれた大皿である。2022は見込みに砂胎土目の痕跡が残る。2023は灰色の灰釉がかかる。2024は灰色

の灰釉の上から口唇部に鉄釉をかけたもので、皮鯨と呼ばれる資料である。2026は見込みに砂目が残る。2027～2031は内野山窯産の資料である。5点とも、見込みは蛇の目釉割ぎされる。2027～2029は外面に透明釉、内面に銅緑釉がかかる。2030は、内外面とも鉄釉がかかる。2031は口縁端部が強く外側に屈曲する。内外面に透明釉をかけ、内面の一部に銅緑釉を流しかける。2032は陶胎染付の皿である。灰色の胎土に白化粧土をかけ、その上から呉須で文様を描く。



第346図 陶器 2 碗・小坏



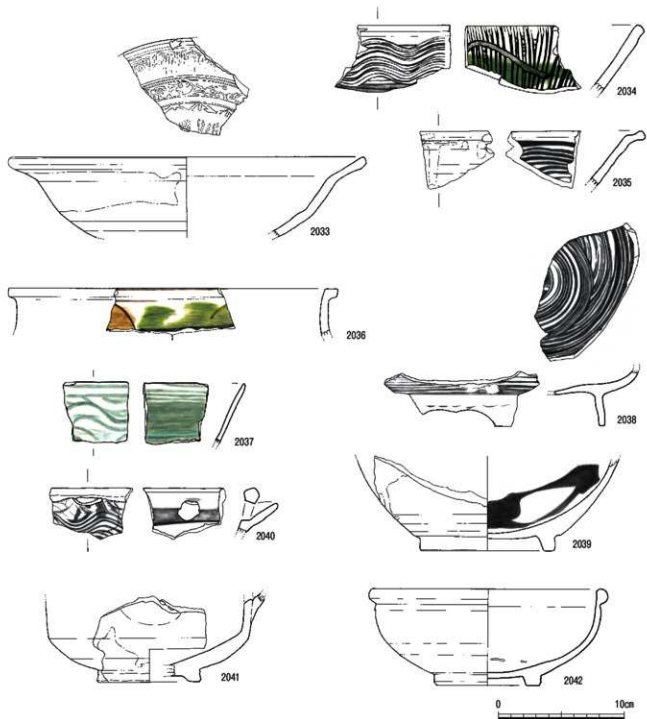
第347图 陶器3 皿

鉢・片口 (第348図)

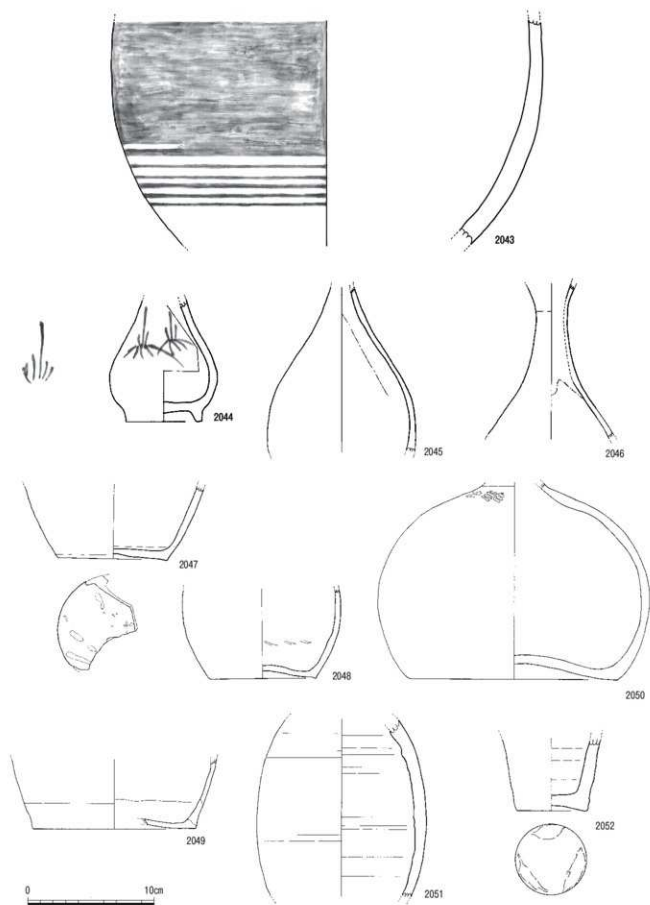
2033～2039は肥前陶器の鉢である。2033の文様は印花であるが、白象嵌は行われていない。2034は外面に白化粧土の刷毛目を施し、内面は白化粧土を掻き落として縦縞文様を入れ、上から緑釉をかける。2035は口縁端部が外側に短く折れる形状の鉢である。内面に白土の刷毛目が施され、褐釉がかかる。2036は内外面に白化粧土がかけられ、外面下位は鉄泥が塗布される。2037は外面に白土による刷毛目が施され、上から緑釉がかかる。鉢とし

たが他の器種である可能性も考えられる。2038は高台が高く、一部に挟りが入る。内外面には、白土による巻き刷毛目が施される。2039は胎土が赤褐色を呈し、内面と外面腰部まで白化粧土がかけられる。内面濁した釉がかけられる。

2040～2042は肥前陶器の片口である。2040は片口部である。白土による刷毛目が施される。2041は、片口部がわずかに残存している資料である。内面灰色、外面鈍い赤褐色の色調を呈する胎土に、灰色の釉がかかる。2042



第348図 陶器 4 鉢



第349图 陶器 5 德利



は、口縁部が玉縁状を呈するもので、内底面には重ね焼きの目跡が残る。片口部は欠損している。

#### 徳利・瓶 (第349図)

2043・2045～2052は徳利、2044は瓶である。2043・2044は肥前陶器である。2043の外面は、鉄泥の上から白化粧土をかけ、筋状に掻き取る。2044は陶胎染付の瓶である。2045～2050は薩摩焼苗代川産の資料である。2045・2046は鶴首形の徳利である。2047～2050は底部である。2050は徳利としたが、形状等から漫瓶の可能性も考えられる。肩に貝目が残る。2051・2052は琉球産の荒焼である。2052は鬼の腕と呼ばれる泡盛用の徳利である。外底面に目跡が残る。

#### 蓋 (第350図)

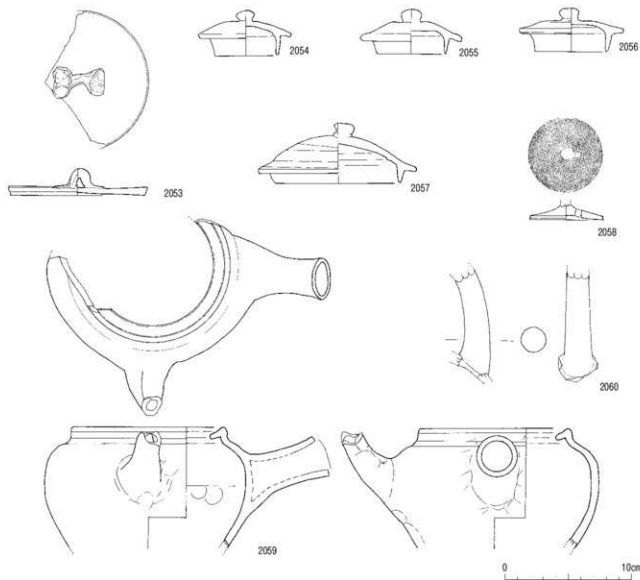
水注、土瓶、釜、急須の蓋を掲載した。2053～2058は

薩摩焼である。2053～2057は薩摩焼苗代川産の資料である。2053は水注の蓋である。素焼きのもので、初期薩摩焼の堂平窯の製品と考えられる。2054～2056は土瓶蓋である。上面に鉄軸がかかる。2057は、薩摩で山茶家(やまじょか)と称される釜の蓋である。2058は薩摩焼龍門司窯産の急須の蓋である。上面に鮫肌軸がかかる。

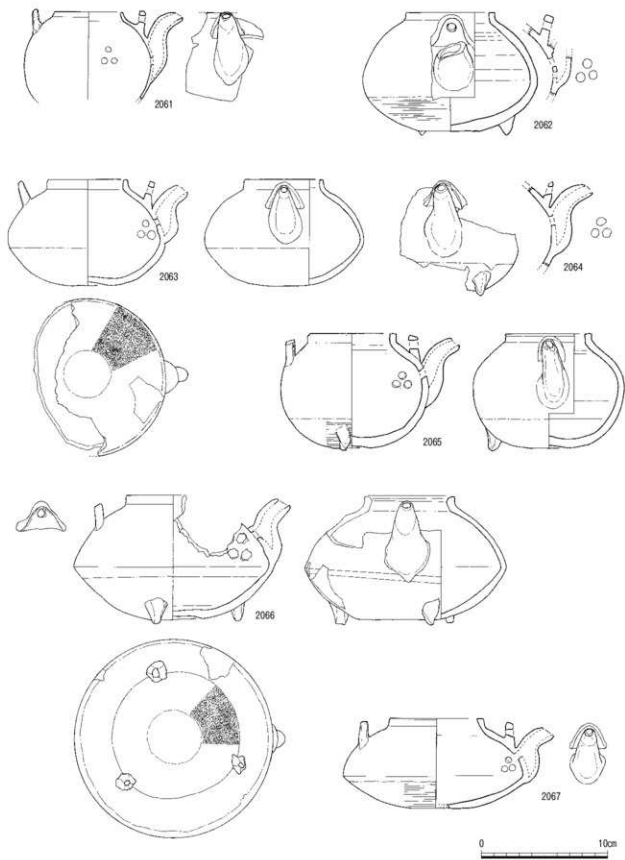
#### 水注・土瓶 (第350～352図)

2059は水注である。巻き口の注口を有し、注口に向かって約90度右側に筒状の把手が付く。器面はタキ成形のあとナデ調整が施されているが、内面には円状のあて具の痕跡が一部に残る。初期薩摩焼の堂平窯の製品と考えられる。2060は水注の把手である。

2061～2069は土瓶である。2061は堅野系の白薩摩である。やや下垂した丸形の形状を呈する。2062～2069は苗代川産の資料で、外面中位まで鉄軸がかかる。口縁部に



第350図 陶器6 蓋・水注・土瓶



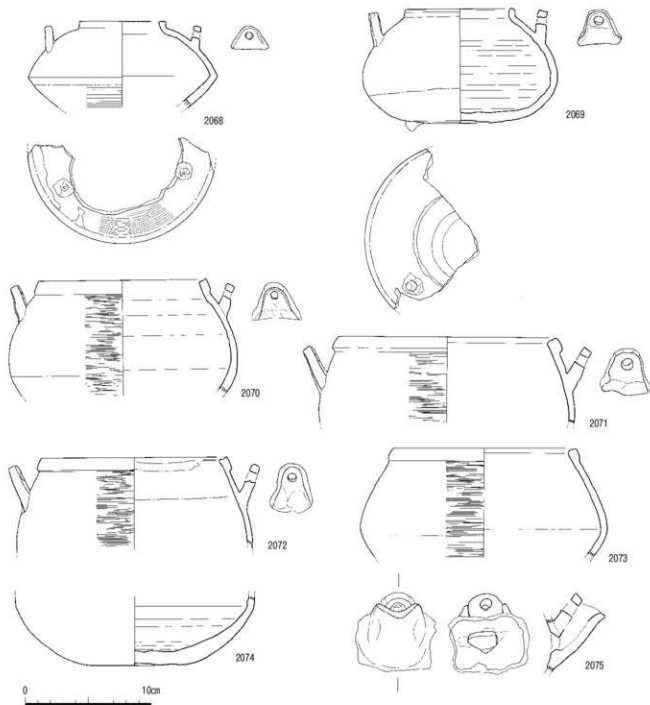
第351图 陶器 7 土瓶

は型作りによる三角形状の耳が対付き、外底面には円錐状もしくは三角錐状の足が3か所付く。外底面には、削り出しによる筋状の工具痕が輪状に残り、中央部は緩やかに凹む。2062～2064はややつぶれた丸形を呈するもので、胴部中央に残はない。2065は丸形の資料である。2066～2068は平形の資料である。体部は、ソロバン玉状の形状を呈する。2069は、最大径を胴部下位に有する資料である。外底面に重ね焼きの際の痕跡が、沈線状に残

る。

### 釜 (第352図)

2070～2075は薩摩で「山茶家」と称される釜である。外面腰部まで鉄軸がかかり、口縁下位には型作りによる半楕円状の耳が対でつく。2074は底部である。土瓶のような足はつかない。2075は片口部である。片口の中に一方の耳がつけられる。

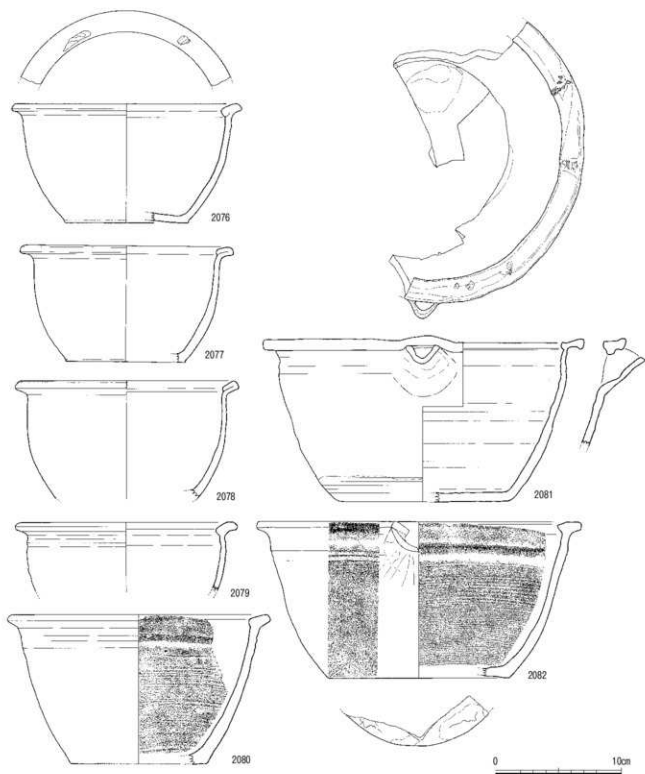


第352図 陶器 8 土瓶・釜

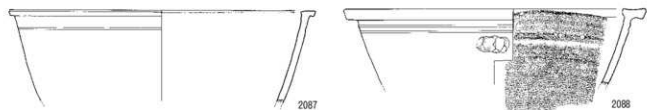
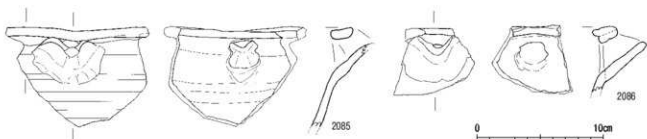
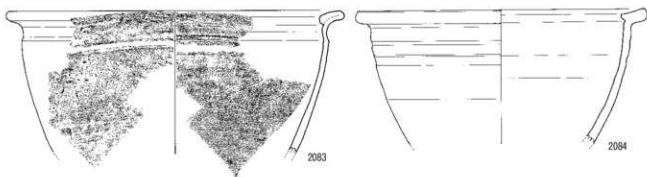
片口 (第353・354図)

2076～2086は薩摩焼苗代川産の片口である。2076～2080は小形、2081～2084は大形、2085・2086は片口部の資料である。口縁部は外側から内側に折り返してつくられ、胴部下位はヘラ削りされる。2076は、口唇部

と外底面に貝目が残る。2080は、内面にヘラ状工具による筋状の調整痕が残る。2081は口唇部に貝目が残る。2082・2083の内外面はヘラ状工具による筋状の調整痕が残る。



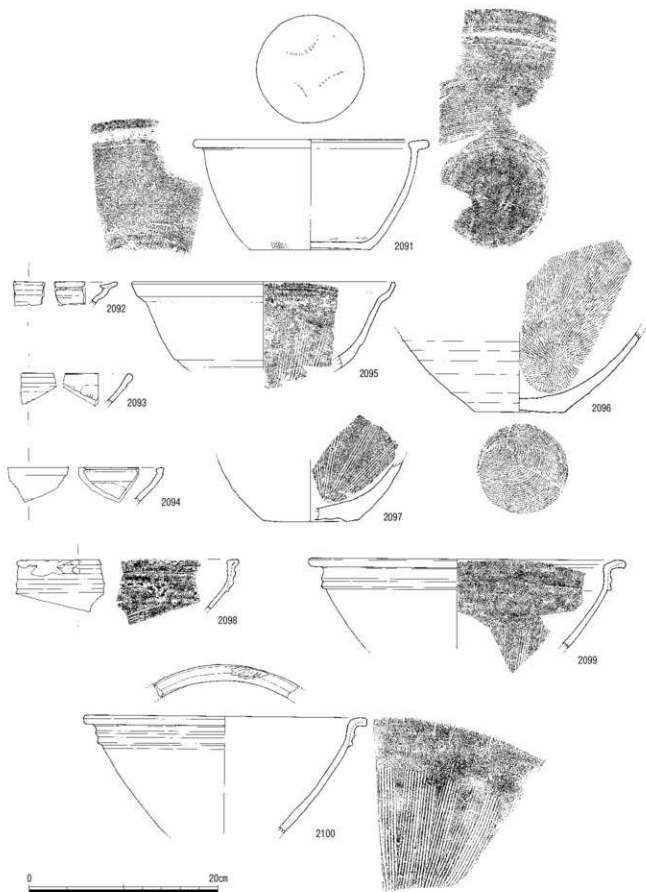
第353図 陶器9 片口



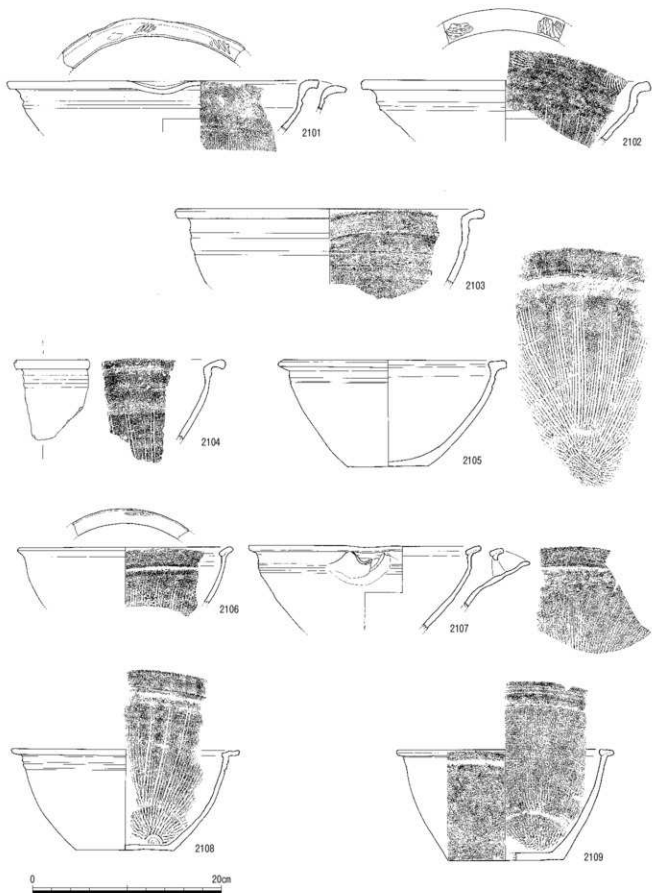
鉢 (第354図)

2087～2091は薩摩焼苗代川産の鉢である。2087は口縁部が短く外側に折れるもので、外面には細い沈線が巡る。浅鉢形を呈し、壺・壺等の蓋の可能性も考えられる。2088は外面に張り付けの装飾が付く。内面は筋状の工具痕が残る。2089は口縁部が直口するもので、器高も低く浅鉢形を呈するものである。壺・壺の蓋の可能性も考えられる。2090の把手の中央には沈線状の線が入る。口唇部には貝目が残る。2091は内外面に、横方向の調整痕が残る。内底面には貝目が3か所のこっており、焼成時に別の製品を内側に入れて焼いたと考えられる。

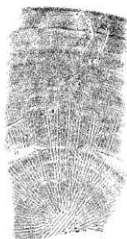
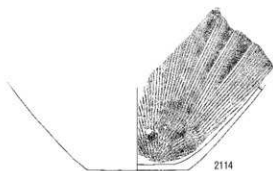
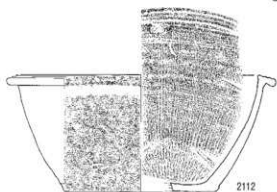
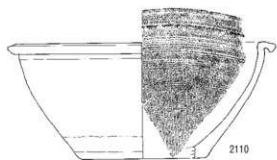
第354図 陶器10 片口・鉢



第355图 陶器11 鉢・描鉢



第356图 陶器12 漆鉢



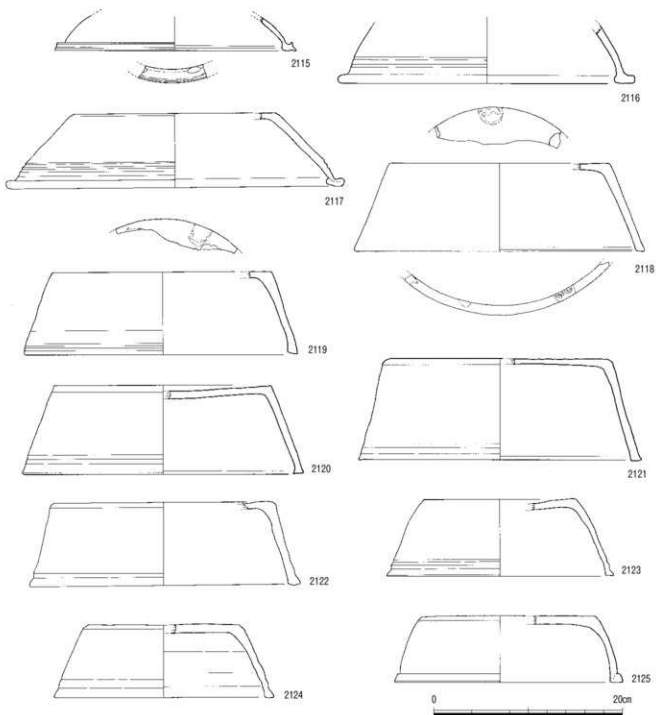
第357图 陶器13 漆鉢



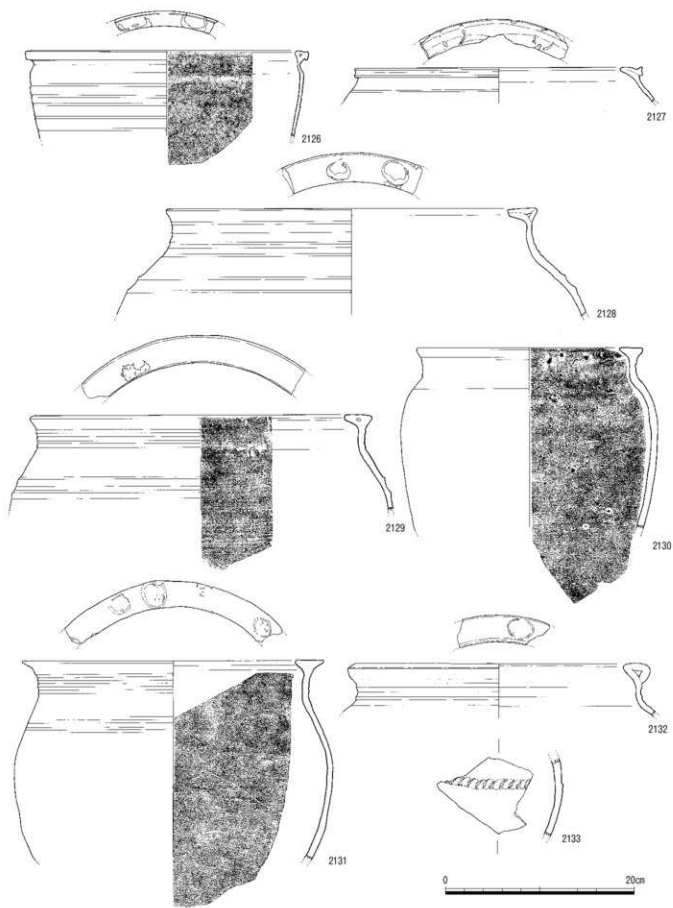
播鉢 (第355~357図)

2092~2097は肥前陶器の播鉢である。2092~2094は口縁部、2095は口縁~胴部で、口縁先端には掲軸がかけられ、以下は露胎する。2096・2097は底部である。播り目は細くシャープであるが、2096はやや密に、2097は余白を空けて入る。2097は高台を有する。2098~2114は薩摩焼苗代川産の資料である。2098は口縁部を外側に折り返して肥厚させ、外面口縁下位に2条の突帯を巡らせるものである。2099~2104も同様の口縁づくりであるが、突

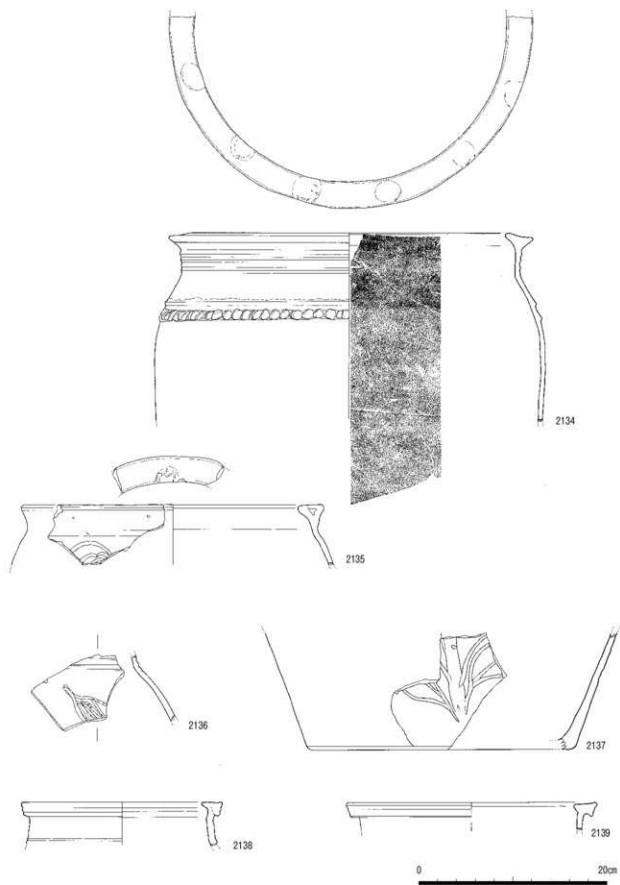
帯は低く、口縁端部外側に長くのびる。2105~2108は、口縁部を外側から内側に折り返して丸くつくる。2107のような片口を有するものと思われる。播り目は、2108を除き、内面口縁下位に余白を残し、細くシャープに入る。2109は口唇部が平坦につくられ、口縁部がT字状となる。播り目は内面上位まで余白なく入り、播り目の下と外面には、横方向の工具痕が残る。2110~2113は口縁部がL字状を呈する。胎土は赤褐色や鈍い橙色を呈し、粗く白色砂粒を多く含む。播り目は細くシャープであるが、内



第358図 陶器14 蓋(甕・変用)



第359图 陶器15 甗



第360图 陶器16 瓦

面口縁下位まで入り、掘り目の下には横方向の工具痕が残る。2111・2112は外面にも横方向の工具痕が明瞭に残る。2114は底部である。掘り目が細くシャープに入る。

#### 蓋 (第358図)

2115～2125は、薩摩焼苗代川産の蓋である。甕や壺にかぶせる浅鉢形の形状をしたものである。2115は口唇部の外側が溝状に凹むもので、貝目も残る。2116・2117は、口縁部を外側から内側に折り返してつくる。外面口縁下位には、浅い沈線が2条巡る。2118～2124は、口縁部が直口し、端部はやや肥厚する形状のものである。口唇部は軸割ぎされ平坦につくられる。外面口縁下位には、2条の弱い沈線が巡るものもある。2118は外底面と口唇部に、2119は外底面に貝目が残る。2125は、口縁端部が短く外側に折れる。口唇部は軸割ぎされ、外面腰部から底面にかけては露胎する。

#### 壺 (第359～361図)

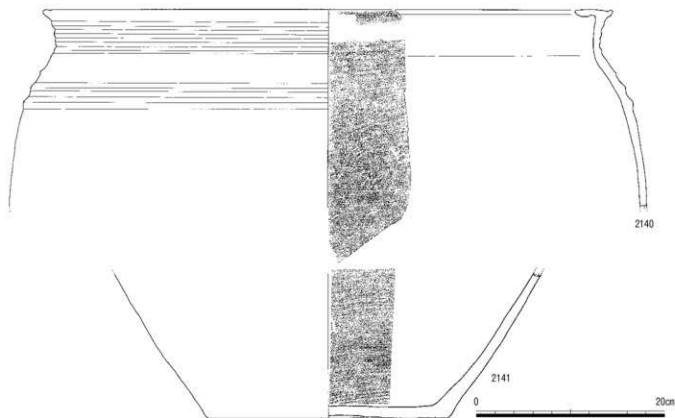
2126～2141は薩摩焼苗代川産の壺である。2126・2127は、胎土が緻密で器壁も非常に薄い。口唇部の外側は溝状に凹む。2126はバケツ状の形状のものである。外面には数条の沈線を有し、口唇部には貝目が残る。タキ成形と考えられるが、ナデ調整により内面には当て具の痕跡は残っていない。胎土は灰黄色を呈し、非常に緻密で

層状をなす。初期薩摩焼である串本野窯産の可能性が考えられる。2127は肩が張る形状のものである。口唇部には貝目が残る。初期薩摩焼の堂平窯産の可能性が考えられる。2128～2134は、口縁端部を外側に折り曲げて、断面三角形につくる資料である。肩部には1～2条の突帯や、縄状突帯が巡る。2135～2137は外面に掻き落とし文が描かれた資料である。2135は口縁部で、断面三角形につくられる。2136は肩部、2137は胴～底部である。2138・2139は口縁部がT字状を呈し、外端部が垂れ下がる資料である。胎土は赤褐色で粗く、白色砂粒を多く含む。2140・2141は大形の壺である。

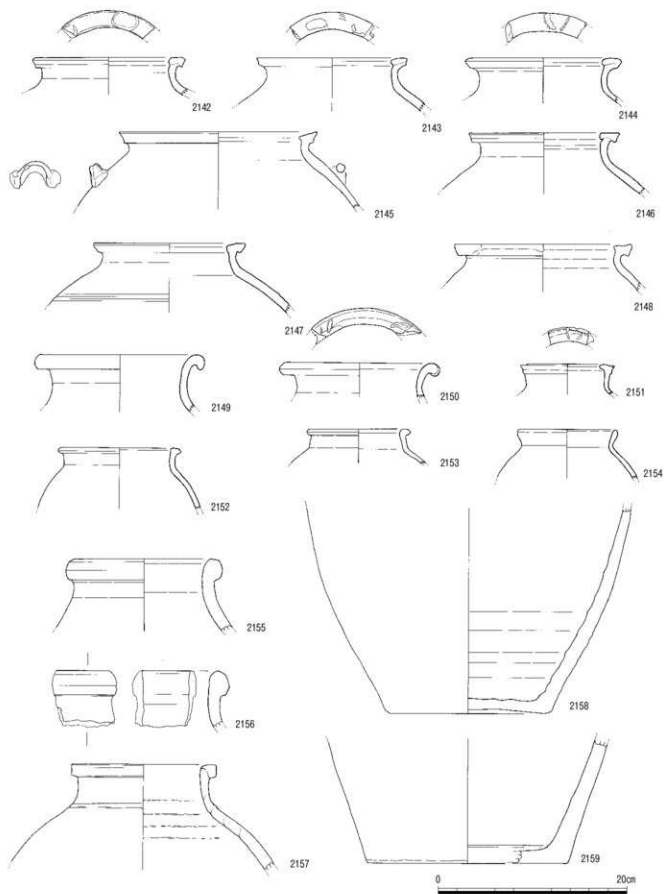
2140の口縁部はくちばし状に内側へ伸びる。施軸により不明瞭であるが、外面には横方向の工具による調整痕が筋状に残り、内面にはタキ成形時の同心円状の当て具と、その上からの横ナデ調整が残る。2141は底部で、内面には横方向のナデ調整の痕跡が残る。

#### 壺 (第362図)

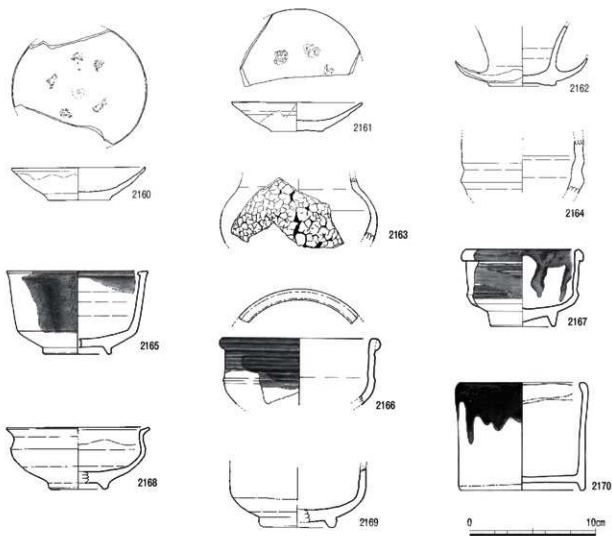
2142～2159は壺である。2142～2154は薩摩焼苗代川系の資料で、2155～2159は琉球産の荒焼である。2142～2150は大形の壺である。2142～2148は、口縁部は外側から内側に折り返してつくられる。2142～2144・2147は口唇部がやや丸みを帯び、貝目が残る。2145・2146・2148の口唇部は平坦につくられる。2145の肩部に



第361図 陶器17 壺



第362图 陶器18 壶



第363図 陶器19 灯明具・仏具

は横耳がつくが、個数は不明である。2149・2150は口縁部が外側に開き、端部を丸くつくるものである。口唇部にはイタヤガイの目跡が残る。2151～2154は中形の壺である。2151は器壁が薄く、口唇部の外側は溝状に凹み、貝目が残る。初期薩摩焼の堂平窯の製品と考えられる。2152・2153は、口縁端部が小さく丸くつくれる。2154は口縁部から頸部にかけての形状が、くの字状に屈曲する。2155～2159は焼き締めて、胎土は赤褐色を呈する。琉球密屋窯の製品と考えられる。

#### 灯明具 (第363図)

2160～2162は薩摩焼龍門司系の灯明具である。2160・2161は灯明皿で、見込みにはゴマ目が残る。2162は灯明皿受け台である。外底面には糸切りの痕跡が残る。

#### 仏具 (第363図)

2163～2170は仏具である。2163・2164は薩摩焼で、元立院窯産の仏花器である。2163は黒蛇蝎軸がかかり、2164は黒軸がかかる。2165～2170は香炉である。2165～2167は肥前陶器である。2165は、灰色の焼き締まった胎土に、一部褐軸がかかる。2166・2167は、白化粧土による刷毛目の上から褐軸がかけられる。2168～2170は薩摩焼で龍門司窯産の資料である。2168は黄褐色に発色した鉄軸がかかる。2169は底部で、外面に黒褐色の鉄軸がかかる。2170は筒形の形状を呈し、外面は白化粧土に緑軸が流しかけられる。

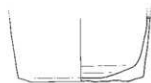
#### その他 (第364図)

2171は浅黄色の緻密な胎土に透明釉がかかる資料で、肥前陶器と思われる。高台は幅広く非常に低く削り出され、高台脇は広く面取りされる。用途不明の資料である。

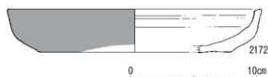
2172は土師質土器の焙烙である。外面に煤が付着する。

2173は薩摩焼苗代川産の植木鉢と思われるが、甕の可能性も考えられる資料である。口縁端部には指でつまんで液状にした装飾が施される。2174は瓦質土器の火鉢の底部である。器面には、金雲母状の光る鉱物が観察される。「お七」の印路がみられる。2175・2176は蒔し瓦である。

2175は丸瓦、2176は軒平瓦である。2177は土製品の人形である。頭から上が欠損している。2178は陶器の底部を転用したメンコである。2179は、型作りされた菊花形のミニチュア皿で、素焼きである。



2172



2172

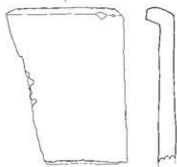
0 10cm



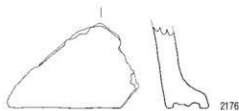
2173



2174



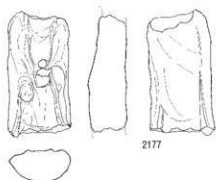
2175



2176



0 20cm



2177



2178

2179

0 10cm

金属製品（鉄製品・銅製品）（第365～367図）

2180～2309は金属製品を一括した。いずれも中世から近世にかけてのものと考えられる。この中には、鉄製品と銅製品が含まれる。なお、諸般の事情によりX線撮影できたものそうでないものがあり、詳細な形状については検討が必要なものも含まれている。

2180～2300は鉄製品である。

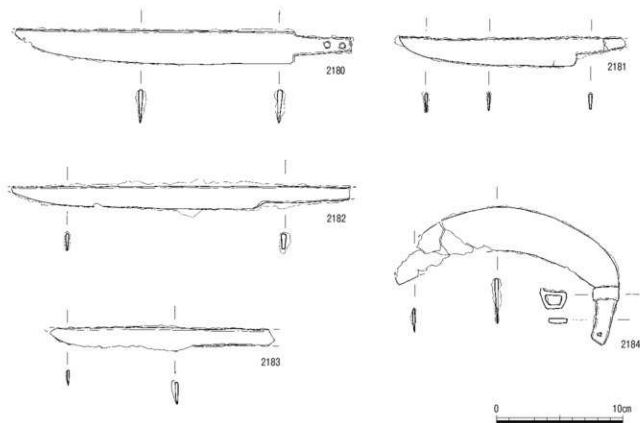
2180～2183は短刀である。2180・2181はほぼ完全なもので、特に2180については茎（なかご・柄部分のこと）に目釘穴が明瞭に残るものである。2181については本来は目釘穴があるはずであるが現状では確認できない。2182は2180・2181と比較して細身の刃部を持つものである。使用し研磨を繰り返すうちに現状の大きさとなった可能性も考えられる。2183は刃部の残存状況は良好ではないが、茎についてはほぼ完全なものである。

2184は鎌である。先端部に若干の刃こぼれと破損がみられるが、ほぼ完全な状態のものである。基部には輪状になった部分があり木質もわずかではあるが残存する。

2185・2186は先端部の断面が三日月状を呈する短冊状の製品で、ヤリガンナの可能性のあるものである。2185は先端の一部が欠く失る。2187は短冊状の製品である。

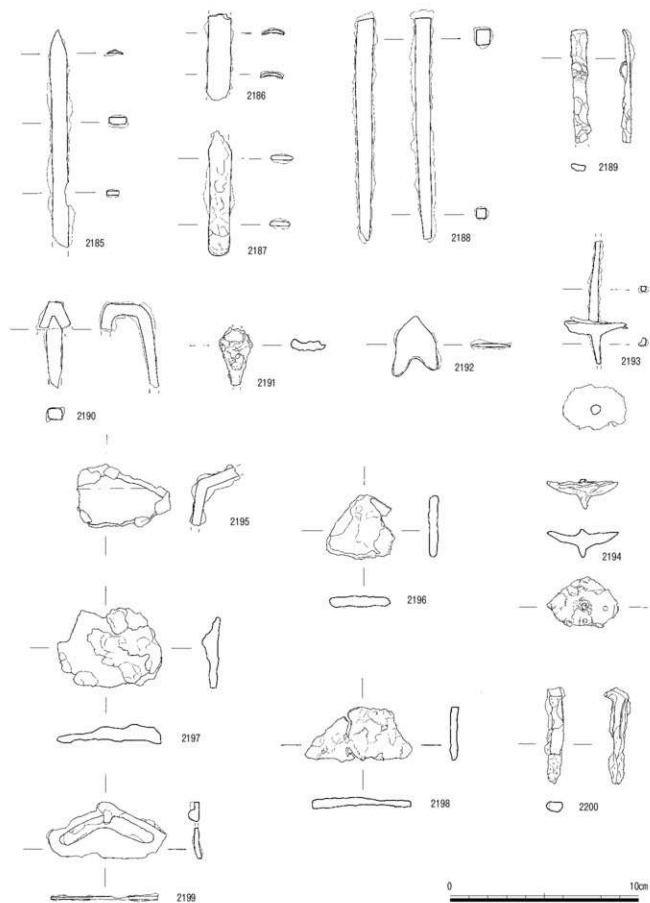
上部にはやや幅が狭くなる部分があるのでへら状を呈していたものと考えられる。2188は方柱状の製品で先細りのものである。大型釘やタガネの可能性が考えられるものである。2189は短冊状の製品である。先端部に反りを持つ。釘の可能性もあるが、検討を要する。2190は、角柱状の棒を「U」状に曲げ、途中で二股に加工した製品で、「熊手」状の形状を呈するものと考えられる。2191・2192は鉄鎌である。2191は菱形を呈するもので、古墳時代に多い「圭頭鎌」に類似するものである。2192はハート形を呈するもので、「無茎鎌」と呼称されるものである。この2点はいずれも古墳時代の遺物の混入の可能性も考えられるものである。2193・2194は鉄製紡錘車である。いずれも円盤状部分の破損が著しい。

2195～2198は鑄造製品で、鉄鍋の破片の可能性が高いものである。特に2196は鍋の頭部とみられるもので、鍋の形状を窺い知ることのできる数少ない資料である。2199は、ハンガー形を呈する製品で、火打金である。上部に棒状部分を絡めたと思われる部分がある。全体的に錆化が進んでおり、破損が著しい。2200は断面が方形を呈し、上部で直角に曲げた棒状製品で、いわゆる「角釘」である。本遺跡では、土坑墓から出土することが多いが、

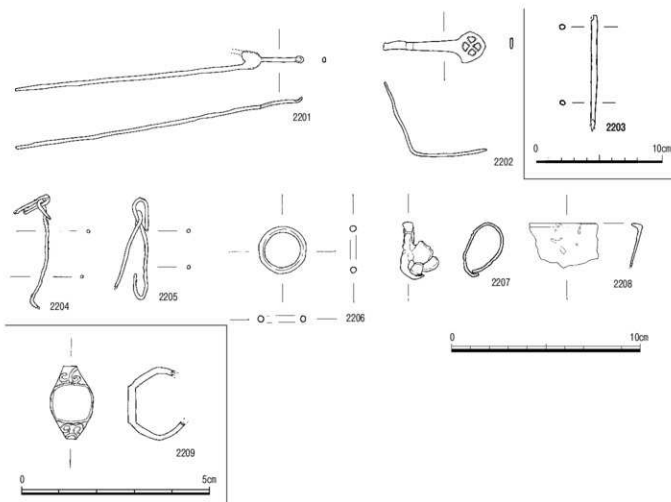


第365図 金属製品 1





第366図 金属製品2



第367図 金属製品3

この遺物についても土坑墓の棺に使用された可能性がある。

2201～2209は銅製品である。

2201・2202は「かんざし」と考えられるものである。2201は、耳かき部分をもつもので、途中で二股になるものである。2202はし字形で折れているが、元は、まっすぐであったとみられる。端部は円形を呈し、クローバー形の4カ所の「透かし」を持つ。2203は棒状の製品で両端部の一端は丸くおさめ、もう一方については鋭く尖るものである。「縫い針」の可能性も考えられるが、糸通しの穴がみられないので検討が必要である。2204・2205は針金状のものを両端でフック形に環状にするものを連結するものである。何らかの金具の可能性はあるが、「釣花いけ」という製品に類似する。なお、2204・2205は中世壱穴建物跡の壁面に接する状態で出土したという調査時の記録があったが、どの遺構であるかが判然としなかったため、一般遺物として扱った。2206は環状の製品である。指輪にも類似するものであるが、「金坐（かん

ざ）」と呼称される製品に類似する。金坐であれば、手箱の紐掛や兜の後頭部につけられていたものと考えられる。2207は王冠に類似した環状を呈する製品である。「太刀金具」と呼称されるものに類似する。「太刀金具」であれば、鞘の先端部付近に巻かれていたと考えられる。この場合、通常であれば「太刀」は上級武士のものであるのだが、本資料は簡素なつくりであるので、場合によっては農民クラスのものであった可能性も指摘される。2208は輪形とみられる製品の口縁部の破片で、「銅輪」と呼称されるものである。通常であれば、7～8世紀頃に比定されるものである。2209は指輪である。上面には方形の区画を持つ。また、側面には唐草文様がみられる。日本では、古代から近世にかけては「指輪」をつけるという文化自体がないので、大陸との影響によるものと考えられるもので、重要な資料である（銅製品に関しては久保智康氏【京都国立博物館】の御教示による部分が大きい）。

近世遺構内出土遺物観察表

発掘調査 年度	調査番号	出土位置	形状	種類	素材の色調	材質	用途	寸法 (mm)			遺地	時期	備考	
								長さ	幅	高さ				
第 304 区	180	掘削 1層	A-30	陶器	片口	褐色	鉢	口唇部輪郭	15.0	-	-	遺構年代1	17c前半	
	180	掘削 1層	A-30	陶器	片口	赤褐色	鉢	口唇部輪郭	-	-	-	遺構年代1	17c前半	口唇部に目皿あり
	180	掘削 1層	A-30	陶器	蓋	灰白色	透明釉	椀形全体蓋物	-	-	-	肥前系	19c	
第 313 区	1804	土坑 埋	B-34	白磁	弁	白色	透明釉	蓋付輪郭	3.8	4.0	3.4	肥前系	19c	
	1805	土坑 埋	B-33	白磁	弁	白色	透明釉	蓋付輪郭	-	3.4	-	肥前系	19c	
第314区	1806	1-10	Ⅱ	磁器品	-	-	-	最大径 11.0	最大径 11.0	最大径 10.8	-	-	-	重24g
第315区	1811	土坑 埋	B-32	磁器品	缸	-	-	最大径 32	最大径 29	最大径 28	-	-	-	重20g
	1812	掘削 1層	A-36	陶器	蓋	褐色	反釉	外周中心から高台内蓋物	130	40	40	肥前	1580~1610	内蓋 磁胎
第 322 区	1817	掘削 1層	B-34	陶器	蓋	白っぽい赤褐色	磁胎	上面の内蓋物	-	直径 110	-	遺構年代1	18c後半	
	1818	掘削 1層	B-34	陶器	蓋	白っぽい赤褐色	白化磁土に 磁胎	上面の内蓋物	3.8	直径 11	-	遺構年代1 土坑	18c後半	
第 324 区	1819	掘削 1層	D-30	磁器品	-	-	-	最大径 4.8	最大径 5.0	最大径 4.7	-	-	-	
	1820	溝1	C-36	磁器	碗	白色	透明釉	椀形全体蓋物	11.4	-	-	肥前系	18c後半	
	1821	溝1	D-36	磁器	碗	灰白色	透明釉	蓋付輪郭	-	4.2	-	肥前系	18c後半	
	1822	溝1	C-36	磁器	碗	灰白色	透明釉	椀形全体蓋物	11.2	-	-	肥前	18c後半	
	1823	溝1	C-36	磁器	碗	灰白色	透明釉	蓋付輪郭	直径 10	高さ 10	-	肥前系	18c後半	
	1824	溝1	C-D-36	磁器	碗	褐色褐色	透明釉	蓋付輪郭	100	4.8	5.4	肥前系	18c末頃~ 19c前半	
	1825	溝1	C-D-36	磁器	碗	灰白色	透明釉	蓋付輪郭	10.8	4.8	6.3	肥前系	18c末頃~ 19c前半	
	1826	溝1	C-36	磁器	碗	白色	透明釉	蓋付輪郭	7.0	3.0	4.0	肥前系	18c後半	
	1827	溝1	C-36	磁器	碗	灰白色	透明釉	椀形全体蓋物	10.0	-	-	肥前系	18c末頃~ 19c前半	
	1828	溝1	D-36 E-32	磁器	碗	灰白色	透明釉	蓋付輪郭	30	2.7	2.2	各地	18c末頃~ 19c前半	
	1829	溝1	C-36	磁器	蓋	灰白色	透明釉	蓋付輪郭	14.0	6.4	3.1	肥前	18c中頃	高台内蓋に付蓋土の目皿あり
	1830	溝1	B-35~ 36 C-36	磁器	皿	灰白色	透明釉	蓋付輪郭	-	12.0	-	肥前	19c代	
	1831	溝1	C-36	磁器	湯瓶か?	灰白色	透明釉	内蓋部	-	-	-	肥前	18c	
	1832	溝1	C-36	陶器	碗	灰色	銅緑釉	外蓋部一高台内蓋部	100	4.4	6.7	遺構年代1	17c後半	
	1833	溝1	D-37	陶器	碗	褐色黄色	透明釉	高台部一高台内蓋部	10.4	3.8	4.8	肥前	18c後半	
	1834	溝1	D-36	陶器	碗	白っぽい黄褐色	磁胎	蓋付一高台内蓋部	直径 10	高さ 10	-	遺構年代1	18c後半	
	1835	溝1	C-D-36	陶器	碗	灰褐色	反釉	蓋付一高台内蓋部	-	4.6	-	遺構年代1	18c後半	
	1836	溝1	C-36	陶器 (白磁)	碗	灰白色	透明釉	蓋付輪郭	-	3.5	-	遺構年代1	18c代か?	
	1837	溝1	D-36	陶器	碗	黄褐色	透明釉	高台内蓋部	-	-	-	肥前系	17c後半	
	1838	溝1	D-36	陶器	碗	灰褐色	反釉	外蓋部以下蓋部	-	-	-	肥前	18c末頃~ 17c後半	蓋部 直径10に付蓋土あり
	1839	溝1	C-36	陶器	皿	白っぽい褐色	透明釉	外蓋部以下蓋部	16.0	-	-	肥前か?	17c後半?	
	1840	溝1	C-D-36	陶器	碗	赤褐色	磁胎	外蓋部以下蓋部 直径10に付輪 郭部	-	4.7	-	遺構年代1	18c後半	
	1841	溝1	C-D-36	陶器	瓶類	白っぽい灰色	磁胎	内蓋部	-	-	-	遺構年代1	18c後半~	飛び脚 かなから
	1842	溝1	C-36 D-36	陶器	土瓶	緑赤褐色	磁胎	口唇部輪郭	6.2	-	-	遺構年代1	18c後半	
1843	溝1	D-36	陶器	土瓶	赤褐色	磁胎	椀形全体蓋物	-	-	-	遺構年代1	18c後半		
1844	溝1	C-36	陶器	土瓶	赤褐色	磁胎	椀形全体蓋物	-	-	-	肥前	18c後半		
1845	溝1	D-37	陶器	蓋付土瓶	褐色	磁胎	椀形全体蓋物	13.0	-	-	遺構年代1	18c代か?		
第 325 区	1846	溝1	C-36	陶器	片口土瓶	赤褐色	磁胎	口唇部輪郭	-	-	-	遺構年代1	18c後半	
	1847	溝1	C-36	陶器	皿	白っぽい赤褐色	磁胎	口唇部輪郭	25.2	16.6	11.8	遺構年代1	18c代	
	1848	溝1	C-36	陶器	皿	白っぽい赤褐色	磁胎	口唇部輪郭	-	-	-	遺構年代1	18c代	
	1849	溝1	B-37 D-36 C-D-36	陶器	磁鉢	緑赤褐色	反釉	椀形全体蓋物	-	16.2	-	遺構年代1	19c代	
	1850	溝1	D-36	陶器	磁鉢	赤褐色	磁胎	外蓋部	-	13.2	-	遺構年代1	19c代	
	1851	溝1	C-D-36	陶器	蓋	緑赤褐色	磁胎	口唇部輪郭	38.0	-	-	遺構年代1	18c代	口唇部に目皿あり
	1852	溝1	C-D-36	陶器	蓋	緑赤褐色	磁胎	口唇部輪郭	27.2	21.4	8.8	遺構年代1	17c後半	
	1853	溝1	D-36	陶器	蓋	赤褐色	磁胎	口唇部輪郭	34.0	-	-	遺構年代1	18c代	口唇部に目皿あり
	1854	溝1	D-36	陶器	蓋	緑赤色	磁胎	椀形全体蓋物	-	-	-	遺構年代1	18c代	
	1855	溝1	C-36	陶器	蓋	褐色	磁胎	口唇部輪郭	-	-	-	遺構年代1	18c代	
第 326 区	1856	溝1	B-D-30 D-36	陶器	碗	灰白色	内(透明釉 外(銅緑釉)	椀形全体蓋物	11.6	-	-	肥前	18c前半	
	1857	溝2	B-36	陶器	碗	白っぽい褐色	磁胎	椀形全体蓋物	12.4	-	-	遺構年代1	18c後半	
	1858	溝2	C-36	陶器	蓋	赤褐色	磁胎	口唇部輪郭	15.4	-	-	遺構年代1	18c代か?	
	1859	溝2	B-35	磁器品	鉢	-	-	-	最大径 24.1	最大径 13.0	最大径 11	-	-	重218g
	1860	溝2	B-34~35	陶器	磁鉢	緑褐色	磁胎	口唇部輪郭	27.6	-	-	遺構年代1	18c後半	口唇部に目皿あり
第 327 区	1862	溝4	E-16	陶器	蓋	緑褐色	磁胎	口唇部輪郭	22.8	14.4	4.6	遺構年代1	17c前半	口唇部に目皿あり
	1863	溝4	-	磁器品	-	-	-	最大径 14.6	最大径 11.6	最大径 9.8	-	-	重25g	
	1864	溝4	E-18	磁器品	-	-	-	最大径 165	最大径 125	最大径 125	-	-	重16g	
	1865	溝3	B-10	陶器	蓋付	灰白色	透明釉	内蓋一蓋付一高台内蓋部	-	6.0	-	肥前	不明	

近世遺構内出土遺物観察表

発掘 層位	調査 番号	出土区 階位	種別	器種	出土の色調	釉薬	胎地	重量(g)			長さ (cm)	直径 (cm)	厚さ (cm)	形状	備考	
								最大	最小	平均						
第 328 区	1886	近世遺構 I	D-29	土製品	土埴	にがい黄褐色	-	-	4.7	最大径 1.1	-	-	-	-	-	
	1887	近世遺構 I	D-30	土製品	土埴	にがい黄褐色	-	-	9.7	最大径 1.8	-	-	-	-	-	
	1888	近世遺構 I	D-30	土製品	土埴	にがい黄褐色	-	-	3.4	最大径 1.1	-	-	-	-	-	
	1889	近世遺構 I	D-29-30	石製品	玉輪巻	-	-	-	10.6	最大径 11.7	-	-	-	-	-	-
	1870	近世遺構 I	D-30	鉄製品	釘	-	-	-	9.3	1.5	9.3	9.7	-	-	鉄線か?	
第 329 区	1871	近世遺構 I		鉄製品	ヤリノシ	-	-	-	4.4	1.5	6.6	-	-	-	-	
	1872	近世遺構 I		鉄洋	平歯長方形 地金板厚	-	-	-	20.4	16.0	7.8	23.0	-	-	-	
	1873	近世遺構 I		鉄洋	流動洋	-	-	-	22.2	17.9	6.5	30.40	-	-	-	
	1875	近世遺構 I		鉄洋	流動洋	-	-	-	16.2	12.6	3.2	3.98	-	-	-	
	1876	近世遺構 I		鉄洋		-	-	-	11.1	7.4	3.0	3.10	-	-	-	
第 330 区	1877	近世遺構 I		鉄洋		-	-	-	11.6	10.3	2.6	3.28	-	-	-	
	1878	近世遺構 I		鉄洋		-	-	-	9.9	8.0	2.5	2.21	-	-	-	
	1879	近世遺構 I		鉄洋		-	-	-	24.5	19	6.5	24.40	-	-	-	
	1880	近世遺構 I		鉄洋	帯付板金板厚	-	-	-	18.4	14.1	3.8	18.10	-	-	-	
	1881	近世遺構 I		鉄洋	帯付板金板厚	-	-	-	7.3	6.1	2.3	1.68	-	-	-	
第 331 区	1882	近世遺構 I		鉄洋	帯付板金板厚	-	-	-	5.4	5.8	1.8	1.40	-	-	-	
	1883	近世遺構 I		鉄洋	帯付板金板厚	-	-	-	21.1	14.7	6.4	21.90	-	-	-	
	1884	近世遺構 I		鉄洋	帯付板金板厚	-	-	-	19.7	14.7	5.5	20.90	-	-	-	
	1885	近世遺構 I		鉄洋	帯付板金板厚	-	-	-	18.0	10.6	6.4	8.75	-	-	-	
	1886	近世遺構 I		鉄洋	精製鍍金洋	-	-	-	10.0	7.4	4.4	1.36	-	-	-	
第 332 区	1887	近世遺構 I		鉄洋	精製鍍金洋	-	-	-	6.8	7.1	2.9	1.10	-	-	-	
	1888	近世遺構 I		鉄洋	精製鍍金洋	-	-	-	9.2	8.6	4.6	2.41	-	-	-	
	1889	近世遺構 I		鉄洋		-	-	-	3.7	4.1	1.9	2.7	-	-	-	
	1890	近世遺構 I		鉄洋	流出孔洋	-	-	-	6.5	3.7	2.6	9.0	-	-	-	
	1891	近世遺構 I		鉄洋		-	-	-	9.9	4.5	3.4	1.20	-	-	-	
第 333 区	1892	近世遺構 I		鉄洋		-	-	-	14.0	7.5	6.2	6.08	-	-	-	
	1893	近世遺構 I		鉄洋	流出孔洋	-	-	-	11.0	6.3	6.3	4.61	-	-	-	
	1894	近世遺構 I		鉄洋	流出孔洋	-	-	-	10.7	5.7	5.0	2.61	-	-	-	
	1895	近世遺構 I		鉄洋	流出孔洋	-	-	-	11.5	8.8	7.4	6.74	-	-	-	
	1896	近世遺構 I		土製品	輪の裂口	にがい黄褐色	-	-	20.5	最大径 10.6	-	-	-	-	-	
第 334 区	1897	近世遺構 I		土製品	輪の裂口	にがい黄褐色	-	-	17.9	最大径 10.6	-	-	-	-	-	
	1898	近世遺構 I		土製品	輪の裂口	にがい褐色	-	-	16.9	最大径 8.6	-	-	-	-	-	
	1899	近世遺構 I		土製品	輪の裂口	明黄褐色	-	-	16.5	最大径 9.2	-	-	-	-	-	
	1900	近世遺構 I		土製品	輪の裂口	にがい黄褐色	-	-	15.9	最大径 9.7	-	-	-	-	-	
	1901	近世遺構 I		土製品	輪の裂口	灰黄色	-	-	14.3	最大径 9.0	-	-	-	-	-	
第 335 区	1902	近世遺構 I		陶器	碗	にがい黄褐色	砂化粧土の 灰白色に洗滌	残存断面は胎地	2.7 10.6	-	-	-	-	-	肥前 16c前半	
	1903	近世遺構 I		陶器	皿	灰色	顔料施	外周部下部に黄褐色 黄白色の粉厚	2.7 10.6	最大径 4.6	-	-	-	-	肥前 17c	
	1904	近世遺構 I		陶器	皿	灰色	透明釉	残存断面は胎地	2.7 10.6	-	-	-	-	-	肥前 18c代か?	
	1905	近世遺構 I		陶器	皿	灰色	透明釉	残存断面は胎地	2.7 10.6	最大径 4.5	最大径 2.8	最大径 0.9	-	-	-	
	1906	近世遺構 I	E-29	石製品		-	-	-	7.5	-	-	-	-	-	-	

近世土遺物観察表

発掘番号	発掘時期	出土区	用途	種類	形状	土色・色調	胎土	胎地	寸法 (mm)		重量	時期	備考		
									口径	高さ					
第 127 区	1907	A-9-20	磁器	丸瓶	灰白色	透明胎	曹州胎	曹州胎製	15.0	5.2	1.4	昭和	17代前半	瓦版文 焼文	
	1908	A-9-20	磁器	丸瓶	灰白色	透明胎	曹州胎	曹州胎製	-	3.9	-	昭和	17代前半	瓦版文	
	1909	C-30	磁器	丸瓶	白色	透明胎	曹州胎	曹州胎製	11.4	5.1	1.0	昭和	17代前半	瓦版文	
	1910	B-30	磁器	丸瓶	灰白色	透明胎	曹州胎	曹州胎製	11.8	5.0	0.7	昭和	17代前半	ワザツの文様	
	1911	A-9-20	白磁	丸瓶	白色	透明胎	曹州胎	曹州胎製	11.0	4.4	0.3	昭和	17代前半か?		
	1912	B-34-25	I	磁器	丸瓶	灰白色	透明胎	曹州胎	曹州胎製	10.0	4.2	0.4	昭和	18代前半	焼文
	1913	C-38	磁器	丸瓶	灰白色	透明胎	曹州胎	曹州胎製	9.8	4.1	0.1	昭和	18代中頃	コシヤツ印付瓦片 内面に「コシヤツ印付瓦片 表面の遺物	
	1914	C-38	磁器	丸瓶	白色	(内)透明胎 (外)黄緑胎	曹州胎	曹州胎製	11.0	8.4	0.7	昭和	18代中頃	コシヤツ印付瓦片 内面に「コシヤツ印付瓦片 表面の遺物	
	1915	A-36	磁器	丸瓶	灰白色	透明胎	曹州胎	曹州胎製	見込小径/自動製	11.8	4.4	0.5	昭和	18代後半	見込小径/コシヤツ印付 瓦片
	1916	磁器	丸瓶	灰白色	透明胎	曹州胎	曹州胎製	曹州胎製	12.8	6.3	0.1	昭和	18代後半	コシヤツ印付瓦片	
第 128 区	1917	A-9-26-27	磁器	丸瓶	灰白色	透明胎	曹州胎	曹州胎製	-	4.6	-	昭和	18代中頃		
	1918	C-36	磁器	丸瓶	灰白色	透明胎	曹州胎	曹州胎製	11.0	4.2	0.1	昭和	18代後半	見込小径/コシヤツ印付 瓦片	
	1919	C-34	磁器	丸瓶	灰白色	透明胎	曹州胎	曹州胎製	見込小径/自動製	11.2	4.2	0.4	昭和	18代後半	瓦文 橋子文
	1920	B-35	磁器	丸瓶	灰白色	透明胎	曹州胎	曹州胎製	10.2	4.0	0.4	昭和	18代後半		
	1921	C-34-28	磁器	丸瓶	灰白色	透明胎	曹州胎	曹州胎製	10.3	4.0	0.3	昭和	18代中頃	焼文	
	1922	磁器	丸瓶	灰白色	透明胎	曹州胎	曹州胎製	曹州胎製	13.5	6.0	0.0	昭和	18代後半		
	1923	B-36-27	磁器	丸瓶	灰白色	透明胎	曹州胎	曹州胎製	10.4	4.2	0.6	昭和	18代後半	一筆焼文	
	1924	C-38	磁器	丸瓶	灰白色	透明胎	曹州胎	曹州胎製	-	4.7	-	昭和	18代後半	瓦版文	
	1925	磁器	丸瓶	灰白色	透明胎	曹州胎	曹州胎製	見込小径/自動製	12.1	4.6	0.0	昭和	18代後半	瓦版文	
	1926	B-38	磁器	丸瓶	灰白色	透明胎	曹州胎	曹州胎製	見込小径/自動製	10.8	4.0	0.2	昭和	18代後半	焼文
第 129 区	1927	C-35	I	磁器	丸瓶	灰白色	透明胎	曹州胎製	見込小径/自動製	11.2	5.0	0.4	昭和	18代後半	焼文
	1928	B-37	磁器	丸瓶	灰白色	透明胎	曹州胎	曹州胎製	見込小径/自動製	11.4	4.4	0.4	昭和	18代後半	コシヤツ印付瓦片の遺文
	1929	C-36	磁器	丸瓶	白色	透明胎	曹州胎	曹州胎製	見込小径/自動製	11.8	5.0	0.5	昭和	18代後半	焼文
	1930	C-35	I	白磁	瓶形蓋	灰白色	透明胎	曹州胎	曹州胎製	11.8	4.2	0.5	昭和	18代後半	
	1931	C-35-15	I	磁器	蓋形蓋	灰白色	透明胎	曹州胎製	曹州胎製	11.6	6.0	0.5	昭和	18代後半	山水文
	1932	C-35	磁器	蓋形蓋	灰白色	透明胎	曹州胎	曹州胎製	曹州胎製	10.4	6.0	0.4	昭和	18代後半-19代前半	山水文
	1933	B-38	磁器	小豆飯椀	灰白色	透明胎	曹州胎	曹州胎製	見込小径/自動製	10.2	-	-	昭和	18代後半	焼文
	1934	B-38-C-34	白磁	瓶形蓋	灰白色	透明胎	曹州胎	曹州胎製	見込小径/自動製	11.8	4.0	0.7	昭和	18代後半	山水文
	1935	B-38-17	磁器	瓶形蓋	白色	透明胎	曹州胎	曹州胎製	見込小径/自動製	-	6.3	-	昭和	18代後半	橋子文
	1936	C-35	I	磁器	瓶形蓋	白色	(内)透明胎 (外)黄緑胎	曹州胎	曹州胎製	7.6	4.0	0.3	昭和	18代後半	コシヤツ印付瓦片 内面に「コシヤツ印付瓦片 表面の遺物
第 130 区	1937	磁器	瓶形蓋	灰白色	透明胎	曹州胎製	曹州胎製	7.9	-	-	昭和	18代後半	四方焼文		
	1938	磁器	瓶形蓋	灰白色	透明胎	曹州胎製	曹州胎製	7.9	-	-	昭和	18代後半	焼文		
	1939	C-37	磁器	瓶形蓋	灰白色	透明胎	曹州胎	曹州胎製	6.7	3.0	0.7	昭和	18代後半	見込小径/コシヤツ印付 瓦片	
	1940	B-35	磁器	瓶形蓋	灰白色	透明胎	曹州胎	曹州胎製	8.7	3.4	0.1	昭和	18代後半	コシヤツ印付瓦片 内面に「コシヤツ印付瓦片 表面の遺物	
	1941	C-38	磁器	瓶形蓋	白色	透明胎	曹州胎製	曹州胎製	7.1	-	-	昭和	18代後半	瓦版文	
	1942	C-38	磁器	瓶形蓋	灰白色	透明胎	曹州胎製	曹州胎製	7.3	4.0	0.1	昭和	18代後半-19代前半	焼文	
	1943	C-38	磁器	瓶形蓋	白色	透明胎	曹州胎製	曹州胎製	7.2	4.0	0.8	昭和?	18代後半-19代前半	橋子文	
	1944	C-34	磁器	瓶形蓋	灰白色	透明胎	曹州胎	曹州胎製	8.8	3.2	0.3	昭和	18代後半	焼文	
	1945	C-35	磁器	瓶形蓋	灰白色	透明胎	曹州胎製	曹州胎製	6.2	2.4	0.0	昭和	18代後半	橋子文	
	1946	A-38-34	白磁	小径	白色	透明胎	曹州胎	曹州胎製	7.0	5.5	0.0	昭和	18代後半	曹州(一筆)焼文	
第 140 区	1947	B-34-24	磁器	小径	白色	透明胎	曹州胎	曹州胎製	5.0	2.4	0.3	昭和	18代後半		
	1948	E-44	磁器	小径	白色	透明胎	曹州胎	曹州胎製	6.0	2.6	0.4	昭和	18代	焼文	
	1949	C-38	津軽磁器	小径	白色	透明胎	曹州胎製	見込小径/自動製	6.2	1.9	2.7	中津川産物	18代	焼文	
	1950	B-35	I	磁器	皿	灰白色	透明胎	曹州胎製	見込小径/自動製	23.0	10.2	0.8	昭和	18代後半	コシヤツ印付瓦片 表面の遺物
	1951	A-9-30	磁器	皿	灰白色	透明胎	曹州胎	曹州胎製	-	14.0	-	昭和	18代後半	見込小径/コシヤツ印付 瓦片	
	1952	B-36-26	磁器	皿	白色	透明胎	曹州胎	曹州胎製	-	13.7	-	昭和	18代後半	見込小径/コシヤツ印付 瓦片	
	1953	A-30	磁器	皿	灰白色	透明胎	曹州胎	曹州胎製	-	-	-	昭和	18代後半	半筆焼文	
	1954	C-38	磁器	皿	灰白色	透明胎	曹州胎製	曹州胎製	-	-	-	昭和	18代後半	見込小径/コシヤツ印付 瓦片	
	1955	B-36	磁器	皿	白色	透明胎	曹州胎	曹州胎製	17.8	11.4	2.1	昭和	18代後半	橋子文	
	1956	B-36	磁器	皿	灰白色	透明胎	曹州胎	曹州胎製	-	6.4	-	昭和	17代中頃	橋子文	
第 141 区	1957	磁器	皿	灰白色	透明胎	曹州胎	曹州胎製	14.5	9.2	1.9	昭和	17代中頃	橋子文		
	1958	C-35	I	磁器	皿	灰白色	透明胎	曹州胎	曹州胎製	15.5	7.6	2.8	昭和	18代後半	見込小径/コシヤツ印付 瓦片
	1959	磁器	皿	灰白色	透明胎	曹州胎製	曹州胎製	12.8	6.4	0.0	昭和	18代後半	曹州(一筆)焼文		
	1960	C-36	磁器	皿	灰白色	透明胎	曹州胎	曹州胎製	13.2	9.2	3.1	昭和	18代後半	コシヤツ印付瓦片 表面の遺物	
	1961	B-34	磁器	皿	白色	透明胎	曹州胎	曹州胎製	13.2	8.2	2.4	昭和	18代後半	コシヤツ印付瓦片 表面の遺物	
	1962	C-36	I	磁器	皿	灰白色	透明胎	曹州胎	曹州胎製	-	8.0	-	昭和	18代後半	コシヤツ印付瓦片 表面の遺物
	1963	C-36	磁器	皿	灰白色	透明胎	曹州胎	曹州胎製	13.0	7.6	4.1	昭和	18代後半	コシヤツ印付瓦片 表面の遺物	
	1964	B-35	磁器	皿	白色	透明胎	曹州胎	曹州胎製	14.4	9.0	5.0	昭和	18代後半-19代前半	見込小径/コシヤツ印付 瓦片	
	1965	B-33	磁器	皿	灰白色	透明胎	曹州胎製	見込小径/自動製	13.8	7.6	4.8	昭和	18代後半	見込小径/コシヤツ印付 瓦片	
	1966	C-35	I	磁器	皿	灰白色	透明胎	曹州胎	曹州胎製	13.8	8.1	3.8	昭和	18代後半-19代前半	見込小径/コシヤツ印付 瓦片
第 142 区	1967	B-36	I	磁器	皿	黄白色	透明胎	外層磁器下層一筆内面黄緑胎 見込小径/自動製	13.0	4.6	3.8	昭和	18代後半-19代前半		
	1968	C-36	磁器	皿	白色	透明胎	曹州胎	曹州胎製	-	5.0	-	昭和	18代後半		
	1969	B-36	磁器	皿	白色	透明胎	曹州胎	曹州胎製	10.5	5.3	2.7	昭和	18代後半	見込小径/コシヤツ印付 瓦片	
	1970	A-10	I	磁器	皿	灰白色	透明胎	曹州胎	曹州胎製	10.1	5.0	3.1	昭和	18代後半	見込小径/コシヤツ印付 瓦片
	1971	磁器	皿	灰白色	透明胎	曹州胎	曹州胎製	曹州胎製	3.8	4.2	2.8	昭和	18代	焼文	
	1972	C-36	磁器	皿	灰白色	透明胎	曹州胎	曹州胎製	9.8	4.2	2.8	昭和	18代	焼文	
	1973	C-35	I	磁器	皿	灰白色	透明胎	曹州胎	曹州胎製	10.0	5.5	2.9	昭和	18代後半-19代前半	山水文
	1974	E-45	磁器	皿	灰白色	透明胎	曹州胎	曹州胎製	10.3	6.0	2.5	昭和	18代後半-19代前半	橋子文	
	1975	C-35	磁器	皿	灰白色	透明胎	曹州胎	曹州胎製	10.8	5.8	6.0	昭和	18代	焼文	
	1976	C-38	磁器	皿	灰白色	透明胎	曹州胎	曹州胎製	8.4	-	-	昭和	18代前半		
第 143 区	1977	磁器	皿	灰白色	透明胎	曹州胎製	曹州胎製	8.2	-	-	昭和	18代	焼文		
	1978	B-36-28	磁器	皿	灰白色	透明胎	曹州胎製	曹州胎製	12.8	-	-	昭和	18代	焼文	
	1979	C-38	I	磁器	皿	白色	透明胎	曹州胎製	曹州胎製	-	-	昭和	18代	焼文	
	1980	C-38	I	磁器	皿	白色	透明胎	曹州胎製	曹州胎製	-	-	昭和	18代	焼文	
	1981	C-38	I	磁器	皿	白色	透明胎	曹州胎製	曹州胎製	-	-	昭和	18代	焼文	
	1982	C-38	I	磁器	皿	白色	透明胎	曹州胎製	曹州胎製	-	-	昭和	18代	焼文	

近世土遺物観察表

調査番号	調査期	出土区	種別	種類	粘土の色澤	胎土	胎色	胎地	調査(㎝)		年代	時期	備考		
									口径	高さ					
第134区	1987	Q-25	I	磁器	黒	白色	透明胎	残存部分全無胎	9.7	-	肥前県	18代	磁器文		
	1987	Q-26		磁器	黒	白色	透明胎	裏付け胎割り	9.2	2.7	肥前県	16代～19代前期			
	1987	B-26		磁器	黒	灰白色	透明胎	裏付け胎割り	8.6	4.0	肥前県	18代後半			
	1987			磁器	黒	白色	透明胎	裏付け胎割り	9.0	4.0	肥前県	17代後半			
	1987	A-29-15a		磁器	黒	灰白色	透明胎	裏付け胎割り	10.6	2.1	肥前県	17代後半			
	1987	A-29		磁器	黒	白色	透明胎	外蓋蓋物	4.6	1.2	肥前県	18代			
	1987	A-30		磁器	白色(黄褐色)	灰白色	透明胎	残存部分全無胎	14.0	-	肥前県	17代～18代前期			
	1987	Q-25	II	磁器	淡黄	灰白色	透明胎	内蓋蓋物以下無胎	2.4	-	肥前県	18代	繪文		
	1987	Q-21		磁器	赤褐色	白色	透明胎	外蓋蓋物	8.0	4.2	肥前県	18代			
	1987	B-23-14		磁器	濃赤	灰白色	透明胎	内蓋無胎	裏付け胎割り	-	5.2	-	-		
	1987	B-23-25		磁器	濃赤	灰白色	透明胎	裏付け胎割り	内蓋口縁上縁無胎	2.4	7.2	22.0	肥前県(遺品)	19代後半	砂粒付
	第135区	1987	B-24		磁器	緑	淡黄色	透明胎	裏台部～裏台内蓋蓋物	11.0	4.8	4.6	肥前県	18代前半	繪付
1987		E-19		陶器	緑	白～灰褐色	反胎	外蓋蓋物～裏台内蓋蓋物	12.7	5.4	6.1	肥前県	16代～17代前期	底繪	
1987		Q-25		陶器	緑	白～灰褐色	反胎	外蓋蓋物～裏台内蓋蓋物	12.6	5.2	4.2	肥前県	16代～17代前期		
1987		A0-26-37	II	陶器	緑	褐色	高粘色胎	外蓋蓋物～裏台内蓋蓋物	-	4.9	-	肥前県	16代～17代前期		
1987		E-4		陶器	灰青緑	褐色	高粘	外蓋蓋物～裏台内蓋蓋物	-	3.6	-	肥前県	16代		
1987		E-9		陶器	緑	灰褐色	高粘	外蓋蓋物～裏台内蓋蓋物	-	6.7	-	肥前県	16代～17代前期	裏付け胎土目録番号付	
1987		E-9		陶器	緑	灰褐色	高粘	外蓋上縁無胎	裏台下内蓋蓋物	11.2	5.2	7.1	肥前県	16代～17代前期	
1987		Q-25	I	陶器	緑	淡黄色	(内)透明胎 (外)反胎	外蓋蓋物～裏台内蓋蓋物	10.2	4.0	3.9	肥前県	17代後半		
2007		Q-15		陶器	緑	灰白色	(内)透明胎 (外)反胎	外蓋蓋物～裏台内蓋蓋物	10.6	4.6	6.2	肥前県(内蓋口縁)	17代後半		
2007		陶器	緑	淡黄色	透明胎	裏付け胎割り	51.4	4.6	6.7	肥前県	17代後半	底繪半部			
2007		陶器	緑	淡黄色	透明胎	裏付け胎割り	12.4	3.2	6.3	肥前県	17代後半				
第136区		2007	Q-25		陶器	赤褐色	灰白色	透明胎	裏付け胎割り	10.0	4.0	3.9	肥前県	16代後半	底繪高粘胎
	2007	A-30		陶器	暗赤	褐色	透明胎	裏付け胎割り	10.8	4.4	5.7	肥前県	16代後半	底繪高粘胎	
	2007	陶器	暗赤	褐色	褐色	透明胎	裏付け～裏台内蓋蓋物	10.0	3.6	4.6	肥前県	16代前半	底繪高粘胎		
	2007	陶器	暗赤	褐色	褐色	透明胎	裏台～裏台内蓋蓋物	9.4	3.0	6.0	肥前県	16代前半	裏台内蓋蓋物 底繪高粘胎		
	2007	陶器	暗赤	褐色	褐色	透明胎	外蓋蓋物～裏台内蓋蓋物	7.0	3.9	3.6	肥前県	16代前半	裏台内蓋蓋物 底繪高粘胎		
	2007	B-24	III	陶器	緑	灰白色	反胎	外蓋蓋物～裏台内蓋蓋物	-	3.6	-	肥前県	16代前半	裏台内蓋蓋物 底繪高粘胎	
	2007	Q-26	III	陶器	緑	灰白色	白化粧土に透明胎	胎地	11.2	3.0	7.3	肥前県	16代前半		
	2010	陶器	緑	灰白色	白化粧土に透明胎	胎地	11.4	4.8	7.3	肥前県	16代前半				
	2011	A-31		陶器	緑	黄褐色	白化粧土に高粘胎	裏付け胎割り	-	4.0	-	肥前県	16代前半		
	2012	陶器	灰褐色	褐色	透明胎	裏付け胎割り	-	4.2	-	肥前県	16代前半	内蓋 打滑り目			
	2012	E-30		陶器	緑	灰白色	胎地	裏付け胎割り	13.0	4.7	6.0	鎌倉時代前半	17代後半	外蓋 白化粧土に高粘胎	
	第137区	2014	陶器	緑	灰白色	高粘	-	残存部分全無胎	12.5	-	-	鎌倉時代前半	17代後半	胎地繪半部	
2014		A0-25-18		陶器	緑	白～灰褐色	高粘	裏付け胎割り	裏台内蓋蓋物/胎割り	12.4	5.2	5.0	鎌倉時代前半	16代後半	
2014		陶器	緑	褐色	白化粧土に透明胎	裏台～裏台内蓋蓋物	裏台内蓋蓋物/胎割り	-	4.8	-	鎌倉時代前半	15代後半			
2017		Q-26		陶器	緑	白～灰褐色	胎地	裏台～裏台内蓋蓋物	裏台内蓋蓋物/胎割り	13.1	5.4	5.9	鎌倉時代前半	16代後半	
2018		Q-26		白磁器	黒	灰白色	透明胎	残存部分全無胎	8.0	-	-	鎌倉時代前半	16代前半	胎地	
2018		Q-26	II*	白磁器	黒	淡黄色	透明胎	残存部分全無胎	-	-	-	鎌倉時代前半	16代前半	胎地	
2020		白磁器	赤緑	灰白色	透明胎	裏付け胎割り	-	2.2	-	鎌倉時代前半	16代前半	胎地			
2021		B-23		陶器	黒	灰白色	反胎	外蓋蓋物～裏台内蓋蓋物	-	6.6	-	肥前県	16代～17代前期	胎地	
2022		B-27-37	I	陶器	黒	灰褐色	反胎	外蓋蓋物～裏台内蓋蓋物	19.0	6.4	3.6	肥前県	16代～17代前期	裏台内蓋蓋物/胎割り	
2022		E-19-20		陶器	赤	灰白色	反胎	裏付け～裏台内蓋蓋物	13.0	4.3	3.0	肥前県	1500～1610年	口縁繪胎地	
2024		E-18-19	II	陶器	黒	白～灰褐色	反胎	外蓋蓋物～裏台内蓋蓋物	12.0	4.2	3.2	肥前県	16代～17代前期	底繪 口縁	
第141区		2025	E-18		陶器	赤	灰白色	反胎	外蓋蓋物～裏台内蓋蓋物	11.1	6.1	3.1	肥前県	1500～1610年	
	2025	陶器	赤	灰白色	胎地	14.2	2.6	3.6	肥前県	16代～17代前期	裏台内蓋蓋物				
	2027	B-30		陶器	黒	灰白色	(内)反胎胎 (外)胎割り	外蓋蓋物～裏台内蓋蓋物	13.0	4.6	4.6	肥前県(胎地)	17代後半		
	2027	陶器	黒	灰白色	(内)胎割胎 (外)胎割胎	外蓋蓋物～裏台内蓋蓋物	裏台内蓋蓋物/胎割り	12.2	4.4	3.4	肥前県(胎地)	17代後半	胎地		
	2029	Q-26		陶器	黒	淡黄色	(内)胎割胎 (外)胎割胎	外蓋蓋物以下全無胎	裏台内蓋蓋物/胎割り	13.6	4.6	3.7	肥前県(胎地)	17代後半	
	2030	Q-30	II	陶器	赤	灰白色	胎地	外蓋蓋物～裏台内蓋蓋物	裏台内蓋蓋物/胎割り	-	5.2	-	肥前県(胎地)	17代	
	2031	陶器	赤	灰黄色	透明胎(高粘胎)	外蓋蓋物～裏台内蓋蓋物	裏台内蓋蓋物/胎割り	12.6	4.6	3.5	肥前県(胎地)	17代後半	胎地		
	2032	B-22-12	II	陶器	黒	白～灰褐色	白化粧土に透明胎	残存部分全無胎	14.0	-	-	肥前県	不明	胎地	
	2034	陶器	緑	灰褐色	胎地胎	外蓋中位以下無胎	28.0	-	-	肥前県	17代				
	2035	B-24	IV	陶器	緑	赤褐色	白化粧土に高粘胎	残存部分全無胎	-	-	-	肥前県	17代後半		
	2036	B-25-18	遺り	陶器	緑	灰褐色	白化粧土に高粘胎	残存部分全無胎	26.0	-	-	肥前県	17代後半		
	第142区	2037	F-3	IV	陶器	緑	黄褐色	胎地	残存部分全無胎	-	-	-	肥前県	17代後半	
2037		B-26		陶器	緑	灰白色	白化粧土に高粘胎	裏台内蓋蓋物	-	-	-	肥前県	16代後半		
2038		E-20		陶器	緑	赤褐色	(内)白化粧土～胎地	裏台部～裏台内蓋蓋物	-	10.6	-	肥前県	16代前半		
2040		Q-25	I	陶器	赤口	赤褐色	胎地	白胎割り胎割り	-	-	-	肥前県	17代後半		
2041		Q-25	I	陶器	赤口	灰白色	胎地	外蓋蓋物～裏台内蓋蓋物	-	8.2	-	肥前県	16代～17代前期		
2042		E-27		陶器	赤口	白～灰褐色	胎地	裏台部～裏台内蓋蓋物	16.0	3.2	7.6	肥前県	17代	内蓋蓋物に胎割り	
2042		Q-24	III	陶器	濃赤	白～灰褐色	胎地/白化粧土	外蓋蓋物以下内蓋蓋物	-	-	-	肥前県	16代後半		
2044		陶器	緑	灰白色	白化粧土に透明胎	裏付け胎割り	-	6.0	-	肥前県	16代後半				
2045		陶器	濃赤	赤褐色	胎地	内蓋上部胎割胎	-	-	-	鎌倉時代前半	17代後半				
2046		A-30		陶器	濃赤	褐色	胎地	内蓋上部胎割胎	-	-	鎌倉時代前半	17代後半			
2047		陶器	濃赤	褐色	胎地	残存部分全無胎	-	6.6	-	鎌倉時代前半	17代後半	外蓋蓋物胎割り			
2048		A-23	III	陶器	濃赤	褐色	胎地	残存部分全無胎	-	8.4	-	鎌倉時代前半	17代後半		
2049	Q-25		陶器	濃赤	褐色	胎地	-	12.6	-	鎌倉時代前半	17代後半				
第143区	2050	A-23	III	陶器	濃赤	褐色	胎地	残存部分全無胎	-	10.5	-	鎌倉時代前半	17代	胎地に目録番号付	
	2051	Q-25	I	陶器	濃赤	褐色	胎地	-	10.4	-	鎌倉時代前半	16代後半			
	2052	E-30		陶器	濃赤	赤褐色	胎地	-	5.6	-	鎌倉時代前半	16代後半	外蓋蓋物胎割り		

近世出土遺物観察表

調査番号	埋蔵層	出土区	種別	種類	形状・色	材質	用途	法量 (cm)		遺地	時期	備考
								口径	高さ			
第150区	2050	B-35	瓦	筒形	黒褐色	-	-	104	11.0	溝敷野代1	150後半	堂平集
	2054	B-35	瓦	筒形	黒	鉄製	上蓋筒形	5.0	3.6	溝敷野代1	150後半	
	2055	B-34	瓦	筒形	黒	鉄製	上蓋筒形	5.4	3.5	溝敷野代1	150後半	
	2056	D-36	筒形	筒形	黒褐色	鉄製	上蓋筒形	5.6	3.4	溝敷野代1	150後半	
	2057	-	筒形	筒形	黒褐色	鉄製	上蓋筒形	8.8	4.7	溝敷野代1	150後半	
	2058	C-36	筒形	筒形	黒	鉄製	上蓋筒形	-	-	溝敷野代1	溝敷野代1	溝敷野代1
	2059	D-A-30	筒形	水注	黄褐色	鉄製	口唇部短弁	6.0	-	溝敷野代1	150前半	
	2060	D-35-36	筒形	短弁	灰色	鉄製	外周部短弁	12.0	-	溝敷野代1	150後半	
	2061	D-36	筒形	土流	灰白色	鉄製	口唇部短弁	5.4	-	溝敷野代1	150後半	
	2062	D-34-35	筒形	土流	灰白色	鉄製	外周部短弁	7.0	4.4	溝敷野代1	150後半	
第151区	2063	C-35	筒形	土流	赤褐色	鉄製	外周部短弁	8.4	-	溝敷野代1	150後半	
	2064	B-34-35	筒形	土流	赤褐色	鉄製	外周部短弁	-	-	溝敷野代1	150後半	
	2065	B-34-35	筒形	土流	褐色	鉄製	外周部短弁	7.0	2.8	溝敷野代1	150後半	
	2066	B-33-34	筒形	土流	褐色	鉄製	外周部短弁	7.4	3.0	溝敷野代1	150後半	
	2067	筒形	土流	灰白色	鉄製	外周部短弁	7.4	3.5	溝敷野代1	150後半		
	2068	筒形	土流	褐色	鉄製	外周部短弁	8.5	-	溝敷野代1	150後半		
	2069	筒形	土流	褐色	鉄製	外周部短弁	8.0	3.0	溝敷野代1	150後半		
	2070	筒形	土流	褐色	鉄製	外周部短弁	12.0	-	溝敷野代1	150後半		
	2071	D-35	筒形	土流	灰白色	鉄製	口唇部短弁	17.2	-	溝敷野代1	150後半	
	2072	D-35	筒形	土流	灰白色	鉄製	口唇部短弁	14.0	-	溝敷野代1	150後半	
第152区	2073	A-36	筒形	土流	灰白色	鉄製	外周部短弁	14.4	-	溝敷野代1	150後半	
	2074	C-35-36	筒形	土流	灰色	鉄製	外周部短弁	-	-	溝敷野代1	150後半	
	2075	A-35-36	筒形	土流	褐色	鉄製	外周部短弁	-	-	溝敷野代1	150後半	
	2076	B-34-35	筒形	土流	褐色	鉄製	外周部短弁	10.7	3.4	溝敷野代1	150後半	
	2077	筒形	土流	褐色	鉄製	外周部短弁	16.8	3.4	溝敷野代1	150後半		
	2078	筒形	土流	褐色	鉄製	外周部短弁	17.7	-	溝敷野代1	150後半		
	2079	B-35	筒形	土流	褐色	鉄製	外周部短弁	16.7	-	溝敷野代1	150後半	
	2080	D-36	筒形	土流	褐色	鉄製	外周部短弁	20.2	10.7	溝敷野代1	150後半	
	2081	筒形	土流	褐色	鉄製	外周部短弁	25.4	13.0	溝敷野代1	150後半		
	2082	C-35	筒形	土流	灰白色	鉄製	口唇部短弁	25.8	14.4	溝敷野代1	150後半	
第153区	2083	A-36	筒形	土流	灰白色	鉄製	口唇部短弁	24.8	-	溝敷野代1	150後半	
	2084	筒形	土流	灰白色	鉄製	口唇部短弁	22.5	-	溝敷野代1	150後半		
	2085	筒形	土流	褐色	鉄製	口唇部短弁	-	-	溝敷野代1	150後半		
	2086	C-35	筒形	土流	褐色	鉄製	口唇部短弁	-	-	溝敷野代1	150後半	
	2087	E-35-36	筒形	土流	褐色	鉄製	口唇部短弁	32.4	-	溝敷野代1	150後半	
	2088	筒形	土流	褐色	鉄製	口唇部短弁	32.0	-	溝敷野代1	150後半		
	2089	D-35	筒形	土流	褐色	鉄製	口唇部短弁	32.8	-	溝敷野代1	150後半	
	2090	B-34-35	筒形	土流	褐色	鉄製	口唇部短弁	24.8	12.0	溝敷野代1	150後半	
	2091	E-36	筒形	土流	褐色	鉄製	口唇部短弁	26.6	12.8	溝敷野代1	150後半	
	2092	筒形	土流	褐色	鉄製	口唇部短弁	24.8	12.8	溝敷野代1	150後半		
第154区	2093	D-36	筒形	土流	褐色	鉄製	口唇部短弁	-	-	溝敷野代1	150後半	
	2094	E-9	筒形	土流	褐色	鉄製	口唇部短弁	-	-	溝敷野代1	150後半	
	2095	E-9	筒形	土流	褐色	鉄製	口唇部短弁	-	-	溝敷野代1	150後半	
	2096	E-9	筒形	土流	褐色	鉄製	口唇部短弁	-	-	溝敷野代1	150後半	
	2097	E-9	筒形	土流	褐色	鉄製	口唇部短弁	-	-	溝敷野代1	150後半	
	2098	E-9	筒形	土流	褐色	鉄製	口唇部短弁	-	-	溝敷野代1	150後半	
	2099	E-9	筒形	土流	褐色	鉄製	口唇部短弁	-	-	溝敷野代1	150後半	
	2100	E-9	筒形	土流	褐色	鉄製	口唇部短弁	-	-	溝敷野代1	150後半	
	2101	E-9	筒形	土流	褐色	鉄製	口唇部短弁	-	-	溝敷野代1	150後半	
	2102	E-9	筒形	土流	褐色	鉄製	口唇部短弁	-	-	溝敷野代1	150後半	
第155区	2103	E-9	筒形	土流	褐色	鉄製	口唇部短弁	-	-	溝敷野代1	150後半	
	2104	筒形	土流	褐色	鉄製	口唇部短弁	-	-	溝敷野代1	150後半		
	2105	筒形	土流	褐色	鉄製	口唇部短弁	-	-	溝敷野代1	150後半		
	2106	筒形	土流	褐色	鉄製	口唇部短弁	-	-	溝敷野代1	150後半		
	2107	A-31	筒形	土流	褐色	鉄製	口唇部短弁	24.8	8.0	溝敷野代1	150後半	
	2108	B-33-34	筒形	土流	褐色	鉄製	口唇部短弁	24.0	10.2	溝敷野代1	150後半	
	2109	筒形	土流	褐色	鉄製	口唇部短弁	24.0	10.2	溝敷野代1	150後半		
	2110	B-34	筒形	土流	褐色	鉄製	口唇部短弁	23.0	12.2	溝敷野代1	150後半	
	2111	B-34-35	筒形	土流	褐色	鉄製	口唇部短弁	28.8	13.2	溝敷野代1	150後半	
	2112	B-34-35	筒形	土流	褐色	鉄製	口唇部短弁	30.1	16.2	溝敷野代1	150後半	
第156区	2113	B-33-34	筒形	土流	褐色	鉄製	口唇部短弁	28.6	16.0	溝敷野代1	150後半	
	2114	F-13	筒形	土流	褐色	鉄製	口唇部短弁	31.3	14.3	溝敷野代1	150後半	
	2115	A-31	筒形	土流	褐色	鉄製	口唇部短弁	-	-	溝敷野代1	150後半	
	2116	E-7	筒形	土流	褐色	鉄製	口唇部短弁	28.4	-	溝敷野代1	150後半	
	2117	E-25	筒形	土流	褐色	鉄製	口唇部短弁	31.4	-	溝敷野代1	150後半	
	2118	E-25	筒形	土流	褐色	鉄製	口唇部短弁	35.8	21.4	溝敷野代1	150後半	
	2119	D-30	筒形	土流	褐色	鉄製	口唇部短弁	31.2	23.4	溝敷野代1	150後半	
	2120	筒形	土流	褐色	鉄製	口唇部短弁	29.0	23.4	溝敷野代1	150後半		
	2121	A-A-20-31	筒形	土流	褐色	鉄製	口唇部短弁	29.5	25.0	溝敷野代1	150後半	
	2122	B-35	筒形	土流	褐色	鉄製	口唇部短弁	30.0	23.4	溝敷野代1	150後半	
第157区	2123	E-25	筒形	土流	褐色	鉄製	口唇部短弁	29.0	22.2	溝敷野代1	150後半	
	2124	C-11	筒形	土流	褐色	鉄製	口唇部短弁	24.2	16.0	溝敷野代1	150後半	
	2125	B-35	筒形	土流	褐色	鉄製	口唇部短弁	23.2	16.0	溝敷野代1	150後半	
	2126	B-35	筒形	土流	褐色	鉄製	口唇部短弁	24.0	18.4	溝敷野代1	150後半	

近世出土遺物観察表

探出 番号	発掘 番号	出土区	階位	種類	器種	粘土の色調	胎素	胎形	法量 (cm)		用途	時期	備考	
									口径	高さ				
第159区	2126	B-12	瓦	陶管	瓦	灰白色	鉄粒多々?	口唇部割断か?	30.0	-	-	鎌倉時代 15世紀	口唇部に溝あり(中央部より)	
	2127		陶管	管	赤褐色	鉄粒	残存部全面焼結	35.6	-	-	鎌倉時代 15世紀	口唇部に溝あり		
	2128	A-30	瓦	陶管	管	赤褐色	鉄粒	口唇部割断	29.2	-	-	鎌倉時代 15世紀		
	2129	A-30-31		陶管	管	黄白色	鉄粒	口唇部割断	36.2	-	-	鎌倉時代 15世紀		
	2130	B-29		陶管	管	赤褐色	鉄粒	口唇部割断	34.2	-	-	鎌倉時代 15世紀		
	2131	B-29		陶管	管	白っぽい褐色	鉄粒	口唇部割断	37.0	-	-	鎌倉時代 15世紀	口唇部に溝あり	
	2132		陶管	管	緑褐色	鉄粒	口唇部割断	32.0	-	-	鎌倉時代 16世紀			
	2133		陶管	管	赤褐色	鉄粒	残存部全面焼結	-	-	-	鎌倉時代 16世紀			
	2134	A-23	瓦	陶管	管	赤褐色	鉄粒	口唇部割断	38.8	-	-	鎌倉時代 16世紀		
	2135		陶管	管	赤褐色	鉄粒	口唇部全面焼結	21.0	-	-	鎌倉時代 16世紀			
第160区	2136	B-27	部分	陶管	管	明赤褐色	鉄粒	残存部全面焼結	-	-	-	鎌倉時代 16世紀		
	2137		陶管	管	明赤褐色	鉄粒	残存部全面焼結	-	27.3	-	-	鎌倉時代 16世紀		
	2138		陶管	管	赤褐色	鉄粒	口唇部割断	21.0	-	-	鎌倉時代 16世紀			
	2139	C-35	1	陶管	管	赤褐色	鉄粒	口唇部割断	26.8	-	-	鎌倉時代 16世紀		
	2140	B-35	1	陶管	管	黄褐色	鉄粒	口唇部割断	40.4	-	-	鎌倉時代 16世紀		
	第161区	2141		陶管	管	黄白色	鉄粒	外表面に漆塗り	-	25.8	-	-	鎌倉時代 16世紀	
		2142	A-31		陶管	管	黄白色	鉄粒	口唇部割断	15.4	-	-	鎌倉時代 16世紀	口唇部に溝あり
		2143		陶管	管	灰白色	鉄粒	口唇部割断	16.0	-	-	鎌倉時代 16世紀	口唇部に溝あり	
		2144	C-28	瓦	陶管	管	白っぽい褐色	鉄粒	口唇部割断	15.0	-	-	鎌倉時代 16世紀	口唇部に溝あり
		2145	平塚区 E-31		陶管	管	白っぽい褐色	鉄粒	口唇部割断	21.0	-	-	鎌倉時代 16世紀	
2146		A-26-28		陶管	管	灰褐色	鉄粒	口唇部割断	16.0	-	-	鎌倉時代 16世紀		
2147		B-13	1b	陶管	管	黄白色	鉄粒	口唇部割断	16.8	-	-	鎌倉時代 16世紀	口唇部に溝あり	
2148		D-34	瓦	陶管	管	白っぽい黄褐色	鉄粒	残存部全面焼結	16.9	-	-	鎌倉時代 16世紀	口唇部にイヤワイヤの痕跡あり	
2149		B-35		陶管	管	灰白色	鉄粒	残存部全面焼結	17.6	-	-	鎌倉時代 16世紀	口唇部にイヤワイヤの痕跡あり	
2150			陶管	管	緑褐色	鉄粒	残存部全面焼結	8.4	-	-	鎌倉時代 16世紀	口唇部に溝あり(変形)		
第162区	2151		陶管	管	灰白色	鉄粒	口唇部割断	12.0	-	-	鎌倉時代 16世紀			
	2152	D-26-28		陶管	管	緑褐色	鉄粒	残存部全面焼結	11.0	-	-	鎌倉時代 16世紀		
	2153	B-35		陶管	管	白っぽい褐色	鉄粒	口唇部割断	10.4	-	-	鎌倉時代 16世紀		
	2154	D-25	瓦	陶管	管	赤褐色	鉄粒	口唇部割断	-	-	-	鎌倉時代 16世紀		
	2155	D-26	瓦	陶管	管	赤褐色	-	-	14.6	-	-	鎌倉時代 16世紀		
	2156		陶管	管	赤褐色	-	-	-	15.4	-	-	鎌倉時代 16世紀		
	2157	D-26-28	瓦	陶管	管	赤褐色	-	-	18.8	-	-	鎌倉時代 16世紀		
	2158	D-24-D-27	瓦	陶管	管	赤褐色	-	-	-	16.6	-	-	鎌倉時代 16世紀	
	2159	D-26	瓦	陶管	管	赤褐色	-	-	-	21.2	-	-	鎌倉時代 16世紀	
	2160	D-24	瓦	陶管	灯籠皿	赤褐色	鉄粒	外面口縁下位一内表面露出	10.8	4.9	2.3	鎌倉時代 16世紀	裏面にゴブツ目あり	
第163区	2161	D-24-D-26	瓦	陶管	灯籠皿	黄褐色	鉄粒	外面口縁下位一内表面露出	10.4	4.1	2.3	鎌倉時代 16世紀	裏面にゴブツ目あり	
	2162	C-25	1b	陶管	灯籠皿	赤褐色	鉄粒	外面露出	-	3.4	-	鎌倉時代 16世紀		
	2163	D-16		陶管	灯籠皿	灰白色	鉄粒	外面露出	-	3.4	-	鎌倉時代 16世紀		
	2164	D		陶管	灯籠皿	灰白色	鉄粒	残存部全面焼結	-	-	-	鎌倉時代 16世紀		
	2165		陶管	燈罩	瓦	赤褐色	鉄粒	外面露出(下位)	11.2	5.0	6.6	室町 16世紀		
	2166	C-30		陶管	燈罩	白っぽい褐色	鉄粒	白土質土(表面露出)	13.0	-	-	室町 16世紀		
	2167	F-2	1a	陶管	燈罩	灰白色	鉄粒	白土質土(表面露出)	9.8	5.2	6.1	室町 16世紀		
	2168	E-28		陶管	燈罩	緑褐色	鉄粒	外面(内表面口縁下位)露出	11.4	4.4	4.9	鎌倉時代 16世紀		
	2169		陶管	燈罩	白っぽい褐色	鉄粒	外面(内表面口縁下位)露出	-	5.8	-	-	鎌倉時代 16世紀		
	2170	A-27-28		陶管	燈罩	灰白色	鉄粒	白土質土(表面露出)	10.0	10.0	6.1	鎌倉時代 16世紀		
第164区	2171	C-35		陶管	鉢か?	黄白色	透物	外面露出	-	6.9	-	室町 15世紀		
	2172	B-35		土製品	土製土器	褐色	鉄粒	口唇部割断	20.0	15.0	2.4	鎌倉時代 16世紀	外面に漆塗り	
	2173	B-35		瓦	瓦	黄褐色	鉄粒	口唇部割断	31.2	-	-	鎌倉時代 16世紀		
	2174	E-25		瓦	瓦	灰白色	-	-	-	25.4	-	-	鎌倉時代 16世紀	
	2175	D-24	瓦	瓦	軒平瓦	赤褐色	-	-	-	-	-	-	鎌倉時代 16世紀	
	2176	F-18	瓦	土製品	土形	褐色	-	-	-	-	-	-	鎌倉時代 16世紀	
	2177	D-25		陶管	のび	白っぽい褐色	-	-	-	3.8	-	-	鎌倉時代 16世紀	
	2178			陶管	のびか?	灰白色	-	-	-	4.8	1.6	1.1	平朝 平朝	漆塗りの遺物か?

金属製品観察表

探出 番号	発掘 番号	種類	器種	遺物名	出土区	法量 (cm)			重量 (g)	備考
						最大径	最大幅	最大厚		
第146区	771	銅製品		管穴銅線	C-D-20-21	3.2	2.7	1.10	8.0	
第176区	752	銅製品	燈籠	土製土	D-20	6.7	0.8	4.0	4.0	
第201区	881	銅製品	鉄線か?	ビツカ41	D-15	3.8	3.65	0.5	11.0	鉄造製品
	882	銅製品	鉄線か?	ビツカ42	D-15	5.4	4.3	1.1	2.3	鉄造製品
	883	銅製品	六弁花形金環金具	ビツカ43	D-9	2.6	2.4	0.5	3.0	鍍金あり
	888	銅製品	鉄線か?	溝?	A-27	5.1	2.6	0.5	21.0	鉄造製品

探出 番号	発掘 番号	種類	器種	出土区	階位	法量 (cm)			重量 (g)	備考	
						最大径	最大幅	最大厚			
第165区	2180	銅製品	短刀	C-37	区	26.6	2.6	0.6	138.0		
	2181	銅製品	短刀	D-27	区	18.1	2.35	0.4	41.0		
	2182	銅製品	短刀	F-25	区	26.7	2.75	0.9	89.0		
	2183	銅製品	短刀	F-11	区	17.6	2.0	0.5	27.6		
	2184	銅製品	鐙	F-3	区	24.0	3.8	0.6	72.0		
	2185	銅製品	竹刀(シノナカ)	D-25-26	区	11.8	1.7	0.7	14.0		
	2186	銅製品	竹刀(シノナカ)	B-37	区	4.8	1.5	0.25	5.0		
	2187	銅製品	へら状製品	B-37	区	6.6	1.65	0.45	11.0		
	2188	銅製品	大型釘	D-21	区	12.25	1.2	1.0	42.0		
	2189	銅製品	短針状製品	D-25	区	1.1	1.1	0.8	0.4		
第166区	2190	銅製品	短針状製品	E-26	区	4.6	1.7	0.9	16.0		
	2191	銅製品	鐙	A-23	区	3.1	1.8	0.6	3.0	透物	
	2192	銅製品	鐙	A-24	区	2.4	1.3	0.5	5.0	透物	
	2193	銅製品	短針	B-5	区	6.5	3.2	0.5	14.0		
	2194	銅製品	短針	D-25	区	2.7	3.8	1.5	9.0		
	第167区	2195	銅製品	短針	A-30	区	3.5	1.8	0.6	3.0	
		2196	銅製品	短針	A-30	区	3.5	1.8	0.6	3.0	
		2197	銅製品	短針	A-30	区	3.5	1.8	0.6	3.0	
2198		銅製品	短針	A-30	区	3.5	1.8	0.6	3.0		
2199		銅製品	短針	A-30	区	3.5	1.8	0.6	3.0		
2200		銅製品	短針	A-30	区	3.5	1.8	0.6	3.0		
2201		銅製品	短針	A-30	区	3.5	1.8	0.6	3.0		
2202		銅製品	短針	A-30	区	3.5	1.8	0.6	3.0		

※探出番号(46区)第176区(第201区)第203区は中世遺物



## 第4章 自然科学分析

### 第1節

#### 芝原遺跡出土製鉄・鍛冶・ 青銅関連遺物の金属学的調査

九州テクノリサーチ・TACセンター  
大澤正己・鈴木瑞穂

#### 1. いきざつ

芝原遺跡は鹿児島県南さつま市金峰町に所在する。縄文時代中期から近世にわたる複合遺跡である。調査地区内からは中世末～近世初頭と推定される鉄滓等の製鉄・鍛冶関連遺物が多量に出土している。遺跡内での生産の実態を検討する目的から金属学的調査を行う運びとなった。

#### 2. 調査方法

##### 2-1. 供試材

Table 1に示す。製鉄・鍛冶・青銅関連遺物計21点の調査を行った。

##### 2-2. 調査項目

###### (1) 肉眼観察

遺物の外観上の観察所見を記載した。これらの記載をもとに分析試料採取位置を決定している。

###### (2) 顕微鏡組織

滓中に晶出する鉱物及び鉄部の調査を目的として、光学顕微鏡を用い観察を実施した。観察面は供試材を切り出した後、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の3 $\mu$ と1 $\mu$ で順を追って研磨している。また金属鉄の腐食には3%ナイトル(硝酸アルコール液)、酢酸・硝酸・アセトン混合液を用いた。

###### (3) EPMA (Electron Probe Micro Analyzer) 調査

化学分析を行えない微量試料や鉱物組織の微小域の組織同定を目的とする。

分析の原理は、真空中で試料面(顕微鏡試料併用)に電子線を照射し、発生する特性X線を分光後に画像化し、定性的な結果を得る。更に標準試料とX線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。

反射電子像(COMP)は、調査面の組成の違いを明瞭に表示するものである。重い元素で構成される金属(合金)や鉄滓中の結晶は明るく、軽い元素で構成される晶出物ほど暗い色調で示される。これを利用して組成の違いを確認後、定量分析を実施している。また元素の分布状態を把握するため、反射電子像に加えて、適宜特性X線像の撮影も行った。

###### (4) 化学組成分析

供試材の分析は次の方法で実施した。

全鉄分(Total Fe)、金属鉄(Metallic Fe)、酸化第一鉄(FeO):容量法。

炭素(C)、硫黄(S):燃焼容量法、燃焼赤外吸収法  
二酸化硅素(SiO<sub>2</sub>)、酸化アルミニウム(Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)、酸化カルシウム(CaO)、酸化マグネシウム(MgO)、酸化カリウム(K<sub>2</sub>O)、酸化ナトリウム(Na<sub>2</sub>O)、酸化マンガニン(MnO)、二酸化チタン(TiO<sub>2</sub>)、酸化クロム(Cr<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)、五酸化燐(P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>)、バナジウム(V)、銅(Cu)、二酸化ジルコニウム(ZrO<sub>2</sub>): ICP (Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer) 法:誘導結合プラズマ発光分光分析。

### 3. 調査結果

#### SIB-1: 炉壁

(1) 肉眼観察: 熱影響を受けて内面が黒色ガラス質化した、大型で厚手の炉壁片である。内面表層には着磁性の強い黒灰色の滓部や茶褐色の鉄錆が溶着する箇所も観察される。側面2面は直線状で、築炉時の粘土塊の接合面の可能性が考えられる。胎土は粘土質で、小礫や砂粒、赤色スコリアなどが含まれている。また微細な有機質の混和物が目につく。

(2) 顕微鏡組織: Photo. 1①～③に示す。①の明灰色部は錆化鉄である。また下側の暗色部は炉壁内面の溶融物(黒色ガラス質滓)で、②③はその拡大である。ガラス質滓中には炉材粘土中に混和された砂粒が散在している。さらに滓中のごく微細な明白色部は金属鉄である。3%ナイトルで腐食したところ、ほとんど炭素を含まないフェライト(Ferrite:  $\alpha$ 鉄)単相の組織であった。

内面に金属鉄(またはその錆化物)が溶着することから、当炉壁は製鉄炉の炉壁片と推測される。

#### SIB-2: 砂鉄

(1) 肉眼観察: 遺跡内に集積した砂鉄である。砂鉄粒子は磨耗してやや丸みを帯びたものが多い。また砂鉄以外には斜長石、角閃石、輝石類などの無色・有色鉱物が混在する。地域周辺に分布する火山噴出物起源の砂鉄を採取している。

(2) 顕微鏡組織: Photo. 1④～⑥に示す。灰褐色粒は砂鉄(磁鉄鉱または含チタン鉄鉱<sup>(註1)</sup>)である。粒内の暗色多角形結晶は燐灰石[Apatite: Ca<sub>5</sub>(PO<sub>4</sub>)<sub>3</sub>F]と推定される。鹿児島県下の砂鉄には、粒内に微細な燐灰石が多数含まれる事例が多い<sup>(註2)</sup>が、当遺跡でも同様の特徴が確認された。暗色粒は斜長石、角閃石、輝石類などの鉱物である。反射顕微鏡下で観察してい

るため、光を透過する鉱物とは暗い色調になる。

SIB-2: 砂鉄は、平成14年度に調査したSBH-1: 砂鉄とはほぼ同じ地点の砂鉄と判断されるため、その時に分析したSBH-1: 砂鉄の化学組成について報告する。  
(3) 化学組成分析: Table 2に示す。全鉄分 (Total Fe) 54.10%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.05%、酸化第1鉄 (FeO) 31.62%、酸化第2鉄 ( $Fe_2O_3$ ) 42.20%の割合であった。主に砂鉄以外の無色・有色鉱物に含まれる造滓成分 ( $SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO + K_2O + Na_2O$ ) 12.23%で、このうち塩基性成分 ( $CaO + MgO$ ) は2.83%である。砂鉄 (含チタン鉄鉱) に含まれる二酸化チタン ( $TiO_2$ ) 11.72%と高値で、バナジウム (V) は0.24%であった。また酸化マンガン (MnO) は0.59%、銅 (Cu) <0.01%である。さらに五酸化燐 ( $P_2O_5$ ) は0.50%と高値傾向を示した。

遺跡内の採取砂鉄は、地塊周辺に分布する火山噴出物起源の高チタン ( $TiO_2$ ) 砂鉄と推定される。磨耗して丸みを帯びた粒の割合が高いことから、近接する河川または海浜部に堆積した砂鉄を採取して製鉄原料とした可能性が高いと考えられる。

### SIB-3: 炉外流出滓

- (1) 肉眼観察: やや小型で厚手の炉外流出滓の破片である。上面は滑らかで複数条の流動痕が残る。他の面はすべて破面で、内部に気孔は散在するが、緻密で重量感のある滓である。
- (2) 顕微鏡組織: Photo. 2①~③に示す。淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル ( $Ulvöspinel: 2FeO \cdot TiO_2$ )、淡灰色柱状結晶ファヤライト ( $Fayalite: 2FeO \cdot SiO_2$ ) が晶出する。砂鉄製錬滓の晶癖である。
- (3) 化学組成分析: Table 2に示す。全鉄分 (Total Fe) 46.62%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.06%、酸化第1鉄 (FeO) 51.23%、酸化第2鉄 ( $Fe_2O_3$ ) 9.64%の割合であった。造滓成分 ( $SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO + K_2O + Na_2O$ ) は18.69%と低めで、このうち塩基性成分 ( $CaO + MgO$ ) は4.48%であった。砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン ( $TiO_2$ ) 17.92%と高値で、バナジウム (V) は0.26%であった。また酸化マンガン (MnO) は0.81%、銅 (Cu) <0.01%である。五酸化燐 ( $P_2O_5$ ) は0.69%と高値であった。

当鉄滓はチタン ( $TiO_2$ )、燐 ( $P_2O_5$ ) の高値傾向が顕著であり、地塊の火山噴出物起源の砂鉄を原料とした製錬滓と特定できる。

### SIB-4: 鉄塊系遺物

- (1) 肉眼観察: 表面全体が黄褐色の土砂で覆われた鉄塊系遺物の破片と推定される。特殊金属探知機のL (●) で反応があり、内部にはまともな金属鉄部が存在する。表面には錆化に伴う放射割れも生じている。一方表面には広い範囲で暗灰色の滓部も観察される。

内部には細かい気孔が散在するが緻密である。

- (2) 顕微鏡組織: Photo. 2④~⑥に示す。④の明色部は金属鉄で、⑤はその拡大である。3%ナイトルで腐食したところ、フェライト単相~重共析組織 (C < 0.77%) が確認された。またフェライト結晶には燐 (P) が固溶している結晶粒が粗大化している部分がみられる。黒色層状のパーライト (Pearlite) 組織の面積率からは、炭素含有量が0.1%前後の亜共析と推定される。  
④の右下は滓部で⑥はその拡大である。淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル、白色針状結晶イルミナイト (Ilmenite:  $FeO \cdot TiO_2$ ) が晶出する。比較的高温で生じた砂鉄製錬滓の晶癖である<sup>(注3)</sup>。

付着滓の鉱物組成から、当該塊系遺物は地塊の火山噴出物起源の砂鉄を製鉄原料としたものと判断される。また金属鉄部は比較的炭素含有量の低い軟鉄 (低炭素鋼) であるが、内部に燐 (P) の影響が確認された。

### SIB-5: 羽口

- (1) 肉眼観察: 熱影響を受けて外面がガラス質化した羽口先端部の破片である。暗灰色の滓が帯状に固着しており、下面側の小破片と推定される。滓部は細かい凹凸があり、着磁性の強い箇所と弱い箇所をもつ。羽口胎土部分は緻密な粘土質で、微細な有機質の混和物が観察される。
- (2) 顕微鏡組織: Photo. 3①~③に示す。①は付着滓部分の拡大である。淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル、白色粒状結晶ウスタイト ( $Wustite: FeO$ )、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。砂鉄を始発原料とする精錬鍛冶滓の晶癖である。  
②③の明白色部はガラス質滓中の金属鉄で、3%ナイトルで腐食した組織を示している。炭素をほとんど含まないフェライト単相の組織であった。  
付着滓の鉱物組成から、当羽口は鍛冶原料 (製鉄塊系遺物) の不純物除去 (精錬鍛冶作業) に用いられた羽口破片と推定される。

### SIB-6: 焼形鍛冶滓

- (1) 肉眼観察: 平面不整形面やや扁平な2240gと特大の焼形鍛冶滓である。長軸片側に弧状の窪み部分があり、羽口からの送風痕跡の可能性が考えられる。表面は広い範囲が茶褐色の鉄錆や土砂で覆われるが、特殊金属探知機での反応はない。また上下面とも細かい木炭痕による凹凸が多数残る。滓の地の色調は暗灰色で、細かい気孔がみられるが、重量感のある滓である。
- (2) 顕微鏡組織: Photo. 3④~⑥に示す。滓中には白色微細樹枝状結晶ウスタイト、淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。砂鉄を始発原料とする精錬鍛冶滓の晶癖といえる。

(3) 化学組成分析: Table 2に示す。全鉄分 (Total Fe) 43.36% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.06%、酸化第1鉄 (FeO) 38.66%、酸化第2鉄 (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) 18.94%の割合であった。造洋成分 (SiO<sub>2</sub>+Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>+CaO+MgO+K<sub>2</sub>O+Na<sub>2</sub>O) 32.28%で、このうち塩基性成分 (CaO+MgO) は3.50%である。製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO<sub>2</sub>) 3.34%、バナジウム (V) 0.12%であった。酸化マンガン (MnO) は0.28%、銅 (Cu) <0.01%である。五酸化燐 (P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>) は0.65%と高値であった。

当鉄洋は遺跡出土砂鉄 (SBH-1) や製錬滓 (SIB-3) と比較すると、製鉄原料の砂鉄起源の珪石成分 (TiO<sub>2</sub>, V, MnO) の低減傾向を示すことから精錬鍛冶滓に分類される。また砂鉄や製錬滓と同様燐 (P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>) の高値傾向がみられることから、やはり在地の砂鉄を製錬してできた鍛冶原料鉄 (製錬鉄塊系遺物) の不純物除去作業での反応副生物と考えられる。

#### SIB-7: 梶形鍛冶滓

(1) 肉眼観察: 約1/4が欠損しているが本来の平面は楕円状で、厚みのある1419gと大型の梶形鍛冶滓である。表面は広い範囲で茶褐色の鉄錆や土砂で覆われる。錆化鉄部には比較的着磁性の強い箇所が複数あるが、特殊金属探知機での反応はない。洋の地の色調は暗灰色で上下面とも木炭痕が多数散在する。下面には微細な木炭も複数付着する。破面には大小の気孔が散在するが、重量感のある洋である。

(2) 顕微鏡組織: Photo.4①~③に示す。洋中には淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル、白色微細樹枝状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。砂鉄を始発原料とする精錬鍛冶滓の晶癖といえる。

(3) 化学組成分析: Table 2に示す。全鉄分 (Total Fe) 47.76% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.07%、酸化第1鉄 (FeO) 42.32%、酸化第2鉄 (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) 21.15%の割合であった。造洋成分 (SiO<sub>2</sub>+Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>+CaO+MgO+K<sub>2</sub>O+Na<sub>2</sub>O) 27.26%で、このうち塩基性成分 (CaO+MgO) は4.37%である。また製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO<sub>2</sub>) は4.64%、バナジウム (V) 0.13%であった。酸化マンガン (MnO) は0.38%、銅 (Cu) <0.01%である。また五酸化燐 (P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>) は0.60%と高値であった。

当鉄洋は梶形鍛冶滓 (SIB-7) と近似する鉱物・化学組成であり、精錬鍛冶滓に分類される。

#### SIB-8: 梶形鍛冶滓

(1) 肉眼観察: 平面不整形をした、260gの中型で完形の梶形鍛冶滓である。やや扁平で下面は細かい木炭痕による凹凸が著しい。表面は全体に茶褐色の鉄錆や土砂で覆われる。土砂中にはごく微細な木炭破片や鍛

造剥片が含まれる。着磁性の強い部分があるが、特殊金属探知機での反応はない。また表面には気孔がほとんどなく緻密で重量感のある洋である。

(2) 顕微鏡組織: Photo.4④~⑥に示す。④の左上は鉄洋表面に付着した土砂で、内部にごく微細な鍛造剥片が複数含まれている。⑤はその拡大である。一方④右下は洋部で⑥はその拡大である。白色微細樹枝状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。鉄チタン酸化物の結晶はなく、鍛錬鍛冶滓の晶癖といえる。

(3) 化学組成分析: Table 2に示す。全鉄分 (Total Fe) 46.06% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.23%、酸化第1鉄 (FeO) 37.87%、酸化第2鉄 (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) 23.44%の割合であった。造洋成分 (SiO<sub>2</sub>+Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>+CaO+MgO+K<sub>2</sub>O+Na<sub>2</sub>O) 30.72%で、このうち塩基性成分 (CaO+MgO) は2.07%である。製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO<sub>2</sub>) は0.31%、バナジウム (V) も0.02%と低値であった。酸化マンガン (MnO) 0.07%、銅 (Cu) <0.01%も低い。五酸化燐 (P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>) は0.30%とやや高値であった。

当鉄洋は製鉄原料の砂鉄起源の珪石成分 (TiO<sub>2</sub>, V, MnO) の影響がほとんどなく、鍛錬鍛冶滓に分類される。

#### SIB-9: 梶形鍛冶滓 (ガラス質洋)

(1) 肉眼観察: 93gと小型で完形の梶形鍛冶滓である。ガラス質で軽く、炉材粘土 (羽口・炉壁) または鍛接剤 (粘土汁・薬灰) などの溶融物主体の洋と考えられる。上下面ともごく細かい木炭痕が多数残る。

(2) 顕微鏡組織: Photo.5①~③に示す。素地部分は黒色ガラス質洋で、内部には熱影響を受けた無色鉱物が点在する。これは炉材粘土中に含まれていた砂粒の可能性が考えられる。また微細な明白色粒は金属鉄で、②③はその拡大である。3%ナイトルで腐食したところ炭素をほとんど含まないフェライト単相の組織が確認された。

(3) 化学組成分析: Table 2に示す。全鉄分 (Total Fe) は9.84%と非常に低値であった。このうち金属鉄 (Metallic Fe) は0.18%、酸化第1鉄 (FeO) 6.47%、酸化第2鉄 (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) 6.62%の割合である。造洋成分 (SiO<sub>2</sub>+Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>+CaO+MgO+K<sub>2</sub>O+Na<sub>2</sub>O) 84.08%と非常に高値であるが、塩基性成分 (CaO+MgO) は4.46%と低めであった。また製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO<sub>2</sub>) は0.66%、バナジウム (V) も0.02%と低値であった。酸化マンガン (MnO) も0.11%、銅 (Cu) <0.01%と低い。五酸化燐 (P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>) は0.26%であった。

当鉄洋は粘土溶融物 (SiO<sub>2</sub>, Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>主成分) 主体の鍛錬鍛冶滓に分類される。

### SIB-10：流出孔滓（鍛冶・含鉄）

(1) 肉眼観察：平面楕円状でやや小形偏平な605gの楕形鍛冶滓の端部から、棒状の流出孔滓が伸びたものと推測される。また楕形滓部分では鉄部の錆化に伴う放射割れが顕著であり、特殊金属探知機での反応はないものの、まとまった鉄部が存在する可能性が考えられる。また流出孔部分は断面楕円状で、破面では中小の気孔が放射状に分布するが、密着で重量感のある滓である。

(2) 顕微鏡組織：Photo.5④～⑥に示す。滓中には淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル、白色微細樹枝状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。砂鉄を始発原料とする精錬鍛冶滓の晶癖といえる。

(3) 化学組成分析：Table 2に示す。全鉄分 (Total Fe) 52.50% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.05%、酸化第1鉄 (FeO) 21.77%、酸化第2鉄 (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) 50.80% の割合であった。造滓成分 (SiO<sub>2</sub> + Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub> + CaO + MgO + K<sub>2</sub>O + Na<sub>2</sub>O) 15.46% と低めで、塩基性成分 (CaO + MgO) も2.73% と低値である。製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO<sub>2</sub>) 1.97%、バナジウム (V) 0.08% であった。また酸化マンガン (MnO) は0.14%、銅 (Cu) <0.01% である。五酸化燐 (P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>) は0.53% と高値傾向を示した。

当鉄滓は製鉄原料の砂鉄起源の脈石成分 (TiO<sub>2</sub>, V, MnO) の影響が残ることから、精錬鍛冶後半段階の反応副生物と推測される。

### SIB-11：流出孔滓（鍛冶）

(1) 肉眼観察：120gと小形で偏平な楕形鍛冶滓の端部から、やや偏平な棒状の流出孔滓が伸びたものと推測される。流出孔滓 (SIB-10) と比較すると全体に小型で、まとまった鉄部はみられない。楕形滓部分の下面は細かい木炭痕による凹凸が著しい。流出孔部分も細かい凹凸があり、流動性は弱いものと推測される。

(2) 顕微鏡組織：Photo.6①～③に示す。白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。またウスタイト粒内の微細な淡茶褐色多角形結晶はウルボスピネルと推定される。③中央の微細舞白色粒は金属鉄で、3% ナイタルで腐食したところ、ほとんど炭素を含まないフェライト単相の組織が確認された。

(3) 化学組成分析：Table 2に示す。全鉄分 (Total Fe) 57.47% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.17%、酸化第1鉄 (FeO) 55.76%、酸化第2鉄 (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) 19.96% の割合であった。造滓成分 (SiO<sub>2</sub> + Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub> + CaO + MgO + K<sub>2</sub>O + Na<sub>2</sub>O) 18.72% と低めで、このうち塩基性成分 (CaO + MgO) は2.84% である。製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO<sub>2</sub>) は

1.38%、バナジウム (V) 0.03% であった。酸化マンガン (MnO) は0.12%、銅 (Cu) <0.01% である。五酸化燐 (P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>) は0.53% と高値傾向を示した。

当鉄滓は流出孔滓 (SIB-10) と同様、脈石成分 (TiO<sub>2</sub>, V, MnO) の影響が残ることから、精錬鍛冶後半段階の反応副生物と推測される。

### SIB-12：粒状滓（イ）鍛造剥片（口）

イ-1, 8.0mm径

(1) 肉眼観察：黒灰色で重なる球状の粒状滓様遺物である。表面には部分的に薄く茶褐色の鉄錆が付着する。全体に着磁性が強く、表面に気孔はみられない。

(2) 顕微鏡組織：Photo.6④⑤に示す。内部は空洞化し、滓中にはウスタイトが凝集して晶出する。

イ-2, 8.3mm径

(1) 肉眼観察：大ききの異なる二つの粒状滓様遺物が溶着している。色調は暗灰色で、どちらも重なる球状を呈する。表面にはごく微細な気孔が散在しており、着磁性は弱い。

(2) 顕微鏡組織：Photo.6⑥⑦に示す。どちらもともに粘土溶融物 (ガラス質) であった。また内部の微細明白色粒は金属鉄である。SIB-9楕形鍛冶滓的な鍛冶に関連した派生物。

イ-3, 3.5mm径

(1) 肉眼観察：やや大型で比較的にきれいな球状の粒状滓である。色調は暗灰色で、表面にはごく微細な棘状の突起がみられるが、全体に平滑である。着磁性は強い。

(2) 顕微鏡組織：Photo.7①②に示す。滓中にはウスタイトが凝集して晶出する。

イ-4, 2.8mm径

(1) 肉眼観察：比較的にきれいな球状の粒状滓である。色調は暗灰色で、表面には1箇所微細な鍛造剥片が付着する。表面は平滑で気孔はなく、着磁性は強い。

(2) 顕微鏡組織：Photo.7③④に示す。写真上側にごく微細な鍛造剥片が固着している。また内部空洞化の外周滓中にはごく微細なウスタイトが晶出する。

イ-5, 1.9mm径

(1) 肉眼観察：比較的にきれいな球状の粒状滓で、色調は暗灰色である。表面は平滑で気孔はなく、着磁性は強い。

(2) 顕微鏡組織：Photo.7⑤⑥に示す。内部気孔は少なく滓中には白色粒状結晶ウスタイトが晶出する。また微細明白色部は金属鉄である。

イ-6, 1.6mm径

(1) 肉眼観察：やや小型で重なる球状の粒状滓である。色調は暗灰色で、表面には1箇所ごく微細な不定形の割れ面が観察される。着磁性は強い。

(2) 顕微鏡組織：Photo.7⑦⑧に示す。内部空洞化の

外周は灰褐色多角形結晶マグネタイトが晶出する。

今回調査をした6点のうち5点(イ-1, 3-6)は鉄酸化物の結晶主体であり、鉄素材を熱間で加工した時に生じた微細遺物と推定される。また残る1点はガラス質で、鍛接剤に用いた粘土汁などの溶融物の可能性が考えられる。前者が高温鍛接、後者は低温加工時の派生物の可能性をもつ。

ロー-1, 9.3×6.5×0.6mm

(1) 肉眼観察: 大型で微かに湾曲した形状の剥片である。表裏面とも光沢のない黒灰色で、淡褐色の土砂が薄く付着する。着磁性は強い。

(2) 顕微鏡組織: Photo. 8①②に示す。写真上側の灰褐色多角形結晶はマグネタイトと推定される。普通鍛造剥片で確認される鉄酸化物の3層構造は見られないが、鉄酸化物からなる薄膜状の微細遺物である。

ロー-2, 9.3×6.4×0.7mm

(1) 肉眼観察: 大型で厚手の剥片様遺物である。表裏面とも光沢のない黒灰色で、微細な凹凸が著しい。着磁性は強い。

(2) 顕微鏡組織: Photo. 8③④に示す。最表層の灰白色針状結晶はヘマタイト、灰褐色多角形結晶はマグネタイト、灰色結晶はウスタイトである。

ロー-3, 7.9×4.9×0.45mm

(1) 肉眼観察: 大型で平坦な剥片である。表裏面とも光沢のない黒灰色で、微かに皺状の凹凸がみられる。着磁性は強い。

(2) 顕微鏡組織: Photo. 8⑤⑥に示す。表側は水平状に割れを起すもののロー-1と同様、灰褐色多角形結晶マグネタイトが凝集する。鉄酸化物からなる薄膜状の微細遺物である。

ロー-4, 6.5×4.7×0.65mm

(1) 肉眼観察: 大型で平坦な剥片である。表裏面とも光沢のない黒灰色で、微かに皺状の凹凸がみられる。着磁性は強い。

(2) 顕微鏡組織: Photo. 8⑦⑧に示す。表層(写真上側)の明白色部はヘマタイト、灰褐色部はマグネタイトと推定される。

ロー-5, 4.7×3.0×0.5mm

(1) 肉眼観察: 大型で平坦な剥片である。表裏面とも光沢のない黒灰色で、微かに皺状の凹凸がみられる。着磁性は強い。

(2) 顕微鏡組織: Photo. 9①②に示す。肥大化した表層(写真上側)の明白色部はヘマタイト、その内側の灰褐色部はマグネタイト、下側の灰色部はウスタイトである。

ロー-6, 1.7×1.3×0.3mm

(1) 肉眼観察: ごく小型でやや薄手の剥片である。表裏面とも光沢のない黒灰色で、表層に鉄錆が付着する。

着磁性は強い。

(2) 顕微鏡組織: Photo. 9③④に示す。素地の黒色部はガラス質で、白色粒状結晶ウスタイトが晶出する。鍛造剥片ではなく鍛練鍛冶の晶癖といえる。鉄滓の表層剥片に分類される。

調査した6点のうち5点(ロー-1-5)は鉄酸化物であり、鉄素材を熱間で鍛打加工した時に生じる微細遺物と推定される。また残る1点は鍛練鍛冶の表層部剥片の可能性が高い。

#### SIB-13: 鉄塊系遺物

(1) 肉眼観察: 表面が黄褐色の土砂で覆われた74gの塊状の鉄塊系遺物である。明瞭な滓部はなく、鉄主体の遺物と推測される。また特殊金属探知機(L●)で反応があり、内部にはまとまった金属鉄部が存在するものと考えられる。

(2) 顕微鏡組織: Photo. 9⑤⑥-⑦に示す。⑤左下の暗灰色部は黒色ガラス質である。また明白色部は金属鉄で、3%ナイトルで腐食したところ、過共析組織～共晶状黒鉛組織が確認された。⑥が局部的に晶出した共晶状黒鉛組織で細い黒色部は黒鉛(C)である。⑦は過共析組織の拡大で、白色針状のセメントイト(Cementite: Fe<sub>3</sub>C)が晶出する。

当遺物にはガラス質が付着することから、製鉄炉壁と接触する部分で生じた鉄塊の可能性が考えられる。また比較的炭素含有量が高く、局部的に鑄鉄組織も確認された。

#### SIB-14: 鉄塊系遺物

(1) 肉眼観察: 355gとやや大型で塊状の鉄塊系遺物である。全体が黄褐色の土砂で厚く覆われており、本来の表面状態は困難である。

(2) 顕微鏡組織: Photo. 10①-③に示す。内部にはまとまりの良い金属鉄部が存在する。3%ナイトルで腐食したところ、フェライト単相～亜共析組織(C<0.77%)が観察された。炭素含有量は部位によるばらつきが大きいが、最大で0.5%程度の鋼と推定される。また部分的に鑄(P)偏析が生じている。①は鑄偏析の顕著な部分である。偏析状態についてはEPMA調査の項で詳述する。

(3) EPMA調査: Photo. 10④に滓部の反射電子像(COMP)を示す。淡褐色針状または多角形結晶は、特性X線像ではともにチタン(Ti)に強い反応がある。定量分析値は79.2%TiO<sub>2</sub>-9.2%FeO-4.4%Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-3.2%MgO-3.5%V<sub>2</sub>O<sub>5</sub>(分析点1)、77.1%TiO<sub>2</sub>-9.3%FeO-4.5%Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-4.4%MgO-1.6%V<sub>2</sub>O<sub>5</sub>(分析点2)、78.3%TiO<sub>2</sub>-10.1%FeO-4.4%Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-4.3%MgO-1.5%V<sub>2</sub>O<sub>5</sub>(分析点3)であった。チタン酸化物(TiO<sub>2</sub>)主体で、ルチル(Rutile: TiO<sub>2</sub>)に近い組成の結晶である。砂鉄を高温鍛練した時の晶癖とい

える。また暗色結晶定量分析値は48.0SiO<sub>2</sub>-30.4Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-10.5%CaOであった(分析点4)。アノサイト(Anorthite:CaO・Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>・2SiO<sub>2</sub>)と推測される。著地のガラス質滓部分の定量分析値は47.2%SiO<sub>2</sub>-10.0%Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-5.7%CaO-5.1%MgO-1.4%K<sub>2</sub>O-14.1%FeO-5.2%TiO<sub>2</sub>-4.2%MnO(分析点5)であった。非晶質珪酸塩で鉄(FeO)やチタン(TiO<sub>2</sub>)、マンガ( MnO)を含む。

Photo.10⑤は①の構相析出部分の反射電子像である。微小黄褐色部は特性X線像をみると硫黄(S)に強い反応がある。定量分析値は61.7%Fe-36.0%Sであった。硫化鉄(FeS)に同定される。その周囲は特性X線像をみると磷(P)に強い反応があり、さらに環状に弱い反応が広がっている。定量分析値は磷に強い反応がある個所が86.4%Fe-22.0%P(分析点15)であった。磷化鉄共晶(a+Fe<sub>2</sub>P)に同定される。また反応の弱い個所でも97.4%Fe-3.1%P(分析点16)、99.0-0.9%P(分析点17)と磷の影響が顕著であった。

付着滓の鉱物組成から、当遺物は砂鉄を高温製錬した生成鉄塊(製錬鉄塊系遺物)と特定できる。金属鉄部の炭素含有量は部位によるばらつきが大きいが、最大で0.5%程度の鋼であった。また磷(P)の影響が著しいところから、在地の砂鉄を製鉄原料とした可能性が高いと考えられる。

#### SIB-15: 鉄塊系遺物

(1) 肉眼観察: 370gとやや大型で塊状の鉄塊系遺物である。錆化の進行に伴う放射割れが著しく、表面の剥落も生じている。特殊金属探知機のL(●)で反応があるため、内部にまとまった金属鉄部が存在する。また表面の土砂中には、微細な木炭破片が複数含まれる。表面には部分的に暗灰色の滓部を残す。

(2) 顕微鏡組織: Photo.11①~③に示す。①全体に錆化が進んでいるが、一部金属鉄が残存する。②はその拡大である。金属鉄部は3%ナイタルで腐食したところ、黒色層状パーライト地に白色針状セメントイト析出の過共析組織が確認された。炭素含有量は1.5%前後の鋼と推測される。一方①左上は滓部で③はその拡大である。発達した淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネルが晶出する。

付着滓の鉱物組成から、当遺物は砂鉄を高温製錬した生成鉄塊(製錬鉄塊系遺物)と推定される。金属鉄部は比較的炭素含有量の高い鋼であった。

#### SIB-16: 梃形鍛冶滓(緑青付着, 含鉄)

(1) 肉眼観察: 309gで平面不整形円状の梃形鍛冶滓である。広い範囲が茶褐色の鉄錆に覆われている。錆化に伴う放射割れも著しいが特殊金属探知機のL(●)で反応があり、内部に金属鉄部が存在する。部分的に暗灰色の滓部も確認される。また上面側に1個所緑青

が付着している。

(2) 顕微鏡組織: Photo.11④~⑥、Photo.12①②に示す。Photo.11④~⑥は表層に緑青が付着する部分(16-1)であるが、断面には鋼の影響は不明瞭である。暗灰色部は滓部で、白色微細樹枝状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。一方明灰色は滓部で過共析組織痕跡が残存する。またPhoto.12①②は金属鉄粒が残存する部分(16-2)で、3%ナイタルで腐食したところ、フェライト単相~亜共析組織が確認された。

(3) 化学組成分析: Table 2に示す。全鉄分(Total Fe)51.05%に対して、金属鉄(Metallic Fe)1.20%、酸化第1鉄(FeO)20.84%、酸化第2鉄(Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)48.11%の割合であった。渣滓成分(SiO<sub>2</sub>+Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>+CaO+MgO+K<sub>2</sub>O+Na<sub>2</sub>O)19.62%で、このうち塩基性成分(CaO+MgO)は2.62%である。製鉄原料の砂鉄(含チタン鉄鉱)の起源の二酸化チタン(TiO<sub>2</sub>)は0.26%、バナジウム(V)が0.01%と低値であった。また酸化マンガ( MnO)0.06%、銅(Cu)は<0.01%と低値である。五酸化磷(P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>)は0.28%と若干高めであった。

当初緑青の付着から鋼関連遺物の可能性が考えられたが、断面観察と化学分析を実施した結果、銅(Cu)の影響が確認されなかったこと。また梃形鍛冶滓(SIB-8)と近似した組成であることから、鉄素材の熱間加工に伴って生じた鍛錬鍛冶滓に分類される。

#### SIB-17: 梃形鍛冶滓(鍛造品)

(1) 肉眼観察: 錆化に伴い複数の破片に分かれているが、比較的大きな3片が接合可能であった。その状態から、やや小形の梃形鍛冶滓の下面中央に鍛造製品が付着している。滓部は暗灰色で、表層は若干風化気味である。鍛造品は残存長が63mm、断面は最大14×7mm程度の長方形で、特殊金属探知機のL(●)で反応がある。

(2) 顕微鏡組織: Photo.12③~⑤、Photo.13①に示す。Photo.12③上側の暗灰色部は滓部で、Photo.13①はその拡大である。淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル、白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。

一方Photo.12③下側は横断面が長方形に成形された鍛造品で、④⑤は金属鉄部の拡大である。3%ナイタルで腐食したところ、⑤に示したようなほとんど炭素を含まないフェライト単相の組織が主体であったが、④のように黒色層状のパーライトが析出する亜共析組織部分も存在する。ただし炭素含有量の高い個所でも0.1%以下の軟鉄であった。

(3) EPMA調査: Photo.13②に滓部の反射電子像(COMP)を示す。白色樹枝状結晶は特性X線像では

鉄 (Fe) に反応がある。定量分析値は95.6%FeO - 3.9%TiO<sub>2</sub> (分析点8)であった。ウスタイト (Wustite : FeO) に同定される。淡茶褐色多角形結晶は特性X線像をみるとチタン (Ti) に反応がある。定量分析値は66.9%FeO - 24.7%TiO<sub>2</sub> - 6.1%Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub> (分析点9)であった。アルミン (Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) を含むウルボスピネル (Ulvöspinel : 2FeO · TiO<sub>2</sub>) に近い組成の結晶といえる。また素地部分の定量分析値は39.5%SiO<sub>2</sub> - 8.9%Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub> - 7.3%CaO - 1.2%MgO - 2.3%K<sub>2</sub>O - 1.6%Na<sub>2</sub>O - 1.3%P<sub>2</sub>O<sub>5</sub> - 33.8%FeOであった。非晶質珪酸塩で鉄分 (FeO) の割合が高く、磷 (P) も若干含まれる。

もう1視野。Photo.13⑬には鍛造鉄の非金属介在物の反射電子像 (COMP) を示す。白色粒状結晶の定量分析値は95.6%FeO - 2.4%TiO<sub>2</sub> (分析点11)であった。ウスタイト (Wustite : FeO) に同定される。淡茶褐色多角形結晶は特性X線像ではチタン (Ti) に反応がある。定量分析値は65.2%FeO - 22.3%TiO<sub>2</sub> - 8.7%Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub> - 3.4%V<sub>2</sub>O<sub>3</sub> (分析点12)であった。アルミナ (Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)、バナジウム (V<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) を含むウルボスピネル (Ulvöspinel : 2FeO · TiO<sub>2</sub>) に近い組成の結晶といえる。13の淡灰色結晶の定量分析値は62.5%FeO - 3.0%MgO - 1.1%CaO - 30.9%SiO<sub>2</sub> (分析点13)であった。ファヤライト (Fayalite : 2FeO · SiO<sub>2</sub>) で微量石灰 (CaO)、マグネシア (MgO) を固溶する。また素地部分の定量分析値は37.4%SiO<sub>2</sub> - 8.4%Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub> - 8.8%CaO - 1.0%MgO - 3.7%K<sub>2</sub>O - 3.4%Na<sub>2</sub>O - 5.0%P<sub>2</sub>O<sub>5</sub> - 30.2%FeOであった。非晶質珪酸塩で鉄分 (FeO) の割合が高く、磷 (P) の高値傾向も顕著である。

滓部の鉱物組成から、当鉄滓は精錬鍛冶末期の反応副生成物の可能性がある。ただし滓下部に鍛造鉄器が付着していることから、鍛錬鍛冶滓の可能性も看過できない。ある程度製錬工程起源の不純物 (鉄チタン酸化物の結晶を含む滓) の混じった新鉄と古鉄 (腐鉄器) の両方を加熱・鍛錬していた可能性が考えられる。また鉄製品部分は炭素含有量のごく低い軟鉄 (高融点) であった。介在物のEPMA調査の結果高チタン (TiO<sub>2</sub>)、高磷 (P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>) 傾向が確認されたため、この製品の始発原料も在地の火山岩噴出物起源の砂鉄と推測される。

#### SIB-18：鉄製品 (鍛造品)

- (1) 肉眼観察：梶形鍛冶滓 (SIB-17) 中の鍛造製品とよく似た棒状 (長さ58×幅16×厚み5mm) の鍛造品である。表面は錆化に伴う剥離が著しいが、特殊金属探知機L (●) で反応がある。
- (2) 顕微鏡組織：Photo.14⑭～⑮に示す。横断面が長方形の鍛造製品の端部である。明白色部は金属鉄

で、3%ナイトルで腐食したところ炭素をほとんど含まないフェライト単相の組織が確認された。また内部の暗色部は非金属介在物で、内部には淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル、白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが品出する。

当鉄器は炭素含有量の低い軟鉄を鍛打成形した鍛造品の破片である。また介在物中にウルボスピネルが含まれており、始発原料は砂鉄と判断される。梶形鍛冶滓 (SIB-17) 中の鉄製品と非常によく似た遺物であった。

#### SIB-19：鉄製品 (鍛造品)

- (1) 肉眼観察：鉄製品 (SIB-18) より細い棒状 (断面8×4mm) の鍛造品である。鉄釘などの先端寄りの破片の可能性が考えられる。表面は錆化に伴う剥離が著しいが、特殊金属探知機L (●) で反応がある。
- (2) 顕微鏡組織：Photo.14⑯～⑰に示す。棒状鉄製品の縦断面の調査を実施した。金属鉄部を3%ナイトルで腐食したところ先端部中央 (④) 右側および⑥上側の黒色部で高炭素域が確認された。最大で0.7%程度の炭素含有量の鋼である。一方基部 (④左側の白色部) は低炭素域で、粒度の微細なフェライト単相の組織であるが、下面側に若干炭素含有量の高い部分をもつ (⑤下側はその拡大)。炭素含有量の異なる鉄素材を鍛接した製品の可能性が考えられる。また鍛造品 (SIB-17, 18) とは異なり、非金属介在物中ではウスタイトのみで明瞭なウルボスピネル結晶はなく、始発原料が砂鉄であったかは不明である。

#### SIB-20：鉄製品 (鍛造品)

- (1) 肉眼観察：板状の鍛造品の小破片である。鉄鋼などの鉄錐物の体部破片と推定される。表面は錆化に伴う割れが著しいが、特殊金属探知機L (●) で反応がある。
- (2) 顕微鏡組織：Photo.15⑱～㉓に示す。断面は約4.5mmの厚みをもつ。全面亜共晶組成白鉄組織 (C < 4.26%) を呈する。また内部には微細な気孔 (鉬炭) を残す。

#### SIB-21：青銅製品 (両端：鑄鉄)

- (1) 肉眼観察：中央部は表面が緑青に覆われた流動状の鋼 (または青銅) である。両端部は茶褐色の鉄錐に覆われた薄板状の鑄鉄片であり、鑄掛による補修などを施した部分破片の可能性をもつ。
- (2) 顕微鏡組織：Photo.15⑳～㉔に示す。青銅と鑄鉄板が接する部分を示した。全体はほぼ左右対称で、中央の青銅部分が両端の板状の鑄鉄を挟んだ状態になっている。また青銅部分は耐酸・耐酸・アセトン混合液で腐食して現出した組織を示しているが、各相の組成に関してはEPMA調査の項で詳述する。一方鑄鉄部分は完全に錆化しているが、ほぼ全面縁の巣状のレデ

ブライト (Ledeburite) の共晶組成白銅鉄組織 (C: 4.26%) が残存する。出土遺物としてはかなり炭素含有量の高い銅鉄製品といえる。

(3) EPMA調査: Photo. 16①②に青銅部分の反射電子像 (COMP) を示す。反射顕微鏡下の粒状黒色部は反射電子像では明白色を呈する。また特性X線像では鉛 (Pb) に強い反応があり、定量分析値は86.0%Pb-8.0%O (分析点1)、79.7%Pb-9.5%O (分析点8)であった。鉛酸化物と推定される。

反射顕微鏡下での淡橙色樹枝状相は反射顕微鏡下では最も暗い色調を呈する。定量分析値は81.3%Cu-2.6%Sn-3.9%Pb-4.2%Zn-4.2%As (分析点2)、83.6%Cu-2.1%Sn-3.4%Pb-4.4%Zn-4.1%As (分析点9)であった。銅 (Cu) の割合の高い相である。またその周囲の顕微鏡下では白色の部分も特性X線像では暗色を呈する。定量分析値は80.9%Cu-2.9%Sn-4.4%Pb-4.1%Zn-4.9%As (分析点3)、79.5%Cu-2.7%Sn-5.7%Pb-4.2%Zn-5.4%As (分析点10)であった。銅の割合が僅かに低い淡橙色部と類似した組成である。

反射顕微鏡下の青灰色相は、反射電子像では上記淡橙色～白色部分より若干淡い色調となっており、特性X線像では錫 (Sn) にやや強い反応がみられる。定量分析値は73.1%Cu-8.3%Sn-3.8%Pb-2.2%Zn-10.3%As (分析点4)、75.6%Cu-7.4%Sn-3.4%Pb-2.3%Zn-9.9%As (分析点5)、71.4%Cu-9.8%Sn-4.1%Pb-1.9%Zn-10.4%As (分析点13)であった。錫 (Sn) の割合の高い相といえる。

さらに反射顕微鏡下で灰色の針状・粒状相は、反射電子像では淡橙色～白色部分より若干淡い色調で、特性X線像では砒素 (As) に強い反応がみられる。定量分析値は68.0%Cu-30.9%As (分析点6)、64.5%Cu-33.7%As (分析点7)、65.1%Cu-32.5%As (分析点11)、66.9%Cu-29.8%As (分析点12)であった。銅 (Cu)、砒素 (As) が主成分の相である。

以上の調査結果から、中央部は砒素をかなりの割合で含む鉛青銅に同定される。さらに亜鉛 (Zn) も検出されているが、今回は化学分析を実施していないため、銅の鉱石起源のものか否かについては判断が困難である。また両端の銅鉄部分は金属組織から、比較的炭素量の高い共晶組成白銅鉄であることが明らかとなった。

#### 4. まとめ

中世末～近世初頭と推定される芝原遺跡の製鉄・鍛冶および銅関連遺物の調査を実施した結果、遺跡周辺で砂鉄製錬から、鍛造鉄器製作までのマスプロ方式の一貫体制がとられた事が明らかとなった。大量の鍛冶廃滓、精

錬鍛冶、鍛錬鍛冶用羽口の規格化 (内径30mm)、粗鉄の大量徐洋にみられる流出孔滓の存在などで一大コンビナートは裏付けられる。また調査地区内から緑青の付着した転用取銅の出土があり、近接する渡船遺跡で緑青の付着した炉壁片が出土している。地域で銅 (または青銅) 鋳物生産が行われたことは確実であるが、今回調査を実施した遺物中には、遺跡内での銅 (または青銅) 製品生産に直接伴うものは検出されなかった。個々のまとめを Table 3に示す。詳細は以下のとおりである。

(1) 出土砂鉄 (SIB-2 (SBH-1)) には、粒内に微細な磷灰石 [Apatite:  $\text{Ca}_5(\text{PO}_4)_3\text{F}$ ] を多数含む高チタン鉄鉱が複数確認された。当遺跡では火山噴出物の起源の砂鉄が製鉄原料であったと推定される。この特徴は鹿児島県下の他の製鉄遺跡でも共通しており、地域の地質を反映したものである。

(2) 砂鉄と同様製錬滓 (SIB-3) には、高チタン ( $\text{TiO}_2$ )、高磷 (P) 傾向が窺える。やはり地域に分布する火山噴出物の起源の砂鉄が製鉄原料であった。また製錬滓としては鉄分 (Total Fe) が極めて高い。これも鹿児島県下の出土製錬滓に広く共通する特徴であり [Fig.1] (註4)、高磷砂鉄を製鉄原料としていることと関連すると考えられる。

金属鉄中の磷は、鍛錬作業時の鍛接不良や製品の脆化といった悪影響の原因となるため、製鉄時に①砂鉄/木炭比を大きくして、製錬滓中のFeO含有率を上げること、②製錬温度を比較的低温に保つことで、生成鉄中への磷の移行を抑制した可能性が考えられる。

(3) 鉄塊系遺物・含鉄鉄滓 (SIB-4, 13-16) 中には、一部銅鉄組織を呈するなど、比較的炭素含有量の高いものも存在するが、完全な錠は見られなかった [Fig.2]。また磷偏析が観察されるものもあり (SIB-4, 14)、地域の砂鉄製錬生成鉄塊 (新鉄) が鍛冶原料となっていたと発言できる。

(4) 桶形鍛冶滓 (SIB-6, 7) と流出孔滓 (SIB-10, 11) はチタン濃度が高く精錬鍛冶滓、桶形鍛冶滓 (SIB-8, 9, 16) は鍛錬鍛冶滓に分類される。また粒状滓、鍛造剥片 (SIB-12) など熱間での鍛打加工に伴う微細遺物も検出された。鍛冶原料 (製錬系鉄塊) の不純物除去から鍛造鉄器製作まで、遺跡内で一連の作業が行われたことを示す遺物群であった。

また鍛造鉄器を含む桶形鍛冶滓 (SIB-17) の存在から、遺跡周辺で生産された新鉄のみでなく、古鉄 (廃鉄器) も合わせて鍛冶原料とした可能性が指摘できる。

(5) 鍛造鉄器 (SIB-17, 18, 19) のうち2点は、非金属系物中にウルボスピネル結晶が含まれており、始発原料は砂鉄である。なかでもEPMA調査を実施したSIB-17は非金属系物中の素地部分が高磷 (P) 傾向がみられて、在地の砂鉄を始発原料とした鉄材の可能



性は十分に有らう。

(6) 青銅製品 (両端: 錳鉄) (SIB-21) は鋳掛による補修などを施した部分の破片であろう。類似遺物はさつま川内市の古原遺跡でも出土しており、分析調査を実施している<sup>(18, 19)</sup>。中央の緑青部分は砒素 (As)、亜鉛 (Zn) を高い割合で含む鉛青銅であった。近接地域の渡畑遺跡では鋳造用溶解炉の炉壁片が出土しており、溶着金属のEPMA調査を実施した結果、錫 (Sn) の割合の高い鉛青銅と判明している<sup>(18, 19)</sup>。今回確認された砒素 (As)、亜鉛 (Zn) などはいくく微量であり、地域には様々な成分の鋳造原料 (または青銅製品) が搬入されたと考えられる。

(7) Table 4に芝原遺跡出土製鉄・鍛冶関連遺物の分類を示す。前近代製鉄の一貫体制を実証する遺物群である。各遺構との対応を参考にさせて頂きたい。精錬鍛冶では鍛冶がの下部に排水孔を設けた新機軸、羽口内径は30mmに統一して精錬鍛冶、鍛錬鍛冶に充当したマスプロ方式の一大製鉄コンビナートを形成している。

#### (注)

(1) 木下亀城・小川留太郎「岩石鉱物」保育社 1995  
チタン鉄鉱は赤鉄鉱とあらゆる割合に混じりあった固溶体をつくる。(中略) チタン鉄鉱と赤鉄鉱の固溶体には、チタン鉄鉱あるいは赤鉄鉱の結晶をなし、全体が完全に均質なものと、チタン鉄鉱と赤鉄鉱が平行にならんで規則正しい縞状構造を示すものがある。チタン鉄鉱は磁鉄鉱とも固溶体をつくり、これにも均質なものと、縞状のものがある。(中略) このようなチタン鉄鉱と赤鉄鉱、または磁鉄鉱との固溶体を含むチタン鉄鉱Titaniferous iron oreという。

(2) 鈴木瑞穂「鹿児島県下の採取砂鉄の分析調査結果」『ミュージアム知覧紀要・官報11号』ミュージアム知覧 2007

(3) J.B. Mac chesney and A. Murau: American Mineralogist, 46 (1961), 572

【イルミナイト (Ilmenite: FeO・TiO<sub>2</sub>) の晶出はFeO・TiO<sub>2</sub>二元平衡状態図から高温化操作が推定される。】

(4) Fig.1に示した鹿児島県下の出土製鉄関連遺物の分析データは、以下の文献より引用した。

①中山光夫・上田耕「小坂ノ上遺跡出土の古代の蔵骨器と埋納鉄滓について」『ミュージアム知覧紀要第1号』1995

②大澤正己・鈴木瑞穂「宝満製鉄遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査」『宝満製鉄遺跡』鹿児島県曾於郡志布志町教育委員会 2004

③大澤正己「上加世田遺跡出土製鉄一貫体制遺物と鋳鋼遺物の金属学的調査」『上加世田遺跡1』加世田市教育委員会 1985

④大澤正己・鈴木瑞穂「一つ木遺跡出土製鉄・鍛冶関

連遺物の金属学的調査」『一つ木地区 (A・B) 遺跡』鹿児島県宮之城町教育委員会 2001

⑤大澤正己・鈴木瑞穂「古原遺跡出土鉄滓・青銅製品の金属学的調査」『古原遺跡』さつま川内市教育委員会 2005年度分析調査実施

⑥大澤正己・鈴木瑞穂「厚地松山遺跡出土製鉄・鍛冶関連遺物の金属学的調査」『厚地松山製鉄遺跡』鹿児島県知覧町教育委員会 2000

⑦大澤正己・鈴木瑞穂「中原鉄生産関連 (前畑西) 遺跡出土製鉄・鍛冶関連遺物の金属学的調査」『中原鉄生産関連遺跡 (前畑西) 遺跡』鹿児島県知覧町教育委員会2007

⑧「宝満製鉄遺跡出土鉄滓の分析調査 (予備調査) ~ 周辺地域 (東谷・吉原・花房) を比較して ~」『宝満寺跡 宝満製鉄遺跡 幸田遺跡 弓場ヶ尾遺跡』鹿児島県曾於郡志布志町教育委員会 2003

⑨鈴木瑞穂「南九州地域の中世~近世の製鉄技術について」『鉄の歴史-その技術と文化-フォーラム第12回公開研究発表会論文集』(社)日本鉄鋼協会 社会鉄鋼工学部会「鉄の歴史-その技術と文化-」フォーラム 2009

⑩大澤正己・鈴木瑞穂「上水流遺跡出土製鉄・鍛冶関連遺物の金属学的調査」『上水流遺跡4』中小河川改修事業 (万之瀬川) に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (VI) 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (159) 鹿児島県立埋蔵文化財センター2010

⑪大澤正己・鈴木瑞穂「出土製鉄・鍛冶・鋳造関連遺物の金属学的調査」『渡畑遺跡2』中小河川改修事業 (万之瀬川) に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (IX) 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (159) 鹿児島県立埋蔵文化財センター2011

(5) 前掲注 (4) ⑤

(6) 前掲注 (4) ⑪

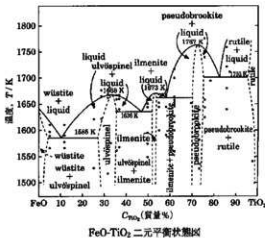




Table 4 芝原遺跡出土製鉄・鍛冶・銅関連遺物の分析 (鹿児島県立歴史文化センター)

&lt; 前近代製鉄一貫体副産物を実証する遺物を出土&gt; ; マスプロ方式製鉄-大コヒンナー通熱(精錬鍛冶 : 下部排滓新機械採用、羽口内径30mm統一)

生産工程	製鉄 高チタン砂鉄製錬 砂鉄SBH-1 11.72%TiO <sub>2</sub> , 0.50%P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	精錬鍛冶 粗鉄大塊処理 < 検査中断なく排滓 > 粗鉄処理 故鉄(スクラップ)処理、表面slag化した中鉄に針状鉄器遺存; 出土位置不明一粘資料(年代不詳)	鍛錬鍛冶 低溫蒸延 低溫火造	製品	
遺構	B-18 製鉄副産物遺構1号(中世) 製鉄副産物遺構4号(中世)	A <sup>1</sup> ~J-18 製鉄副産物遺構15号(中世) 製鉄副産物遺構16号(中世), 9-11, 15号(中世)	製鉄副産物工場推定地 鍛錬鍛冶工場推定地		
遺物	砂鉄集積 EF-18 炉壁(内面, 半還元砂鉄付着) 製錬滓(滑らか肌, 緻密質) 鉄塊系遺物, 再結合滓	大・中・小銅形鍛冶滓 炉塊系遺物・含鉄鍛冶滓 SIB-6, 7: 精錬鍛冶滓 SIB-10, 11: 精錬系流出孔滓	大・中・小銅形鍛冶滓 炉塊系遺物・含鉄鍛冶滓 SIB-6: 高温蒸し鍛錬銅形鍛冶滓 SIB-10, 11: 精錬系流出孔滓	ガラス質銅形鍛冶滓 (5品実測区) SIB-9: 低溫鍛冶滓	鉄製品の特定
課題	どんが銚子をつ造ったか(炭素量) < 粗鉄の組成 >	銅形形状から鍛冶炉の形態を推定 → 第228図1773~第332図1789 平面が長方形, 楕円形, 円形で大・中・小存在 断面: 楕形 浅~深, 扁平 炉底付着物 → 粘土, 砂粒, 木炭粒			
情報 (特記事項)	高温遺物 銅形遺物 粗鉄系遺物 11.72%TiO <sub>2</sub> , ウルボスビネル	・ 羽口: 内径30mm 内四29~30mm, ズム銅タイプに統一, マスプロ方式製鉄羽口実当, 精錬・鍛錬鍛冶炉力使用か, (12048から同一タイプ羽口出土) ・ 平面長方形銅形存在, 断面がない(岡山県瀬峰町産銅片量からの表採品) ・ 流出孔滓存在(島根県佐田遺跡に類似) 粗鉄の大量排滓 高温排滓のslag			



精錬鍛冶炉断面模式図

※ 芝原遺跡の調査指導要領(014, 11, 14~15, 015.8, 8, 5)

## 報告者紹介

- ① 水巻町教育委員会1996『宮尾遺跡』江戸初期鍛冶炉 浅~深タイプ一筆検出
- ② 岡山県教育委員会2009『研究紀要』第1号 年代不明 長方形銅形排滓採取
- ③ 島根県教育委員会1998『板屋III遺跡』精錬鍛冶炉の前塚排滓孔から鉄滓を復し出す

● 芝原遺跡出土砂鉄 (SBH-1) ● 製錬滓 (SIB-3)

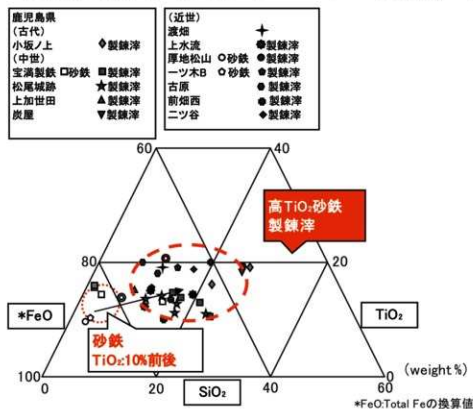


Fig. 1 鹿兒島県下の製鉄遺跡出土砂鉄、製錬滓の化学組織



Fig. 2 芝原遺跡出土鉄塊系遺物・含鉄鉄滓の断面金属組織調査結果

### SIB-1 炉壁

①～③暗灰色部:内表面層がラス質滓、砂粒散在、明灰色部:鉄化鉄、微小明白色粒:金屬鉄、ナイタル etch フェライト単相



### SIB-2 砂鉄

④～⑥灰褐色粒:砂鉄(含矽ノ鉄鉱)、砂鉄粒内多角形状暗色鉱物:燐灰石、淡黄色鉱物:黄鉄鉱、暗色粒:斜長石、角閃石、輝石類などの造岩鉱物

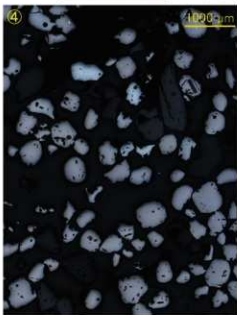
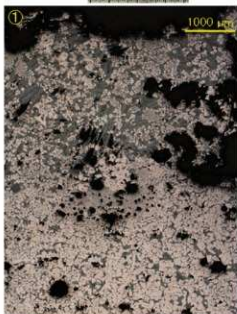


Photo. 1 炉壁・砂鉄の顕微鏡組織

SIB-3

炉外流出滓

①～③滓部ウルホスト・ネル・  
ファイライト



SIB-4

鉄塊系遺物

④明白色部:金属鉄、フェラ  
イト単相～亜共析組織(塊  
偏析)、滓部ウルホスト・ネル・  
ファイライト

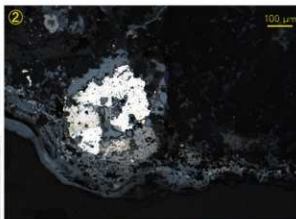
⑤金属鉄部、⑥滓部拡大



Photo. 2 炉外流出滓・鉄塊系遺物の顕微鏡組織

SIB-5 羽口

①附着層部のスタイト-ウルボ  
スピネル-ファヤライト  
②③明白色粒:金属鉄、ナ  
イタルetch フェライト単相



SIB-6

椀形鍛冶滓

④~⑥明灰色部:酸化鉄、  
滓部:ウルボスピネル・微細ウ  
スタイト-ファヤライト



Photo. 3 羽口・椀形鍛冶滓の顕微鏡組織

SIB-7

椀形鍛冶滓

①～③滓部ウルボスピネル・  
ウスタイト・ファヤライト、不定形  
青灰色部、錆化鉄



SIB-8

椀形鍛冶滓

④上側表層付着土砂、鍛造  
割片混在、下側滓部、ウスタイ  
ト・ファヤライト、錆化鉄部散在。  
⑤鍛造割片拡大、⑥滓部拡大

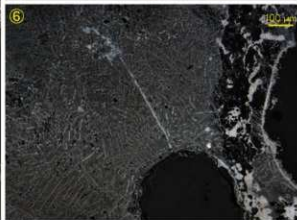


Photo. 4 椀形鍛冶滓の顕微鏡組織



SIB-9

梘形鍛冶滓  
(ガラス質滓)

①ガラス質滓、被熱砂粒  
散在、明白色粒-金属鉄  
②③金属鉄粒、ナイトル  
etch フェライト单相



SIB-10

流出孔滓

④~⑥滓部-ウルボスピネル・  
クヌイト・フェライト

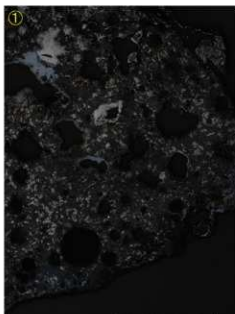


Photo. 5 梘形鍛冶滓・流出孔滓の顕微鏡組織

SIB-11

流出孔滓

①～③滓部ウスタイト・微細  
ウルボスピネル・ファヤライト  
②③中央・微小金属鉄粒、  
ナイタルetch フェライト単相



SIB-12-イ-1

粒状滓

④⑤ウスタイト凝集



SIB-12-イ-2

粒状滓

⑥⑦ガラス質滓、微小金属  
鉄粒

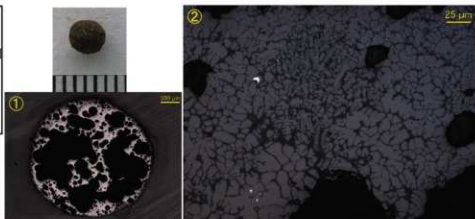


Photo. 6 流出孔滓・粒状滓の顕微鏡組織

SIB-12-イ-3

粒状滓

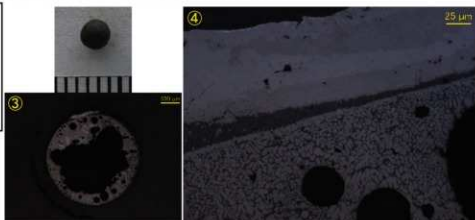
①②滓部:ウスタト、微小明  
白色粒:金属鉄



SIB-12-イ-4

粒状滓

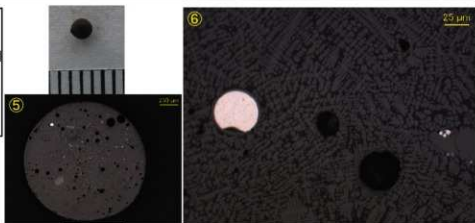
③④上側:鍛造剥片溶着  
滓部:ウスタト



SIB-12-イ-5

粒状滓

⑤⑥滓部:ウスタト、微小明  
白色粒:金属鉄



SIB-12-イ-6

粒状滓

⑦⑧滓部:マグネシウム

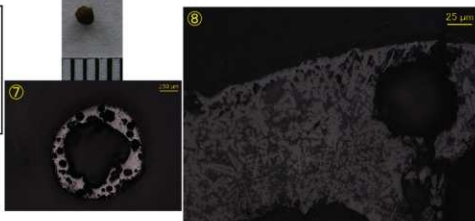
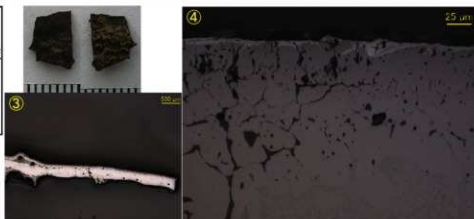


Photo. 7 粒状滓の顕微鏡組織

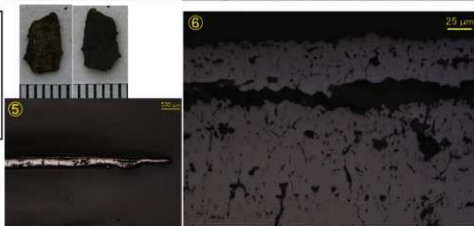
SIB-12-0-1  
鍛造剥片様遺物  
①②マグネサイト



SIB-12-0-2  
鍛造剥片  
③④明白色層ヘマタイト、灰  
褐色結晶マグネサイト、灰色  
層ウスタイト



SIB-12-0-3  
鍛造剥片様遺物  
⑤⑥マグネサイト



SIB-12-0-4  
鍛造剥片様遺物  
⑦⑧明白色部ヘマタイト、灰  
褐色部マグネサイト

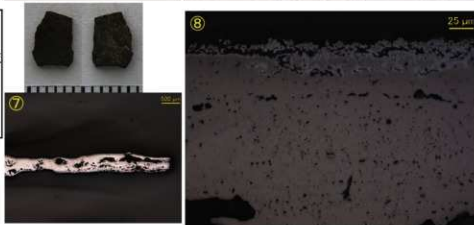


Photo. 8 鍛造剥片の顕微鏡組織

SIB-12-D-5

鍛造剥片

①②明白色層へマタイト、灰  
褐色層マグネサイト、灰色層：  
ウスタイト



SIB-12-D-6

鍛造剥片様遺物

③④鍛冶滓破片、滓部ウ  
スタイト



SIB-13

鉄塊系遺物

⑤滓部黒色ガラス質滓  
金屬鉄部ナイテッチ  
過共析組織～共晶状黒鉛組  
織  
⑥共晶状黒鉛組織拡大  
⑦過共析組織拡大

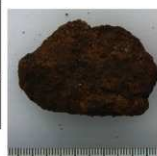
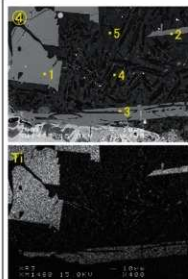


Photo. 9 鍛造剥片・鉄塊系遺物の顕微鏡組織

SIB-14

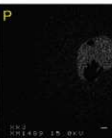
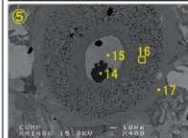
鉄塊系遺物

①亜共析組織、燐化鉄共晶、②③フェライト単相～亜共析組織



定量分析値

Element	1	2	3	4	5	Element	14	15	16	17
Na <sub>2</sub> O	0.022	-	-	1.960	0.170	Cu	0.128	0.056	0.053	-
MgO	3.248	4.372	4.284	0.407	5.100	Pb	-	0.023	0.008	-
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	4.392	4.525	4.352	30.432	10.022	Zn	-	0.001	-	-
SiO <sub>2</sub>	0.121	0.097	0.082	47.963	47.208	Fe	61.691	86.357	97.433	99.006
P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	0.008	0.014	-	0.022	0.131	As	-	0.112	0.056	-
S	-	-	-	0.005	0.029	Sb	0.029	-	-	0.011
K <sub>2</sub> O	0.011	0.054	0.042	0.890	1.383	Bi	0.009	-	-	-
CaO	0.019	0.174	0.117	10.474	5.672	Se	0.029	0.027	0.002	-
TiO <sub>2</sub>	79.233	77.083	78.329	2.675	5.164	Ag	-	0.010	-	-
Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	0.171	0.032	0.112	0.044	-	O	0.089	0.301	0.739	0.049
MnO	0.519	1.102	1.100	0.396	4.236	S	35.965	0.230	0.031	0.012
FeO	9.152	9.255	10.090	1.569	14.118	C	0.944	-	-	0.003
As <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	0.485	0.458	0.714	-	0.081	Mn	0.008	21.985	3.143	0.896
V <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	3.506	1.565	1.527	0.021	0.065	Ti	0.377	0.011	0.009	-
PbO	-	0.027	0.003	0.039	0.018	V	0.047	0.010	0.009	-
CuO	-	-	-	-	-	Total	0.684	0.004	-	0.024
SnO <sub>2</sub>	0.068	-	-	-	-		100.000	109.127	101.482	100.000
Mn <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	0.007	-	-	-	-					
Total	100.962	98.758	100.774	98.897	93.407					



滓部および鉄中非金属介在物の反射電子像(COMP)・特性X線像

Photo. 10 鉄塊系遺物の顕微鏡組織・EPMA調査結果